

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第179集

まち や
町屋遺跡

2013

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

町屋遺跡の所在する愛知県一宮市は、平成 17 年 4 月 1 日に愛知県の北西県境を流れる木曽川左岸に位置する旧尾西市と旧葉栗郡木曽川町を編入して現在のかたちになった市であります。古くから木曽川の水運と現在でも東京と大阪を結ぶ東西の交通路が市域の中央を貫ぐ地勢を反映して、政治・文化が営まれてきた地域であります。

この度報告いたします町屋遺跡は、昭和初期から地元の方々により多数の弥生土器や石器が発見・調査されてきた遺跡であり、一宮市の弥生文化を語る上で草分け的遺跡であります。この発掘調査により、弥生時代の遺構と遺物が多数確認され、集落の姿を推定できるようになったことは、愛知県尾張地域の弥生文化を考える上でも貴重な資料になったものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 25 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 加 藤 高 明

例　言

1. 本書は愛知県一宮市千秋町町屋に所在する町屋遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 調査は、県道名古屋江南線道路拡幅工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
 3. 調査期間は平成 19 年 11 月から平成 20 年 2 月まで、発掘調査面積は 1,600m²である。整理および報告書作成作業は平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月にかけて実施した。
 4. 調査担当者は、石黒立人（本センター調査研究統括専門員）・藤山誠一（本センター調査研究主任）・永井邦仁（本センター調査研究主任）である。発掘調査はティケイトレード株式会社の支援を受けて実施した。
 5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、一宮市教育委員会、一宮市博物館、一宮市千秋町町屋自治会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
 6. 本書の編集は藤山誠一が担当したが、執筆は永井邦仁・藤山誠一により分担した。また付論では、付論 1 を藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）・米田恭子氏（株式会社パレオ・ラボ）、付論 2 を永草康次（神熱）、に執筆して頂いた。
 7. 整理作業は藤山誠一が担当した。整理作業は伊藤あけみ・瀧智美（整理補助員）の協力を得て実施した。遺物の実測・トレース作業はナカシャクリエイティブ株式会社・株式会社アーキジオに委託して実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に、本書レイアウト編集作業を有限会社アルケイリサーチに委託して実施した。
 8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
 9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
 10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
- 〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4161)
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)

 12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けています。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
- 安藤春雄・久保慎子・黒沢浩・土本典生・長谷川昭三・長谷川稔・馬場伸一郎・松本彩・北村和宏

目 次

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法	1
第2節 町屋遺跡の立地とこれまでの調査・研究	7
第3節 周辺の遺跡	8

第2章 遺 構

第1節 基本層序	13
第2節 各調査区の概要	15
遺構図版	29

第3章 出土遺物

第1節 弥生土器・土師器・陶器	60
第2節 石器	68
第3節 ガラス製品	72
遺物図版	73

第4章 総 括

第1節 遺構の変遷	122
第2節 弥生土器・土師器・陶磁器の出土分布	126
第3節 石器の出土分布	129
第4節 遺構・出土遺物の分布と地形環境	130
第5節 町屋遺跡の全体像	131
付 論1 町屋遺跡出土土器の胎土材料	137
付 論2 愛知県一宮市町屋遺跡出土した柳条痕文系土器の胎土に関する考察	152
付 論3 愛知県一宮市町屋遺跡採集資料の分析	158

写真図版

遺構：写真図版 1 ～写真図版 10

出土遺物：写真図版 11 ～出土遺物 20

抄 錄

挿図・挿表目次

第 1 図 町屋遺跡位置図	1	第 28 図 第 2 面 07D 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	49
第 2 図 調査区位置図	2	第 29 図 第 2 面 07F 区遺構図 (1:200)	50
第 3 図 発掘調査の行程	3	第 30 図 第 2 面 07G 区遺構図 (1:200)	51
第 4 図 町屋遺跡の立地	6	第 31 図 第 2 面 07Ha 区遺構図 (1:200)	52
第 5 図 町屋遺跡の出土遺物	7	第 32 図 第 2 面 07Hb 区遺構図 (1:200)	53
第 6 図 町屋遺跡周辺の遺跡	9	第 33 図 第 2 面 07I 区遺構図 (1:200)	54
第 7 図 町屋遺跡基本土層図	14	第 34 図 第 2 面 07I 区遺構図 (1:200)2、個別 遺構断面図 (1:100)	55
第 8 図 第 1 面 07A 区遺構図 (1:200)、個別遺構 断面図 (1:100)	29	第 35 図 第 2 面 07D 区遺構図 (1:200)	56
第 9 図 第 1 面 07A 区・07B 区遺構図 (1:200)	30	第 36 図 第 3 面 07A 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	57
第 10 図 第 1 面 07B 区・07C 区遺構図 (1:200)、 個別遺構断面図 (1:100)	31	第 37 図 第 3 面・第 4 面 07C 区遺構図 (1:200)、 個別遺構断面図 (1:100)	58
第 11 図 第 1 面 07C 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	32	第 38 図 第 3 面 07Ha 区遺構図 (1:200)	59
第 12 図 第 1 面 07C 区遺構図 (2:1:200)、個 遺構断面図 (1:100)	33	第 39 図 07Aa 区～07Ac 区出土弥生土器・ 土師器・陶器	73
第 13 図 第 1 面 07E 区・07F 区遺構図 (1:200)	34	第 40 図 07Bb 区・07Ca 区出土弥生土器・ 土師器・陶器	74
第 14 図 第 1 面 07F 区遺構図 (1:200)	35	第 41 図 07Ca 区出土弥生土器・土師器・陶器	75
第 15 図 第 1 面 07G 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	36	第 42 図 07Ca 区・07Cb 区出土弥生土器・ 土師器・陶器	76
第 16 図 第 1 面 07G 区・07H 区遺構図 (1:200)	37	第 43 図 07Cb 区～07Cc 区出土弥生土器・ 土師器・陶器	77
第 17 図 第 1 面 07H 区遺構図 (1:200)	38	第 44 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1)	78
第 18 図 第 1 面 07I 区遺構図 (1:200)	39	第 45 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (2)	79
第 19 図 第 1 面 07I 区遺構図 (2:1:200)	40	第 46 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (3)	80
第 20 図 第 1 面 07J 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	41	第 47 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (4)	81
第 21 図 第 1 面 07J 区遺構図 (2:1:200)	42	第 48 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (5)	82
第 22 図 第 2 面 07A 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	43	第 49 国 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (6)	83
第 23 図 第 2 面 07B 区遺構図 (1:200)	44	第 50 国 07Cc 区・07D 区・07Ga 区・07Ha 区 出土弥生土器・土師器・陶器	84
第 24 国 第 2 面 07B 区・07C 区遺構図 (1:200)、 個別遺構断面図 (1:100)	45	第 51 国 07Ha 区・07Hb 区・07Ia 区出土弥生 土器・土師器・陶器	85
第 25 国 第 2 面 07C 区遺構図 (1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	46		
第 26 国 第 2 面 07C 区遺構図 (2:1:200)、個別 遺構断面図 (1:100)	47		
第 27 国 第 2 面 07C 区個別遺構断面図 (1:100)	48		

第 52 図 07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器(1)	86	第 87 図 07Ja 区出土石器	121
第 53 図 07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器(2)	87	第 88 図 ガラス製品(1:1)	122
第 54 図 07Ia 区出土弥生土器・土師器・陶器(3)	88	第 89 図 A 期～C 期の遺構(1:1,000)	123
第 55 図 07Ia 区～07Id 区出土弥生土器・ 土師器・陶器	89	第 90 図 D 期の遺構(1:1,000)	124
第 56 図 07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器(1)	90	第 91 図 E 期・F 期・古代の遺構(1:1,000)	125
第 57 図 07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器(2)	91	第 92 図 町屋遺跡の復元図(1:5,000)	134
第 58 図 07Id 区・07Ie 区出土弥生土器・土師器・ 陶器	92	第 1 表 町屋遺跡の発見・調査歴	8
第 59 図 07Ie 区・07Ja 区出土弥生土器・土師器・ 陶器	93		135
第 60 図 07Aa 区・07Ab 区出土石器	94	第 2 表 弥生土器・土師器・陶磁器の出土傾向	127
第 61 図 07Bb 区出土石器(1)	95	第 3 表 石器の出土傾向	130
第 62 図 07Bb 区出土石器(2)	96	付 論 1	
第 63 図 07Ca 区出土石器(1)	97	図 版 1 分析試料の偏光顕微鏡写真	148
第 64 図 07Ca 区出土石器(2)	98	図 版 2 分析試料の偏光顕微鏡写真	149
第 65 図 07Cb 区出土石器(1)	99	図 版 3 分析試料の偏光顕微鏡写真	150
第 66 図 07Cb 区出土石器(2)	100	図 版 4 分析試料の偏光顕微鏡写真	151
第 67 図 07Cb 区・07Cc 区出土石器	101	第 1 表 胎土分析を行った町屋遺跡出土土器と その詳細	138
第 68 図 07Cc 区出土石器(1)	102	第 2 表 土器胎土中の微化石類・岩石・鉱物組成 の観察結果	141
第 69 図 07Cc 区出土石器(2)	103	第 3 表 土器胎土中の粘土および砂粒の特徴 一覧表	144
第 70 図 07Cc 区出土石器(3)	104	第 4 表 岩石片の起源と組み合わせ	145
第 71 図 07Cc 区出土石器(4)	105	第 5 表 器種と粘土の種類および砂粒組成の関係	145
第 72 図 07Cc 区出土石器(5)	106	付 論 2	
第 73 図 07Cc 区出土石器(6)	107	第 1 図 主要鉱物三角ダイヤグラム	152
第 74 図 07Cc 区出土石器(7)	108	第 2 図 粒径三角ダイヤグラム	152
第 75 図 07Cc 区出土石器(8)	109	第 3 図 胎土分析試料実測図・写真	155
第 76 図 07Cc 区出土石器(9)	110	第 1 表 町屋遺跡胎土分析試料一覧	153
第 77 図 07Cc 区出土石器(10)	111	第 2 表 実態顕微鏡観察結果	156
第 78 図 07Cc 区出土石器(11)	112	第 3 表 偏光顕微鏡観察結果	156
第 79 図 07Cc 区・07Cd 区・07Gb 区・ 07Ha 区・07Hb 区出土石器	113	付 論 3	
第 80 図 07Hb 区・07Ia 区出土石器	114	第 1 図 安藤春雄氏所蔵資料(1)	159
第 81 図 07Ia 区出土石器	115	第 2 図 安藤春雄氏所蔵資料(2)	160
第 82 図 07Ia 区・07Ib 区出土石器	116	第 3 図 安藤春雄氏所蔵資料(3)	161
第 83 図 07Ic 区・07Id 区出土石器	117	第 4 図 長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料	162
第 84 図 07Id 区出土石器(1)	118	第 5 図 長谷川稔氏所蔵資料	162
第 85 図 07Id 区出土石器(2)	119		
第 86 図 07Id 区・07Ie 区出土石器	120		

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法（第1図～第4図）

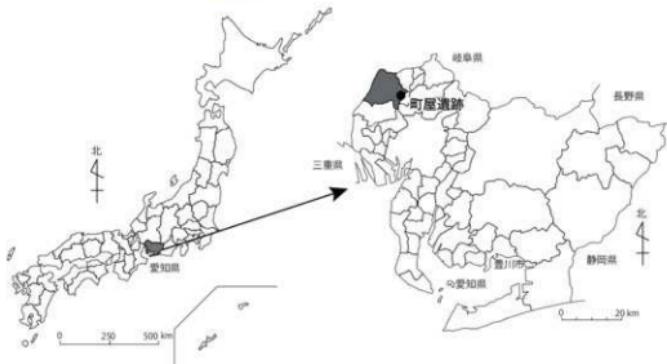
町屋遺跡は愛知県一宮市千秋町町屋に所在する遺跡で（図1）、名古屋鉄道犬山線石仏駅より西南西850mの地点に位置する。本遺跡は一宮市埋蔵文化財包蔵地一覧に町屋遺跡（遺跡番号 02034）として周知の遺跡として知られており、愛知県建設部道路建設課による県道名古屋江南線道路拡幅工事に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室による試掘調査が平成18年度に行われた結果、奈良時代から室町時代の遺構・遺物が全ての試掘調査地点において確認された。この為、県道名古屋江南線道路拡幅工事事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財團法人愛知県教育・スポーツ振興財團愛知県埋蔵文化財センターが平成19年11月から平成20年2月の期間で、発掘調査を実施した。

調査面積は1,600 m²で、調査地点は県道名古屋江南線が名神高速道路と交差する地点を中心に南北約500mの範囲にわたる。調査区は県道名古屋江南線の東西拡幅部分の南北に細長い範囲となり、県道名古屋江南線と交差する東西方向の道路を境界として、県道の西側の地点を北からA区・B区・C区・D区・E区・F区の大きく6ヶ所に、県道の東側を北からG区・H区・I区・J区の大きく4ヶ所に分けた（第2図）。また発

掘調査に伴う耕土置場の設置と県道沿線の民地（商店・民家・畠地など）への出入り口の確保の為、A区を北からAa区～Ac区の3ヶ所に、B区を北からBa区～Bc区の3ヶ所に、C区をCa区～Cd区の4ヶ所に、F区をFa区～Fc区の3ヶ所に、G区を北からGa区・Gb区の2ヶ所に、H区を北からHa区・Hb区の2ヶ所に、I区をIa区～Ie区の4ヶ所に、J区をJa区～Jc区の3ヶ所に細分して調査を行った。

発掘調査の工程は（第3図参照）、A区を平成19年12月上旬～平成20年2月中旬に、B区を平成19年12月上旬～中旬と平成20年1月上旬～中旬に、C区を平成19年11月中旬～下旬と平成20年1月下旬～2月上旬、同年2月中旬～下旬に、D区を平成20年2月下旬に、E区を平成20年2月下旬に、F区を平成20年2月上旬～中旬に、G区を平成20年1月中旬～下旬と同年2月下旬に、H区を平成20年1月中旬～2月上旬に、I区を平成19年11月中旬～平成20年1月下旬に、J区を平成20年1月中旬～平成20年2月下旬であった。発掘調査の終了後、平成23年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はショベルカーにて表土となる旧水田埋立て土と旧水田耕作土・旧畑耕作土、近世以後の造成土と思われる堆積を除去した後、発掘調査作業（人力に



第1図 町屋遺跡位置図



第2図 調査区位置図

調査区	2007年11月	12月	2008年1月	2月
07A区		Area A00	A00	
07B区		B00	B00	
07C区	C00		C00	C00-C00
07D区				D00
07E区				E00
07F区				F00-F00区
07G区			G00	G00
07H区			H00	H00
07I区	I00-I00-I00		I00	
07J区		J00		J00-J00区

第3図 発掘調査の工程

による遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察など)を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

遺跡の地元説明会は実施できなかったが、以下の遺跡の発掘調査現場の見学会があった。

町屋道路建設推進委員会の役員をはじめとする地元の皆様：発掘調査中随時

一宮市立千秋中学校の生徒：平成19年12月13日
明治大学付属博物館友の会の皆様：平成19年12月17日

愛知県立一宮南高等学校の生徒：平成19年12月26日
また平成20年1月3日～5日に一宮市町屋公民館において町屋遺跡出土遺物の展示と調査写真のパネル展示を行った。



発掘2 表土掘削 (07Id 区、北より)



発掘1 調査区設置のフェンスにより仮囲い (07Ga区、南西より)



発掘3 遺構の検出 (07Cc 区北側 03SD、北より)



発掘4 遺構の掘削風景（07Cc 区、北より）



発掘5 遺構の掘削（07Cc 区 051SK、北西より）



発掘6 高所作業車による全景写真撮影（07Cc 区・07Id 区・07Lb 区）



発掘8 遺構の測量（07D 区、北より）



発掘7 個別遺構の写真撮影（07Ia 区、南より）



発掘9 一宮市立千秋中学校生徒の見学



発掘 10 愛知県立一宮南高等学校生徒の見学



発掘 11 埋め戻し作業 (07le 区、北より)



発掘 12 出土遺物の洗浄



整理 1 遺物の分類・接合



整理 2 遺物の復元（石膏入れ作業）



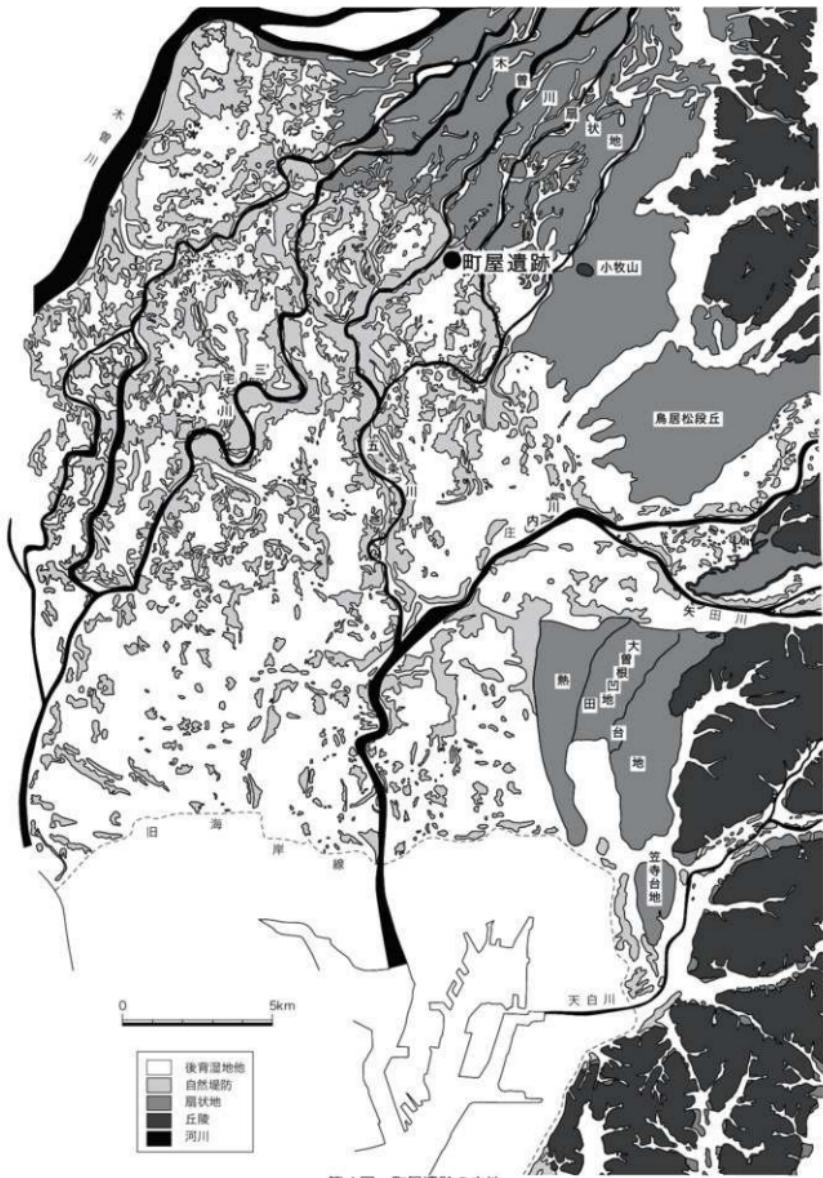
整理 3 遺物の実測



整理 4 遺物の写真撮影



整理 5 報告書の執筆・編集・作成



第4図 町屋遺跡の立地

第2節 町屋遺跡の立地とこれまでの調査・研究（第4図・第1表）

町屋遺跡（第4図-1、以下遺跡番号を付す）の所在する愛知県一宮市は、濃尾平野を流れる木曾川の左岸にあり、木曾川により形成された沖積平野の扇状地帯から氾濫原地帯にあり、町屋遺跡のある一宮市南東部は犬山市から続く扇状地帯から氾濫原地帯に移る地点に位置する。さらに木曾川左岸になる尾張地域では、かつての木曾川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は本遺跡の北西を青木川が、南東を五条川が北東から南西へ蛇行しながら流れている。

町屋遺跡が、遺跡として知られるようになったのは古く、戦前（昭和16年）には、梶田不二男氏と坂重吉氏により、弥生土器や石鏃・石斧などの石器が採集されて報告されている。その後昭和29年8月には名古屋大学考古学研究室により、「町屋遺跡」として発掘調査が実施され、弥生時代中期の遺物が多く出土した（註1）。またこの遺跡は昭和38年に発行された『東海の先史遺跡』において、紅村弘氏により遺跡の紹介がある（第5図、註2）。昭和42年に刊行された『一宮市史』においては、「花ノ木遺跡」として報告されている（註3）。



第27図 町屋遺跡出土各種遺物（石器・土器） 1磨製石斧 2-8磨製石鎌
9-14 打製石鎌 15 サヌカイト製鋸歯尖頭器 16 石盤 17 小型石斧
18 手鎌 19 石錐 20-28 土器（長谷川川底＝門氏藏）

第5図 町屋遺跡の出土遺物

紅村 弘 1963『東海の先史遺跡』総括編 名古屋鉄道株式会社より第27図を引用転載

第1表 町屋遺跡の調査歴（地点は第92図に対応する）

地点	地点詳細	調査・発見日	出土遺物	その他	文献
A	字花の木 1619番地	昭和 29年 8月 26日～同年 8月 28日	真田町式壺・甕、奇造式壺・甕・高杯・鉢など	調査指導は植崎彰一氏	千秋村史編纂委員会編・発行 1956「町屋遺跡」「千秋村村史」
B	字花の木、07D区の東 20m 地点付近	昭和後期	埴形壺・赤彩広口壺	長谷川稔氏所蔵資料	本報告書付論 3 参照
C	花の木遺跡、07D区の南西 100m 地点付近	昭和 36 年の土取りの際	弥生中期の壺・深鉢・甕 安達厚三氏採集	大參義一・岩野見司 1967「花ノ木遺跡」「新編一宮市史資料編二 弥生時代」一宮市	
D	字北坪 1435番地	昭和 10 年 3 月下旬と昭和 10 年 5 月頃と昭和 13 年 5 月上旬頃	石劍？・石畫？(石小刀か)・敲石	梶田不二男氏採集(梶田氏は地点 D～地点 G 付近に於いて石器 500 点以上、弥生土器 100 点以上他にも採集された)	梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収
E	字北坪 1432番地	昭和 6 年 7 月上旬頃	打製石斧・磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収
F	字北坪 1438番地	昭和 2 年 5 月中頃	磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収
G	字北坪 1430番地	昭和 10 年 5 月上旬頃と昭和 13 年 10 月上旬頃	勾玉・管玉・臼玉・磨製石斧・敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収、坂重吉 1941.6 「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収
H	字北坪 1398番地	昭和 13 年 11 月上旬	弥生時代中期壺・土鍋・球？	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収
I	字北目保 1222番地	昭和 10 年 5 月中旬	敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」「瀧尾の遺跡と遺物」第 29 号、復刻版中巻に所収
J	07D 区の南西 100m 地点付近、地点 C の北側畠地	昭和後期～平成	弥生時代中期～後期の 弥生土器片多數、磨製石斧・敲石・凹み石・砥石・石小刀・打製石鏡・打製石錐など多數	安藤春雄氏採集	本報告書付論 3 参照

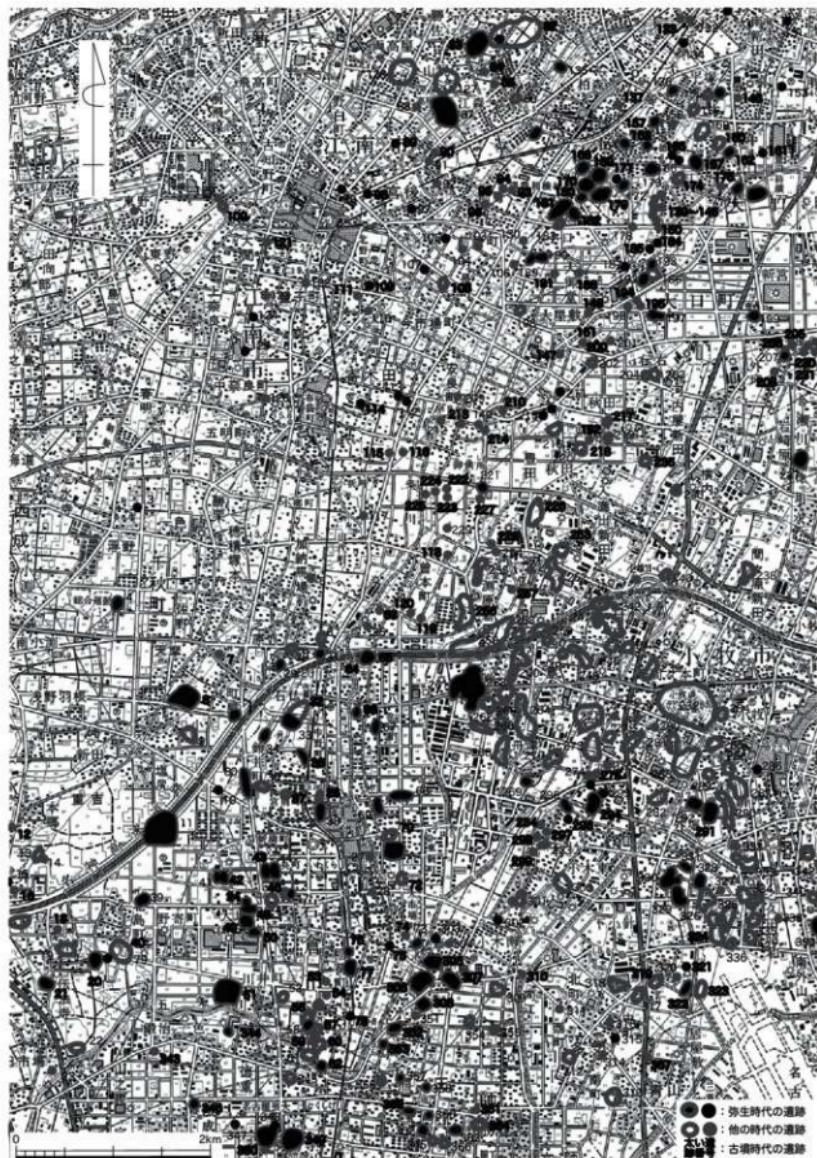
第3節 周辺の遺跡

まず町屋遺跡(1)周辺の遺跡を概観してみるために、本遺跡の北側を愛知県江南市、丹羽郡扶桑町、丹羽郡大口町、本遺跡の東側を小牧市西部、本遺跡の南側を一宮市南東部、北名古屋市、西春日井郡豊山町の範囲について、遺跡分布図を作成した(第6図)。以下、本遺跡周辺の遺跡の分布について述べる。

旧石器時代には、丹羽郡大口町小口にある西山神B遺跡(156)と大口町伝右付近にある山間遺跡(201)・中原遺跡(203)・中原西遺跡(204)、小牧市西之島にある西之島遺跡(251)、小牧山付近にある小牧市元町の鶴源遺跡(275)と小牧市小牧の小牧山東遺跡(284)の大きく4地点にみられる。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代の遺跡がみられた大

口町小口に西山神A遺跡(155)・地蔵堂遺跡(159)が、大口町伝右から秋田付近に東藪山遺跡(202)・中原西遺跡(204)・兎遺跡(219)・北替地遺跡(220)が、小牧市本町付近に鶴源遺跡(275)・織田井戸遺跡(294)が分布する。また江南市山尻町から江森町にかけて高海戸遺跡(83)・河原山遺跡(86)・角舟遺跡(87)が、一宮市千秋町に佐野遺跡(4)が、一宮市丹陽町伝法寺付近に池之上遺跡(17)・椎現山遺跡(368)が、一宮市丹陽町塩尻から岩倉市大地町にかけて猫島遺跡(11)・穴田遺跡(42)・西町畠遺跡(43)・伴定遺跡(45)・西北出(A)遺跡(47)・野辺遺跡(49)・ノンベ遺跡(50)が、岩倉市八郷町から鈴井町にかけて御山寺遺跡(35)・八郷遺跡(65)が、岩倉市曾野町から西春日井郡師勝



第6図 町屋遺跡周辺の遺跡

1. 長良郡御陵 (古墳時代)	124. 神奈川原 (古墳時代)	247. 東松島城跡 (古墳時代)
2. 佐久 (遺跡) (古墳時代)	125. 佐久今宿跡 (古墳時代・室町時代)	248. 佐久今宿跡 (古墳時代)
3. 境芦遺跡 (古墳時代・平安時代・鎌倉時代)	126. 佐久木崎跡 (古墳時代)	249. 桐生木崎跡 (中世)
4. 佐野郡遺跡 (古墳時代・奈良時代)	127. 木崎越跡 (中世)	250. 佐原子母原 (中世)
5. 佐野郡遺跡 (古墳時代・奈良時代)	128. 木崎越跡 (中世)	251. 西原子母原 (中石器時代)
6. 佐野郡遺跡 (古墳時代・奈良時代)	129. 北山越跡 (中世)	252. 年代溝跡 (古墳時代・中世)
7. 内長谷古墳 (古墳時代)	130. 高見越跡 (鎌倉時代)	253. 久保田越跡 (古墳時代・中世)
8. 一宮高坂古墳和高坂塚 (古墳時代～鎌倉時代)	131. 長良尾根塚 (古墳時代)	254. 久保田越跡 (古墳時代・中世)
9. 長良尾根塚 (古墳時代)	132. 長良尾根塚 (古墳時代)	255. 久保田越跡 (古墳時代・中世)
10. 黒瀬古墳 (古墳時代)	133. 長良尾根塚 (古墳時代)	256. 日置遺跡 (古墳時代・中世)
11. 鶴ヶ瀬古墳 (古墳時代・室町時代)	134. 長良尾根塚 (古墳時代)	257. 三河御子野跡 (古墳時代・中世)
12. 壱岐古墳 (古墳時代・平安時代・鎌倉時代)	135. 長良尾根塚 (古墳時代)	258. 三河御子野跡 (古墳時代)
13. 丹波越跡 (古墳時代・平安時代)	136. 長良尾根塚 (古墳時代)	259. 丹波越跡 (古墳時代)
14. 丹波越跡 (古墳時代・平安時代)	137. 元氣原 (古墳時代)	260. 丹波越跡 (古墳時代)
15. 斧木原跡 (古墳時代・平安時代)	138. 元氣原 (古墳時代)	261. 丹波原 (丹波遺跡) (古墳時代)
16. 斧木原跡 (古墳時代・平安時代)	139. 元氣原 (古墳時代)	262. 丹波原 (丹波遺跡) (古墳時代)
17. 斧木上遺跡 (古墳時代・奈良時代・鎌倉時代)	140. 白山1号古墳跡 (古墳時代・白山1号塚)	263. 旦坂新道跡 (中世)
18. 相模山塚 (古墳時代・奈良時代)	141. 白山2号古墳跡 (古墳時代・白山2号塚)	264. 三河原 (東海道通路) (中世)
19. 佐久井遺跡 (古墳時代・奈良時代)	142. 白山3号古墳跡 (古墳時代・白山3号塚)	265. 三河原 (東海道通路) (中世)
20. 佐久井遺跡 (古墳時代・奈良時代)	143. 白山4号古墳跡 (古墳時代・白山4号塚)	266. 三河原 (東海道通路) (中世)
21. 西門古墳 (古墳時代・平安時代)	144. 白山5号古墳跡 (古墳時代・白山5号塚)	267. 三河原 (東海道通路) (中世)
22. 丘陵ヶ跡 (古墳時代・室町時代)	145. 白山1号古墳跡 (古墳時代・白山1号塚)	268. 上田原跡 (中世)
23. 大河原跡 (古墳時代・平安時代)	146. 白山2号古墳跡 (古墳時代・白山2号塚)	269. 上田原跡 (中世)
24. 大河原跡 (古墳時代・平安時代)	147. 大河原跡 (古墳時代)	270. 上田原跡 (中世)
25. 井ノ堀跡 (古墳時代)	148. 大日原跡 (古墳時代)	271. 松原遺跡 (古代～中世)
26. 新井古跡 (古墳時代)	149. 大日原跡 (古墳時代)	272. 丹波駿河跡 (中世)
27. 丹波越跡 (古墳時代～奈良時代)	150. 丹波越跡 (古墳時代)	273. 丹波越跡 (中世)
28. 佐久越跡 (古墳時代)	151. しまらん原 (古墳時代)	274. 野間越跡 (中世)
29. 西御嶽跡 (古墳時代)	152. 高見越跡 (古墳時代)	275. 道高越跡 (古石器時代～绳文時代)
30. 長良尾根塚 (古墳時代)	153. 高見越跡 (古墳時代)	276. 道高越跡 (古石器時代～绳文時代)
31. 長良尾根塚 (古墳時代)	154. 高見越跡 (古墳時代)	277. 長良尾根塚 (中世)
32. 榛木原跡 (古墳時代)	155. 榛木原 (遺跡) (古墳時代)	278. 上田原跡 (中世)
33. 鹿島原跡 (古墳時代)	156. 榛木原 (古墳時代)	279. 鹿島原跡 (中世)
34. 鹿島原跡 (古墳時代)	157. 鹿島原 (古墳時代・古墳時代)	280. 鹿島原跡 (中世)
35. 鹿島原跡 (古墳時代・奈良時代)	158. 鹿島原 (古墳時代)	281. 仁治原跡 (中世)
36. 法寺寺跡 (古墳時代)	159. 法寺寺跡 (古墳時代)	282. 仁治原跡 (中世)
37. 法寺寺跡 (古墳時代)	160. 法寺寺跡 (古墳時代)	283. 仁治原跡 (中世)
38. 宮原跡 (古墳時代)	161. 万葉原跡 (古墳時代)	284. 仁治原跡 (古石器時代・中世)
39. 西御嶽跡 (古墳時代)	162. 驚原跡 (古墳時代～古墳時代)	285. 仁久之庄北浦跡 (中世)
40. 前原跡 (古墳時代・平安時代)	163. 驚原跡 (古墳時代)	286. 驚原跡 (古墳時代)
41. 前原跡 (古墳時代・平安時代)	164. 驚原跡 (古墳時代)	287. 驚原跡 (古墳時代)
42. 六月原跡 (古墳時代～古墳時代)	165. 今原跡 (古墳時代～古墳時代)	288. 驚原跡 (中世)
43. 西御嶽跡 (古墳時代～古墳時代)	166. 今原跡 (古墳時代)	289. 驚原跡 (中世)
44. 佐久井遺跡 (古墳時代)	167. 今原跡 (古墳時代)	290. 驚原跡 (中世)
45. 佐久井遺跡 (古墳時代)	168. 今原跡 (古墳時代～古墳時代)	291. 久之庄中川遺跡 (古墳時代・中世)
46. 西之庄 (古墳時代)	169. 日置原跡 (古墳時代～古墳時代)	292. 和田原跡 (中世)
47. 西之庄 (A) 遺跡 (古墳時代・生糸時代)	170. 日置原跡 (古墳時代～古墳時代)	293. 下伊那郡御子野通路 (中世)
48. 西之庄 (B) 遺跡 (古墳時代)	171. 日置原跡 (古墳時代～古墳時代)	294. 久保田越跡 (古墳時代・中世)
49. 野川西原跡 (古墳時代～古墳時代)	172. 葵原跡 (古墳時代)	295. 小山御原跡 (古墳時代・中世)
50. ノハニ原跡 (古墳時代～古墳時代)	173. 早原跡 (古墳時代)	296. 天王山原 (古墳時代)
51. 佐久井遺跡 (古墳時代～鎌倉時代)	174. 早原跡 (古墳時代)	297. 天王山原 (古墳時代・中世)
52. 佐久井遺跡 (古墳時代)	175. (小)川原 (古墳時代)	298. 天王山原 (古墳時代)
53. 神寺寺跡 (古墳時代)	176. 七郎原跡 (古墳時代)	299. 争原寺跡 (古墳時代)
54. 古ノ古原 (古墳時代)	177. 仁光原跡 (古墳時代)	300. 争原寺跡 (古墳時代)
55. 古ノ古原 (古墳時代)	178. 仁光原跡 (古墳時代)	301. 争原寺跡 (古墳時代)
56. 佐久井遺跡 (古墳時代)	179. 中原原跡 (古墳時代～古墳時代)	302. 争原寺跡 (古墳時代)
57. 前原跡 (古墳時代・室町時代)	180. 仁原東原跡 (古墳時代～古墳時代)	303. 争原寺跡 (古墳時代)
58. 石原跡 (古墳時代)	181. 仁原東原跡 (古墳時代～古墳時代)	304. 仁原西原跡 (古墳時代)
59. 石原跡 (古墳時代)	182. 仁原東原跡 (古墳時代～古墳時代)	305. 仁原西原跡 (古墳時代)
60. 下ノ原跡 (古墳時代)	183. 西原跡 (中世)	306. 仁原西原跡 (古墳時代)
61. 小原跡 (古墳時代・桃絆出土)	184. 大原1号 (古墳時代)	307. 仁原西原跡 (子田原跡) (古墳時代・中世)
62. 小原跡 (古墳時代)	185. 大原2号 (古墳時代)	308. 仁原西原跡 (古墳時代・中世)
63. 横山古原 (古墳時代)	186. 大原3号 (古墳時代)	309. 仁原西原跡 (古墳時代)
64. 七郎原跡 (古墳時代)	187. 仁原跡 (古墳時代)	310. 仁原西原跡 (古墳時代)
65. 八郎原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	188. 仁原跡 (古墳時代)	311. 仁原西原跡 (古墳時代)
66. 八郎原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	189. 仁原跡 (古墳時代)	312. 仁原西原跡 (古墳時代)
67. 仁原跡 (古墳時代)	190. 仁原西原跡 (古墳時代)	313. 仁氣原 (古墳時代) (古代～中世)
68. 中原原跡 (古墳時代)	191. 仁原西原跡 (古墳時代)	314. 仁氣原 (古墳時代) (中世)
69. 中原原跡 (古墳時代)	192. 仁原西原跡 (古墳時代)	315. 仁氣原 (古墳時代) (中世)
70. 古山御原跡 (古墳時代)	193. 仁原跡 (古墳時代)	316. 多多良原・西原跡 (中世)
71. 真寺寺跡 (古墳時代)	194. 大原1号 (古墳時代)	317. 仁原跡 (古墳時代)
72. 真寺寺跡 (古墳時代)	195. 大原2号 (古墳時代)	318. 仁原跡 (古墳時代)
73. 佐久井遺跡 (古墳時代～平安時代)	196. 大原3号 (古墳時代)	319. 仁原跡 (古墳時代)
74. 佐久井遺跡 (古墳時代)	197. 五郎原跡 (古墳時代)	320. 仁原跡 (中世)
75. 神寺寺跡 (古墳時代)	198. 仁原跡 (古墳時代)	321. 真寺寺跡 (古墳時代・古墳時代・中世)
76. 神寺寺跡 (古墳時代)	199. 仁原跡 (古墳時代)	322. 真寺寺跡 (古墳時代・中世)
77. 四郎原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	200. シラカバ原 (古墳時代) (古墳時代)	323. 小仁原 (仁原跡) (古墳時代・中世)
78. 長良尾根塚 (古墳時代)	201. 仁原跡 (仁原跡) (古墳時代)	324. 仁原跡 (古墳時代・中世～近世)
79. 北山原跡 (古墳時代)	202. 仁原跡 (仁原跡) (古墳時代)	325. 仁原跡 (八幡原跡) (中世)
80. 仁原跡 (古墳時代～奈良時代)	203. 中原原跡 (古墳時代)	326. 仁原跡 (古墳時代)
81. 仁原跡 (古墳時代～奈良時代)	204. 仁原西原跡 (古石器時代・绳文時代)	327. 小仁原 (仁原跡) (中世)
82. 二子原跡 (古墳時代～中世)	205. 仁原西原跡 (古墳時代)	328. 大河原跡 (古代～中世)
83. 仁原跡 (古墳時代～奈良時代)	206. 仁原西原跡 (古墳時代)	329. 小仁原 (仁原跡) (古墳時代・中世)
84. 石原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	207. 神原跡 (古墳時代)	330. 小仁原 (仁原跡) (市原跡) (古代～中世)
85. 宮原跡 (古墳時代)	208. 神原跡 (古墳時代)	331. 小仁原 (北山原跡) (中世)
86. 沼原跡 (古墳時代)	209. 仁原跡 (古墳時代)	332. 仁原跡 (古墳時代)
87. 小室原跡 (古墳時代～中世)	210. 仁原跡 (古墳時代)	333. 仁原跡 (古墳時代)
88. 小室原跡 (古墳時代～中世)	211. 芳原跡 (古墳時代)	334. 仁原跡 (古墳時代)
89. 大河原跡 (古墳時代～中世)	212. 西原跡 (古墳時代)	335. 仁久之庄八幡原跡 (中世)
90. 大河原跡 (古墳時代～中世)	213. 西原跡 (古墳時代)	336. 仁久之庄八幡原跡 (中世)
91. 宮原跡 (古墳時代)	214. 仁原跡 (古墳時代)	337. 仁久之庄仁原跡 (中世)
92. 八郎原跡 (古墳時代)	215. 仁原跡 (古墳時代)	338. 仁原跡 (仁原跡) (中世)
93. 寺ノ西原跡 (古墳時代)	216. 仁原跡 (古墳時代)	339. 西山原 (西山原跡) (中世)
94. 仁原跡 (古墳時代)	217. 仁原跡 (古墳時代)	340. 天王山原 (中世)
95. 京原跡 (古墳時代)	218. 仁原跡 (古墳時代)	341. 仁原跡 (古墳時代)
96. 前原小字原跡 (古墳時代)	219. 仁原跡 (古墳時代)	342. 仁原跡 (古墳時代)
97. 前原小字原跡 (古墳時代)	220. 仁原跡 (古墳時代)	343. 仁原跡 (古墳時代)
98. 仁原跡 (古墳時代)	221. 仁原跡 (古墳時代)	344. 仁原跡 (古墳時代～中世)
99. 小室原跡 (平安時代～鎌倉時代)	222. 木崎原 (古墳時代)	345. 仁原跡 (古墳時代)
100. 大河原跡 (古墳時代・平安時代)	223. 木崎原 (古墳時代)	346. 仁原跡 (古墳時代)
101. 大上原跡 (古墳時代・平安時代)	224. 木崎原 (古墳時代)	347. 仁原跡 (古墳時代)
102. 豊家原跡 (鎌倉時代・江戸時代)	225. 木崎原 (古墳時代)	348. 仁原跡 (古墳時代)
103. 宝生寺寺跡 (古墳時代～奈良時代)	226. 仁原跡 (古墳時代)	349. 仁原跡 (古墳時代)
104. 仁原跡 (古墳時代)	227. 仁原跡 (古墳時代)	350. 仁原跡 (古墳時代)
105. 山王山原跡 (鎌倉時代～室町時代)	228. 山古原 (古墳時代)	351. 仁原跡 (古墳時代)
106. 真音寺遺跡 (鎌倉時代・四山山遺跡)	229. 平原原跡 (古墳時代)	352. 仁原跡 (古墳時代)
107. 石枕古原跡 (古墳時代)	230. 平原原跡 (古墳時代)	353. 仁原跡 (古墳時代)
108. 石枕古原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	231. 仁原跡 (古墳時代)	354. 仁原跡 (古墳時代)
109. 仁原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	232. 仁原 (安土山原跡) (古墳時代)	355. 仁原跡 (古墳時代)
110. 長原跡 (古墳時代～鎌倉時代)	233. 仁原跡 (古墳時代)	356. 仁原跡 (古墳時代)
111. 仁原跡 (古墳時代)	234. 仁原跡 (古墳時代)	357. 仁原跡 (古墳時代)
112. 横原跡 (古墳時代)	235. 仁原跡 (古墳時代・中世)	358. 仁原跡 (古墳時代)
113. 亲庭原跡 (古墳時代)	236. 仁原跡 (古墳時代)	359. 仁原跡 (古墳時代)
114. 上原跡 (古墳時代～生糸時代)	237. 仁原跡 (古墳時代)	360. 仁原跡 (古墳時代)
115. 仁原跡 (古墳時代)	238. 仁原跡 (古墳時代)	361. 仁原跡 (古墳時代)
116. 真音寺古原 (古墳時代～鎌倉時代)	239. 仁原今木原跡 (古墳時代)	362. 仁原跡 (古墳時代)
117. 小折原跡 (古墳時代)	240. 仁原跡 (古墳時代)	363. 仁原之庄仁原跡 (古墳時代)
118. 仁原跡 (古墳時代)	241. 仁原跡 (古墳時代)	364. 仁原之庄仁原跡 (古墳時代～中世)
119. 横原跡 (古墳時代)	242. 仁原跡 (古墳時代)	365. 仁原跡 (古墳時代)
120. 仁原跡 (古墳時代)	243. 仁原跡 (古墳時代)	366. 仁原跡 (古墳時代)
121. 横原跡 (古墳時代)	244. 仁原跡 (古墳時代)	367. 仁原古原 (古墳時代)
122. 大河原跡 (古墳時代)	245. 仁原跡 (古墳時代)	
123. 西尾跡 (宝町時代)	246. 仁原跡 (古墳時代)	

第6図の町屋遺跡周辺の遺跡一覧

町山の前にかけて国衙遺跡（77）・藤島遺跡（304）・堤下遺跡（354）・六の坪遺跡（355）が比較的集まって分布している。

弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡があった地域をつなぐように遺跡の分布が広がり、大きく4つの分布するエリアを捉えることができる。一つは青木川の西にある江南市江森から大口町余野にかけての地区付近を中心分布する一群、二つ目は町屋遺跡も含まれるもので、一宮市丹陽町天摩から岩倉市大地町や小牧市藤島町を経て、師勝町熊之庄にいたる地区付近を中心に分布する一群、三つ目は小牧山の南西部にある小牧市元町から常普請にかけての地区付近を中心に分布する一群、四つ目は一宮市丹陽町伝法寺付近に分布する一群などに分かれれる。

本報告の主体となる弥生時代の町屋遺跡周辺の遺跡について具体的にみると、本遺跡から南東2.9kmにある一宮市元屋敷遺跡（20）は、弥生時代前期の集落遺跡として著名で、東西約120m、南北100mの環濠が確認されている。隣接する岩倉市北島白山遺跡も弥生時代前期の遺跡として知られている。南2.1kmにある岩倉市野辺遺跡では前期の遠賀川土器片が出土し、遺物包含層が確認されている。近接するノンベ遺跡からも遠賀川式土器や中期朝日式土器片が出土している。続く弥生時代中期においても、南西1.3kmにある一宮市猫島遺跡（11）では弥生時代中期前半の環濠集落がみつかっており、南1.9kmにある岩倉市大地遺跡（24）では沈線文形土器として知られる「大地式土器」を出土した遺跡であり、南西3.0kmにある一宮市飯守神遺跡（369）では、中期中葉の土器・石器等が出土しており、土坑・溝を主体とする遺構群も検出されている。他にも一宮市一宮南高校平松遺跡（8）で弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の土器が出土した。同市鹿取遺跡（9）も弥生時代中期～後期の遺跡である。南南西0.8kmにある一宮市蕪池遺跡（10）は、弥生時代後期の大型器台、底部に先行した大型長頸壺など完形土器多数が出土し、後期の墓域が展開したと推定されている。岩倉市梅ノ木遺跡（32）では弥生時代後期の竪穴建物、溝状遺構や、古墳時代初頭の土器などが出土している。岩倉市岩倉城遺跡（28）でも弥生時代後期末の竪穴建物と方

形周溝墓が確認されている。このように、遺跡群として捉えられる遺跡の分布も確認されている出土遺物などからみると、遺跡の中心となる時期は異なっており、遺跡間において変遷がみられる。

古墳時代の遺跡は弥生時代の遺跡分布とやや地点を変えつつもほぼ重なるように展開しており、古墳時代後期の前方後円墳である巣本二子塚古墳（118）がある大口町秋田や同町御供所から江南市曾木本町や小牧市三ツ瀬原新田にかけて、新たに遺跡が多く分布する。この結果、図5の北にある江南市山の尻や大口町小口から大口町御供所付近を経て南の岩倉市大地町や師勝町熊之庄にいたる遺跡群と大口町御供所から南東の小牧市下小針につづく遺跡群が形成されたようにみられる。

以上に述べた遺跡の分布は、主に地表面における表面採集によるところが大きい成果であり、分布図を作成した範囲の地域では、比較的多くの遺跡が確認されているように思われる。しかし、近年までの宅地や商業施設、耕作地、工場などの開発により、地表面における遺物の表面採集が困難な地区も多くある為、必ずしも正確な遺跡の状態を示しているわけではないが、大まかな傾向をみる上で有効な方法であり、先に述べた弥生時代から古墳時代の遺跡分布以外にも町屋遺跡の東北東1.2kmにある一宮市長福寺廃寺跡（6）と本遺跡から南東2.7kmにある岩倉市御土井廃寺跡（76）、本遺跡から南2.8kmにある薬師堂廃寺跡（51）、本遺跡から南西3.0kmにある一宮市伝法寺廃寺跡（19）などがあり、尾張國府推定地の候補ともなっている岩倉市国衙遺跡（77）の存在とともに、白鳳時代から奈良時代にかけて広く開発された地域と考えられる。また中世の遺跡は古代まで遺跡があり多く存在しなかつた小牧市小牧城跡（232）のある北西側から南側の地域に比較的多く分布するようであり、遺跡の地域的変遷も考えられ、興味深い傾向である。

また、近年大規模な発掘調査が行われた遺跡の例をみると、本遺跡から1.3kmにある一宮市猫島遺跡（11）では、縄文時代後期前葉から晩期末葉の土器や石器、磨製石斧が少量出土しており、遺跡の東側に自然河道が見つかっており、遺構こそ極めて少ないが、微高地上に集落が存在した可能性が高い。弥生時代中期前半には長径200m前後の環濠集落がみつかっており、内

部からは平面プランが円形の松菊里型住居や平面が方形プランの堅穴建物が90棟程、方形周溝墓10基、土坑多数、水田跡があり、弥生時代中期の拠点集落の一つである。その後も古墳時代前期後半の大型土坑や奈良時代の掘立柱建物群、平安時代後半の掘立柱建物3棟、井戸1基、溝などがあり、中世後半期にかけて北東から南西にのびる多数の溝がみつかっている。

本遺跡の南東0.8kmにある岩倉市御山寺遺跡（35）では、弥生時代の遺跡として周知されてきたが、発掘調査の結果、岩倉市鈴井町にある立切遺跡（34）の南に位置する西側地点では绳文時代晚期前半を中心とする土坑などの遺構群、古墳時代前期の堅穴建物や溝などの遺構群、古代末から中世前半期の河道に伴う遺構群、中世後半期の区画溝などがあった。また岩倉市中野町にかかる東側地点では弥生時代後期末の方形周溝墓1基、古墳時代前半の堅穴建物25棟、奈良時代末から平安時代前半にかけての堅穴建物8棟や古代から中世にかけての掘立柱建物11棟、中世後半期の掘立柱建物や区画溝、中世後半期から戦国時代の区画溝や

土坑、江戸時代の土坑墓、水田跡などが確認されている。

このように各遺跡の中においても地点毎に異なる遺構変遷がみられ、遺構と遺物の分布には消長がみられる。これらは、従来周知されてきた遺跡の情報が、発掘調査で確認できる情報の一部分であることを示す可能性が高いようである。これまでに周知されてきた遺跡（遺物包含地）の外にも、発掘調査の行われた事例では遺跡が広がる可能性が高く、近接する遺跡間では、連動した人々の営みが存在したものと思われる。今後の研究を期待したい。

【註】

- 註1 梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村ニ於ける遺物」『尾張の遺跡と遺物』第29号（復刻版中巻に所収）
坂重吉 1941.6 「丹羽郡千秋村大字町星出土の石製品と石器に就いて」『尾張の遺跡と遺物』第29号（復刻版中巻に所収）
- 註2 紅村弘 1963 『東海の先史遺跡』総括編、名古屋鉄道株式会社
- 註3 大參義一・岩野見司 1967 「花ノ木遺跡」『新編一宮市史資料編二 弥生時代』一宮市

第2章 遺構

第1節 基本層序

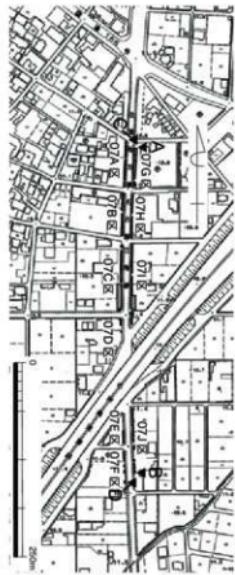
今回の発掘調査を行った各調査区の典型的堆積状況を示す部分を表現して、発掘調査地点の南北約450mにわたる表土以下の堆積について柱状断面図を作成した（第7図）。柱状図数は県道名古屋江南線の東側が20本、西側が22本である。なお、柱状図の上層表現については、調査時の土層觀察の情報に基づいて、色調を暗色：明度1～3、中間色：明度4・5、明色：明度6～8に分類し、粒度を粘土質シルト・極細粒砂・細粒砂、礫層に分類し表現した。以後の堆積の記述は色調の明度と粒度によって行う。

本遺跡地およびその周辺では、水田や畠だったところに最近の土盛り整地が多くみられ、発掘調査時の地表面の標高は名神高速道路北側の07A区と07G区、07G区付近が11.5m～11.6m前後、名神高速道路を挟む南北の地点が11.2m～11.4mで、盛土がない水田が残っていた07Cc区・07Id区・07Ja北区の標高10.6m～10.8mを除くと、北から南に緩やかに下る地形である。

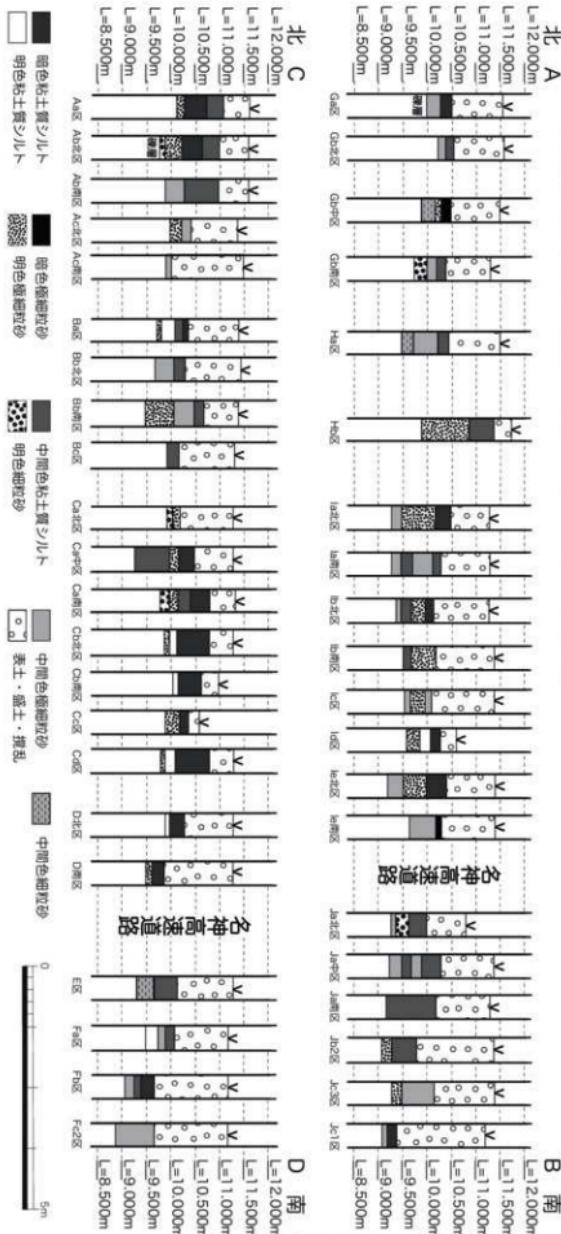
表土である土盛り整地・近代以後から現在にかけての畠・水田の旧耕作土下の状況は、近世にさかのぼる可能性のある旧水田（畠）耕作土が一部確認される地点はあるものの、概ねその下で弥生時代から中世にかけての遺物包含層（遺構を含む、以下省略）があり、その上面付近が遺構検出面となる。遺物包含層の上面の標高は、表土の影響が及ぶ深度により異なる。遺物包含層と遺跡基盤層の堆積物の粒度は、下層から礫層

があり、その上に細粒砂・極細粒砂・粘土質シルトの上方へ細粒化する順に基本的に堆積しており、基盤層の部分ではこれらが互層になる部分も確認できる。

古代から中世にかけての遺物包含層は、中間色粘土質シルトを主体に、名神高速道路の北側にある07Gb中区・07Aa区・07Ab北区・07Ab南区・07Bb南区や名神高速道路の南側にある07Jc3区・07E区・07Fa区・07Fb区において0.1m～0.4m程みられ、本遺跡の周辺部分に多い傾向がみられる。弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物包含層は、暗色粘土質シルトと中間色粘土質シルト・中間色極細粒砂を主体にみられ、07Aa区・07Ab北区・07Ab南区・07Bb南区・07C区全体・07D区全体・07Gb中区・07Gb南区・07H区全体・07I区全体・07Ja南区に層厚0.1m～0.6m程で広がっており、弥生時代の遺構分布とほぼ対応している。この堆積の中で、弥生時代中期～後期の遺物包含層である暗色粘土質シルト層は07Aa区・07Ab北区・07Ca中区から07D南区にかけて、07Ia北区南側から07Ia南区北側にかけて、07Id区・07Ie北区の地点に確認でき、標高10.2m～10.8mにみられる。名神高速道路南側の調査区では基盤層を掘り込む擾乱が多く、概して遺構の残存状況は悪かったが、07Ja南区に弥生時代中期から古代にかけての遺物包含層が確認できたのは、本遺跡が名神高速道路の南側にひろがることが確認できた点で重要である。



第 7 図 町屋遺跡基本土層図 (土層図垂直方向は 1 : 100)



第2節 各調査区の概要

今回の発掘調査できた調査区は、県道の両脇部にある小さく長細いものが多く、調査地点により遺構の残存状態に大きな違いがあり、また確認された遺構の時期・形状も差異があるため、各調査区において調査の概観を述べ、その後遺構面ごとに主要遺構について述べる。

尚、遺構の時期について、古墳時代前期以前は弥生時代中期前葉をA期、弥生時代中期中葉前半をB期、弥生時代中期中葉後半をC期、弥生時代中期後葉をD期、弥生時代後期をE期、古墳時代前期前半をF期として、記述した。

・07Aa 区（第8図・第22図・第36図）

概観

表土層（約60cm厚）下の黄褐色シルト層の上面を第1面（標高約10.5～11.0m）、その50～60cm下の礫まじりシルト層上面を第2面（標高約10.2～10.5m）、さらにその約10cm（調査区北端で約20cm）下の黒色シルト層上面を第3面（標高約10.0m）とした。第1面で古代（7世紀）の土坑、第2面で弥生時代集落の遺構が検出された。一方第3面は、北へ向かって傾斜する地形で、ピット状の落ち込みが多数みられたものの遺物の出土はなく、これらは植物の痕跡と考えられる。

【第1面】

010SK 條円形の土坑である。長軸0.62m 短軸0.43mで深さは0.17mである。011SKと一部重複し、関係は011SK→010SKとなる。遺物は、須恵器杯身が出土している。時期はI-I7号窯期で7世紀後半である。

011SK 010SKと一部重複して検出されたやや崩れた円形の土坑である。こちらが先行する。東西方向の軸は0.8mで深さは0.44mである。遺物は土師器長胴甌の口縁が出土している。時期は概ね7世紀代である。

【第2面】

046SK・047SK 調査区北半部で検出された黒色土層を畔のように挟んで分布する黄褐色土の土坑である。一見水田のような景観であるが、検出時には明瞭であった平面形も、掘削すると境界がはっきり

しなくなった。出土遺物はない。第3面の草本類痕と同じく人為的なものではないと考えられる。

・07Ab 北区（第8図・第22図・第36図）

概観

07Aa区に南接する。第1面（標高約11.0m）では古代～中世、特に100SK・103SKのような明瞭な中世の土坑が検出されている。第2面（標高約10.6m）では弥生時代中期の遺構が検出された。なお当該調査区では調査区東壁にそってサブトレレンチ掘削を行い、第2面から約80cm下（標高約9.8m）で礫層を確認した。

【第1面】

100SK およそ南北方向に長軸となる條円形の土坑である。長軸はグリッド北から東へ20°振れる。残存最大長は1.36m、深さは0.2cmである。遺物は山茶碗の小片が出土しており時期は中世と考えられる。周辺で検出されている同形状の土坑群中で最も残存状況が良い。

103SK 100SKと重複しそれに先行する土坑である。形状や大きさが100SKとほぼ同じであり、これも同時期の土坑墓の可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。

【第2面】

110SB 調査区南部に位置する。竪穴建物の北西隅部が検出されている。建物方位はグリッド北から西へ35°振れる。その北西辺では壁溝が認められる。北西辺長は1.54mある。遺構の重複関係は、111SKより前に112SK・113SKより後になる。顕著な出土遺物はなかった。

・07Ab 南区（第8図・第22図・第36図）

概観

07Ab北区の約2m南の地点から設定した調査区である。基本土層は同区とほぼ同じである。第1面（標高約10.9～11.0m）で古代～中世の遺構、第2面（標高約10.3～10.5m）で弥生時代の遺構が検出された。なお、第2面は遺構の重複が多いため、まず上部に位置する溝群を調査し、その後下位の竪穴建物2棟などの遺構を調査した。

【第1面】

080SK 調査区北端で検出された隅丸方形土坑の一部である。出土遺物はなかったが、形状から墓坑と考えられる。

081SK 調査区半ばで検出された、東西方向に長軸となる楕円形土坑の一部である。長軸 1.17m 以上、短軸（幅）は 1.09m、深さは 25m である。遺物は、須恵器無蓋高杯（H-50 号窯期～I-17 号窯期）で 7 世紀中葉～後葉である。遺構形状や遺物から古代の土坑墓と考えられる。

【第2面】

084SD 085SD に重複して検出された溝状遺構である。深さは 0.25m である。屈曲部があることなどから第3面の 094SB の上層部分に相当する可能性が高い。遺物は C 期の太頭壺や深鉢が比較的大きな破片で出土しており、第3面検出の竪穴建物の時期に関わると考えられる。

085SD 調査区を北東から南西へと抜ける溝である。幅 0.94m、深さは 0.25m である。出土遺物は小片で先行する 084SD に由来するとみられる。

087SD 調査区南部で検出された溝状遺構である。085SD と重複しそれに先行する。全体形は不明であるが、調査区東壁によるとその断面は皿状をしており、竪穴建物の可能性も考えられる。顕著な出土遺物はないが、周辺状況から C 期と考えられる。

【第3面】

093SB グリッド北から若干西へ振れる竪穴建物である。調査区北部で北東隅部を検出し、南部は上位の溝（085SD など）により不明瞭であった。このような状況であるため床面はほとんど残存せず、また顕著な遺物はなく弥生土器の小片が出土したのみであった。深さは 0.09m である。遺構の重複関係では、093SB → 094SB となる。094SB 093SB と重複して検出された竪穴建物である。壁溝の屈曲部が検出されている。建物方位はグリッド北から西へ 50° 振れる。建物平面形における一辺の長は推測するしかないが、仮に 093SB と同規模のものを推測することも可能である。出土遺物は弥生土器小片であったが、第2面の 084SD が当該遺構の埋土上層であると考えられ、それによると C 期である。

・07Ac 北区（第8図）

概観

07Ab 南区から約 4m 南から設定した調査区である。掲乱などの表土層が地表面下約 1.3m 以上あり、07Ab 南区以北でみられた第1面は、当該調査区では滅失していた。加えて調査区南側に向かって基盤砂層が上昇傾向にあるため、同第2面相当の遺構の残存状況も良くなかった。この検出面の標高は約 10.3m である。遺構は、東西方向にのびる数条の溝や不定形な土坑状遺構が検出されるにとどまり、弥生土器は 037SK で出土したのみである。したがって大半の遺構について時期は不明である。

【第1面】

025SD 調査区半ばで東西方向にのびる溝である。幅約 1.5m、深さ 0.29m で中央部やや凹む浅い皿状の溝である。方位はグリッドの東西方向からやや北東ないしは南西へ振れる。重複関係では 024SK・026SK より後で、顕著な遺物はなかったものの、相対的に新しい時期と考えられる。また 027SD・029SD などとほぼ同じ規模であることから古代・中世以降の地境溝である可能性も考えられる。

027SD 調査区半ば、025SD の南側で同様に東西方向にのびる溝である。幅 1.13m、深さ 0.21m である。方位はグリッドの東西方向からわずかに北東ないしは北西方向へ振れる。断面形は緩やかな湾曲である。重複関係では 029SD より前である。

029SD 調査区半ば、027SD の南側で同様に東西方向にのびる溝である。幅 1.41m、深さ 0.14m である。方位はグリッドの東西方向からわずかに北東ないしは南西方向へ振れる。断面形は浅い皿状である。

・07Ac 南区（第9図）

概観

07Ac 北区の南端から南へ約 2m の地点から設定した小調査区である。地表面下約 1.5m まで掲乱などを含む表土層が、標高 10.0m 前後の基盤砂層まで達しており、遺構は完全に滅失していた。また顕著な遺物の出土もなかった。

・07Ba 区（第9図）

概観

調査着手前の段階で産業廃棄物の存在が想定されていた調査区で、試行的に調査区北端から表土掘削を

開始した。そして北端から約3m 挖り進めたところで大規模な擾乱があらわれたためそれ以上の掘削を中止した。土層 SP9-SP10 では、擾乱に相当する表土層上層（1層）が北から南へ掘り下がりその先で基盤層を掘り込んでいることが示され、ここから南側での遺構検出は不可能と判断される。

・07Bb 北区（第9図・第23図）

概観

07Ba 区に南接する調査区で、地表面から約1.2m は擾乱などの表土層が一部基盤層にまで達していたが、東西方向の溝 029SD・030SD が検出できた。検出は2回実施しているが、検出面のレベルはほぼ同一で標高は約10.3m である。

【第1面】

005SD 東西方向にのびる溝状遺構である。断面は深さ約10cm の浅い皿状である。顕著な遺物はなかった。

【第2面】

029SD 調査区北端に位置する東西溝である。調査区北壁付近で北側上端が検出され、幅1.00m、深さは0.24m である。断面は逆台形になるとみられる。遺物はC期以前のものがごく小片で出土する。当該溝の東方延長には07Ha 区 028SD があり、同一溝の遺構と考えられる。

030SD 029SD から南へ約3m に位置する東西溝である。幅1.25m、深さ0.24m、断面逆台形をしており、029SD とはほぼ同じ規模である。溝の方向はグリッドの東西方向からやや北へ振れておりその東方延長には07Ha 区 024SD があることから、両者は同一溝の遺構とみられる。

・07Bb 南区（第10図・第24図）

概観

07Bb 北区から南へ約5m 離れた地点から設定した調査区である。表土層（70～80cm）下の、調査区北半部では砂層、同南半部ではシルト層上面を遺構検出面とした。検出面の標高は約10.6～10.7m である。調査区東壁（土層 SP15-SP16）によれば、基盤層が北から南へ下り傾斜になっている。遺構は、弥生時代から中世までのものが同一面で検出されたが、遺構数が多数になることから遺構検出と掘削は2回に分けて実施した。

【第1面】

023SD 調査区南部に位置する幅0.70m の東西溝である。断面形は浅い皿状である。遺物は土師器高杯の脚部が出土している。E期以降と考えられる。

【第2面】

008SD 調査区内を北西から南東へぬける溝である。幅1.35m、深さ0.66m である。断面形は縦長の逆台形で掘削後崩落が進まぬうちに埋没したと考えられる。遺物は少ないがC期の太頭壺がある（E07Bb001）。形状から周溝墓の一角と推定するが、その場合調査区東側に展開していたとみられる。

035SB 調査区南半部で壁溝とみられる幅約10cm の小溝を2条検出した。それぞれ南北方向と東西方に延びる。これらを組み合わせて竪穴建物の壁溝を想定すると、グリッド北に対して西へ12° 振れる方位となる。わずかな痕跡であるため所属遺物を特定しがたい。

043SB 035SB と重複してそれに先行する竪穴建物である。南東隅部が検出されており、東辺はグリッド北から西へ20° 振れる。明瞭な壁溝は検出されなかつたが、竪穴建物の一部と推測した。顕著な遺物はなかった。

038SD 調査区南端に位置する東西方向の溝である。北側上端が検出され、全体に浅く中央部がやや凹む形状である。ハケ調整甕片が出土している。

・07Bc 区（第10図）

概観

以前はガソリンスタンドとして利用されていた区画に設定した調査区である。地表面下約1.3m の基盤層まで最近の擾乱層が入り込んでおり、コンクリート基礎があるなど遺構の残存状況は良くなかった。遺構検出面の標高は約10.3m である。また、顕著な遺物の出土もなかった。

・07Ca 北区（第10図・第24図）

概観

全長約2m の小さな調査区であるが、東西方向にのびる溝などを検出した。検出面の標高は約10.3m である。

177SD 東北東から西南西方向にのびる溝の一部である。調査区内では北側の上端と南側への傾斜部分が確認できたのみで、幅1.4m 以上、最深部は0.22m

以上でその南側 07Ca 中区との間にあると思われる。顕著な遺物はなかった。なお、当該溝を東方に延長すると 07Ia 北区の 114SD に達する。

・ 07Ca 中区 (第 11 図・第 25 図)

概観

南北約 15m の調査区である。畠地として利用されていたため大規模な搅乱ではなく、表土層は地表面下約 80cm までである。しかしながら基盤砂層は標高 10.5m まで上昇しており、その上面でのみの遺構検出となつた。ただし遺構の重複が激しいため、調査区南部を中心とし段階に分けて実施している。調査区の北端には東西方向の溝 208SD があり、そこから南側では上位で 208SD と同方向とみられる竪穴建物数棟が検出され、下位では向きの異なる竪穴建物が 2 棟検出されている。さらにそれらが廃絶した後に多数の土器が出土する土坑 203SK が調査区南端で検出されている。

【第 1 面】

186SD 調査区北部に位置する南北溝で、調査区西壁に沿って東側上端が検出されている。幅は 0.76m 以上あるが小溝に近いと考えられる。深さは 0.37m である。明瞭な遺構の重複関係を確認でき、187SD の埋土を掘り込んでおり、南端は 189SK ~ 192SK に掘り込まれている。時期は D 期～中世と考えられる。

187SD 調査区北部に位置する東西溝である。グリッド北に対してほぼ東西方向に延びる南側上端が検出された。断面は緩やかな V 字形をしており、上幅が約 2.9m 以上あるのに対して、底面幅が比較的狭いのが特徴である。深さは 0.38m である。遺物 (E07Ca009 ~ E07Ca015) は小片だが甌を中心に比較的多くみられる。時期は D 期と考えられる。当該溝の東方延長には同時期の溝 07Ia 北区 076SD がある。

190SK 調査区半ばに位置する方形皿状の遺構である。西辺長から一辺は約 2m と推定される。平らな底面で 189SK が検出されている。また重複関係では 186SD 南端埋土を掘り込んでいる。遺物は尾張第 6 型式の山茶甌があり、時期は 13 世紀以降と考えられる。

195SD 調査区半ばに位置する東西溝である。グリッド北に対して若干南東に振れる。検出面での上幅約 1.5m、深さ 0.41m である。断面形は逆台

形の中央部に対し両脇が浅くなる。重複関係は、186SD より後で 193SK や南側で同様に掘り込まれる 196SD より前である。遺物にヒサゴ壺片があるため時期は F 期以降となるが、古代～中世の可能性が考えられる。

198SK 調査区南部に位置する。調査区西壁に沿って検出された推定隅丸長方形の土坑である。

199SD 調査区南部に位置する東西溝である。グリッド北に対しほぼ東西方向に延びる。断面形は検出面での上幅 1.56m、深さは 0.08m の浅い皿状である。重複関係は 200SB より後で 197SK より前である。遺物から D 期以降とみられるが、195・196SD に類似することから古代～中世の可能性が考えられる。

200SB 調査区南端に位置する竪穴建物である。西辺と底面の一部が検出されている。したがってその全体規模は推測域を出ないが、土層断面 (C1d-C1d') によると貼床 (2 層) に対し壁溝 (1 層) が掘り込まれており、竪穴建物の掘り方を検出したものと考えて差し支えない。遺物は D 期に相当するものが中心となっているが、以上の検出状況から考えて建物が機能したのはそれ以降と考えるべきである。

201SB 200SB の底面で検出され、その西方へ延長する小溝である。竪穴建物の北 (南) 壁溝の一部と考えられるが全体形は推測の域を出ない。遺物はなく時期不詳である。しかし周辺で D 期以降の竪穴建物が検出されていることから、一連のものである可能性が考えられる。

202SB 調査区南端に位置する竪穴建物である。北辺の一部とその壁溝が検出されているのみで、全体形については推測域を出ない。しかしその方向は 200SB と同じくグリッド北から 10° 西に振れている点が共通する。重複関係では 200SB の埋土を掘り込んでいる。遺物は D 期を中心に一部 E 期とみられるものもある。後述する 203SK との関係もあるが概ね D ~ E 期と考えることができる。

203SK 調査区南端に位置する楕円形の土坑である。調査区西壁に沿って一部が検出されたにすぎず、全体規模も南北に長軸 1.15m 以上としか推定できないが、多数の土器が出土したことで注目される。断面形は西壁上層断面 (C1Pr-C1Pr') によると皿状で

深さ 0.06m である。埋土は単層で遺構ほぼ全体にわたって土器が廃棄された状態で出土した。土器の時期は D 期を含むが主体は E 期 (E07Ca033・034) や一部は F 期 (E07Ca035) に相当する。壺や壺とともに高杯が比較的多く出土している点が注意される。他に剥片石器が出土している。この遺構の評価であるが、遺構の重複関係では 202SB などの堅穴建物の埋土をその位置とは関係なく掘り込んでおり、それらとは時期的に絶続したものであると考えられる。E～F 期の墓域に関わる遺構と推測される。

【第2面】

215SB 調査区南部に位置する堅穴建物である。北東・南東辺が検出されている。しかしそのほとんどは掘り方が残存しているにすぎず、床面や壁溝については不明である。北東辺はグリッド北から西へ 40° 振れる。重複関係では 217SB より後である。

217SB 調査区南端に位置する堅穴建物である。215SB に一部重複して検出された。当該遺構では南西辺の壁溝が確認されたが、残存部分の大半は 215SB と同様に掘り方である。遺物は弥生土器の壺や壺で、D 期と考えられる。

・07Ca 南区 (第11図・第25図)

概観

表土層の厚さは最大 1.2m である。そのため、検出面は基盤砂層上面の 1 面のみである。調査区の位置は、07Ca 北区南端の 202SB や 203SK の続きが検出される可能性が高かったが、大きく削り込まれてそれらは滅失していた。07Ca 基盤砂層は標高 10.1～10.4m で、北区同様に自然堤防の高所に位置している。複数の土坑と堅穴建物 (182SB) が検出されている。

179SK 調査区北東隅を中心に検出された楕円形の土坑である。長軸は約 1.8m 以上、短軸 1.02m で深さは 0.05m である。出土遺物 (E07Ca003) から D～E 期と考えられる。

182SB 179SK に接し調査区西壁に沿って検出された堅穴建物である。隅丸方形の南東隅を中心に検出され、規模は一辺 1.41m 以上深さ 0.12m である。建物の方向はグリッド北から西へ 30° 振れている。壁溝は確認できなかったが、概ね掘り方部分を

検出したものと考えられる。顯著な遺物なかったが、07Ca 北区第 2 面の堅穴建物 (215SB・217SB) と同じ方向である点が注目されよう。

183SK 調査区南端で検出された崩れた円形の土坑である。長さ 1.38m 以上あり、緩やかな傾斜ですり鉢状の断面形となる。土器から D 期と考えられる。

・07Cb 北区 (第11図・第25図・第37図)

概観

調査区北端から大部分は、地表面下約 1.2m まで近代の水田耕作土による削平があり、水田床上の上面および畦畔の下面を第 1 面として遺構検出を行った (標高約 10.2～10.4m)。結果、第 1 面では土坑 1 基 (234SK) の検出にとどまつたが、再度畦畔下層を中心で検出を行ったところ (第 2 面)、堅穴建物 3 棟他の遺構が確認できた。ただし遺構の重複が激しかったため、調査は 2 段階に分けて実施し、下部の遺構は第 3 面として扱つた。

【第2面】

236SB 堅穴建物の北東辺と壁溝が検出されている。建物方位はグリッド北から西へ 45° 振れる。重複関係では、240SB・241SB より前である。顯著な遺物はなかった。

240SB 236SB の南側で重複して検出された堅穴建物の北西辺である。壁溝は確認できなかつたが、立ち上がりや平らな底面から堅穴建物の床面もしくは掘り方とみられる。建物方位はグリッド北から西へ 30° 振れる。遺構の重複関係では 236SB → 240SB → 241SK である。出土遺物は D 期である。土器の他に直徑約 20cm の平らな円盤が正位で出土している。そして 07Cb 南区には当該遺構と方位が合致する 248SB がある。遺構底面の標高はいずれも約 10.3m で齟齬のない範囲であり、これらで 1 棟分と考えられる。

241SK 240SB の後になる堅穴建物と推定される直線的な平面形の遺構である。壁溝は確認できなかつた。出土遺物は D 期である。240SB 同様、07Cb 南区には当該遺構と方位・底面標高が合致する 246SB があり、これらによって堅穴建物の可能性があると考えられる。その場合建物方位はグリッド北から東へ 30° 振れる。

・07Cb 南区（第 11 図・第 25 図・第 37 図）

概観

07Cb 北区の南端と同様の堆積状況であり、地表面下約 1m に近代の水田畦畔上面がある。そこで第 1 面として水田耕作土を検出した。その後 20 ~ 30cm の包含層を掘削し第 2 面として竪穴建物 246SB を検出した。当該調査区では降雪などによって調査区東壁の中央部が崩落し、そのため土層や付近の遺構平面について十分な記録がとれていない箇所がある。

【第 1 面】

233SD 調査区北部で南側上端が検出された溝状遺構である。それは南東から北西方向に延びており、幅は約 1.3m 以上、深さは 0.18m である。底面は平らで立ち上がりも明瞭な皿状の断面形である。遺物に山茶碗が含まれるので、時期は 14 世紀後半以降と考えられる。これだけで遺構の評価は難しいが、水田耕作時の畦畔もしくは島畑にかかる箇所ではないかと考えられる。

【第 2 面】

282SB 調査区中部に位置する竪穴建物の一部である。検出時には緩やかにカーブしていたが、壁溝は比較的直線で検出されている。したがって形状が確定的ではない。加えて当該遺構の南側で検出された 285SK と同一である可能性も指摘される。

292SB 調査区北部に位置する竪穴建物の南東隅部である。壁溝は確認できなかったが平らな底面からその可能性が高いと考えられる。遺物は内湾口縁鉢があり D 期と推測される。建物方位はグリッド北から西へ 25° 振れる。

284SK・285SK 調査区南部に位置する。ともに直線的な平面形であるため、竪穴建物の一部である可能性が考えられるが、北側への展開が確定的でないので保留される。ただし位置関係から 282SB が 285SK と同一であった可能性が残るもの、先述のような状況の悪化により検証ができていない。出土遺物から D 期と考えられる。

287SD 調査区南端に位置する溝の一部である。南西から北東方向へ延びる北側上端を検出した。調査区範囲内では浅く平らな形状であったが、その位置は大型周溝墓 07Cc 区 003SD の北側延長に相当する。頗著な遺物の出土はなかった。

・07Cc 区（第 12 図・第 26 図・第 27 図）

概観

今次発掘調査で最初に着手した調査区であり、面積も一番広い。調査前は水田として使用されており、07Cb 区などとほぼ同じ標高約 10.30m までが表土層（水田耕作土）である。第 1 面では、001SX などの浅く広い窪地を検出したが、これは現行水田の耕作に伴う窪地である。そこで再度検出したところ（第 2 面）、弥生時代の方形周溝墓や竪穴建物などの遺構がほぼ一面で検出できることが判明した。ただし調査区南部を中心に遺構の重複が激しく、そこででは上下 2 段階で調査を実施した（第 3 面）が、それでも判然としない状況であった。遺構の分布は調査区北寄りで方形周溝墓 003SD、その南側に竪穴建物 2 棟（028SB・035SB）があり、さらに南接して大形土坑 051SK がある。検 3 面ではさらにその南側で重複する竪穴建物 3 棟を検出した。

003SD（大型周溝墓） 調査区北部に位置する。調査区内では、北東から南西方向へのびる溝が屈曲して南東方向となる周溝の南西隅部が検出された。北西溝部分は調査区内で約 4.0m 検出され、幅は 2.8m、検出面からの深さは 0.34m で平らな底面をもつ皿状の断面形をしている。周溝の屈曲部は半径約 2m のカーブとなり、墓の平面形は隅丸方形となる。一方南西溝部分は、概ね西辺と同じく皿状の平な溝の底面が広がるが、周溝屈曲部から約 2m 南東の位置で、基盤層を掘り残して構築した陸橋が確認された。陸橋は取り付き部分が撥形に開き、半ばの最も括れた部分での幅は 0.6m で、溝底面からの高さは 0.2m である。なおこの陸橋は、003SD 検出時には埋土下にあって見えなかった。その他北西溝部分の底面で溝状の凹み（083SK・100SK）が検出されたが用途は不明である。

003SD の堆積状況は 2 カ所に設定した土層ベルトで確認したが、遺構掘削時には、オリーブ黒色シルトに極細流砂が混じる上層、上層より粘質の強い黒色シルトの中層、基盤砂層を多く含む灰色系シルトの下層を概ね水平に区分して遺物を取り上げた。そのため一部下層の遺物を上層で取り上げている箇所もある。土層断面で確認すると、セクション C2Pa-

C2Pa'では1・2層、セクションC2Pb-C2Pb'では1・3・4層が掘り返し後の堆積であることが判明する。したがって周溝の堆積には大別2時期があると考えられる。上層の底部では多数の円礫が散在して出土した。そして上層堆積後に掘られた土坑004SKからは磨製石斧1点が出土している。追葬もしくは祭祀に関わるものと考えられる。

003SDの時期は、重複関係ではD期の土器が出土した方形土坑145SKより後になる。周溝そのものからは土器片は少なく主体はE期で、若干だがF期のものも含まれる。前者の時期に築造され、後者の時期まで祭祀が継続していたものと考えられる。

028SB・086SK 調査区半ばに位置する竪穴建物である。調査区内では概ねその東半部が検出された。東辺長は3.18mで、平面形は隅丸正方形とみられる。建物方位はグリッド北から西へ24°振れる。遺構の重複関係は、南接する035SBより後で、さらに当該遺構の埋土に対して掘り込まれた溝状の土坑086SKがある。その位置と平面形は、028SB底面のレベルでは概ねその東辺に沿う溝状をしている。しかし当該遺構は当初028SBと同時に検出されており、検出時には028SB南東隅を起点とする細長い扇形で端はその北辺にまで及んでいた。基本平面図で示しているのは、028SB底面を掘り貫いたその最深部である。086SKからはD期の甕が多数出土している。

028SBの底面ではピット(130SK～137SK)が検出され、4本柱で上屋を支える構造であったとみられる。なお壁溝は確認できていない。また、竪穴建物の掘り方を全て掘ると、中央が比較的浅く四隅が凹む形状になる。遺物はC～D期である。

035SB 028SBに北辺の一部が重複する竪穴建物である。建物方位は同じで、前後関係は035SB→028SBとなる。南辺長は3.80mで、平面形は隅丸正方形である。南辺から西辺にかけて壁溝が廻っている。底面でピットが検出されているが、028SBのような4本柱構成にはならず不均衡な位置にある。遺物はD期が主体である。

051SK 調査区南部に位置する北東から南西方向に長軸となる不定形な土坑である。主体となるのは051SKであるが、遺構検出面では円形土坑(050SK・

055SK)が重複して検出されており、それらは051SK埋没後の掘り込みである。

051SKの形状は、隅丸長方形の深い部分とその両側に取り付く台形の浅い部分とで構成される。土層断面(C2Pq-C2Pq')によると両者は重複関係はない同一遺構と認識され、深い部分の南西端も浅い階段を介して上端に至っていることから、何らかの上部構造に関わるものと考えられる。深い部分は、長軸3.05m、幅1.17m遺構面からの深さ0.54mである。検出段階から多数の土器・石器断片や焼土・炭化物が埋土に含まれていた。土層断面(C2Pr-C2Pr')は、北東端付近のみしか示されていないが、これは遺物の取り上げと小片遺物抽出目的で埋土を採取したためで、土層の大半は1層である。この層は051SK廃絶後の凹みを利用した廃棄土坑で、直接的には051SKの機能に関わらないものと考えられる。3層は黄褐色シルトブロックを多く含み、埋め戻しがなされたことがうかがえる。そしてその下位には厚さ約2cmの炭化物層(5層)がほぼ均一に底面を覆っている。ただしこの層に焼土は含まれず、底面も被熱による赤色化はしていない。それは壁面も同様である。なお051SK機能時期については、3・5層から土器がほとんど出土しなかつたため不明である。しかしながら1層から出土した甕生土器壺・深鉢がA～B期であることから、そこから大きく廻ることはないと考えられる。その用途は、底面が安定しているので貯蔵穴などが考えられる。

097SX 調査区南部に位置する遺構である。028SBや051SKと方位の揃う竪穴建物の北西・北東辺とみられるラインを検出した。しかしながら掘り下げてみるとそれに伴う位置に壁溝は確認されず、それぞれ約40cm内側で壁溝状の小溝(138SD・173SD)が検出された。そのため竪穴建物平面形の再検討が必要となったが、その間にも磨製石斧3点がまとまって出土した長方形土坑(093SK)や鳥形土器の出土した円形土坑(123SK)などが検出され、複雑な遺構の重複であったことが判明した。その中で097SXより後になるのは093SKで、それ以外は先行する遺構群と考えられる。また竪穴建物の可能性が高いのは上記した小溝に開まれた空間のみである。遺物は

ほとんどがD期に該当し、028SB・035SBの時期と併行する。

123SK 097SXの下位で検出された楕円形の土坑である。明瞭な掘り込みでその底部から鳥形土器(E07Cc121)が出土した。出土状況から意図的に投入されたと考えられる。D期の土器が共伴する。

・07Cd区(第12図・第26図・第27図)

概観

07Cc区南東隅は、機材搬入のために一旦調査をせずCc区完了後に実施した。これを07Cd区とよぶ。遺構は不明瞭で上位で竪穴建物らしき265SBを検出したが、これはCc区の溝状遺構093SXと方位が同じえこれに関わる遺構と考えられる。そしてその下位で267SKを検出した。

267SK 竪穴建物の一部の可能性がある遺構である。その南東辺には壁溝が伴う。一方北東辺も検出されたが265SBに削平されており全体に不明瞭であった。しかもこの延長上の07Cc区で続きとなる遺構が検出されておらず、確実なのは南東辺のみといえる。南東辺については07Cc区の壁溝とみられる小溝(138SD-173SD)が相応しい位置関係にあり、それぞれ北西辺・北東辺とみれば一辺約3.8mの竪穴建物を想定することができる。この竪穴建物の方位は07Cc区028SB・035SBとほぼ同じである。顕著な出土遺物はなかったが、上位で掘削した265SBからはD期の土器が出土している。

・07D北区(第28図)

概観

名神高速道路すぐ北側に設定した調査区で、幅1m以下という狭小なトレンチになっている。地表面から約1.3mまで造成土や旧耕作土がみられ、基盤砂層上面で遺構が検出された。遺構は竪穴建物003SB以外に小ピットがある。

003SB 調査区北端で検出された竪穴建物である。土層断面SP33-SP34およびSP34-SP35における状況から、概ね竪穴建物の南北隅部が検出されたものと考えられる。規模は一辺0.5m以上、深さは0.15mである。掘り方部分が検出されたものであろう。遺物からD期と考えられる。

023SD 003SBの底面で検出された、屈曲する小溝

である。その形状から竪穴建物の壁溝と考えられる。方位は003SBとはほぼ同じであるが、003SBの壁面立ち上がりから約20cm内側に位置しているため、別の竪穴建物に関わる可能性もある。

・07D南区(第28図)

概観

07D区中部は、水道管の埋設が確認されたため調査不能となった。結果その南側のわずか2mを07D南区として調査した。地表面下約1.2mまでが表土層で、基盤砂層上面を検出面とした。

022SD 調査区南端で検出された溝である。土層SP37-SP38によるとV字形に近い断面形状をしており、環濠の可能性もある。遺物は少なかったが弥生土器からD期と考えられる。

・07E区(第13図)

概観

名神高速道路の側道の南で、県道の西に位置する調査区で、調査区が店舗の敷地と県道の間にあたるため、幅狭の南北に細長いものになった。表土の盛土と現代の旧水田耕作土が1m以上に及び、脆弱であつたため、遺跡基盤砂層まで機械により掘削し、地表より1.6m～1.7m下の標高9.7m前後にて、遺構検出を行った。確認できた遺構は近世後期以後の旧水田耕作土の上から掘削される溝2条(003SD・004SD)と土坑1基(005SK)、近世以後の旧水田耕作土の下にて確認できた溝1条(001SD)・調査区の基盤砂層ともなる自然流路(006NR)である。001SDは幅0.7m以上、深さ0.35mの丸底の東北東から西南西の方向にのびる溝で、埋土は灰オリーブ粘土質シルトであった。006NRは調査区の北端を流路の北肩とするもので、黄灰色細粒砂の堆積をもとに認識した。

・07Fa区(第13図)

概観

07E区から道を挟んで南にある調査区で、地表から1.15m下の標高10.1m前後にて遺構検出を行い、溝4条を確認した。

005SD・006SD どちらも幅1.0m前後のほぼ東西方向に走る溝で、005SDが深さ0.3mの黄褐色粘土質シルトの埋土の溝、006SDが深さ0.15mのオリー

ブ褐色粘土質シルトの埋土の溝で、どちらもやや平底のものであった。

007SD 北東から南西にのびる溝で、この溝の南側にある近世以後の旧水田耕作土に伴う可能性がある。幅0.6m、深さ0.3mの丸底で、008SDと平行するようである。弥生土器片が出土しているが、中世以後の遺構と思われる。

008SD 調査区の南端で近世以後の旧水田耕作土の下から検出できた溝で、黒褐色粘土質シルトの埋土である。07Fb区001SDと同一の溝である可能性が高い。

・07Fb区（第13図・第29図）

概観

07Fa区の南に隣接する調査区で、地表から1.5m下の標高9.7m前後にて遺構検出を行い、溝1条、水田遺構1筆、土坑1基を確認した。

001SD 北東から南西にのびる溝で008SDの下層部分にあたり、位置から同一の溝と考えられる。南東側に001SDの堤となる003SXが上面幅0.6m程であり、その南東側に深さ0.2mの水田遺構と考えられる002STがある。これらの遺構の埋土は、暗オリーブ褐色～黒褐色粘土質シルトで類似したものであった。弥生時代中期の土器が出土しているが、時期は中世後半以後であろう。

004SK 002STと003SXの下から検出された遺構で、形状から土坑と認識して調査を行ったが、遺構の北西側上端が001SDの軸線とほぼ共通することから、001SDと同様な溝の可能性が高い。遺構の北東側上端しか確認できていないが、幅1.3m以上、深さ0.6m以上のものである。弥生時代中期の土器が出土しているが、時期は中世以後のものであろう。

・07Fc区（第14図）

概観

今次発掘調査において最も南端に位置する調査区である。掘削深度と面積の兼ね合いから通常の検出作業是不可能であったため、3カ所のトレーナ(Fc(1)～(3)区)を掘削し土層の状況を確認した。結果、いずれも地表面から約1.5～2m下まで現代の擾乱・造成土が入っており、その下で造成前の水田耕作土が確認できた。しかしそれ以上の掘削は不能であつ

たため基盤となる砂層を見いだすことはできなかつた。また遺物の出土もなかつた。

・07Ga区（第15図）

概観

県道の東にある最も北端の調査区で、表土となる盛土と現代の旧水田耕作土を機械により掘削した後、標高10.4m前後にて、遺構検出を行つた。その結果、基盤砂層である黄褐色極細粒砂層の中に暗オリーブ褐色粘土質シルトの入る落ち込む部分を048SK・049SKとして調査したが、遺物は出土しなかつた。遺跡基盤層である砾層と黄褐色極細粒砂層は調査区の北側で下がる状況が観察でき、遺跡のひろがりの北端部分にあたるものと思われた。

・07Gb北区（第15図）

概観

07Ga区の南に隣接する調査区で、表土となる盛土と現代の旧水田耕作土を機械により掘削した下、標高10.4m前後にて、遺構検出を行つた。その結果、基盤砂層である黄褐色極細粒砂～灰黃褐色細粒砂層の上面にて灰黃褐色粘土質シルトの部分を044SD、暗灰黃褐色粘土質シルトの部分を045SKとして調査した。045SKから南部系山茶碗片が出土し、中世以後の土坑と思われる。

・07Gb中区（第15図・第30図）

概観

07Gb北区の南に隣接する調査区で、表土の盛土と現代の旧水田耕作土下の第1面で溝10条、土坑15基、第1面の堆積を除去した下面にて第2面にて弥生時代中期後半以後の自然流路1条を確認した。

【第1面】

近世後半以後の旧水田耕作土より新しい017SD・020SK・039SKは039SDにおいて土師器の焼格・施釉陶器・山茶碗等が出土し、近代にかかる新しい時期の遺構と思われる。また017SDより新しい016SDはより新しい時期の耕作関連の溝と思われ、016SDと類似する埋土と形態であった011SD・013SDも同様な時期のものである。これらの遺構より古い018SD・019SK・023SKからは弥生土器片が少し出土したのみで、時期を決ることはできないが、中世～近世頃の時期の可能性がある。038SK

は南部系山茶碗片と北部系山茶碗片が出土する楕円形の土坑、042SKは調査区北西側に検出された須恵器壺片と灰釉陶器壺片が出土する土坑であるが、同様な時期の可能性が高い。

028SD・029SK・035SK・036SD 暗灰黄色・灰オリーブ色極細粒砂の埋土とするもので、調査区北側東壁沿いに検出できた遺構である。028SDと036SDの南北方向から東に折れる幅0.4m、深さ0.25mの形状から、一辻2.2m程の小型方形状平面の竪穴建物の周溝と考えられるものである。出土遺物がなく時期は不明である。また調査区中央部の東壁セクションSP61-SP62にかかる土坑状堆積も、遺構平面では確認できなかったが、同様な遺構の可能性が推定できるものである。

【第2面】

043NR 第1面の下に南東から北西に流れると考えられる自然流路で、灰色～黄灰色のシルト質粘土・粘土質シルト・極細粒砂が互層となる堆積であった。第1面の015SDは黒褐色粘土質シルトの埋土のものを認識したものであるが、軸線が043NRとほぼ同一であるので、043NRの最上層の堆積と考えられる。015SDからはE期と思われる弥生土器片が出土していて、古墳時代前期までには埋没していた可能性が高い流路である。

・07Gb 南区（第16図・第30図）

概観

07Gb 中区の南に隣接する調査区で、表土の盛土と近世後期以後の旧水田耕作土の下の第1面で東西方向からやや東北東から西南西にはしる溝2条、その下にて検出した第2面で溝3条、土坑6基を確認した。07Gb 中区にて確認した043NRの南上端は確認できなかった。

【第2面】

010SD 001SDの下にて検出した東西方向の溝で、001SDとやや軸線が異なるので別遺構とした。出土遺物はない。

003SD 西から南に折れる隅部分にあたる可能性がある溝である。005SDとは003SDとの間に別の軸線をもつ004SKの堆積が確認できたので別遺構と考えた。出土遺物はなし。溝の形状から方形周溝墓の

周溝の可能性があるものである。

047SU 特に遺構らしき落ち込みはなかったが、灰釉陶器壺片、南部系山茶碗片、北部系山茶碗片が出土した。

・07Ha 区（第16図・第31図・第38図）

概観

07Gb 区の道路を挟んで南に位置する調査区で、表土下の第1面で近世後期以後の水田跡2筆と溝1条、土坑2基、第1面の水田遺構の堆積を除去した下面にて第2面・第3面の弥生時代中期後半以後の溝10条、土坑1基と自然流路の堆積を確認した。第2面・第3面の基盤となる自然流路の堆積と思われる細粒砂層中から弥生時代中期後半頃の双口壺(E07Ha005)と高杯(E07Ha004)が出土した。

【第2面・第3面】

020SD～030SD 弥生時代中期後半以後の溝で、東西方向に流れる021SD・022SD・023SD・024SD・028SD・029SD・030SDと南北方向から東に曲がる溝020SD・025SD・027SDがある。これらの溝の掘削・埋没の順序は029SD→020SD→021SD→023SD→022SD、030SD→023SD・030SD→028SD→024SD、027SD→025SD→024SDの順になり、025SDの位置から考えると025SDは030SDより新しくて、023SD・028SDより古い可能性が高い。出土遺物は、掘削・埋没の古い029SD・030SDから新しい022SD～024SDまで、弥生時代中期のC期～D期の遺物が出土している。溝の規模では、幅が1.0m前後の020SD～022SD、幅2.0m前後の023SD～025SD・028SD・030SD、2m以上の029SDで、020SD・022SD・023SD・025SD・028SDは深さ0.4m～0.6m程の断面丸底、021SD・024SDは0.7m～0.8m程の断面丸底、029SD・030SDは深さ1.0m前後の断面「V」字状の3タイプに分かれ。埋土は掘削・埋没の新しい溝である022SDに黒褐色粘土質シルトが入るが、それより古い020SD・021SD・023SD・024SD・028SDでは明度が中間色の粘土質シルトが入り、一番古い掘削・埋没の029SD・030SD、南側の025SD・027SDは中間色の極細粒砂～細粒砂と古い溝程、粒度が粗くなる

傾向がある。また 024SD は 07Bb 北区 030SD と 028SD は 07Bb 北区 029SD と東西の位置関係から同一の遺構の可能性がある。南北方向から東に曲がる溝 020SD・025SD・027SD は溝が方形状にめぐる可能性があり、弥生時代後半の方形周溝墓の一部である可能性がある。

・07Hb 区（第 17 図・第 32 図）

概観

07Ha 区の南側に隣接する調査区で、表土下の第 1 面で近世後期以後の水田跡 2 筆、それに伴う畦や溝 2 条、水田遺構の埋土を除去した下面である第 2 面にて溝 4 条、土坑 4 基がある。第 1 面の水田遺構はほぼ東西方向にのびる溝と水田遺構は軸線が東にやや振れる。

【第 2 面】

005SD 南北方向の溝で、南北の両端で東に折れるような形状である。南北両端で深さ 0.7m ~ 0.8m の断面丸底の溝である。005SD の北端部では暗色粘土質シルトが堆積しており、南側ではやや明るい中間色粘土質シルトが堆積していた。出土遺物は C 期 ~ D 期の弥生土器が出土した。

006SD・009SD 006SD が北東から南東に折れる溝、009SD が北西から南西に折れる形で検出されたもので、006SD の方が新しい。溝の幅はどちらも 2.0m ~ 2.5m で、深さは 006SD が 0.7m 程、009SD が深さ 1.0m を測る。埋土は 006SD が明色粘土質シルトで、009SD は暗色粘土質シルトと明色粘土質シルトが互層となるような埋没状況であった。出土遺物は 006SD が D 期、009SD が C 期の弥生土器が出土している。溝が方形状にめぐる可能性があり、弥生時代後半の方形周溝墓の一部になる可能性がある。

010SD 東西方向の溝で、幅 2.0m 程、深さ 0.6m の溝で、上部の埋土は中間色粘土質シルトである。遺構の新旧関係では 012SK より古く、D 期の弥生土器が出土した。

007SK・011SK・012SK 007SK と 011SK は径 0.6m ~ 0.7m 程の丸底の土坑で弥生時代中期頃の土坑である。012SK は大型の土坑で、南東側に広がる溝になる可能性もある。007SK は遺構の新旧関係か

ら、006SD より新しい。

・07la 北区（第 18 図・第 33 図）

概観

07Hb 区より道を挟んで南に位置する調査区で、表土直下にて弥生時代の遺構を検出した。調査区の北端部と南側は遺構検出面が標高 10.3m ~ 10.5m と比較的高いが、中央部から北側では最近の旧水田耕作土が存在したため、遺構検出面が標高 10.2m ~ 10.4m と低くなっている。遺構は 076SD の南側にて竪穴建物や土坑がみつかり、076SD の北側では東西方向の溝が 4 条、自然流路 1 条がみつかり、現在の地形環境を反映するようにもみえる。

【第 2 面】

076SD 調査区中央部にある東西方向の溝で、幅 1.4m、深さ 0.7m で、暗色粘土質シルトの埋土であった。出土遺物は D 期のものが多いが 1 点 E 期のものと思われる弥生土器片が含まれた。県道西側の 07Ca 中区の 187SD と対応するものと思われる。

085SB・113SB・086SB 076SD の南側の高くなつた地点に検出された竪穴建物とも思われる遺構で、炭化物が少量入る黒褐色粘土質シルトの部分で長方形形状の範囲を検出した。床面は平坦で、遺構検出面からは 10cm 前後と比較的浅い。113SB と 086SB は 104SK に切られているが、同一の遺構である可能性が高い。この付近に 090SK ~ 092SK・099SK ~ 102SK・105SK ~ 107SK などのような径 0.2m ~ 1.0m 程の平面円形の土坑を多数検出した。

095SK 幅 0.7m 程の溝状の土坑である。深さは 0.2m で暗オリーブ褐色粘土質シルトの埋土である。097SK 幅 1.4m、深さ 0.6m 程の溝状丸底の土坑、当初溝の可能性も考えたが、県道西側の 07Ca 中区において続きとなる溝が検出されていないので土坑とした。D 期の弥生土器が出土した。

111SU・114SD 東西方向の溝で、07Ca 北区の 177SD の続きとなる可能性がある。深さ 0.8m 程で、上層で弥生土器片が集積していた部分を 111SU として取り上げた。D 期の弥生土器が多く出土した。

112SD・115SD・118NR 中間色粘土質シルトの堆積を 118NR とし、その下に 112SD と 115SD が検出できた。112SD の方が古く、07Ca 中区

の 226SD と対応する可能性がある。出土遺物は 112SD・118NR から B 期の弥生土器が、115SD から C 期の弥生土器片が少数出土している。

・07la 南区（第 18 図・第 33 図）

概観

07la 北区の南に隣接する調査区で、第 1 面の調査区南側にて近世後期以後の 2 筆の水田跡、第 2 面の調査区北側にて竪穴建物 2 棟、土坑 20 基を確認した。

【第 2 面】

127SB 幅 0.2m、深さ 0.1m ~ 0.2m の周溝のみ検出したもので、長辺 3.0m 以上、短辺 1.8m 程の小型平面台形状のプランになるものと思われる。

133SB 短辺 2.0m の隅丸方形の平面プランになる竪穴建物で深さ 0.05m 程残存していた。埋土は黒褐色の粘土質シルトを主体とするものである。C 期の弥生土器が出土している。

130SK 径 0.7m 程の丸底の土坑で B 期の弥生土器が出土した。

145SK 長径 1.0m、短径 0.7m、深さ 0.35m の丸底の不整梢円形の土坑で、D 期の細頭壺が出土した。

・07lb 北区（第 34 図）

概観

表土直下にて弥生時代の遺構面となった。溝 1 条・土坑 4 基を確認した。

056SD 07Cc 区 003SD・07Id 区 004SD からなる方形周溝墓の北東側溝にあたるもので、深さ 0.2m 程残存していた。

058SK・059SK 径 0.2m 前後の柱穴で、059SK からは内部断面にて柱痕跡を確認できた。058SK が深さ 0.17m、059SK が深さ 0.32m 程である。

・07lb 南区（第 34 図）

概観

表土直下にて遺構検出を行った。2 基の土坑 053SK・054SK を確認した。054SK から北部系山茶碗片が出土した。

・07lc 区（第 34 図）

概観

表土直下にて遺構検出を行った。5 基の土坑を確認した。149SK・150SK から弥生土器が出土した。

149SK 短径 1.1m、長径 2.0m 程の隅丸長方形の

土坑で、深さ 0.25m を測る。土坑の底面と基盤層とした暗灰黄色極細粒砂と黒褐色極細粒砂が互層となる堆積層を土坑に含むか基盤層とするか区別が難しかった。

・07ld 区（第 19 図・第 34 図）

概観

07lc 区の南に隣接する調査区で、第 1 面にて近世後期以後の水田跡 3 筆、第 1 面の水田遺構を掘り下げた後検出した第 2 面にて方形周溝墓の周溝 1 条、竪穴建物 4 棟、土坑 40 基を確認した。

【第 2 面】

004SD 07Cc 区 003SD の続きとなる方形周溝墓の周溝で、南東側溝が幅 3.4m、深さ 0.5m、南西側溝が幅 4.2m、深さ 0.5m を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトに灰色から黄灰色極細粒砂が混じるもので、弥生中期の土器片、石鏃などの石製品が多く出土した。遺構の時期は弥生時代後期（E 期）から古墳時代初頭（F 期）の土器が少量出土したことから、E 期の遺構と考えられる。

005SB・006SB 平面隅丸方形のプランをもつ竪穴建物で、006SB 床面にて地床炉と思われる焼土面が確認できた。時期は D 期である。

031SK・032SK 平面円形の土坑が重複して確認できた。031SK の方が古く、長径 1.0m、短径 0.8m、深さ 0.3m の土坑で、C 期の弥生土器が出土した。032SK は径 0.7m、深さ 0.1m の土坑である。どちらの土坑も灰色粘土質シルトを主体とする埋土に焼土と炭化物が少量混じるものである。

034SB 平面隅丸方形の形態の竪穴建物と思われるもので、黒褐色粘土質シルトの埋土であった。時期は D 期である。この遺構の下から黒色粘土質シルトの埋土で深さ 0.22m の 042SK と灰色粘土質シルトの埋土で深さ 0.18m の 050SK が検出された。034SB に伴う遺構である可能性がある。

・07le 北区（第 19 図）

概観

07Id 区の南と 07le 南区の北に隣接する調査区ではあるが、調査区に北側が近年の掘削により残存しておらず、南端部のみ調査できた。表土直下にて東西方向の溝 084SD と土坑 083SK を確認した。どちら

の埋土も黒褐色～オリーブ黒色粘土質シルトで、出土遺物からD期の遺構と考えられる。

・07le 南区（第19図）

概観

07le 北区の南に隣接する調査区で、南に名神高速道路がある。表土下にて近世後期以後の水田耕作土を確認し、その堆積を除去した後暗オリーブ褐色～オリーブ黒色極細粒砂の部分を平面長方形形状の竪穴建物やその周溝、土坑を検出した。ただし調査後土色観察では竪穴建物の周溝と思われたものは中間色の暗灰黄色や灰黄色の極細粒砂に分類され記録されている。これらの遺構は深さ0.10m～0.15m程と浅く、竪穴建物などは不明瞭な部分もあり、規模は不明である。

072SK・073SK・110SK 070SB・071SB の下にて確認できた土坑で、深さ0.3m～0.5mある明瞭な土坑である。互いに重複し、072SKは径1.5m程、110SKは断面にて径1.5m程を測る。072SK・073SKにてA期の弥生土器が出土した。

・07Ja 北区（第20図）

概観

名神高速道路の側道の南に位置する調査区で、調査区が幅狭の南北に細長いもので、表土の盛土が1m以上に及び、脆弱であったため、遺跡基盤砂層まで機械により掘削し、土層断面の観察・調査のみを行った。調査の結果、表土の盛土の下に現代の旧水田耕作土があり、地表より1.4m～1.5m下の標高10.0m前後にて、近世後期以後の遺構面があった。調査区西壁の堆積にて確認できる遺構は水田耕作土1筆と畦畔跡、溝か土坑の落ち込み2カ所が深さ0.3m～0.7mの堆積であった。1カ所の落ち込みは水田遺構より古いものと観察できた。これらの遺構は基盤層となるにぶい黄色細粒砂と黄褐色極細粒砂の大好きな互層からなる自然流路の堆積の上に形成されたもので、埋土は黄灰色、黄褐色、暗灰黄色粘土質シルトからなるものであった。

・07Ja 中区（第20図・第35図）

概観

07Ja 北区の南に隣接する調査区で、表土の盛土の下に現代の旧水田耕作土があり、地表より1.0m～1.2m

下の標高10.5m前後にて、近世後期以後の水田耕作土3筆と畦畔跡2カ所、溝1条、土坑状の落ち込み1カ所が深さ0.4m～0.7mの堆積であった。埋土は調査区南端で確認した004SKが黒褐色粘土質シルト・極細粒砂の斑土、調査区北側の水田遺構はオリーブ灰色極細粒砂、調査区南側で検出できた002ST・001SDなどは暗灰黄色～灰オリーブ色の粘土質シルトで、基盤層は灰オリーブ色粘土質シルトと同色極細粒砂の互層となる自然堆積であった。001SDは東西方向の溝で幅2.2mを測る。

・07Ja 南区（第20図）

概観

07Ja 中区の南に隣接する調査区で、表土の盛土とその下にある近代以後の旧水田耕作土を除去した標高10.0m前後にて遺構検出を行った。狭い調査範囲ではあったが、弥生時代中期前葉（A期）の竪穴建物1棟、溝2条、土坑2基を確認し、008SBの規模を確定するために、南側を拡張して調査を行った。

006SD 北北東から南南西にはしる幅1.2m、深さ0.45mの丸底の溝で、埋土は灰オリーブ色・オリーブ褐色粘土質シルトである。007SDとはほぼ平行してはしる。北部系山茶碗片が出土した。

007SD 北北東から南南西にはしる幅0.7m、深さ0.3mの丸底の溝で、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。出土遺物はなかったが、時期は中世から近世と思われる。

008SB 一辺2.2mの方形プランの竪穴建物で、床面直上にてA期の貝殻引き太頭壺が出土した。埋土は暗灰黄色粘土質シルト・極細粒砂である。

009SK 長径1.0m程、短径0.5m、深さ0.25mの平面梢円形丸底の土坑で、埋土は黄褐色粘土質シルトである。006SDより古く、D期の弥生土器片が出土している。

・07Jb 1区・2区・3区（第20図・第21図）

概観

07Ja 南区の南に位置する調査区で、県道の東に営業する店舗の出入り口等を除く地点を発掘調査した。07Jb3区は07Ja 南区の南に隣接する調査区で表土の直下にて遺構検出を行ったが、遺構は確認できず、「検出！」として包含層掘削を行い、弥生土器片が

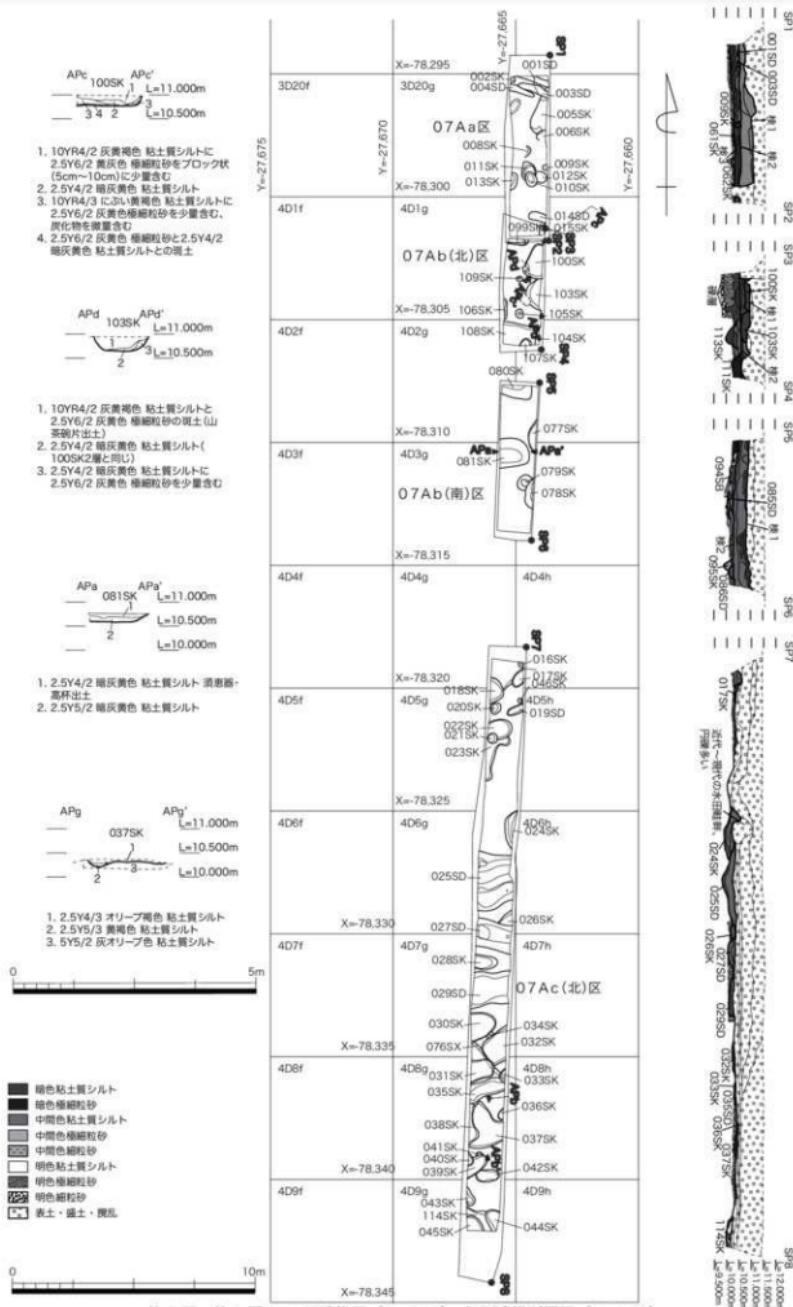
出土した。その後その下にて遺構検出を行い、北北東から南南西に走る幅1.4m、深さ0.7m、丸底の溝013SDを確認した。013SDの埋土は黒褐色粘土質シルトである。07Jb2区は07Jb3区の南5m程にあり、表土の盛土が脆弱であったため、機械により近世以後の旧水田耕作土まで掘削し、基盤層である灰オリーク極細粒砂層上面にて遺構検出を行ったが、遺構・遺物はなかった。07Jb1区は07Jb2区の南約13mにあり、07Jb2区と同様に表土の盛土が脆弱であったため、機械により近世以後の旧水田耕作土まで掘削し、褐色粘土質シルト層上面にて遺構検出を行い、011SKを検出した。011SKは一辺0.75m以上の隅丸方形の土坑で、深さ0.25m程のもので、埋土は褐色粘土質シルトと暗灰黄色粘土質シルトの斑土である。

・07Jc1区・2区・3区（第21図）

概観

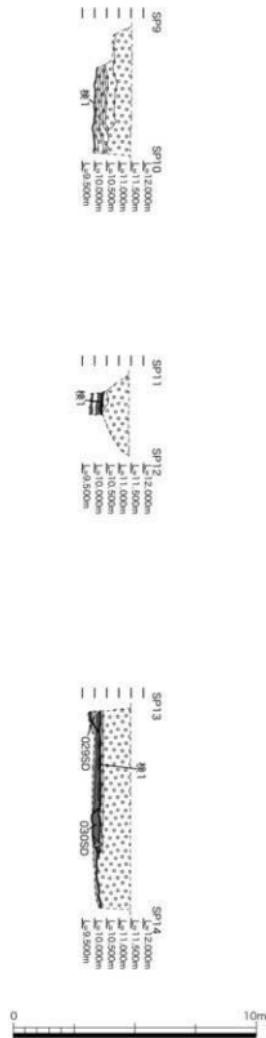
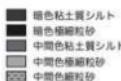
07Jb1区の南に位置する調査区で、県道の東に営業

する店舗等の出入り口等を除く地点を発掘調査した。07Jc1区は表土と近代以後の新しい旧水田耕作土を機械により除去した標高9.4m前後にて遺構検出を行い、010SKを調査した。010SKの規模は不明であるが、深さ0.25mの丸底の土坑で、埋土は黒褐色粘土質シルトに少量の灰色粘土質シルトが混じるものであった。Jc2区も表土と近代以後の新しい旧水田耕作土を機械により除去した標高9.3m前後にて遺構検出を行ったが、遺構・遺物はなかった。07Jc3区は表土を機械により除去した標高10.0m前後にて遺構検出を行い、東南東から西南西にはしる溝012SDと近世以後の水田遺構を検出した。012SDは幅1.0m、深さ0.85mの丸底の溝で、埋土は褐灰色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトなどが細かい斑土状になる堆積が互層に堆積していた。

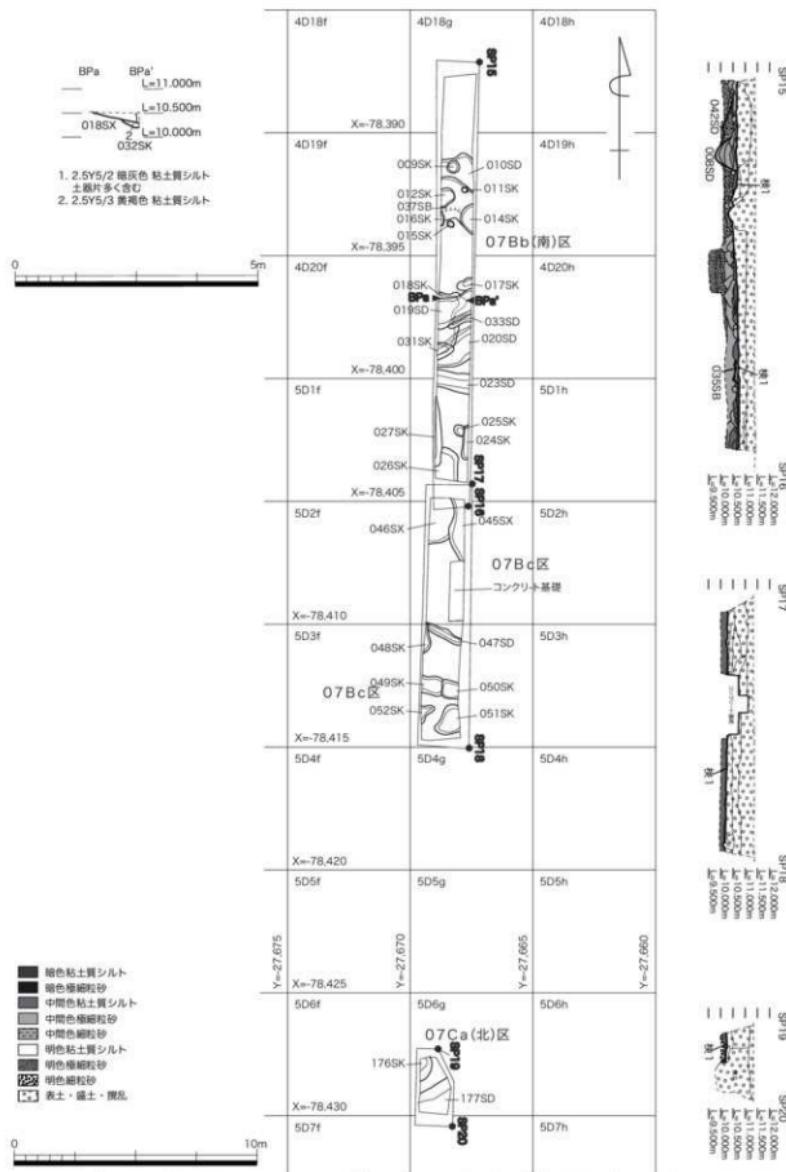


第8図 第1面 07A区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100)

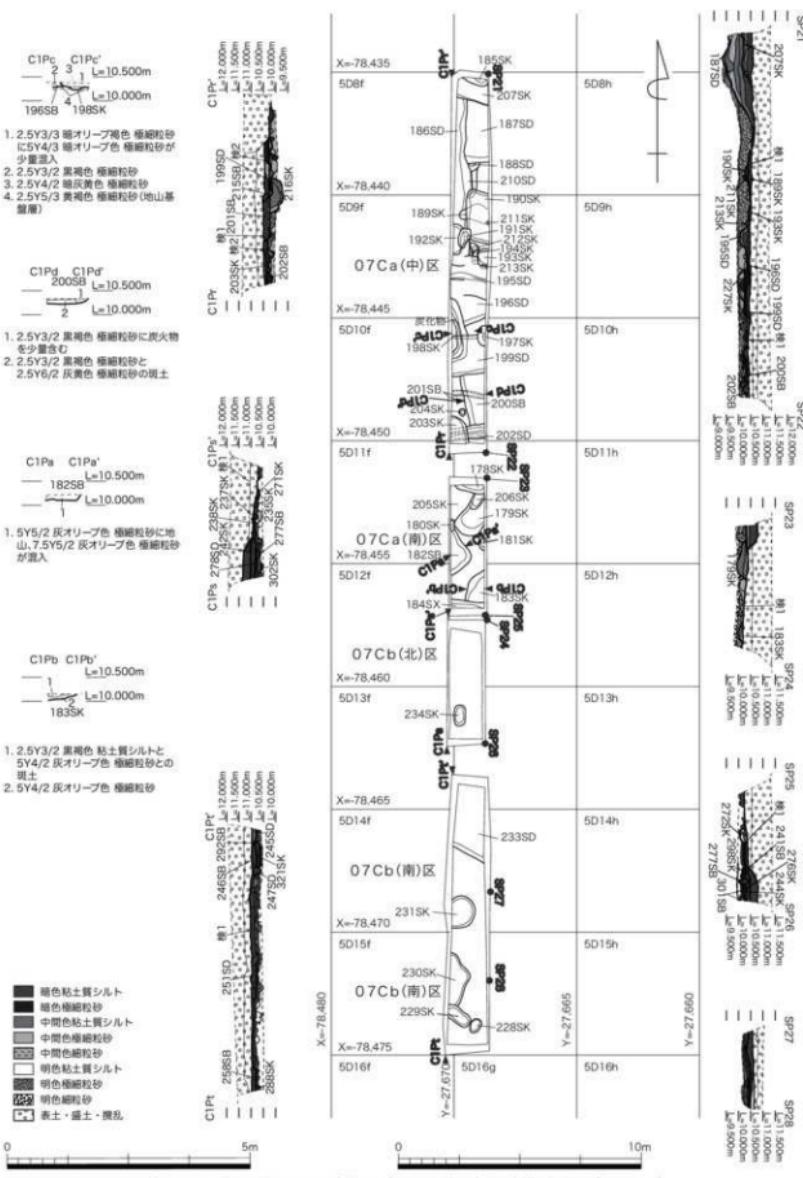
4D10f		4D10g		4D10h		4D10
			X=-78.350		07Ac(南)区	
4D11e		4D11f		4D11g		4D11h 07Ac(南)区
					07Ac	
4D12e		4D12f	Y=-27.670	4D12g	Y=-27.665	4D12h
			X=-78.355			Y=-27.660
4D13e		4D13f		4D13g		4D13h 07Ba区
			X=-78.360		07Ba	
4D14e		4D14f		4D14g		4D14h
			X=-78.365			
4D15e		4D15f		4D15g		4D15h
			X=-78.370			
4D16e		4D16f		002SK 001SK 004SK 005SK 006SK 007SK		4D16h 07Bb(北)区
			X=-78.375	003SK	004SK	
4D17e		4D17f				4D17h
			X=-78.380			
			X=-78.385			



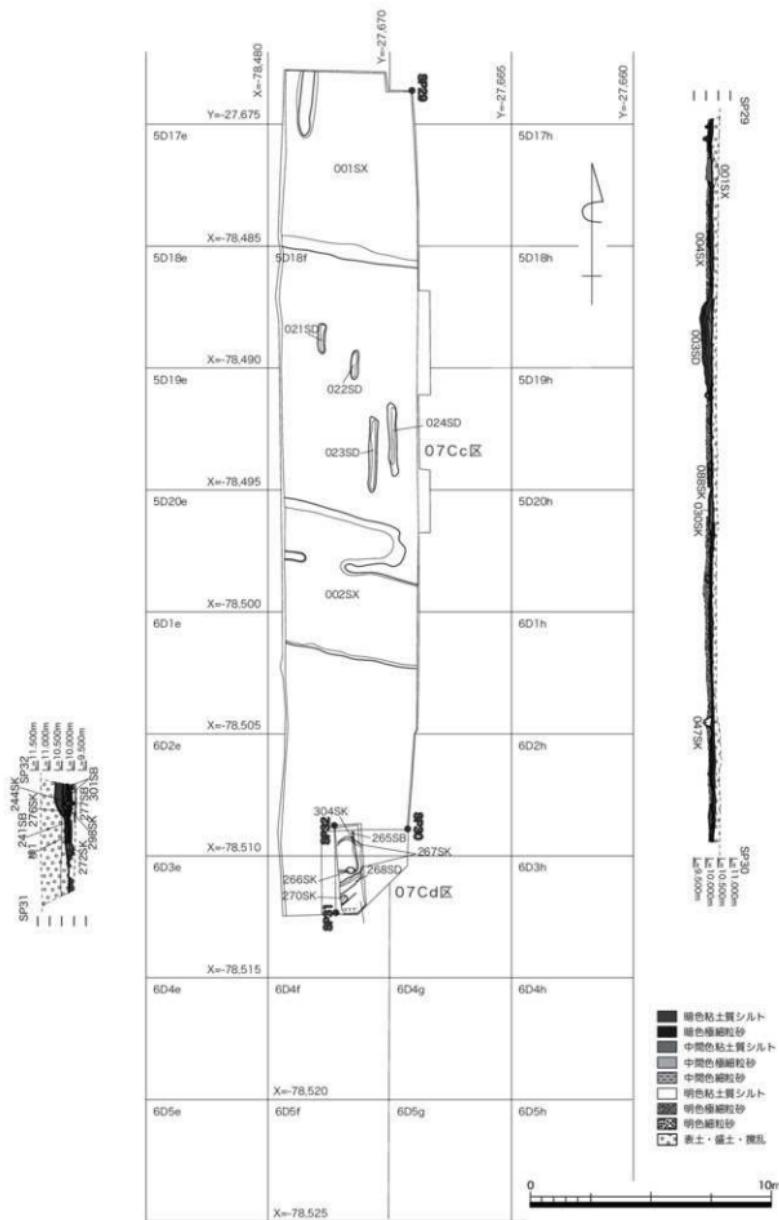
第9図 第1面 07A区・07B区遺構図 (1:200)



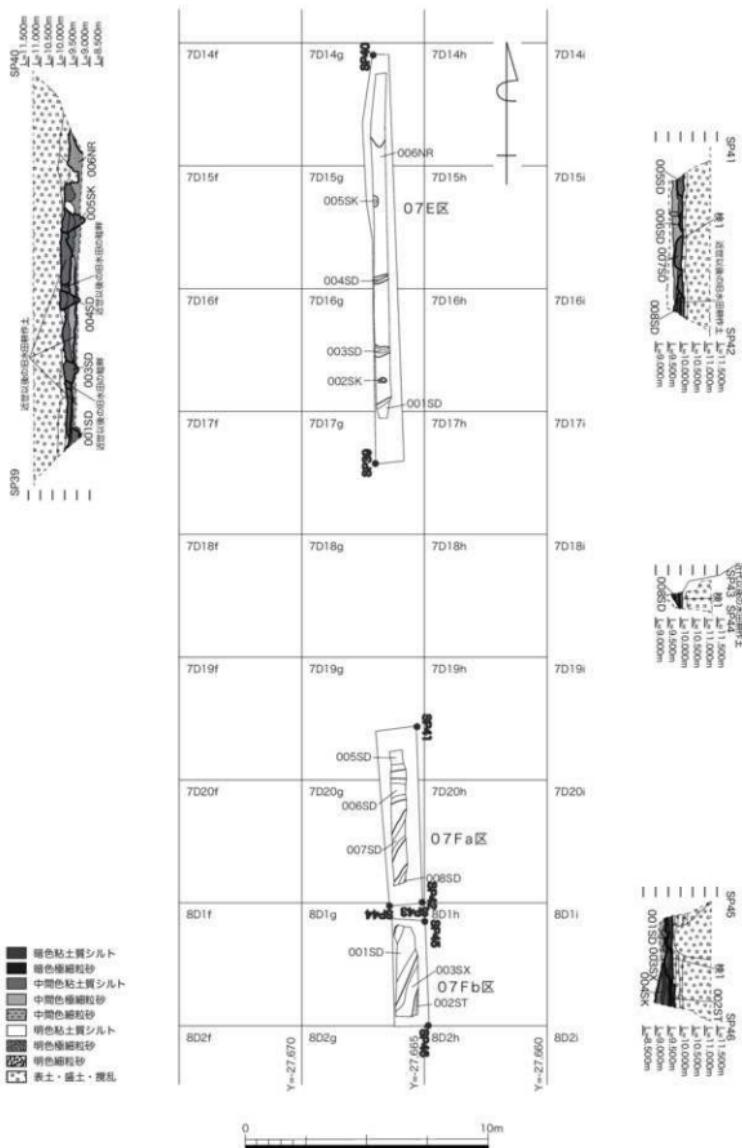
第10図 第1面07B区・07C区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



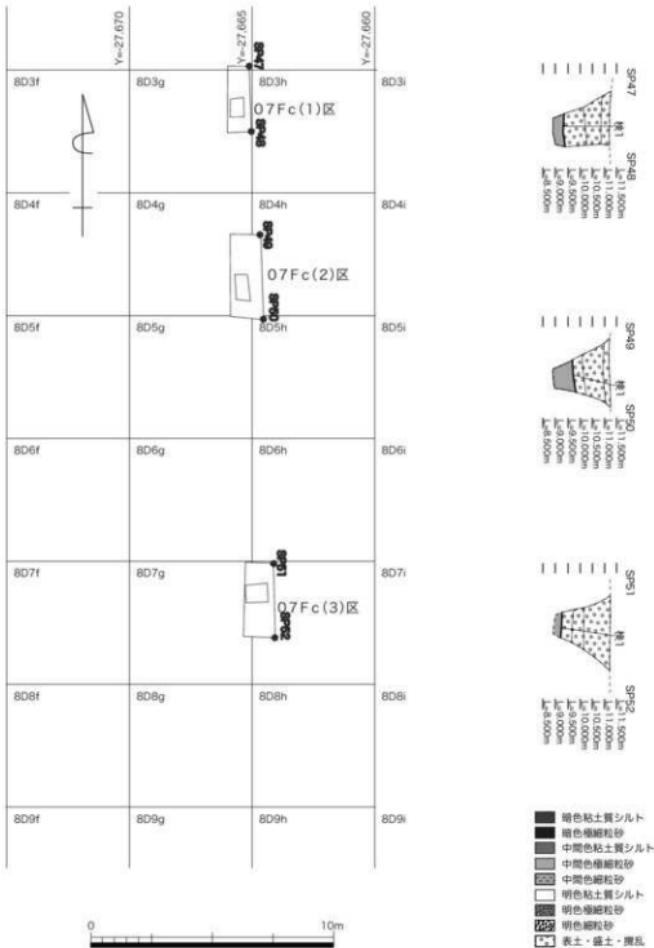
第11図 第1面07C区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



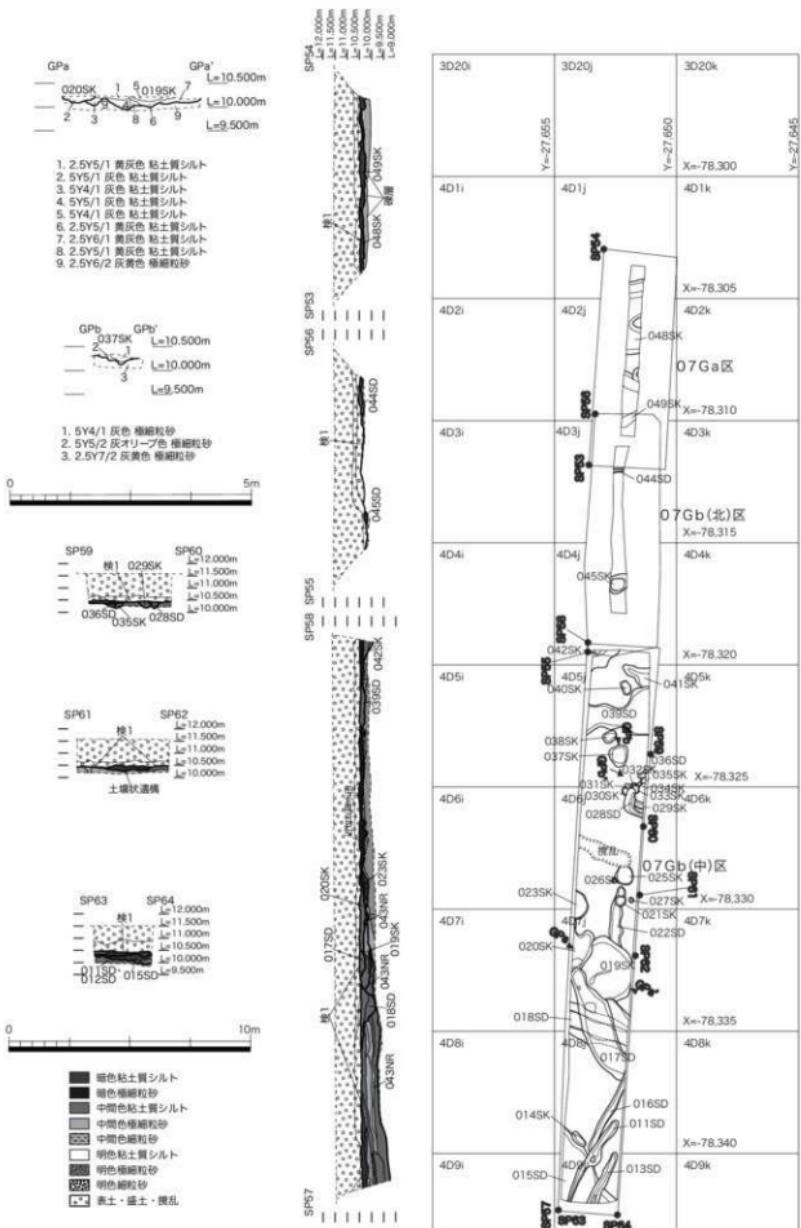
第12図 第1面07C区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



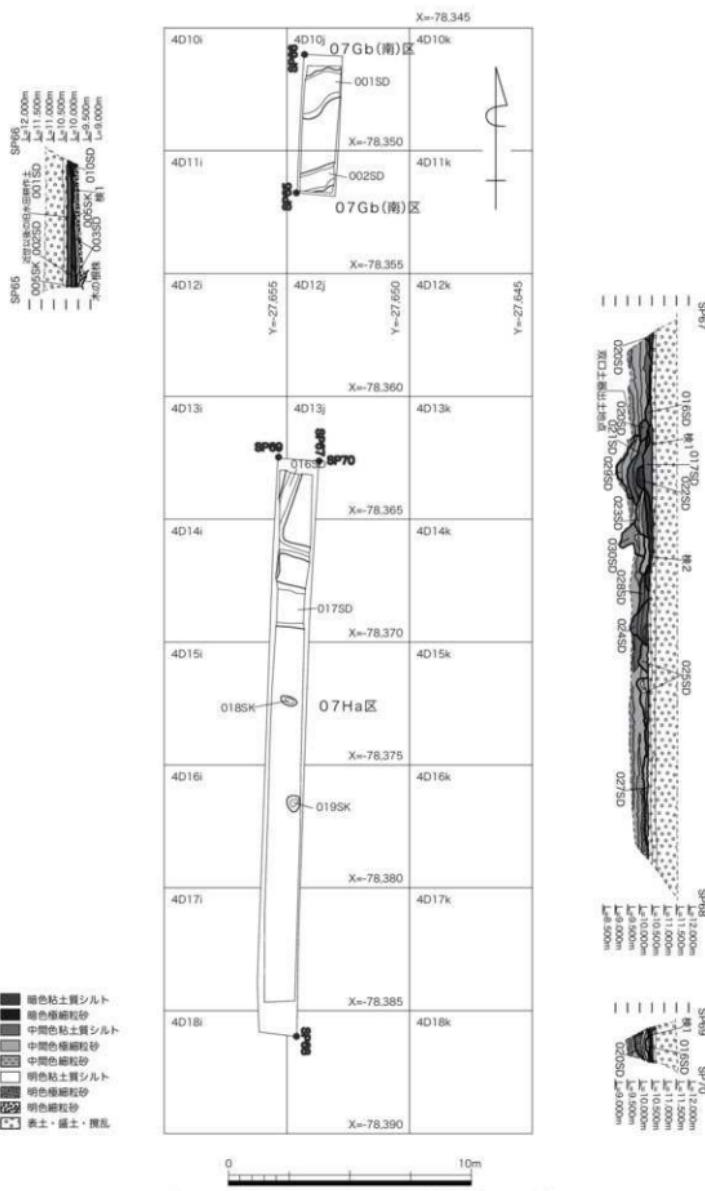
第13図 第1面 07E区・07F区遺構図 (1:200)



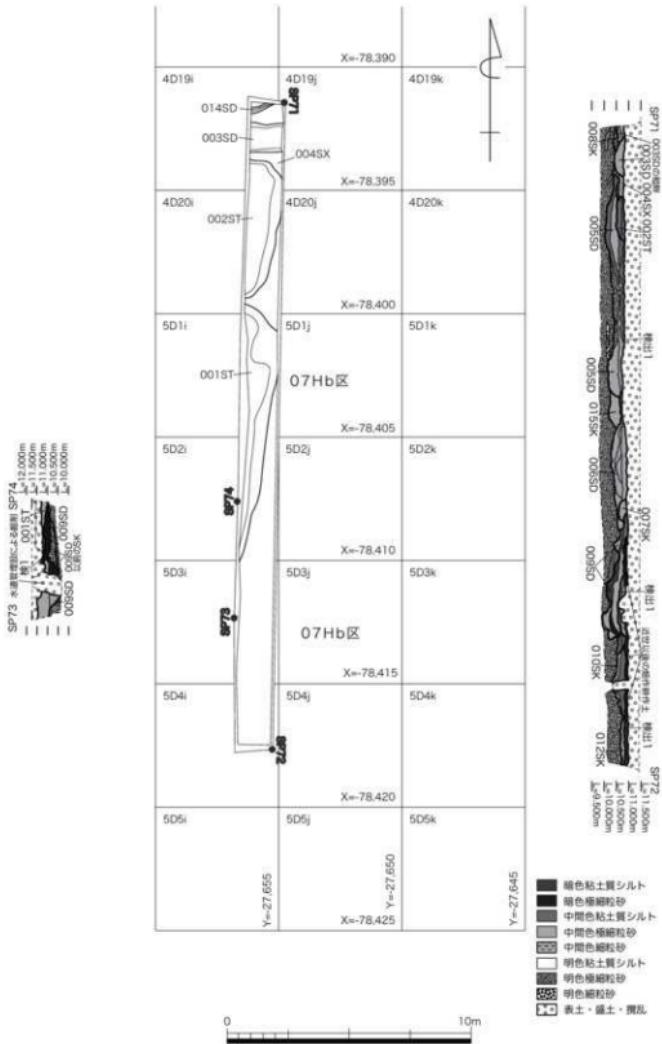
第14図 第1面 07F区遺構図 (1:200)



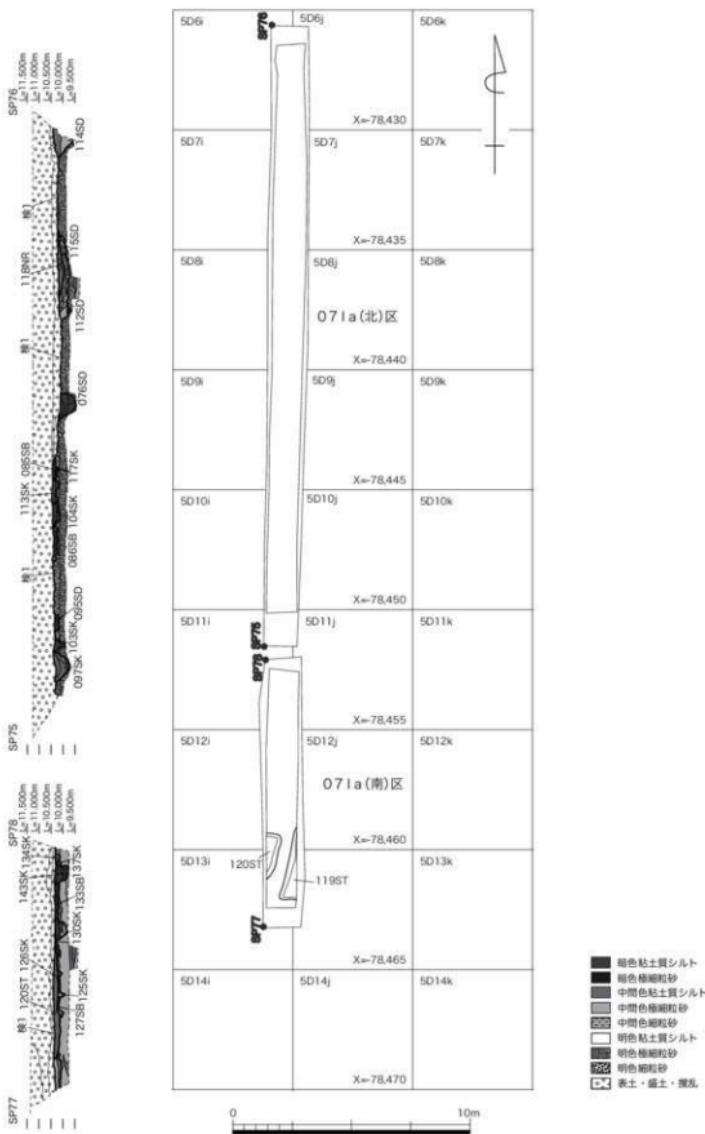
第15図 第1面07G区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



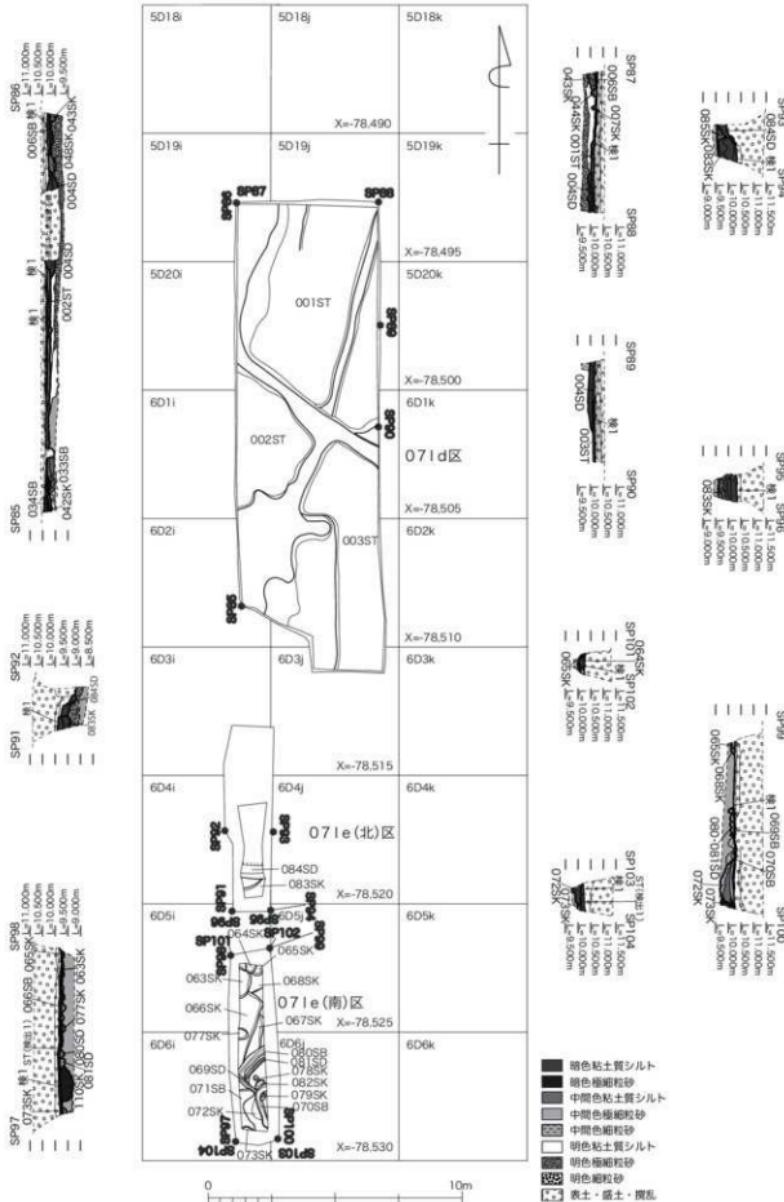
第16図 第1面 07G区・07H区遺構図 (1:200)



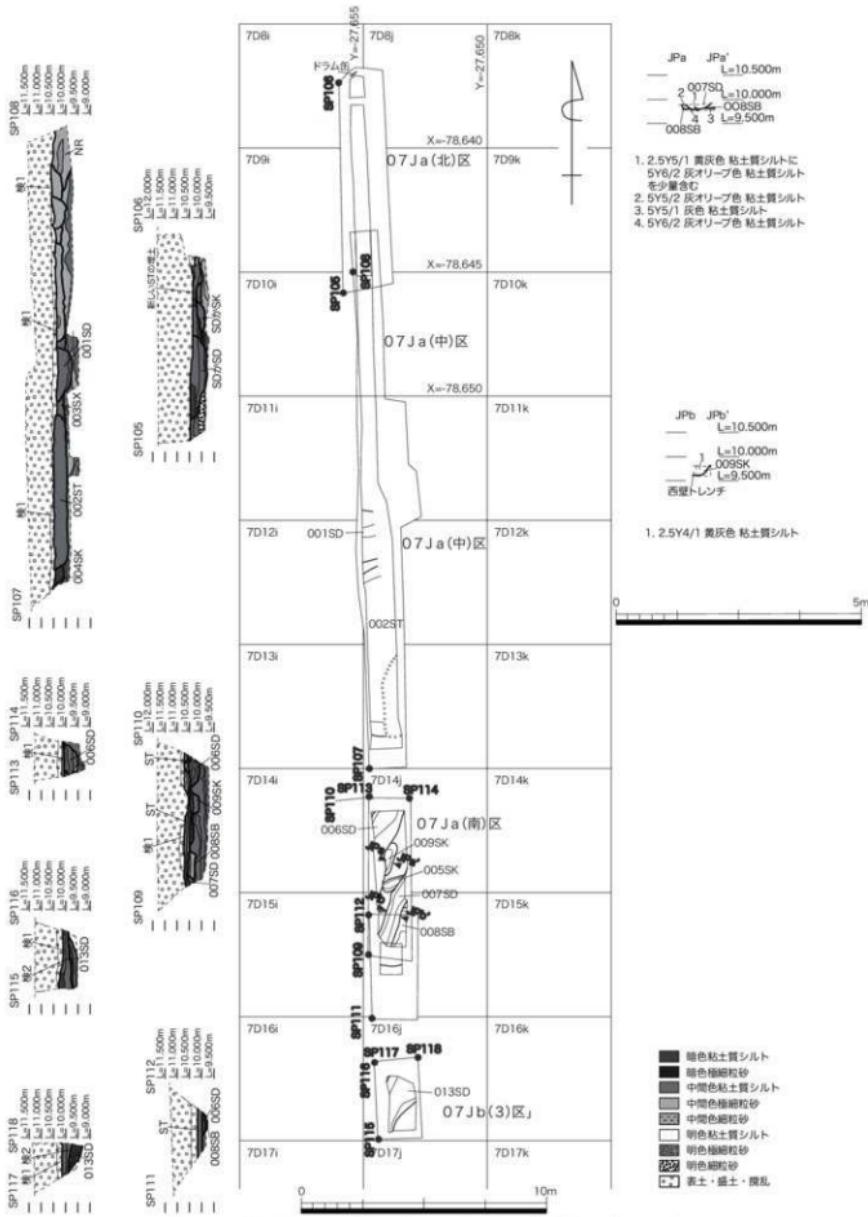
第17図 第1面 07H区遺構図 (1:200)



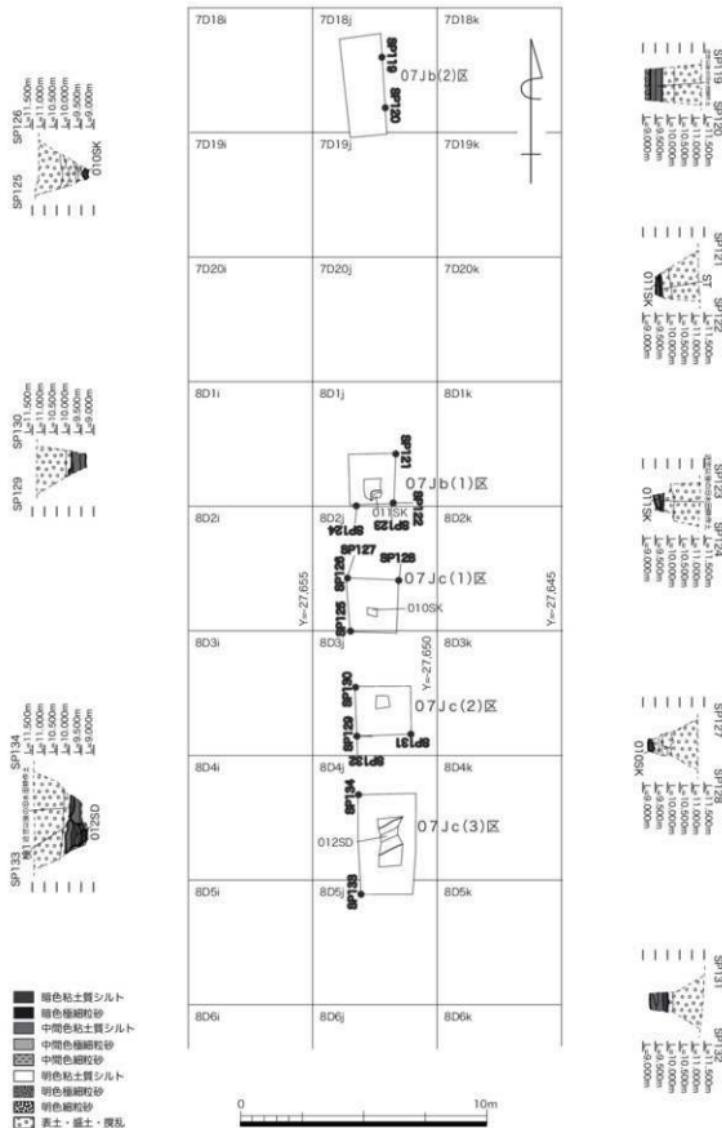
第18図 第1面 07I区遺構図 (1:200)



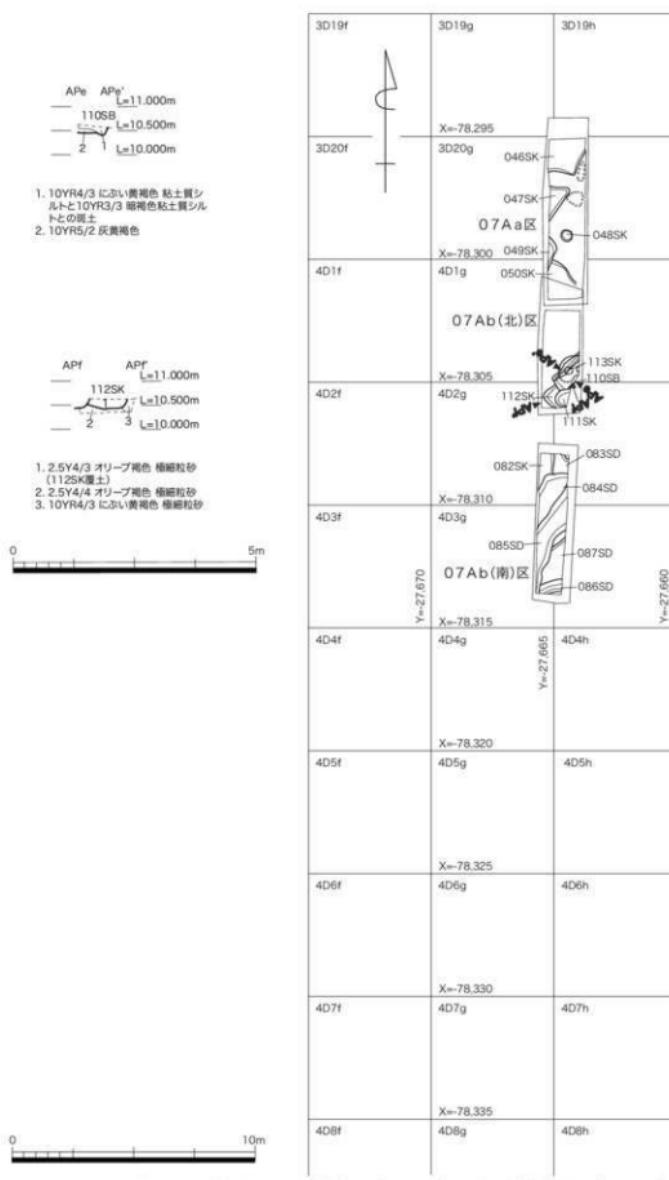
第19図 第1面 071区遺構図 (1:200)



第20図 第1面07J区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



第21図 第1面 07J区遺構図 (1:200)

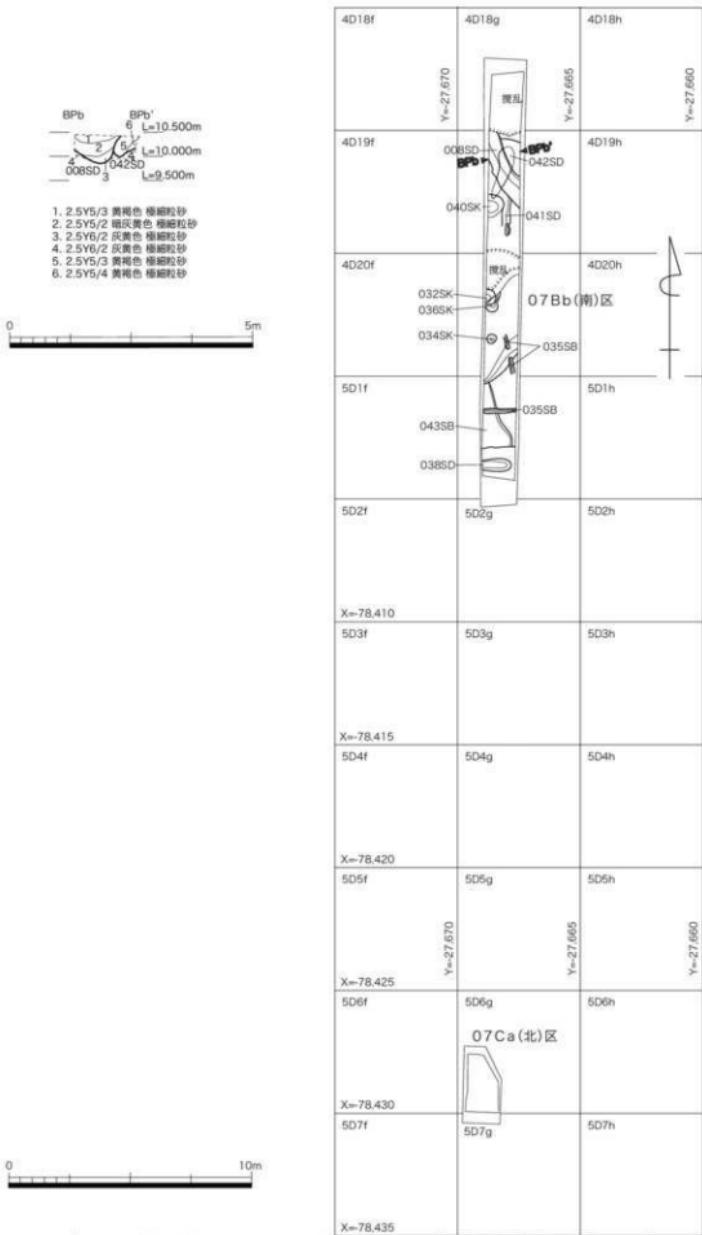


第22図 第2面 07A区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100)

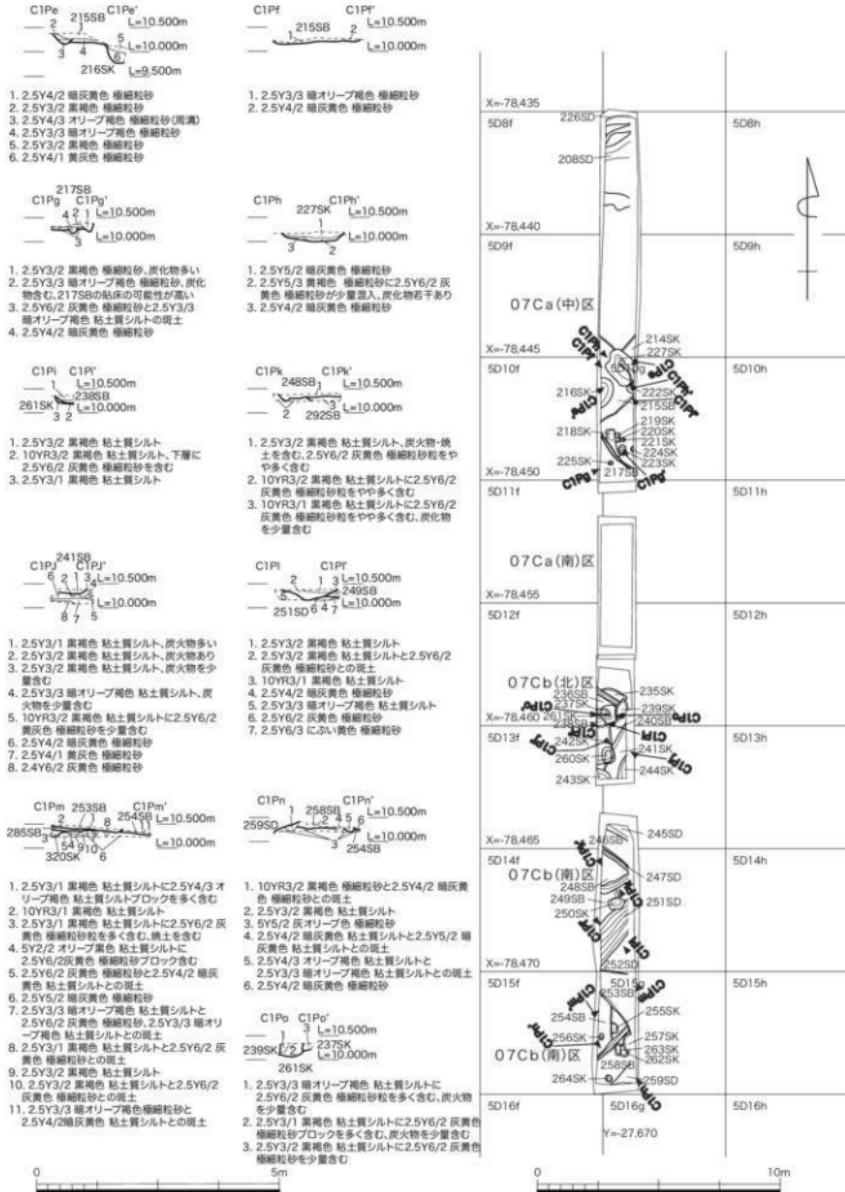
4D10g	4D10h	4D10i
4D11f	4D11g	4D11h
4D12f	4D12g	4D12h
4D13f	4D13g	4D13h
4D14f	4D14g	4D14h
4D15f	4D15g	4D15h
4D16f	<p style="text-align: center;">029SD</p>  <p style="text-align: center;">07Bb(北)区</p>	4D16h
4D17f		4D17h



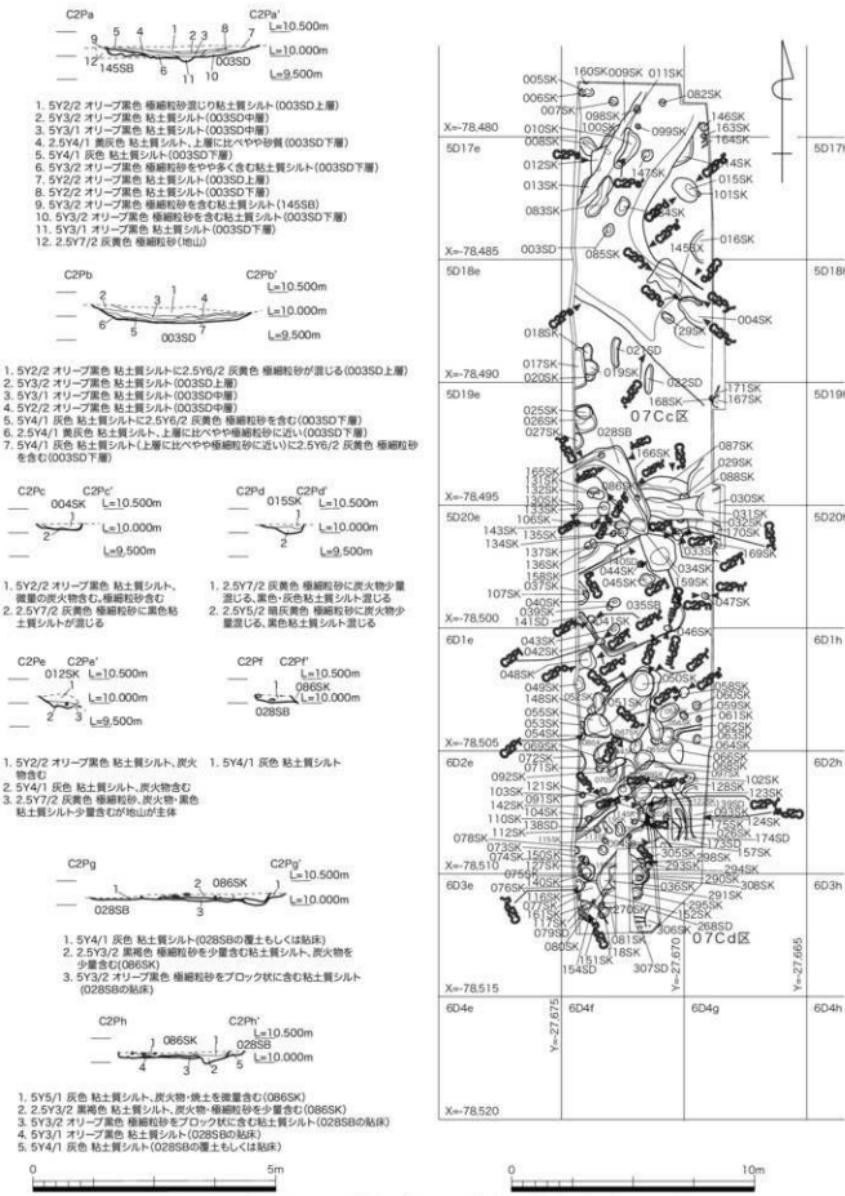
第23図 第2面07B区遺構図 (1:200)



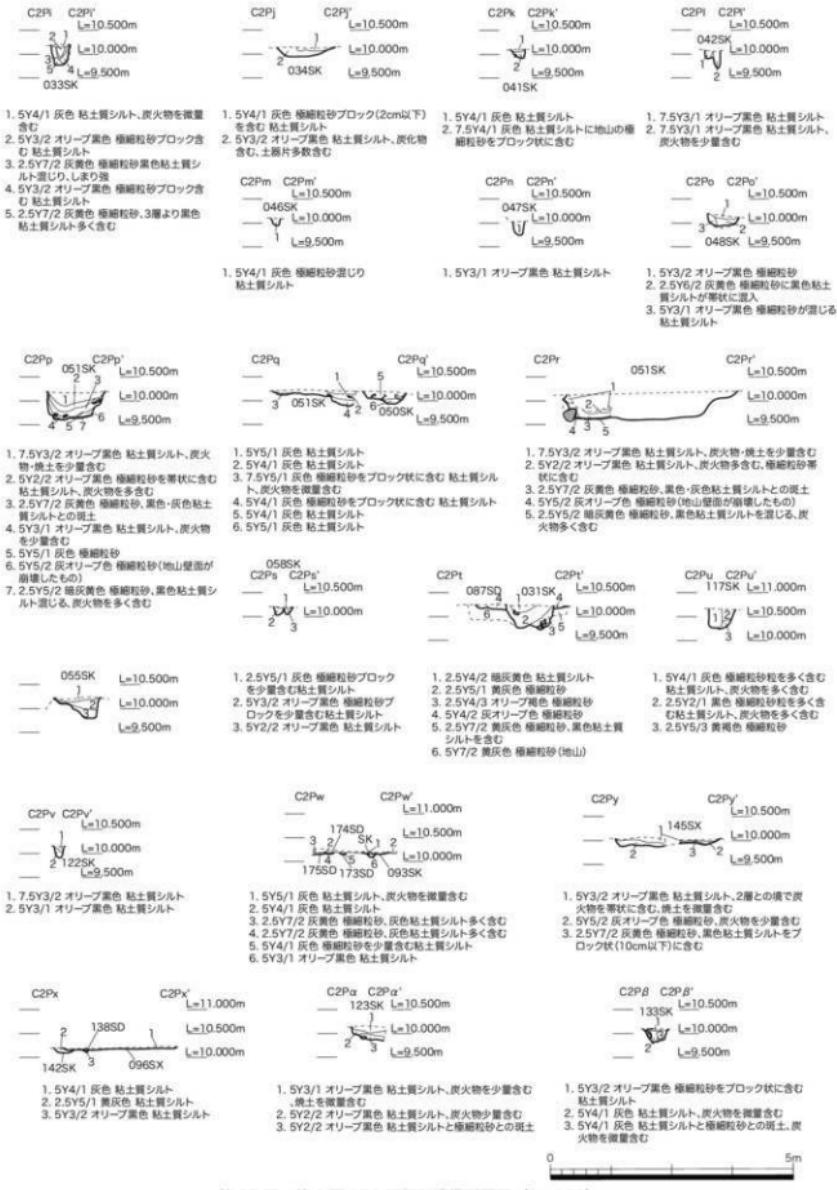
第24図 第2面 07B区・07C区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



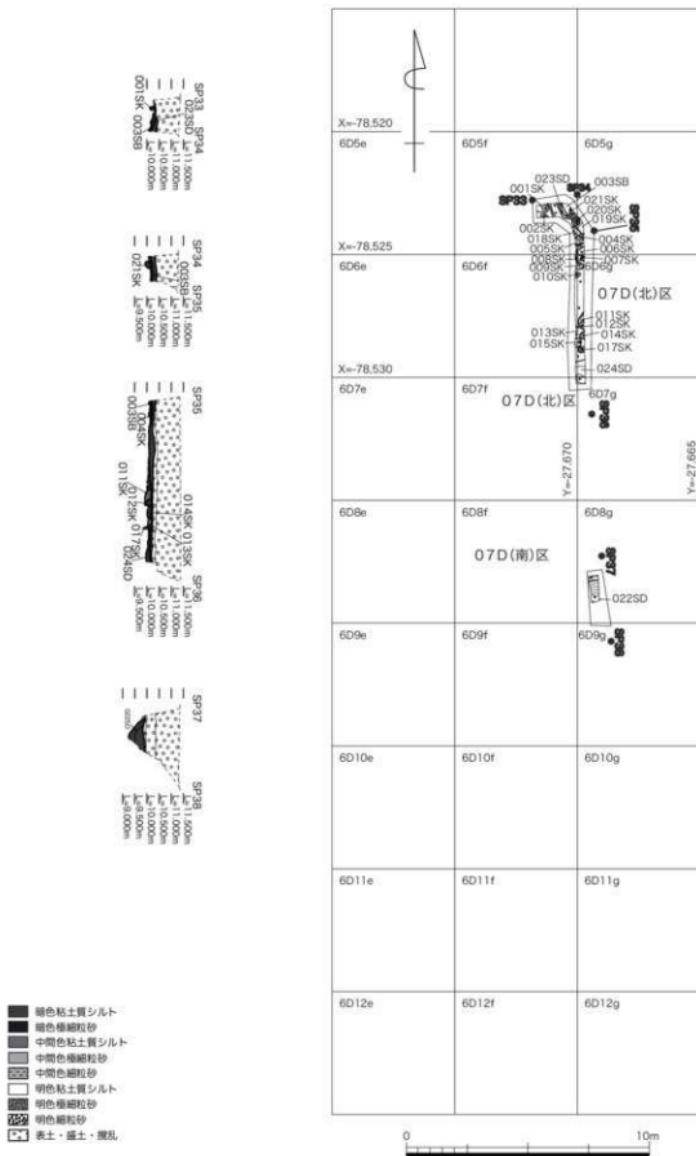
第 25 図 第 2 面 07C 区遺構図 (1 : 200)、個別遺構断面図 (1 : 100)



第26図 第2面07C区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



第27図 第2面07C区個別構造断面図(1:100)

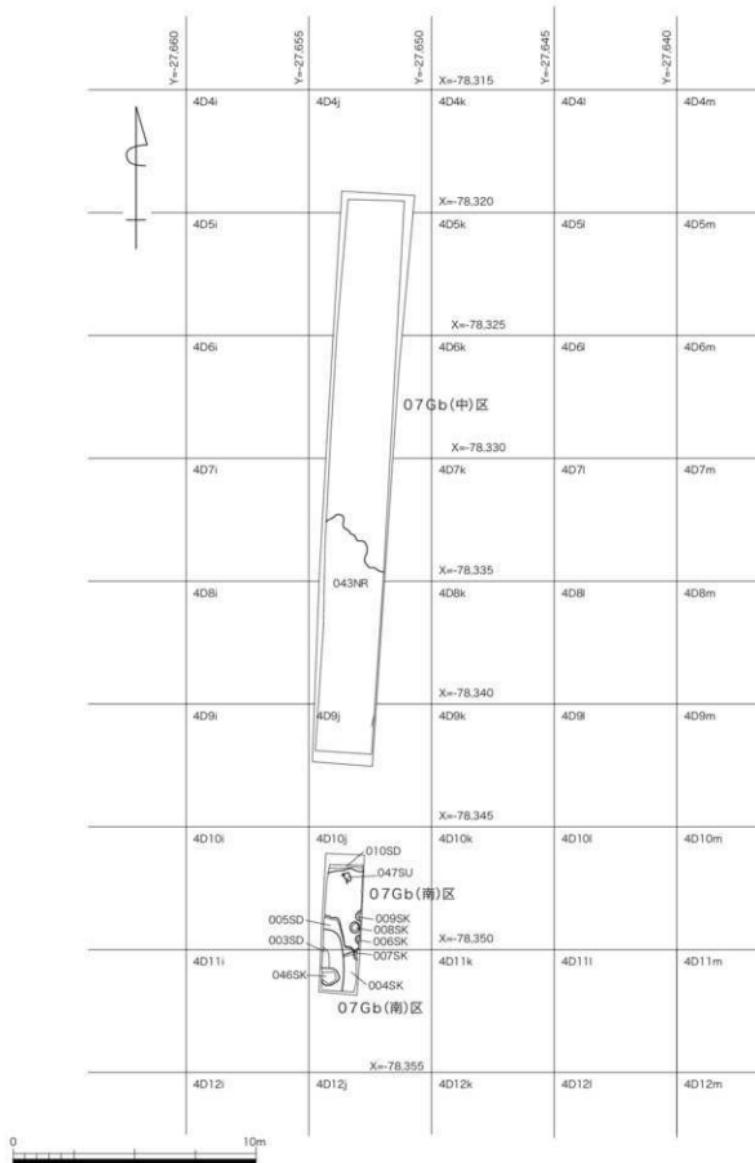


第28図 第2面07D区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)

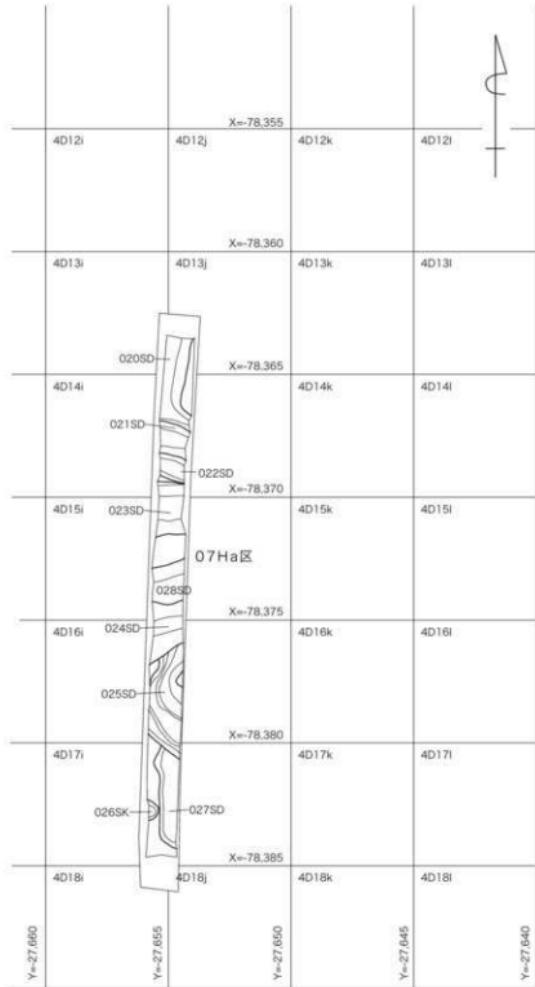
7D14f	7D14g	7D14h	7D14i
7D15f	7D15g	7D15h	
7D16f	7D16g	7D16h	7D16i
7D17f	7D17g	7D17h	
X=78.685			7D17i
7D18f	7D18g	7D18h	
X=78.690			7D18i
7D19f	7D19g	7D19h	
X=78.695			7D19i
7D20f	7D20g	7D20h	
X=78.700			7D20i
8D1f	8D1g	8D1h	
X=78.705			8D1i
8D2f	8D2g	8D2h	
Y=27.650 Y=27.660			
0045K 07Fb区			



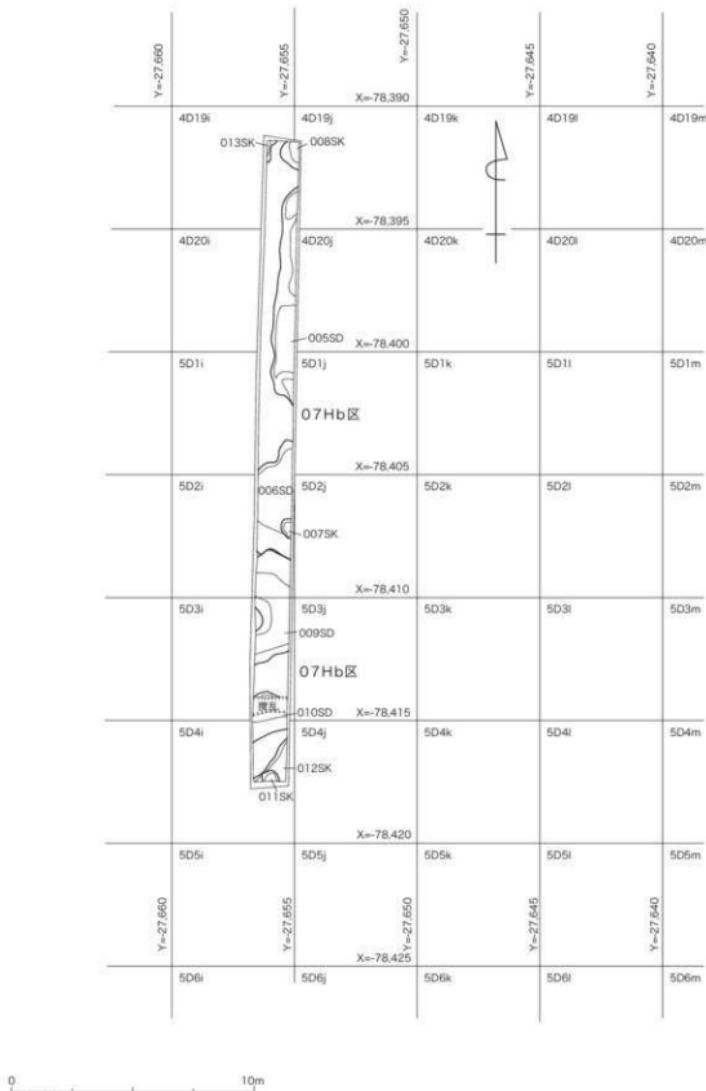
第29図 第2面 07F区遺構図 (1:200)



第30図 第2面 07G区遺構図 (1:200)



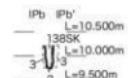
第31図 第2面 07H区構造図 (1:200)



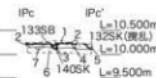
第32図 第2面 07H区遺構図 (1:200)



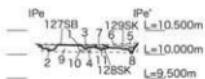
- 2.5Y4/1 黄灰色 極細粒砂をブロック状に少量含む
粘土質シルト
- 2.5Y7/2 灰黄土 極細粒砂に黑色粘土質シルトを
少量含む
- 2.5Y3/3 黒褐色 極細粒砂をブロック状に少量含む
粘土質シルト
- 2.5Y7/2 灰黄土 極細粒砂に黑色粘土質シルトを
少量含む
- 2.5Y7/2 黄褐色 極細粒砂
- 2.5Y6/2 黄褐色 極細粒砂、灰火物を微量含む
- 2.5Y4/1 黄灰色 粘土質シルト



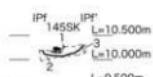
- 2.5Y3/2 黑褐色 粘土質シルト (138SKの柱面跡)
- 2.5Y6/2 黄褐色 極細粒砂と
黒色粘土質シルトとの混土
- 2.5Y6/2 黄褐色 極細粒砂



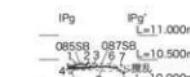
- 2.5Y4/1 黑褐色 極細粒砂をロック状に少量含む粘土質シルト
- 2.5Y7/2 黄褐色 極細粒砂に黑色粘土質シルトを少量含む
- 2.5Y3/1 黑褐色 極細粒砂をロック状に少量含む粘土質シルト
- 2.5Y3/1 黑褐色 極細粒砂をロック状に少量含む粘土質シルト
- 2.5Y3/1 黑褐色 粘土質シルト・極細粒砂をブロック状に少量含む
- (132SK覆土、埋乱)
- 2.5Y7/2 黄褐色 極細粒砂
- 2.5Y2/1 黑褐色 極細粒砂をロック状に少量含む粘土質シルト



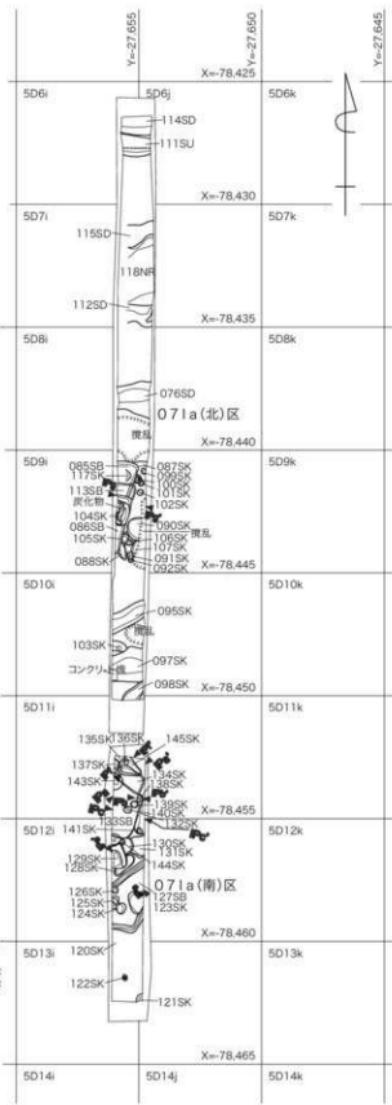
- 2.5Y6/2 黄褐色 極細粒砂に黑色粘土質シルトを少量含む
- 2.5Y5/2 埋乱 黃褐色 極細粒砂
- 2.5Y3/1 黑褐色 極細粒砂をロック状に少量含む粘土質シルト
- 2.5Y5/2 黄褐色 極細粒砂に黑色粘土質シルトを少量含む
- 2.5Y4/2 黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y3/3 橙黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y5/1 黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y5/2 黄褐色 極細粒砂
- 2.5Y5/2 黄褐色 極細粒砂に黑色粘土質シルトを少量含む
- 2.5Y5/2 黄褐色 極細粒砂に黑色粘土質シルトを少量含む
- 2.5Y5/1 黄褐色 粘土質シルト



- 2.5Y6/2 黄褐色 極細粒砂に黑色
粘土質シルトを少量含む
- 2.5Y6/2 黄褐色 極細粒砂
- 2.5Y5/2 黄褐色 極細粒砂に黑色
粘土質シルトを少量含む

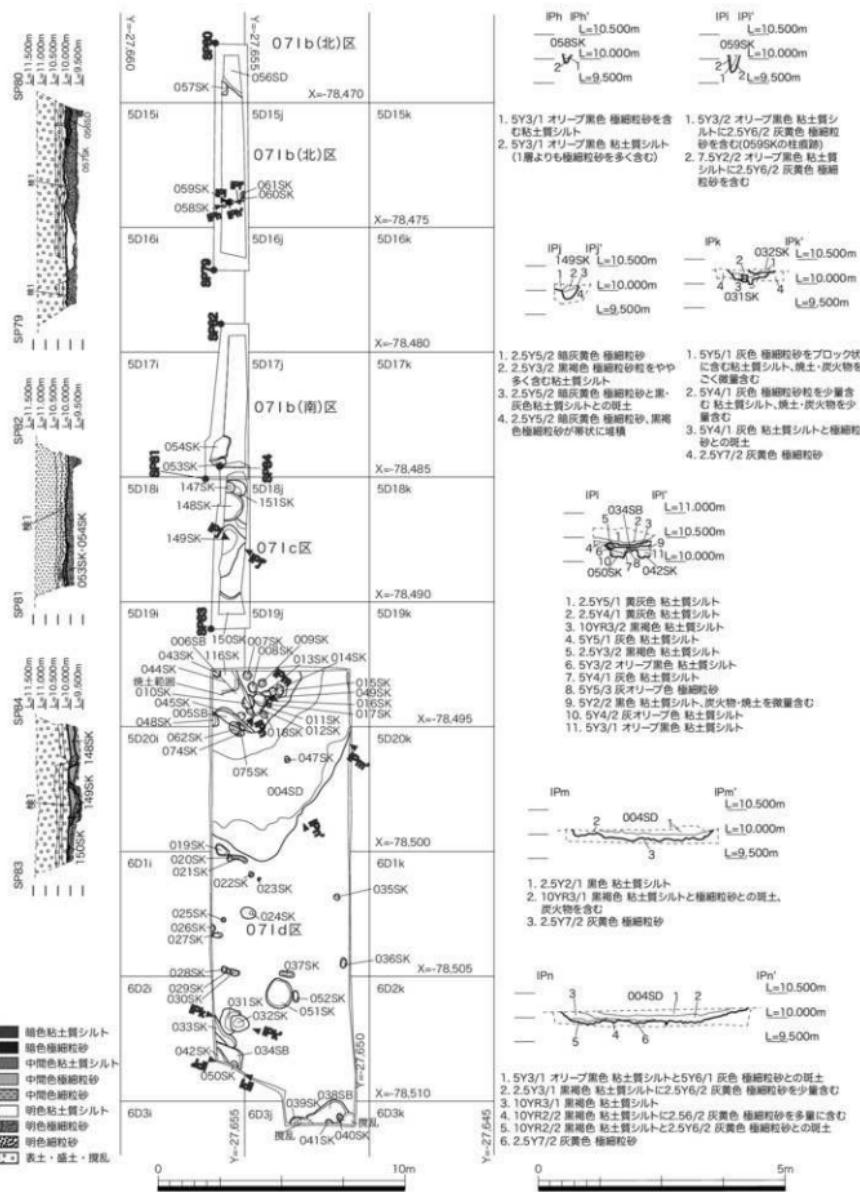


- 2.5Y3/3 暗オーブ褐色 黏土質シルト、灰火物を
多く含む
- 2.5Y3/2 黑褐色 粘土質シルト、灰火物を多く含む
- 2.5Y3/2 黑褐色 粘土質シルト、灰火物を多く含む
- 2.5Y3/2 黑褐色 極細粒砂ブロックを多量に含む
粘土質シルト(087SB柱面跡)
- 2.5Y5/1 黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y5/2 黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y5/1 黄褐色 粘土質シルト
- 2.5Y6/2 黄褐色 粘土質シルトと黑色粘土質シル
トとの混土
- 9.5Y3/1 オーブ褐色 粘土質シルト



0 5m 0 10m

第33図 第2面071区遺構図 (1:200)

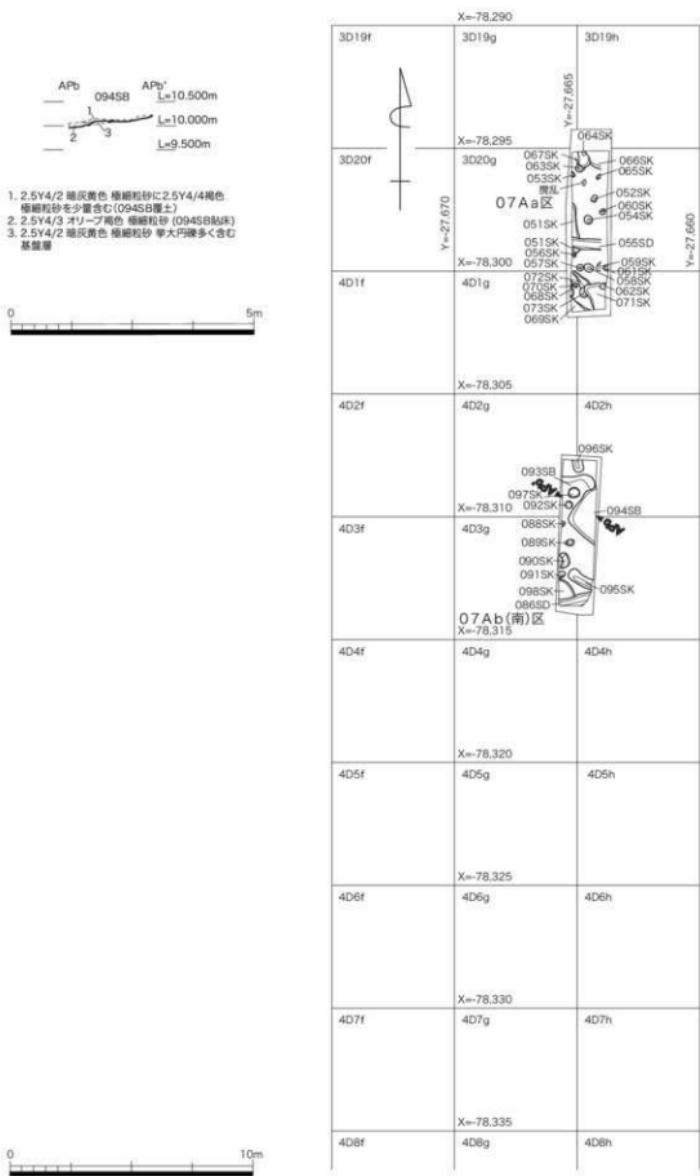


第34図 第2面 071区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 (1:100)

	7D11g	7D11h	7D11i	7D11j	7D11k	7D11l
				X=78.650 X=78.655		
	7D12g	7D12h	7D12i	7D12j	7D12k	7D12l
				07Ja(中)区 003SX X=78.660		
Y=27.670	7D13g	Y=27.695 7D13h	Y=27.690 7D13i	004SK X=78.665	7D13k	Y=27.695 7D13l
				X=78.670		
	7D14g	7D14h	7D14i	7D14j	7D14k	7D14l
	7D15g	7D15h	7D15i	7D15j	7D15k	7D15l
				X=78.675		
	7D16g	7D16h	7D16i	7D16j	7D16k	7D16l
				X=78.680		
	7D17g	7D17h	7D17i	7D17j	7D17k	7D17l



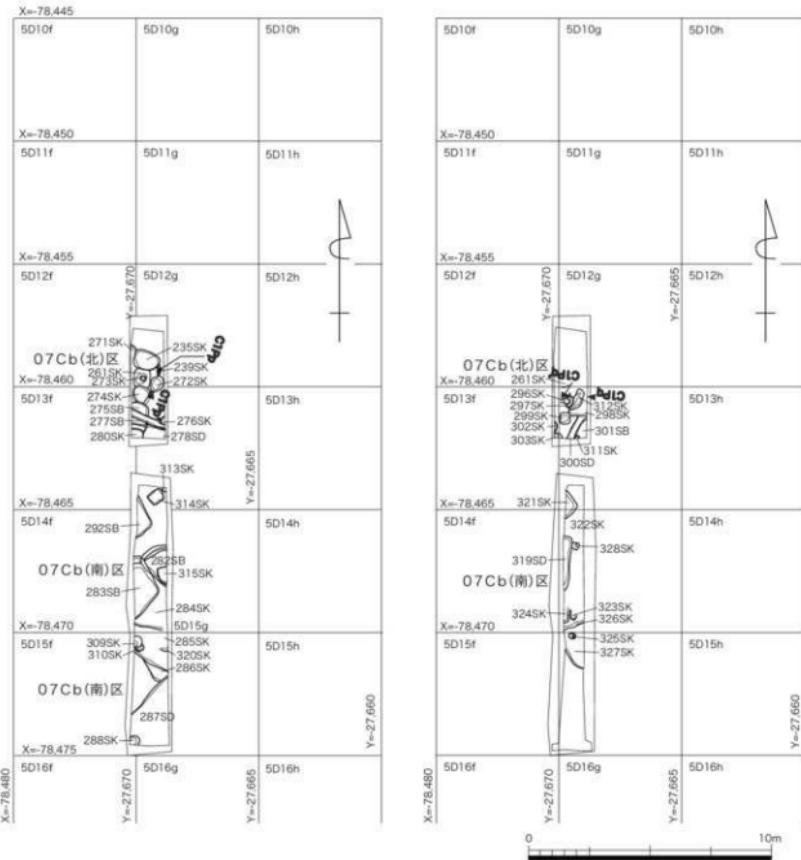
第35図 第2面 07J区遺構図 (1:200)



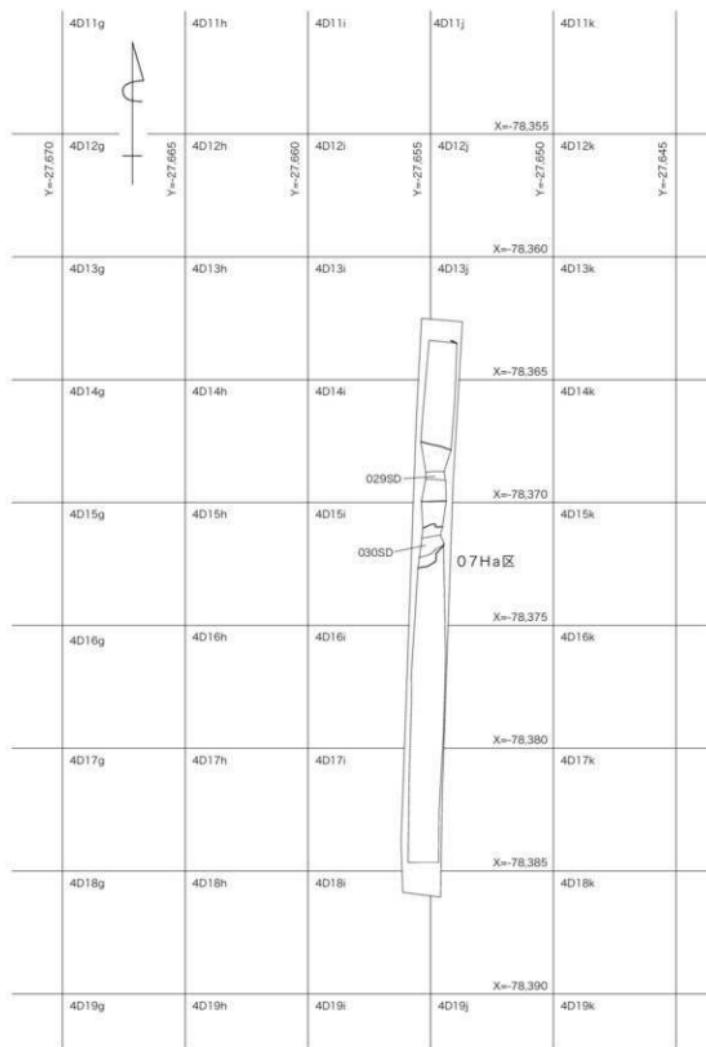


- 1. 2.5Y3/2 黒褐色 塗膜粗粒砂2.2.5Y6/2 黄褐色 塗膜粗粒との斑点
- 2. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルト
- 3. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト
- 4. 2.5Y6/2 黄褐色 塗膜粗粒砂(地山と2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルトとの斑点)
- 5. 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルトに2.2.5Y6/2 黄褐色 塗膜粗粒を少量含む
- 6. 2.5Y6/2 黄褐色 塗膜粗粒砂
- 7. 2.5Y4/2 隆起 黄褐色 粘土質シルト

- 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色
極細粒砂を多く含む、灰火物・焼土を少量含む
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルトに2.5Y6/1
灰黄色 極細粒砂を少量含み、灰火物を少量含む
- 2.5Y6/2 灰黄色 極細粒砂



第37図 第3面・第4面07C区遺構図(1:200)、個別遺構断面図(1:100)



第38図 第3面 07H区遺構図 (1:200)

第3章 出土遺物

今回の遺物出土量はコンテナ約50箱であり、一次整理として発掘調査現場から出土した土器・石器などを水洗洗浄し、弥生土器・土師器・陶磁器と石器について分類を行い、各調査区における遺構の変遷を考えるべく全出土土器について、弥生土器・土師器・陶磁器の取り上げ単位毎、つまり遺構・層位毎の出土土器の大まかな時期的偏り(集中度)と混在性を明らかにした。この際、同時に出土遺物の接合作業を進め、遺構の時

期を示す資料や特徴的な形態のある資料の抽出を行い、実測・トレースを実施した。また、石器などについては、石器を抽出し、実測・トレースを行い、石器以外のものに関しては、石材を分類し、計測・カウントなどをを行い、後の分析資料になるように整理した。ここでは、先に第1節 弥生土器・土師器・陶器の報告を行い、その後に第2節 石器、第3節 ガラス製品の報告をする。

第1節 弥生土器・土師器・陶器（第39図～第59図）

ここでは弥生土器・土師器・陶器の報告にあたり、弥生土器・土師器については、大まかな時期について遺構ごとの資料を抽出し、主要な形態について述べる。その後須恵器・灰釉陶器・山茶碗について述べる。

(1) 弥生時代中期前葉：A期

二枚貝による貝殻施文の太頭壺（広口口縁のものと受口口縁のものがある）、同じく貝殻による調整を行う貝殻条痕調整の太頭壺（受口口縁か内湾口縁の口縁部で体部の貝殻条痕調整後に沈線施文・管状施文を施すもの）の太頭壺（有稜の受け口口縁や内湾する口縁のものが多い）、貝殻条痕調整の深鉢と厚口鉢、柳条痕調整の深鉢、沈線施文を主体とする文様間をミガキ調整する太頭壺（いわゆる「大地式壺」）、ハケ調整深鉢の存在等により分類している。したがって深鉢や貝殻施文受口口縁太頭壺ではB期のものを含む可能性がある。

A期の弥生土器が出土した多数あるが、A期の遺構では07Cc区055SK・同131SK・07Ia区118NR・同136SK・07Ie区110SK・07Ja区008SBがあり、他にB期の遺構ではあるが、A期の土器がまとまって出土した遺構として07Cc区050SK・051SKがある。

貝殻施文太頭壺 二枚貝の貝殻を施文具とした文様がナデ調整や施文後のミガキ調整の中に施されるもので、貝殻直線文や小刻みな貝殻波状文が口縁端部、頸部、体部上半にみられる（E07Cc058～E07Cc060・E07Cc064～E07Cc071・E07Ia045・E07Ja001など）。口縁部は頸部から外反して受口口縁になるも

の（E07Cc002）とそのままひらいておわる広口口縁になるもの（E07Cc058・E07Cc059・E07Cc064～E07Cc067・E07Cc069～E07Cc071・E07Cc073・E07Ia045・E07Ja001・E07Ja003など）があり、口縁端部の上端や下端を棒や指頭などで刻むものが多い。体部はE07Ja003のように底部から体部中位ほどが最も膨らみ頸部に細くなるやや縱長の形をするものが多い。体部上半の貝殻施文の幅は比較的ひろい。

貝殻施文無頭壺 E07Cc038は口縁部径20.0cm程の無頭壺で、口縁部外面に貝殻直線文と貝殻垂下直線文がみられる。

沈線施文太頭壺 ナデ調整や施文後のミガキ調整の中にやや太い沈線による施文がみられるもので、いわゆる大地式土器の一群になる。沈線による方形区画文（E07Cc003・E07Cc124）や弧文（E07Cc037・E07Ia073）、山形文（E07Ie007）の他、直線文、平行沈線直線文（E07Ia073・E07Ie006）がみられ、貝殻直線文と共伴するもの（E07Ca037）や繩文と共伴するもの（E07Ia073）もみられる。E07Ia064は口縁部径15.4cmの内湾口縁の鉢の形状になるものと思われる。E07Id025はD期の遺構から出土したものであるが、体部に沈線に近い櫛描波状文を施す。

貝殻条痕調整太頭壺 口縁部から体部下半まで、貝殻条痕により調整される太頭壺で、貝殻条痕調整後沈線や平行沈線による直線文・山形文・波状文などが描かれるものが多い。口縁部はE07Ia071などのように受口

口縁になるものと E07Ic001・E07Id001 などのように内湾口縁のなるものがある。

貝殻条痕調整太頭壺 外面に貝殻条痕調整を施す太頭壺である。E07Ia071 は、口縁部径 25.0cm で口縁部が受口口縁になるもので、口縁部上端面に貝殻押し引き文、口縁受口部に貝殻描弧文がみられる。E07Id001 も同様な形態のものである。E07Ia054 は体部片で、外面に平行沈線山形文が、E07Id026 には体部に平行沈線波状文がみられる。E07Ic001 は口縁部上端面に貝殻押し引き文のある内湾口縁の形態のもので、口縁部径 13.0cm。E07Ja002 は体部の中位に膨らみのある丸みのあるもので、体部径 29.0cm 程、頭部の跳ね上げ状の貝殻条痕とヨコ貝殻条痕があり、体部にはタテ羽状貝殻条痕の後平行沈線波状文と垂下直線文が施されている。E07Id026 は D 期の遺構から出土したものであるが、体部上半を貝殻条痕で調整し、その上に平行沈線波状文を描く。

貝殻条痕調整厚口鉢 07Cc 区 086SK から出土した E07Cc103 の 1 点のみがあり、内湾する口縁部の端部のみが出土した。口縁端部の折り返しは大きくなり、口縁部径 14.0cm 程である。

貝殻条痕調整深鉢 底部からやや膨らみをもって立ち上がり、口縁部が外反しておわる深鉢で、E07Cc062 が口縁部径 22.0cm、E07Id036 が口縁部径 30.0cm 程、E07Id050 が口縁部径 28.0cm で口縁部内面に貝殻描直線文、口縁部端面に貝殻押し引き文がみられる。E07Ia056 は体部片で、外面に貝殻押圧文のある浮線文がみられる。

櫛条痕調整深鉢 棒状のやや柔らかい櫛状調整具により外面を整えるもので、底部からやや膨らみをもって立ち上がり、口縁部が外反しておわる深鉢で、底部外面に布圧痕がみられる。口縁部内面の比較的上端に近い範囲で連続した櫛条痕刺突文列がみられる。内面はヨコナデ調整を基本とする。E07Cc043 は底部径 8.0cm の底部片、E07Cc061 は口縁部径 28.0cm のもので体部から左上がり斜めの櫛条痕調整がみられる。E07Ia053 は口縁部片で口縁部径 35.0cm、E07Ia057 は底部片で底部径 7.5cm である。E07Id027・E07Id029 は D 期の遺構から出土したものであるが、A 期から B 期のものである可能性が高いものである。

ハケ調整深鉢 体部から口縁部が外反しておわる深鉢形で、外面ハケ調整で、内面ヨコナデ調整のものである。E07Cc082 と E07Cc093 があり、E07Cc082 が口縁部径 25.0cm、E07Cc093 が口縁部径 26.0cm で口縁端部下端を 1 箇所刻んでいる。E07Cc082 は B 期に属する可能性がある。

(2) 弗生時代中期中葉前半：B 期

櫛施文 (付加沈線磨消手法のもので多くは外面が黒色のもの) の受口口縁細頭壺 (無頭壺が少数ある)、櫛施文太頭壺、沈線施文 (太い沈線文のものを含む) と鰐文等を組み合わせた渦巻文や弧状文の壺、ハケ調整壺、櫛条痕調整深鉢、鉢状の高杯がある。ハケ調整壺については、A 期のハケ調整深鉢と区別できていないものがあり、一部は A 期に属する可能性がある。

B 期の弗生土器が出土した遺構は多数あるが、B 期の遺構では 07Bb 区 017SK・07Ca 区 216SK・07Cc 区 025SK・同 027SK・同 050SK・同 051SK・07Ia 区 086SB・同 104SK・07Id 区 007SK がある。

櫛施文受口口縁細頭壺 口縁部が受口口縁で細頭の形態のもので、体部が下半に稜をもつ程に張って頭部にすぼまる (E07Id045 にみられる)。全体に黒色に焼成されるものが多く、櫛描直線文後その上下に沈線文を施し、櫛描直線文の外側をヨコミガキ調整する付加沈線磨消技法がみられる、その上に赤色の彩色文がみられるものがある。口縁部の資料には E07Bb004・E07Ca040 があり、E07Bb004 は口縁部外面に細かく描れる櫛描波状文があり、口縁部から頭部にかけて櫛描直線文でうめる、口縁部径 9.6cm である。E07Ca040 は口縁受口部に櫛描波状文後その上に櫛描垂下文、口縁受口部下端に貝殻刻み後棒状浮文 2 個 1 組があり、この資料は 07Ca 区 198SB 出土器と接合した。体部の資料では、E07Cc019・E07Cc020・E07Cc075・E07Ia019・E07Id043・E07Id045・E07Id047・E07Ie003 などがあり、すべての資料に付加沈線磨消技法がみられ、櫛描直線文の上に E07Id043 には櫛描垂下直線文が、E07Id045・E07Ie003 には櫛描弧文、E07Id047 には櫛描垂下波状文が 2 条～4 条で 1 組の単位でみられる。E07Cc055 は底部片で、体部外面側にタテハケ調整後のヨコミガキ痕がみられ、底部外面に布圧痕が残る。E07Cc075

は出土した07Cc区051SKがA期からの貝殻施文・貝殻条痕調整の弥生土器を主体とする中で、B期の遺構であることを示す資料である。

櫛施文太頸壺 口縁部が外反しておわる太頸壺で、口縁部端部が面をもって垂下する形態のもので、E07Cc056・E07Cc057・E07Cc072・E07Ia021・E07Id046などがある。E07Cc056は口縁部端面に櫛描波状文を施し、貝殻施文のあるE07Cc058と類似する。E07Cc057は口縁端面に櫛描直線文がみられ、その上・下端にハケ刻みを施す。E07Cc072は口縁部径33.0cm、頸部径16.0cmで、文様構成は貝殻施文太頸壺に類似する。櫛描直線文が口縁部端面・頸部・体部にあり、口縁部上・下端にハケ刻みを施す、頸部は櫛描直線文の上に櫛描垂下直線文を2帯1組で4方に描き、丸みのある体部に3帯ある櫛描直線文には追加した弧文が描かれて疑似流水文となっており、櫛描文の外側を細かいヨコミガキ調整で埋める。E07Ia021は体部上半の部分で、櫛描直線文後沈線斜格子文をほどこす。E07Id046は表面が摩滅して櫛描文は確認できないが、あまり大きく外反して開かない口縁部から緩やかに頸部がすぼまって体部下半に棱をもつ器形で、口縁部上端に刻みがみられる。

櫛施文高杯 E07Id028はD期の遺構から出土したものであるが、杯部内面に櫛描直線文と波状文を描く、A期に属する可能性がある。

沈線施文壺 貝殻条痕調整やミガキ調整、ナデ調整の上に沈線によって文様を描く壺で、太頸壺から細頸壺に至るものがあり、口縁部は外反しておわるものが多い。出土資料の中では全体を復元できるものではなく、頸部から体部のものがある。E07Ia020は体部下半の部分で沈線円形文後円形文の中に沈線直線文を描き、その後ミガキ調整を施す。E07Id044は太頸壺の体部で、丸みを帯びた体部を貝殻条痕調整後太沈線で梢円形や弧文形を描く。E07Ie004は頸部片と思われるもので右上がり斜め沈線文後太沈線直線文を施す。E07Id048は体部下半の部分で、外面に貝殻条痕調整がみられる。

ハケ調整壺 体部から口縁部が外反しておわる深鉢形で、外面ハケ調整で、内面ヨコナデ調整のものである。A期の部分で述べたE07Cc082はB期に属する可能性

がある。その他にはあまり良い資料がない。

櫛条痕調整深鉢 A期の櫛条痕調整深鉢で述べた特徴と同様のもので、E07Cc083は器高26.0cm、口縁部径31.8cm、底部径6.7cmをはかるもので、口縁部内面の上端に面をもつように櫛条痕刺突文列、体部外面にヨコ羽状櫛条痕調整、底部に布圧痕がみられる。E07Cc085は、底部片で、外面体部を櫛条痕調整、内面をヨコナデ調整、底部外面に布圧痕を残す。

(3) 弥生時代中期中葉後半：C期

弥生土器の櫛施文受口口縁細頸壺、櫛施文太頸壺、ハケ調整壺、櫛条痕調整深鉢などがある。ハケ調整の壺や櫛条痕調整深鉢についてはB期とD期のものを含む可能性があり、基準が不明瞭な部分を含んでいる。貝殻調整の壺、ハケ調整の台付き壺をこの時期のものには含めていない。

C期の弥生土器が出土した遺構が多数あるが、C期の遺構では07Ab区084SD・07Bb区008SD・同038SD・07Hb区006SD・同009SD・07Ia区085SB・07Id区032SK・同037SKがある。

櫛施文受口口縁細頸壺 形態はB期のものと類似するが、体部最大径をもつところがB期より下に移り、底部から体部が皿状に緩く立ち上がる形態になる。またB期に比べて付加沈線研磨手法のもので外面の色調が黒色でないものや付加沈線研磨手法の櫛施文の省略されたものが目立つようになり、ミガキ直線文のもの、細頸壺の頸部外面に櫛描直線文が細かい波状文になるものがみられる。E07Aa001は口縁部径11cm前後のもので、口縁受口部下端に刻みがある、E07Ab005は体部片でハケ調整後ミガキ直線文を施す。E07Cc030は頸部の部分で、タテハケ調整後体部の沈線直線文後沈線文間にヨコミガキ調整を施す。E07Cc051は口縁部径9.5cmのもので、口縁受口部下端に刻みがみられる。E07Ia011は体部片でハケ調整後沈線直線文を施し、その周囲をヨコミガキ調整する、E07Ia011は体部片でタテハケ調整後に沈線直線文をめぐらすが、ミガキ調整は省略されている。E07Id033は口縁部径9.5cm、頸部径5.4cmのものでタテハケ調整後口縁受口部下端に刻みを施し、体部の沈線直線文後沈線文間にヨコミガキ調整を施す。E07Id039は体部片で沈線直線文とヨコミガキ調整がみられるものである。

櫛施文太頸壺 形態ではB期のものを引き継ぐが、口縁部が外反しておわる広口壺のタイプで、頸部がやや細く短くなり、頸部外面の無文化、沈線施文に変わる傾向がみられる。E07Ab004は広口口縁で、やや細い頸部からやや明瞭な境を経て丸みのある体部にいたるもので、口縁端部外面に櫛刻み、口縁部内面に山形浮文、頸部外面に沈線直線文4条、体部外面に沈線直線文がみられる、沈線文はハケ調整面の上に施されている。E07Bb001～E07Bb003は07Bb区008SD出土のもので、E07Bb001は頸部外面のタテハケ調整の後櫛描直線文を施し、口縁部端面に刻みを施す、E07Bb002・E07Bb003は口縁部上・下端に刻みをいれる。E07Ia067は口縁端部下端に刻みをいれる広口口縁にやや短くなった頸部を経て体部下半に稜をもつて膨らみをもつもので、ハケ調整後体部上半にヨコミガキ調整がみられる。

櫛施文細頸壺 その他の櫛施文細頸壺を一括したもので、受口口縁になるものと広口口縁になるものがあり、櫛施文太頸壺の形態と類似するものと思われる。文様では、体部外面に沈線施文（太沈線文のものを含む）と貝殻刺突文等を組み合わせた渦巻文や弧状文の存在が特徴である。E07Hb005は広口口縁になる細頸壺の体部片と思われ、外面に2条の沈線弧文とその間を貝殻刺突文列でうめる。E07Ia009は広口口縁になるもので、口縁部内面に円形浮文2個、口縁端部上・下端に刻みがある。

ハケ調整壺 口縁部から頸部がややくびれて体部にいたる趣形のもので、体部下半からのタテハケ調整がみられる。この時期には口縁部に指による押圧が1ヶ所～2ヶ所存在するものが特徴的にみられ、あまり体部の径が頸部より大きくならず、深鉢に近い形態のものが多い。E07Bb007・E07Bb008は同一遺構の出土で、同一個体の可能性があるもので、E07Bb007は口縁部を1カ所つまみ上げる口縁部から体部上半のもので、口縁部径21.6cm、頸部径17.6cmをはかる。E07Bb008は底部片で底部径6.0cmをはかる。E07Hb001は口縁部径18.0cm、頸部径15.5cm、体部径15.8cmをはかるもので、内面にヨコナデ調整を行い、口縁部を1カ所つまみ上げる。E07Ia004は口縁部片で口縁部に大きく指押さえ調整を施す、D期の

遺構から出土しているので、時期が下がる可能性がある。

櫛条痕調整高杯・櫛条痕調整双口壺 E07Ha004とE07Ha005は07Ha区の北側の自然流路と思われる堆積から2個体のみ出土したものの、器形などの形態とともに特殊な出土状況である。2個体とも外面全体に櫛条痕調整を施すもので、E07Ha004は脚底部に布压痕が残る。E07Ha004は内傾口縁をもつ椀状の杯部に中央の脚部をもつもので、脚部の底はあげ底となっており、杯部はタテ羽状櫛条痕調整、口縁部はヨコ櫛条痕調整、脚部はタテ櫛条痕調整を行い、杯部内面にヨコナデ調整がみられる。杯部口縁部径9.0cm、脚部径5.7cm、器高12.4cmをはかる。E07Ha005は口縁部径2.0cm程の口縁部が2つある壺で、体部径8.5cm、器高9.2cmをはかる。外面全体に櫛条痕調整する中で、口縁部から体部上半に櫛条痕描波状文を施している。底部外面はナデ調整である。口縁部の一つに抉れがあり、液体の注ぎ口とも考えられる。体部上半に赤彩の痕跡が少し残る。

櫛条痕調整深鉢 形態はB期のものとあまり変わらないが、口縁部内面の櫛条痕刺突文列が幅広になり、外面の口縁端部下にナナメ櫛条痕調整をするものがみられる。E07Ab006は口縁部径40.0cmをはかるやや大型のもので、体部外面を体部からのヨコ羽状櫛条痕調整後口縁部のヨコ櫛条痕調整をして、口縁端部下をさらにヨコ櫛条痕調整により整えている。内面は体部からのヨコナデで、口縁部内面に櫛条痕刺突文列と櫛条痕描波状文を施す。E07Ia013は口縁部片で外面にヨコ櫛条痕調整の後口縁端部をナナメ櫛条痕調整で整える、内面はヨコナデ調整後ナナメ櫛条痕刺突文列をめぐらす。

(4) 弥生時代中期後葉:D期

この時期の弥生土器についてC期からの櫛施文を主体に施す土器群と櫛条痕調整を施す深鉢、ハケ調整壺に、D期になり主体となるいわゆる凹線文を口縁部等に施す壺・高杯とタタキ調整を体部成形に施す壺（壺にもみられる）が新たに加わる。

D期の弥生土器が出土した遺構は多く、07Bb区040SK・07Ca区183SK・同198SB・同199SD・同200SB・同201SD・同208SD・同217SB・07Cb区240SB・同241SB・同242SK・同248SB・同249SD・

同 251SD・同 281SB・同 285SB・同 292SB・07Cc 区 028SB・同 031SK・同 034SK・同 035SB・同 057SK・同 068SK・同 086SK・同 087SK・同 093SK・同 104SK・同 117SK・同 123SK・同 130SK・同 132SK・同 145SX・同 158SK・07Cd 区 265SB・同 291SK・07D 区 020SK・同 022SD・07Hs 区 029SD・07Ia 区 090SK・同 097SK・同 111SU・同 112SD・同 114SD・同 133SB・07Id 区 005SB・同 010SK・同 024SK・同 045SK・07Ie 区 065SB・同 083SKなどがある。

四線文受口口縁細頸壺 報告する出土資料では全形が残るものがないが、受口口縁に凹線文を1条から4条程めぐらし、沈線直線文や櫛描直線文で施文する頸部を経て無文で体部中央付近に膨らみをもつ形態のもので、体部外面等の成形にタタキ調整の後に体部下半のケズリ調整、その後に全体を整えるハケ調整がみられる。E07Ca036は口縁部から頸部の部分で、受口口縁に凹線文を2条めぐらし、頸部に櫛描直線文がみえる。E07Ca038は体部中央から底部の部分で、櫛描直線文がみられないことから、受口口縁細頸壺に分類した。E07Cb002・E07Cb006・E07Cc028・E07Cc044・E07Cc119・E07Ia042は口縁部片で受口口縁に凹線文を1条から2条めぐらす。

四線文内湾口縁細頸壺 報告する出土資料では全形が残るものがないが、口縁部が外に膨らむ内湾口縁に凹線文を1条から4条程めぐらし、その下に主に櫛刺突羽状文や櫛描直線文、ナナメ櫛刺突文列めぐらす頸部を経て、複合櫛施文による櫛描直線文や波状文を数帶めぐらす体部が特徴のもので、体部は中央や下付近に膨らみをもつ形態である。体部外面等の成形にタタキ調整の後に体部下半のケズリ調整、その後に全体を整えるハケ調整がみられる。E07Ca024は頸部から体部上半の部分で、頸部と体部の境に帯状浮文を貼り付け、その下にナナメ櫛刺突文列。その後に複合櫛施文の櫛描直線文、波状文を上から施す。体部外面等の成形にタタキ調整の後に体部下半のケズリ調整、その後に全体を整えるハケ調整がみられる。E07Ca043は体部片で、ハケ調整後体部上半に複合櫛施文の櫛描直線文が3帯みられる。E07Cb014は体部片で複合櫛施文による櫛描直線文と波状文の後に櫛描垂下直線文を施している。E07Ia022は口縁部を欠損するが、頸部側

から櫛描き直線文、ナナメ櫛刺突文列、櫛描波状文、櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文でおわるもので、体部上半の櫛描文が直線文と波状文が交互に施文される点と直線文が一番下に施文されている点から、D期の一一番新しい形態のものである。E07Ia023は頸部の櫛刺突羽状文がみられるもので、E07Ia024は体部片で、櫛描直線文と櫛描波状文がみられる。E07Ie011は口縁部に凹線文を4条めぐらすもので、その下から頸部にかけてナナメ櫛刺突文列が2帯、体部との境に櫛描直線文がみられる、D期の新しい段階の資料である。

四線文受口口縁太頸壺 E07Ca019 は頸部の部分で、タテハケ調整後、頸部と体部の境に櫛描廉状文を施し、その下の体部上半に櫛描直線文がみられる。E07Cb016は受口部に櫛刺突文列後に凹線文を1条めぐらす。E07Cc117は頸部のみであるが、体部との境に2条の断面三角形状の帯状浮文を貼付け、その上、下に円形刺突文列をめぐらす。

四線文内湾口縁太頸壺 内湾口縁に凹線文を数条めぐらす口縁部から櫛描文を施す頸部を経て体部上半を櫛描直線文や櫛描波状文などで飾るもので、体部は中央付近に膨らみをもつ形態である。E07Ca041は頸部から体部上半の部分で、頸部に櫛描廉状文がめぐり、体部に複合櫛施文による櫛描直線文がみられる。

四線文広口縁太頸壺 全体を復元できるものはないが、E07Cc116は口縁部端面がややひろくなり、凹線文が3条めぐらした後6個1組の円形浮文があり、口縁部内面に櫛刺突羽状文が2帯めぐる。

四線文高杯 本製品を写した口縁部が杯部から水平に外に出て下垂する端面を形成する鉢付皿形高杯と鉢状の杯部を鉢形高杯がある。脚部はどちらの形態も中空のものである。鉢形高杯は形態上類似する四線文鉢と成立過程が同じであればD期の後半に位置づけられるものである。四線文頸付皿形高杯は國化できる資料がなかった。E07Cb022は口縁部に5条の凹線文をめぐらす鉢状の高杯で、鉢の可能性もあるものである。E07Ie016は口縁部に凹線文を3条めぐらす鉢形高杯で、杯部外面にヨコタタキ調整後タテヘラケツリ調整を行い最後に下からのタテハケ調整で器面を整えてい、内面はタテハケ調整が残り、杯部底面を充填して成形している。

四線文鉢 圓化できた資料が少ないが、E07Cc050は口縁部に四線文を1条めぐらすもので、D期の後半に位置付けられるものである。

櫛施文細頸壺 四線文を口縁部に施さない細頸壺である。口縁部が広口口縁になるものと受口口縁になるものがあり、体部は比較的丸みを帯びた形態になるものである。底部がやや突出する形態である。E07Ca042は体部片で外面に櫛描直線文と櫛刺突山形文をめぐらす。E07Cb008は受口口縁になるもので、口縁部径10.0cm程である。E07Cc029は頸部から体部にいたる部分のもので、ハケ調整後沈線直線文と貝殻刺突文列がみられる。E07Cc032は体部片で、外面に貝殻刺突文列、その上・下端に沈線文を施す。E07Cc048は口縁部の受口が不明瞭な受口口縁の壺で、口縁部から頸部の外面に櫛描直線文がみられるもので、口縁受口部下端に刻みを施すものである。E07Cc097は口縁部断面がほぼ斜め上にあがっておわる直口口縁の壺で、内・外面にハケ調整を施す、口縁部上端面が上に向く形状からD期の中で古いタイプのものである。E07la043は受口口縁になるもので、受口部外面にヨコ羽状刻みをいれる。E07la051は口縁部断面がほぼ斜め上にあがっておわる直口口縁の壺で、外面を細かい櫛描波状文が口縁部から頸部にかけてめぐる。E07le010は受口口縁になるもので、受口部下端に貝殻刻みをめぐらすものである。

櫛施文太頸壺 C期から続く形態のもので、広口口縁の口縁部からやや細くなる頸部を経て体部中央や下付近に膨らみをもつ形態のもので、底部はやや突出するものがある。E07Ca021は広口口縁のもので、口縁部端面に櫛描波状文、頸部に櫛描直線文、口縁部内面に櫛描直線文と櫛刺突文列がめぐる。E07Ca025も広口口縁になるもので、口縁部端面に貝殻刺突文列、頸部に上から櫛描波状文、櫛描直線文、体部との境に櫛刺突文列を施す、口縁部内面をヨコナデ調整後櫛描波状文がめぐる。E07Cc031は頸部で、ハケ調整後の櫛描波状文がみられる。E07Cc041は表面が摩滅して不明であるが、口縁部径13.0cm、頸部径9.4cm、底部径5.6cm、器高27.6cmをはかるもので、比較的大い頸部から口縁部があり開かずにおわり、体部が下彎れして底部が突出する形態のものである、形

態からC期末からD期前半にかけてのものと思われる。E07Cc098は広口口縁の口縁部片で、内面に三角形刺突文列、口縁端部上・下端に刻みを施している。E07le012は口縁部径17.0cmをはかる広口口縁のもので、口縁部上・下端に刻みがあり、口縁部内面に刻みのある棒状浮文を貼付ける。E07le013は体部片で、外面上に三角形刺突文列が3帯みられる。

三河系壺 全形がわかるものはないが、比較的大型の太頸壺と小型の細頸壺がある。形態は受口口縁になるものと広口口縁で比較的短く広がっておわるものがあり、比較的短い頸部を経て体部下半に大きく膨らんで稜をもち、底部に丸みをもっていたる形態である、底部が突出する。外面上の色調が黒みを帯びたもので、文様では沈線文による波状文や直線文、やや柔らかい原体を使ったと思われるササラ状櫛施文による緩やかな波状文や直線文が特徴である。E07Cb015は太頸壺の体部片で、体部上半にササラ状櫛押し引き文とササラ状櫛波状文、沈線弧文列がみられる。E07Cc039は広口口縁の太頸壺で口縁部が頸部から短く外反しておわるもので、口縁部端面に3個1組の刻みがある、頸部にササラ状櫛描直線文、体部上半にササラ状櫛施文波状文がみられる。

E07Cc101は細頸壺の体部片で、体部外面にササラ状櫛描直線文がめぐり、その下をヨコミガキ調整がみられる、体部径28.0cm程である。E07Cc120は広口口縁細頸壺になるもので、口縁端部に多数の刻みがあり、頸部からのササラ状櫛描ハネ上げ文が口縁部にのびる。E07la044は受口口縁太頸壺で、口縁部径18.2cm、頸部径10.6cmをはかる、内外面にナデ調整を行い、頸部外面にササラ状櫛ハネ上げ文の後沈線斜め文、櫛刺突文、沈線直線文、沈線波状文をめぐらしている。

ハケ調整壺 形態は口縁部が断面「く」の字状に体部から外反してのびるもので、体部上半がやや膨らんだ後底部にいたる。器面調整は外面にハケ調整、内面はハケ調整とナデ調整がみられ、体部下半にはケズリ調整がみられるものがある。体部上半の最後にヨコハケ調整を直線文のようにいれるもののがみられる。底部が平底のものと脚台が付くものがある。E07Cb012は口縁部端面にハケ刻みを施すもので、外面上半にハケ調整後のヨコハケ調整が直線文のようにめぐる、内

面はヨコナデ調整である。E07Cc033は口縁部下端にハケ刻みを施すもので、口縁部径20.0cmをはかる。E07Cc109・E07Cc110は台付甕の脚台部で、外面ハケ調整のものである。E07Cc110は体部内面にタテケズリ調整がみられるが、底部を充填するものがあるのでハケ調整甕に含めた。E07Cc118は口縁部端面にヨコハケ調整後刻みをつけるもので、口縁部径23.6cmをはかる。E07la028は口縁端部下端に刻みのあるもので口縁部径18.6cm、E07la030は口縁部端面に刻みがあるもので口縁部径20.0cmをはかる。E07la049は底部径6.5cmの平底甕で、内面にハケ調整とナデ調整がみられる。E07le014は底部径5.4cmの平底甕で内面にタテケズリ調整がみられる。

受口口縁甕 全形を復元できるものはないが、外面にハケか櫛による刺突文列がみられる受口の口縁部をもつ甕で、体部上半の比較的体部中央に近い部分で膨らみをもって底部にいたるものである。体部上半にはハケ調整による波状文や直線文のような調整がみられる。E07Cb003は受口口縁の口縁部から頸部にかけての部分で、受口部にナナメ刺突文列、体部上半に直線文状のヨコハケ調整がみられる。E07Cc104は緩い受け口になるもので、口縁部上・下端に刻みを施す。

タキ調整甕 形態は口縁部が断面「く」の字状に体部から外反してのびるもので、体部上半が比較的体部の肩が張るように膨らんだ後、底部にいたる。器面調整は外面にハケ調整後タタキ調整を行い、再びハケ調整、体部下半を底部際からのタテハケ調整で仕上げておわるもののが基本で後半のハケ調整は省略がみられるものがある、内面はハケ調整後外面のタタキ調整に伴う押さえ痕がみられ、その後体部下半を下から上へのタテケズリを施す。体部上半の最後にヨコハケ調整を直線文のようにいれるものがみられる。底部が平底のものと脚台が付くものがある。E07Cb004は口縁部端面にハケ刻みを施し、外面にタタキ調整が残る平底甕で、内面にハケ調整の後に外面のタタキ調整に伴う押さえ痕、体部下半内面にタテケズリ調整がみられる、口縁部径23.6cm、頸部径20.2cm、底部径4.8cmをはかる。E07Cb007は脚部径10.6cmをはかる大型の台付甕の脚部、E07Cb009は外面タタキ調整、内面ケズリ調整の平底甕の底部、E07Cb010は脚

部径8.0cmの台付甕の脚部である。E07Cb023は口縁部端面にハケ刻みを施すもので、口縁部径22.3cmをはかる。E07Cb024は上げ底の内面ケズリ調整のもので、外面はタテハケ調整がミガキ調整のようにみえる。E07Cb028は底部片で、外面ハケ調整、内面ケズリ調整の平底甕である。E07Cc105・E07Cc106は口縁端部下端に刻みのあるもので口縁部径20.5cm前後の中型の甕、E07Cc107は口縁部端面に刻みがある大型のもので口縁部径31.4cmをはかる。E07Cc108は内面ケズリ調整のある平底甕である。E07Ha002は外面のタタキ調整が口縁部にまでいたるもので、その後の体部下半のタテハケ調整がみられる、口縁部端面に刻みを施す。E07la029は口縁端部下端に刻みのあるもので、体部外面に直線文のようなヨコハケ調整を施す。E07la047は口縁端部下端に刻みを施す大型甕で、口縁部径31.0cmをはかる、E07la048は口縁部端面に刻みを施す中型の甕で、口縁部径18.0cmをはかる。E07la050は内面ケズリ調整の低脚の台付甕である。E07le015は口縁部径26.0cmをはかる内面体部下半にタテケズリ調整がみられるもので、口縁部端面に刻みを施す。E07le017は底部径7.8cmの平底甕で体部下半内面にタテケズリ調整を施す。

櫛条痕調整深鉢 形態はC期のものとほぼ変わらない。E07Bb009は体部外面にヨコ羽状櫛条痕文調整をするあまり口縁部が外反しない形のもので、口縁部をヨコ櫛条痕調整で整える、内面はヨコナデ調整を行い、口縁部にやや不整方向の櫛条痕刺突文列がめぐる。E07Cc034は底部径7.0cmをはかる底部片で、底部外面に布庄痕が残る。E07Cc042は口縁部30.0cmの体部外面にタテ櫛条痕調整のもの、E07Cc043は底部径8.0cmのもので、底部外面に布庄痕を残す。E07Cc042は口縁部内面の櫛条痕刺突文列が口縁端部に比較的偏って施されている点からD期の遺構から出土しているが、B期にさかのぼる可能性があるものである。E07Cc049は口縁端部外面にヨコ櫛条痕調整がみられるもので、口縁部内面に櫛条痕刺突文列がめぐる。E07la031はあまり口縁部が外反しない口縁部径23.0cmのもので、口縁端部外面にナナメ櫛条痕調整を施す。

加工円盤 土器片を割って成形し円形にしたもの、

また割った後破面を研磨して整えるものである。E07Ca039は径2.2cmのもので、ハケ調整が残り、破面を研磨している可能性がある。E07la041はC期からD期の壺体部片を加工したもので、側面の研磨が少しみられる、径2.8cm。

その他 E07Cb025は口縁部径6.8cm、底部径6.0cm、器高2.6cmの平面円形で丸みある小鉢で、外面をナデ調整、内面をハケ調整、口縁上端面を刻んで整える。E07Cb027は内傾口縁の鉢で口縁部径9.8cmをはかる。E07Cc115は07Cc区104SKから出土した無文高杯で、鉢形にひらく口縁部径が9.5cm、やや膨らみをもってひらく脚部をもつ、脚台部径が6.2cm、器高10.0cmのもので、明確な時期は不明であるが、脚台の形状が台付甕の脚部に類似する点からD期に含める。E07Cc121は鳥形土器と思われるもので、頭部(口縁部)を欠損する、全体をハケ調整した後に体部上半に羽状表現と思われる櫛刺突文がみられる、底部は上げ底で、体部径8.6cm×9.9cm、底部径4.0cm×5.6cmである。

(5) 弥生時代後期：E期

この時期の弥生土器は出土量が少なく、可能な限り抽出した。今回の報告では、弥生時代中期後葉から弥生時代後期への過渡期の時期にあたる「八王子・古宮式」土器は明瞭な資料を得ることができなかつた。D期の弥生土器と変化しない部分もあるが、器形の変化にあまり連続性がないように見えるので、D期とE期の弥生土器の区分については高杯の口縁端部が屈曲するもの(いわゆる「山中式高杯」)の存在やワイン形杯部をもつ高杯の存在(D期にも存在する形態であるが)、楕形杯部をもつ高杯の存在、器台の存在、外面ハケ調整、内面ケズリ調整の有頸甕の存在、太頸壺から頸部の形態変化した広口壺の存在、赤彩上器の存在等から区分した。

E期の弥生土器の出土した遺構は少なく、07Cb区247SD・07Cc区003SD・07la区130SK・07Id区004SDがある。

E07Cb011は07Cb区247SD出土の有稜口縁高杯で、口縁部外面に櫛描波状文がみられる。E07Cb026は07Cb区286SB出土の広口壺の体部片で山形刺突文列と櫛描直線文がみられる。07Cc区003SDと07Id区004SDは同一の方形周溝墓の溝で、E期の遺構と考えているが、出土土器はA期からF期まで含み、A期か

らD期の弥生土器が主体を占める。以下に遺構に関連するE期からF期のものについて述べる。E07Cc006は台付広口壺の脚部で脚部端面に凹線文が3条めぐり、外面に赤彩が施される。E07Id004～E07Id006は広口壺で、E07Id004は口縁部端面に2条の凹線文をめぐらす口縁部、E07Id005は体部片で頭部との境に帶状浮線文を貼付け、その下に櫛描直線文と櫛刺突文列を交互にめぐらす。E07Id006は体部上半の部分で上から櫛描直線文、円形刺突文列、櫛描波状文をめぐらす。E07Cc007・E07Cc008・E07Cc011・E07Id007～E07Id010は「く」の字口縁台付甕で、E07Cc007・E07Cc008・E07Id007～E07Id009は断面「く」の字状に体部から外反しておわる口縁部をもち、体部内面にヨコケズリ調整を行う(E07Id009はヨコナデ調整)、E07Cc008体部外面はヨコナデ調整とともに体部下半にヨコミガキ調整がみられ、E07Id007・E07Id009は口縁部端面に刻みがみられる、E07Cc011・E07Id010は脚部で、E07Cc011は脚部径8.8cm、E07Id010は脚部径11.0cmである。E07Cc009・E07Cc014・E07Cc016・E07Id011～E07Id013は有稜口縁高杯で、E07Cc009・E07Id012は口縁部外面に櫛描波状文を施し、ミガキ調整がみられる。E07Cc014・E07Cc016は円形透かしのある脚部で、E07Cc014は櫛描直線文と貝殻刺突文列が交互にあり、その後タテミガキ調整がはいり、外面に赤彩が施されているもの、E07Cc016は櫛描直線文が3带めぐり、脚部下半にタテミガキ調整がみられる。E07Cc010・E07Cc012・E07Cc013・E07Cc015・E07Id014・E07Id015・E07Id017は内湾口縁高杯で、外面と杯部内面にタテミガキ調整を施すもので、E07Cc010・E07Id014・E07Id015が口縁部径23.0cm～26.4cmをはかる杯部、E07Cc012・E07Cc013・E07Cc015・E07Id017は脚部で円形透かしがあるもので、E07Cc012・E07Cc013は脚部が屈折するものである。E07Id016は杯部がワイングラス形になる高杯の杯部から脚部の部分で脚部外面に櫛描直線文がめぐる。E07Id018は受け部外面に赤彩がみられる器台で口縁部径13.6cmをはかる。E07Id019は櫛描直線文をめぐらす長頸壺の頸部であろうか。E07la062は07la区130SK出土の有稜口縁高杯で口縁部外面に櫛描扇形文がめぐる。E07la070は包含層

出土の赤彩広口壺のあるが、口縁部外面と内面に赤彩が残り、頸部外面に帶状浮文があり、その上・下に円形刺突文列がめぐる、口縁部内面には櫛刺突羽状文と櫛描扇形文がめぐる。

(6) 古墳時代前期前半：F期

土器のE期から継続する有稜口縁高杯や広口壺、「く」の字口縁台付壺などの器形と、内湾口縁高杯や瓢形壺、「S」字口縁台付壺、器台などF期から現れる器形がある。しかし、全体にこの時期の土器の出土量は少なく、「S」字状口縁有頭壺を図化できるものはなかった。

F期の土師器が出土した遺構は、07Ca区195SD・同203SK・07Cb区274SKがある。

E07Ca017・E07Ca018は07Ca区195SD出土のもので、E07Ca017は瓢形壺の口縁部で口縁部径10.0cm、E07Ca018はC期～D期の細頸壺の底部片である。

E07Ca030～E07Ca035は07Ca区203SK出土のもので、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の時期のものと思われ、E07Ca030は体部上半に櫛描直線文がある広口壺、E07Ca032は瓢形壺の体部下半から底部と思われ、体部下半にヨコミガキ調整がみられる。E07Ca033は杯部の口縁が大きく外反する有稜口縁高杯で、杯部口縁部に櫛描波状文がみられ、杯部内面にタテミガキ調整を施す、脚部に円形透かしがある。E07Ca034は有稜口縁高杯の柱状になる脚部で、脚部上半に櫛描直線文が4帯めぐり、円形透かしが施される、脚部下半にはハケ調整後のミガキ調整がみられる。E07Ca035は屈折脚に内湾する杯部が付く高杯で、脚屈折部に円形透かしがあり、外面全体にタテミガキ調整を施す。E07Ca031はD期の凹線文太頸壺の体部片である。

E07Cb021は07Cb区274SK出土の皿形受け部をも

第2節 石器（第60図～第87図）

今回の分析では弥生時代中期を中心とした時期の石器が点出土した。石器には石材表面の加工技術から敲打痕とその後の研磨痕がみられる磨製石器とあまり変形加工を行わない礫石器、打撃により剥離の後、押圧剝離による細部調整（細部変形）を行い製品化する打製石器がある。以下で、1. 磨製石器、2. 矶石器、3. 打製石器に分けて、各石器の主要な形態について

つ器台で口縁部径9.0cmである。

(7) 古代

古代の出土遺物は少なく、実測できたものを述べる。

07Aa区010SK出土のE07Aa002は須恵器の蓋受け部のある杯身で7世紀のもの、07Aa区011SK出土のE07Aa003は土師器の口縁端部をつまみ上げるハケ調整壺で6世紀のものである。07Ab区081SK出土のEAb002は須恵器の高杯で、丸く立ち上がる椀形の杯身に、柱状で下半が大きく広がる脚部の形態のもの、07Ab区の包含層から出土したE07Ab008はE07Ab002と同様の形態の須恵器の高杯で、7世紀のものである。

(8) 中世

中世の出土遺物も少なく、古代の出土遺物と同様に実測できたものを述べる。

07Cc区103SK出土のE07Cc130は南部系の山茶碗で、口縁部径15.8cmをはかる。07Ca区190SK出土のE07Ca016は南部系山茶碗で高台部径6.5cmをはかる。07Cb区233SD出土のE07Cb001は北部系山茶碗で高台部径5.2cmをはかる。07Cb北区の包含層から出土したE07Cb033は灰釉陶器の皿で、口縁部径16.8cm、口縁部内・外面に灰釉がかかる。07Gb区045SD出土のE-Gb001は南部系山茶碗で高台部径8.2cmの断面三角形の高台が付く。

(9) その他

時期は不明のもので主要なものを述べる。E07Id051は注口状のもの、表面が摩滅している。E07Id052は鋤鍊車で、径4.0cm、厚み0.9cmの円形の下面が上げ底状に凹むもので、上面と側面に沈線文がみられる。E07Id053は土鍬で、径1.3cm、孔径0.4cmのもので、全面ナデ調整である。

述べる。

1. 磨製石器

出土した磨製石器には、石劍、両刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、管玉がある。

a. 石劍

磨製石劍は2点あり、2点とも泥岩製である。S07Cc002は刃部の一部が残るのみで形状が不明であ

るが、S07Cc148は刃部の溝状の槽が存在することから銅剣型有槽式石剣になるものである。

b. 石包丁

S07Cb028は石包丁と思われる板状のもので、泥岩製である。厚み0.5cmで、両面穿孔の紐孔が2個確認でき、背面にかけて紐擦れ痕がみられる。紐孔付近に研磨痕がみられる。

c. 両刃石斧

刃部が両刃の磨製石斧でハイアロクラスタイト製のものが6点ある。S07Cc127は全長9.6cm、刃幅5.1cm、厚み2.9cmのほぼ完形なもので、基部から刃部へ大きく広がる形態で、敲打痕を残すが刃部側を中心に研磨痕がみられる。S07Cc003・S07Cc037は研磨痕の残る側面部破片、S07Cc116は敲打痕がみられる基部の破片、S07Cc109は基部の破片で石斧を柄に緊縛した痕跡が帯状に残る。S07Id001は基部側の部分と思われるものもあるが、基部から刃部にかけての開きが少なく、板状であるので、石斧の再生途上品の可能性がある。

d. 柱状片刃石斧

刃部が片刃で横断面形が方形状の磨製石斧でハイアロクラスタイト製のものが1点ある。S07Bb008は基部の部分で、柱状の身中央付近に抉りが残る。厚み3.4cmである。

e. 扁平片刃石斧

刃部が片刃で小型の磨製石斧で、横断面形が扁平な板状の形態のものである。8点出土し、石材は全てハイアロクラスタイトである。S07Cc004は厚み1.4cmをはかるもので、刃部の破片である。S07Cc119は長径11.2cm、幅3.3cm、厚み2.0cmをはかるもので、基部から3.9cm程のところに柄をつけたと思われる段があり、その付近で一部欠損している。S07Cc133は長径4.3cm、幅1.6cm、厚み0.8cmの小型のもの、S07Cc134とS07Cc135は長径7.0cmと7.5cm、幅2.5cmと2.2cm、厚み1.0cmと1.2cmの中型のもので、S07Cc134は基部から刃部にかけて緩やかに幅が広くなっている。07Id002は長径3.5cm、幅3.1cm、厚み1.0mの小型の長径に対して幅広のもので、基部から0.75cm付近までが柄にかかる部分で、刃部の片側の刃減りが著しい。S07Id020は長径4.1cm、幅2.4cm、厚み0.9cmの小型のもので、刃部の片側がやや刃減り

している。S07Id038は刃部の破片であるが、大型のものと思われる。

e. 管玉

S07Cc105は07Cc区058SKから出土したもので、緑色凝灰岩製の管玉である。径0.45cmの柱状で、長さ0.9cm残存している。

2. 碓石器

出土した碓石器には、凹み石、敲石、砥石、磨石、粗製剥片石器がある。

a. 凹み石・敲石

石器製作の石材の打撃や堅果など植物性食料の解体・潰し等の機能が考えられるもので、拳大から人頭大までの大きさの円礫・亜円礫・亜角礫を主体に使う。石材表面に打撃による敲打痕が認められるものをタタキ石とした。また敲打痕が密になり集中して凹みを形成したものを凹み石に分類した。出土したものは34点あり、磨石から転用されたものが6点ある。石材では安山岩3点、花崗岩2点、凝灰質砂岩2点、砂岩10点、濃飛流紋岩12点、磨石からの転用品には安山岩1点、花崗岩1点、砂岩2点、濃飛流紋岩2点があり、濃飛流紋岩と砂岩のものが多い。形態では、棒状のものでS07Cb006やS07Cc013のような棒状のもので先端部分に敲打痕がよくみられるもの、S07Bb009やS07Cc007のように、先端部分と側面の偏った部分に敲打痕による凹みがみられるものがある。棒状のものから亜円礫を用いたものでは、S07Ca003のようにやや棒状でやや平坦な面上石材の上・下2カ所に敲打痕による線状の凹みがみられるもの、S07Bb005のようにやや大型の長細い亜円礫を用いたもので、敲打痕による凹みが平坦な面の中央部付近とやや偏った部分にあるものがある。亜円礫から円礫を用いたものでは、S07Bb001やS07Cc017のようにやや扁平な円礫の平坦面の中央付近に敲打痕による凹みがみられるものがあり、円礫を用いたものではS07Ia024やS07Bb011、S07Bb013のように、石材の縁辺部に敲打痕が顯著にみられるものがある。

磨石からの転用としては、S07Cc015のようにやや大型の石材の比較的平坦な面を磨き面とし、石材の稜線上になる部分に敲打痕がみられる。S07Ie002は扁平な亜円礫を用いた平坦面中央に敲打痕による凹みが若

干あるもので、側面の稜線に対して垂直方向に線状の磨き痕が顕著に残るものである。S07Cb006 の敲打痕のある先端部付近と S07Cc018 の凹みがある周囲に煤付着や変色等の被熱痕がみられる。反対に凹み石からの転用としては、S07Ab001 は棒状のもので、敲打痕による凹みは石材の中央付近にあるが、石材が割れた後か棒状の先端部分に磨き面がみられ、杵状の製品に転用された可能性がある。S07Cc011 は赤色の大型亜角礫を用いたもので、蒲鉾状に割れた石材の平坦面に磨り面と思われる円滑な面があり、自然面が残る側面に長径 4.35cm、短径 3.3cm、深さ 1.0cm の円滑な面をもつ丸い穴状凹みがあり、穴の位置から磨石として使用された以前に凹み石に使用された可能性があるものである。

b. 砥石

元の製品が拳大から人頭大までの大きさの亜角礫・角礫が想定されるもので、石材表面に対象物を研磨したへこみ状の研ぎ面が認められるものである。砥石の可能性のあるものを 8 点資料化したが、全体の形状の分かるものではなく、研磨面が一部分残るのみのものが多い。石材は泥質凝灰岩 1 点 (S07Ie006)、凝灰質砂岩 1 点 (S07Ca013)、砂岩 3 点 (S07Cb016・S07Ia001・S07Id003)、濃飛流紋岩 1 点 (S07Id039)、花崗岩 1 点 (S07Bb002)、ホルンフェルス 1 点 (S07Cc016) がある。S07Id003 は箱形で比較的全体の形状が残るものである。今回の出土遺物の中には、研ぎ面に溝状の条線が認められる有溝砥石はなかった。また濃飛流紋岩の S07Ie006、花崗岩の S07Bb002、ホルンフェルスの S07Cc016 は砥石というより磨石に分類しても良いのかもしれない。

c. 磨石

拳大から人頭大までの大きさの円礫・亜円礫・亜角礫を使ったもので、石材表面に打撃などによる敲打痕はないが、石材表面にややぬめり（磨き痕）のような光沢が認められるものを 16 点資料化した。石材は、安山岩 2 点、濃飛流紋岩 9 点、砂岩 4 点、ホルンフェルス 1 点で、濃飛流紋岩が多い。形態では、やや扁平な板状のものとして S07Ab003・S07Bb010・S07Bb012・S07Cb025・S07Cc088・S07Cc112・S07Ia009 があり、S07Ab003・S07Bb010・S07Bb012・

S07Cb025 は平面隅丸方形から隅丸長方形のもので、S07Cc112 は平面円形のものである。次に大型の棒状の石材を使ったものとして S07Cb009・S07Cc068・S07Cc085 があり、棒状のややへこんだ鞍部が滑らかになっている。また S07Cb009・S07Cc085 には被熱痕がみられる。その他には不整形なものがあり、S07Cc078 は大型のもので、へこんだ部分の付近に被熱痕がみられる、S07Ia004 は大型のもので、2 面の磨き面と思われる円滑面がある。S07Ia012 も不整形なもので、長径 9.0cm 程の小型のものなので手持ちで使用されたか。

d. 粗製削片石器

円礫から亜円礫の表面を扇形に剥離した形態のもので、剥離した鋭利な緣辺が刃部となる。形態から可能性のあるものを 7 点資料化したが、肉眼で使用痕が確認できるのは S07Id031 のみである。S07Id031 は安山岩製のもので、刃部側をやや細かく剥離加工して薄くし、両側辺の部分に抉りを入れるような剥離加工を施す。

e. 刈石

地床炉の内部に置かれて、発形土器を上に置いて使ったものとかんがえられるもので、平面円形で扁平な亜円礫が用いられる。石材表面に被熱による煤の付着、赤変化がみられるものや平坦な面の中央部分に被熱による変化が少ない部分がみられるものを 5 点資料化した。石材は安山岩 1 点 (S07Cc126)、砂岩 1 点 (S07Cc082)、濃飛流紋岩 3 点 (S07Cc106・S07Cc129・S07Ia003) がある。石材の法量は径 11.0cm ~ 15.0cm、厚み 3.4cm ~ 5.1cm のものである。S07Cc126 は平坦面の縁辺に灰状土壤が付着する。

f. 刈縁石

地床炉の縁辺に置かれたもので、棒状の亜円礫を主体に用いるものである。石材表面の片面に被熱による煤の付着や色調の赤変化などの被熱痕がみられるものを 12 点資料化した。石材は安山岩 1 点 (S07Cb027)、砂岩 3 点 (S07Cc012・S07Ic001・S07Ie005)、濃飛流紋岩 8 点 (S07Ab002・S07Cc005・S07Cc006・S07Cc009・S07Cc086・S07Cc110・S07Cc111・S07Cc120) がある。石材の法量は長径が 9.7cm ~ 25.5cm の 20cm 前後で、短径や厚みが 4.0cm ~ 12.3cm の 5cm ~ 10cm 前後のものである。

S07Cc006 には石材表面の色調の違いによるふきこぼれ痕、S06Cc012 には黒色付着物のふきこぼれ痕が確認できる。

3. 打製石器

出土した打製石器には、石鎌、石錐、石小刀、石匙、両極石器・剥片などの石器加工途上品がある。

a. 石鎌

打製石鎌が 50 点とその未製品が 7 点ある。石材は製品では下呂石 41 点、安山岩 1 点、チャート 8 点、未製品では下呂石 5 点、チャート 1 点、サヌカイト 1 点である。石鎌の法量では、欠損のないもので S07Cc089 の長径 1.5cm から S0707Cc131 の長径 3.6cm まであり、比較的小型から中型の石鎌が主体である。一部欠損しているものに平面五角形石鎌の形態と推定される S07Bb004 や縦長の剥片から製作されたと思われる細身の S07Cc121 のように長径 4cm を超える程のものはありそうであるが、長径 5cm を超えるような長径で大型の石鎌はない。石鎌の形態では、鎌身先端部が三角形状に徐々に狭まって尖る三角形タイプ (S07la023 など)、鎌身先端部が先端からやや急に広がって、一度稜をもって逆剥部にいたる稜タイプ (先端を欠損しているが S07la016 が典型、S07Ca018、S07la008 など)、その違いが不明瞭なもの、鎌身先端部からやや丸みをもつてひろがる不明稜タイプ (S07Cc118、S07Cc124、S07Id043、S07Id047 など) がある。S07la023 のような鎌身部の幅が狭いものは三角形タイプに分類できるが、S07Ca017 のような鎌身が細身でないものは不明瞭タイプになるものが多く、また S07Ca018 のように鎌身に先端部から明瞭な稜をもつて逆剥部にいたるものは少ない。よって鎌身部の分類上は先端部から広がる稜の不明瞭タイプが主体といえる。基部の分類では、無基式と凸基式があり、凸基式が多く主体的存在である。無基式では S07Ca017 のような平基タイプのものや S07Cc076 のような凹基タイプののようなものがあるが、明確なもののは少なく、S07Cc071 のように凸基式を志向しながら、抉りがほとんどなく、平基タイプののようなものもある。凸基式には、S07la023・S07Cb008・S07Hb002・S07la006・S07la008 ように平基状の基部から凸基部を作り出すようにある逆剥タイプのものと S07Cc023・

S07Cc118・S07Id043 のように鎌身部が最も幅広になる基部との境から徐々に狭まって凸基部を作り出す滴形タイプがある。凸基式の逆剥タイプには S07Cb008 のように一度の剥離により凸部を形成するものが多く、S07la023 のように複数の剥離により比較的丁寧に凸部を形成しようとするものは少ないが、凸基式の滴形タイプは複数の剥離により凸部を形成するものが多い。このことは S07Cc124 や S07Id043 のように複数の剥離により凸基部を作り出すものに滴形タイプと逆剥タイプの中間タイプのものがあることも石鎌製作の技術的連続性を示すものと思われる。滴形タイプは鎌身部に明瞭な稜をもつ稜タイプがほとんどなく、鎌身部と基部のつくりが類似するものといえる。

また基部の逆剥タイプで鎌身部が稜タイプか不明瞭タイプでは、S07Cc070・S07Cc089・S07Hb002 のような長径 1.5cm ~ 2.1cm 前後の小さいものと、S07la006・S07la008 のような長径 2.8cm ~ 3.0cm 前後のやや大きいものと、法量が違つても同一形を志向したように思われるものがみられる。

他に S07Cb005 は柳葉形に近い不定形なものであるが、先端付近に赤彩部分がみられる。

b. 石錐

形態は石鎌の平面無基式のものと柳葉形のものと類似するもので、S07Cb001 や S07Cc063 のような平面形滴形に近い三角形から、S07Cc024 や S07Cc092 のような柳葉形になるものなどがあり、先端部の付近に横方向の研磨痕がみられるものである。石材は全て下呂石で 7 点ある。

c. 石匙

S07Cc080 はチャート製の石匙と思われもので、自然面を残す直線的な背部から刃部が弧状に両面から剥離されて作り出されている。

d. 押圧剥離加工品

主に両極打撃により得られた両極剥片から石材縁辺部に押圧剥離による加工が加えられたもので、一部製品化が行わされたものである。出土したものは 50 点あり、下呂石のものが 38 点、チャートのものが 12 点である。S07Cc101 が石小刀を志向した加工をしている他は石鎌・石錐を志向したものがほとんどで、石器製作途上で何らかの不具合により放棄されたものと考えられる。

自然面を残すものでは、S07Cc141 のように長径 3.9cm をはかる片面に大きく自然面を残すあまり縁辺加工が進んでいない剥片から石鎚を志向した加工が進められたものや S07Id050 のように長径 2.3cm で背面に自然面を残すが比較的剝離が進んで小型化したものから石鎚を志向した加工を始めるものまである。自然面を残さないものでは、S07Ca015 のように長径 5.2cm、短径 3.5cm、厚み 1.5cm をはかる大型のものでやや凸基部片側と鎚身部の片面を製作したところで止まっているものと S07Ab005 や S07Ca021 のように長径 1.7cm から 1.8cm 程の小型で鎚身部の片面から両面の加工途中で止まっているものなどがある。ただし S07Cc101 の石小刀を志向したもののようにあまり細部加工が進んでいないものでも形態は比較的判明するものが多いので、押圧剝離加工に入る前には大まかな石取りが完了しているのであろう。

e. 両極石器

両極打撃により両極剥片を得るために石材の縁辺を剝離加工したもので、52 点ある。両極石器には両極剥片を再び加工したものを含むものである（両極打撃による剝離技法から作られたと考えられる剥片石器（未製品）については馬場伸一郎 2007「打製石製品の分析」『朝日遺跡VII』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集』の第2分冊所収に準拠している）。石材は下呂石 50 点、チャート 2 点である。形態は下呂石製

のものとチャート製のもので区別はなく、平面楕円形から隅丸台形・隅丸長方形で、断面は石材中央付近に稜線をもってやや膨らむ形状で、S07la014 のように平面菱形に近く成形されたものもある。法量は長径 2.3cm ~ 5.6cm、短径 1.8cm ~ 4.5cm、厚み 0.6cm ~ 2.5cm である。

f. 両極剥片

両極石器などの石材から両極打撃により得られた剥片で、46 点ある。石材は下呂石 40 点、チャート 6 点である。形態は S07Cc029・S07Cc040 のように平面形が隅丸台形で、断面でも石材中央付近に稜線をもってやや膨らむものもあるが、S07Cc094 ~ S07Cc098 のように平面形が不整形で、断面も片面が弧状に反った形状（剥片状）のものがみられるのが特徴である。法量では、長径 1.5cm ~ 5.5cm、短径 1.0cm ~ 3.7cm、厚み 0.3cm ~ 1.6cm と、両極石器に比べて全体に少し小型化し、厚みが薄くなる。

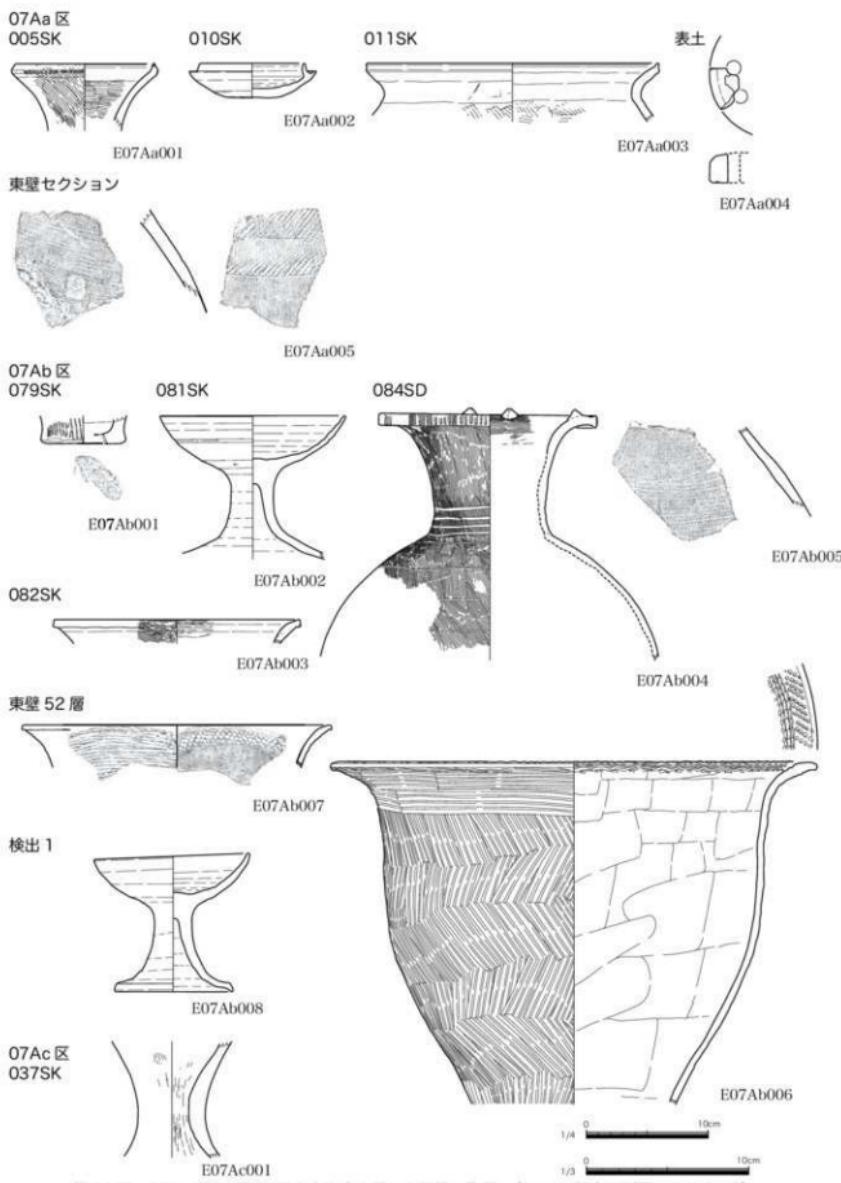
g. 直接打撃剥片

両極打撃によるものを含まない剥片で、下呂石の剥片が多数出土しており、チャートの 1 点とサヌカイトの 1 点を含めた 11 点を資料化した。自然面を残すもので下呂石の典型的なものは S07Cc043・S07Cc062・S07Id048 などがあり、下呂石・チャートの縦長の剥片では S07Cc104・S07Id051 などがある。S07Cc102 はサヌカイトの風化面を残すものである。

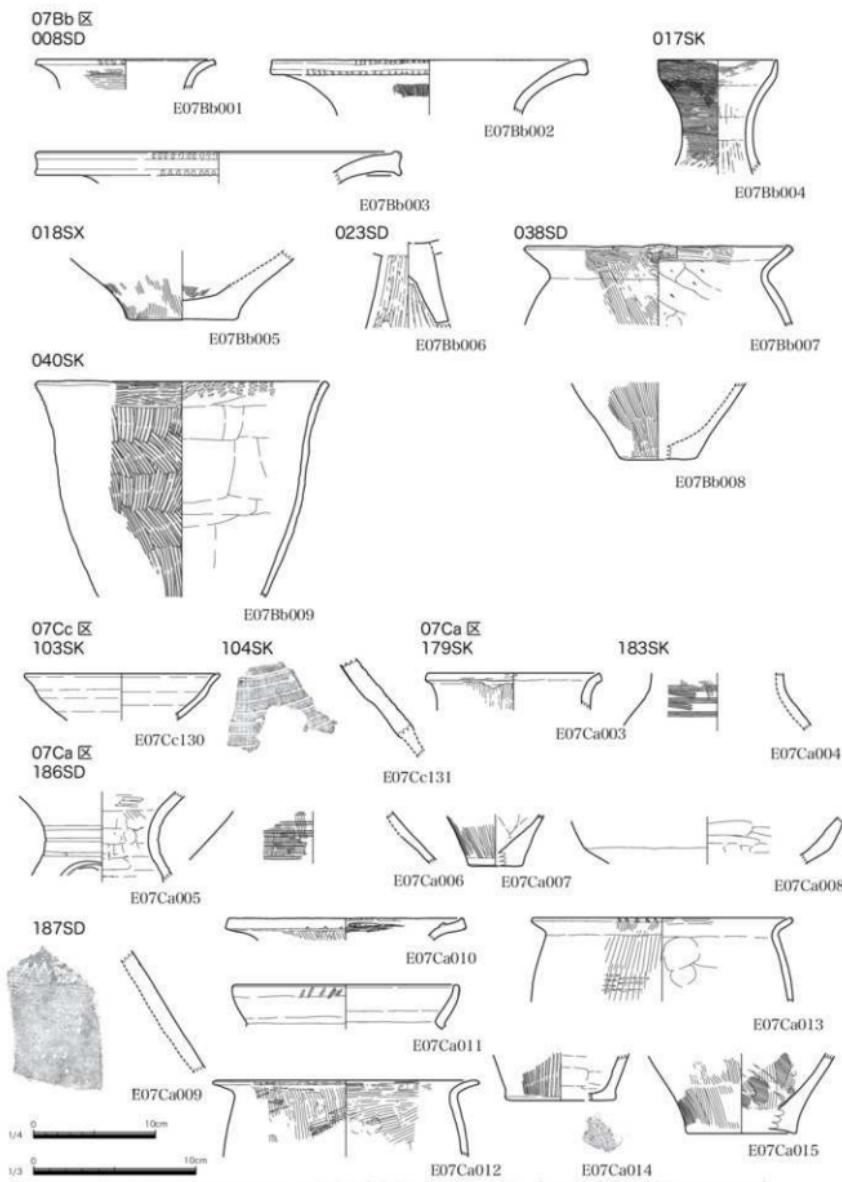
第3節 ガラス製品（第 88 図）

弥生時代のものと思われるガラス製品が 1 点ある。G07Cc001 は近代以後の水田遺構である 07Cc 区 001ST から出土したガラス小玉で、色調はコバルト色

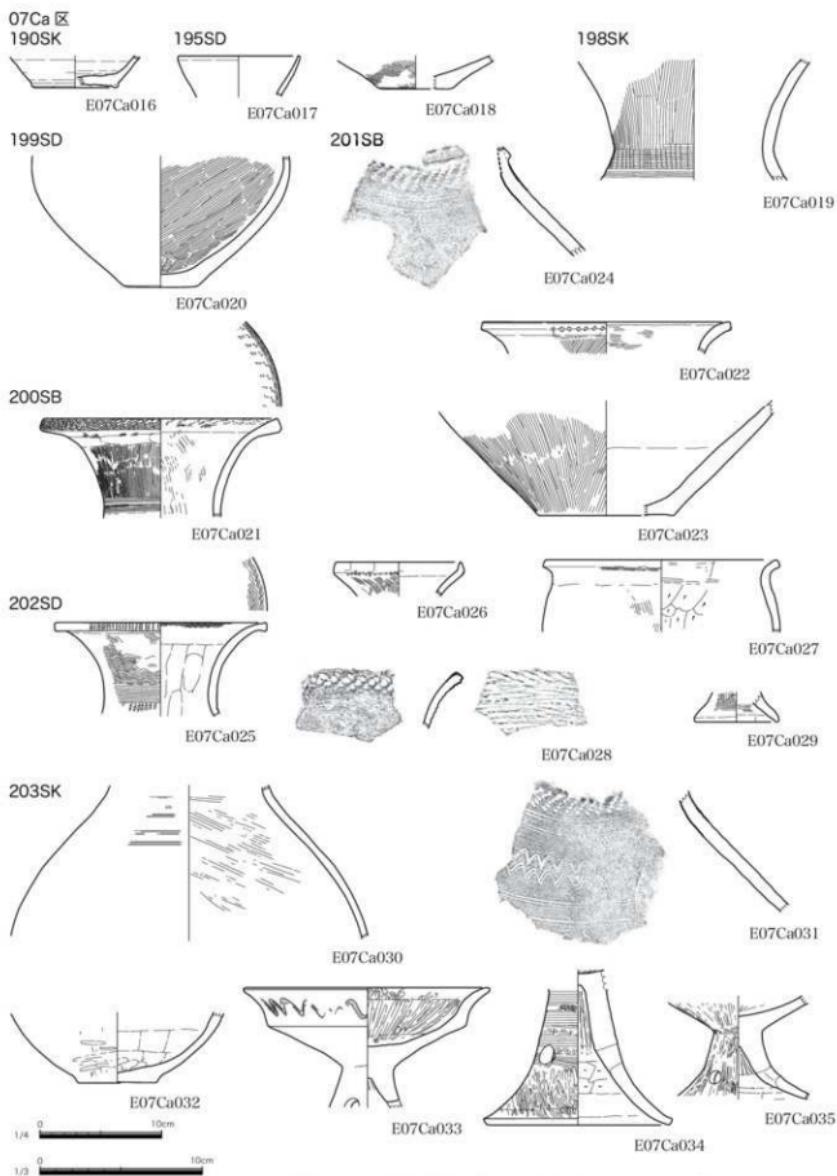
である。長径 0.50cm、短径 0.45cm、厚み 0.22cm、孔径 0.10cm をはかる。E 期の方形周溝墓に関連するものか。



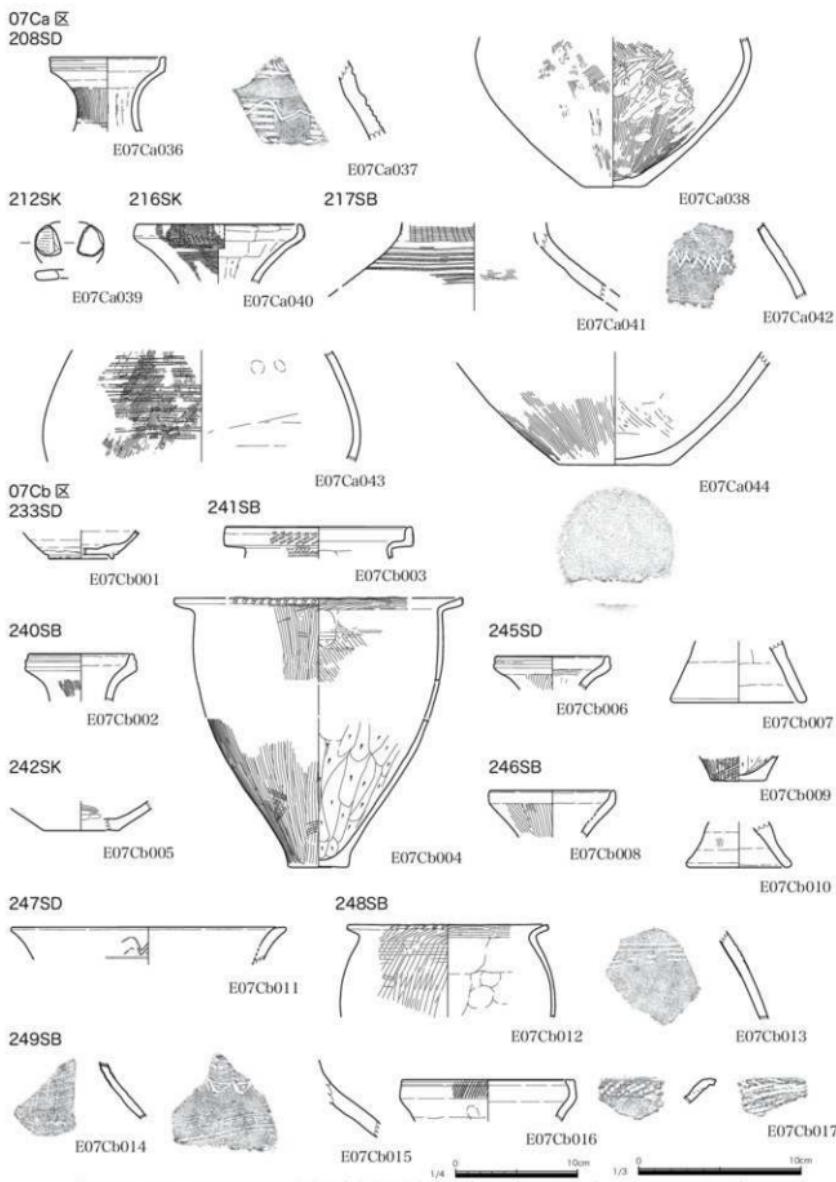
第39図 07Aa区～07Ac区出土弥生土器・土師器・陶器（1:4、拓本と断面のみは1:3）



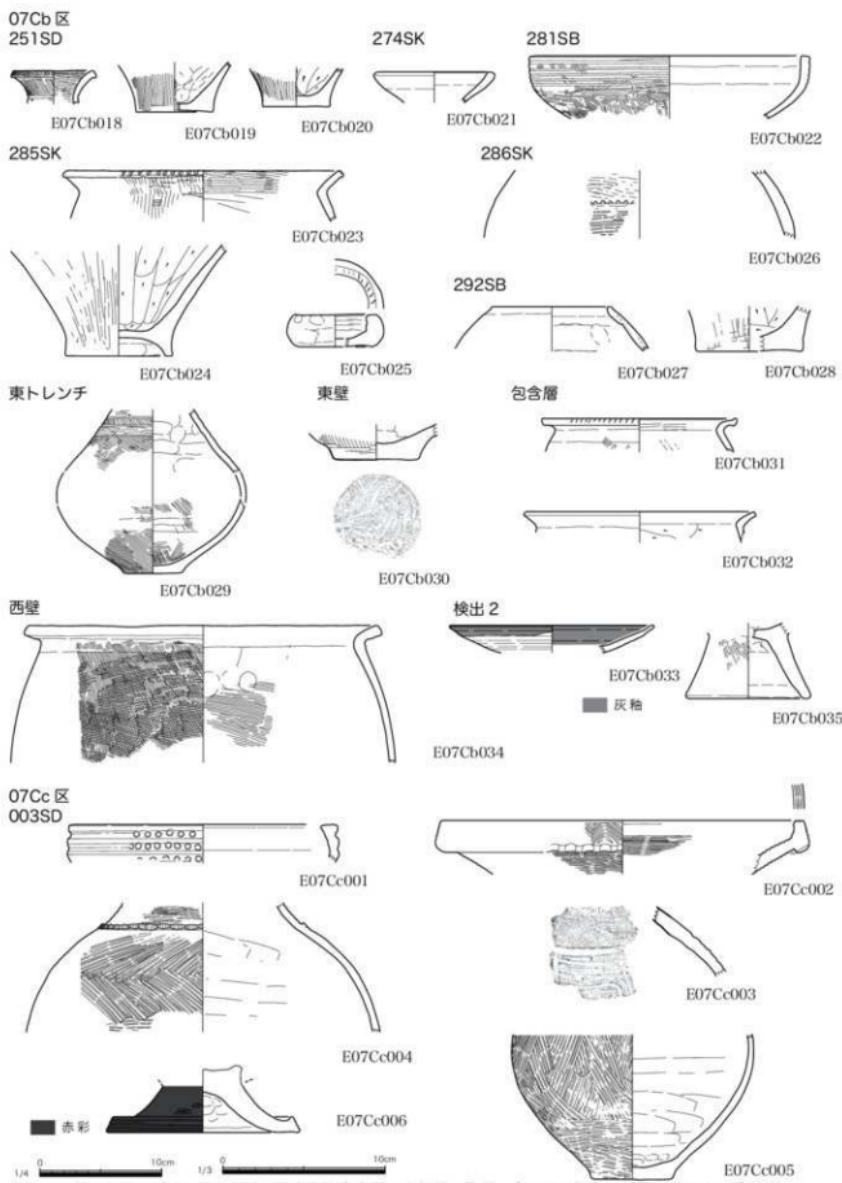
第 40 図 07Bb 区・07Ca 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1:4, 拓本と断面のみは 1:3)



第41図 07Ca区出土弥生土器・土師器・陶器 (1:4、拓本と断面のみは1:3)

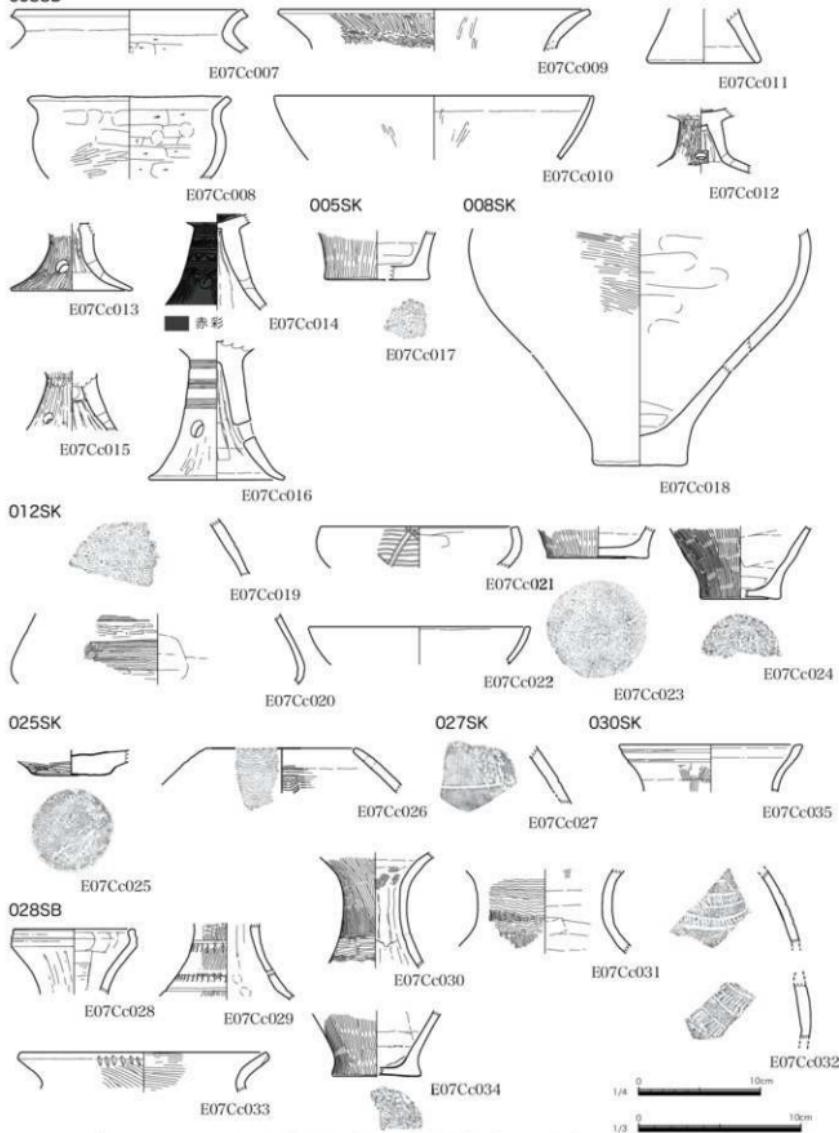


第 42 図 07Ca 区・07Cb 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1 : 4、拓本と断面のみは 1 : 3)

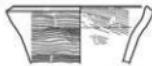


第43図 07Cb 区・07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1:4、拓本と断面のみは1:3)

07Cc 区
003SD



第 44 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1) (1:4、拓本と断面のみは 1:3)

07Cc 区
031SK

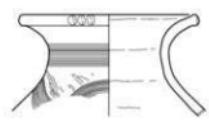
E07Cc036



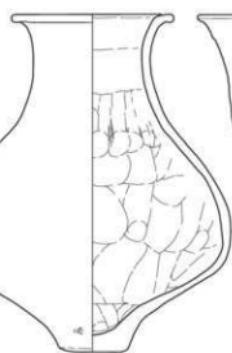
E07Ce037



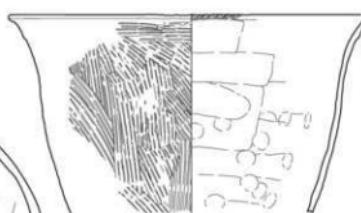
E07Cc038



E07Cc039



E07Cc040



E07Cc042



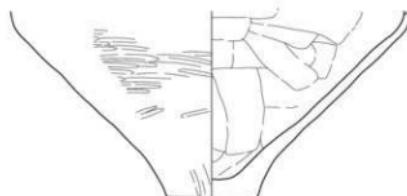
034SK



E07Cc044



E07Cc047



E07Cc045

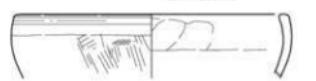


E07Cc046

035SB



E07Cc048



E07Cc050



E07Cc049

042SK



E07Cc051

048SK



E07Cc052



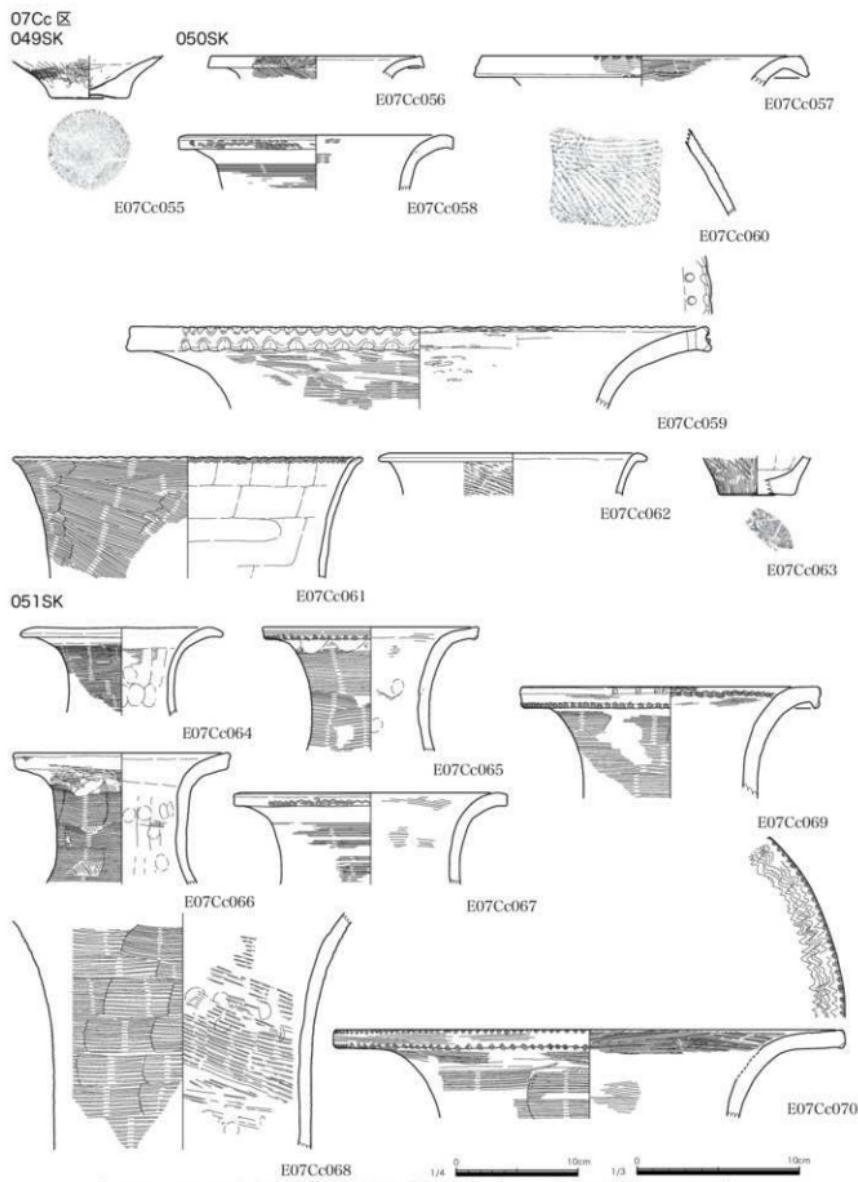
E07Cc054



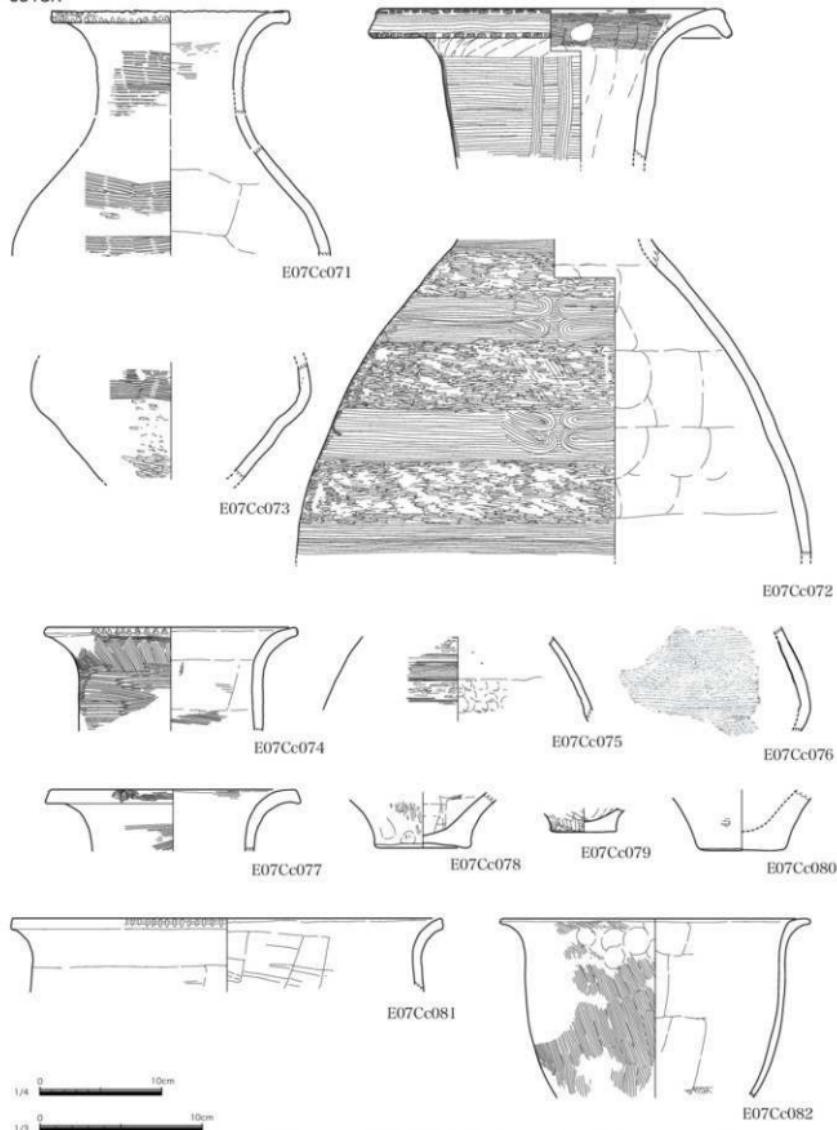
E07Cc053



第 45 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（2）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

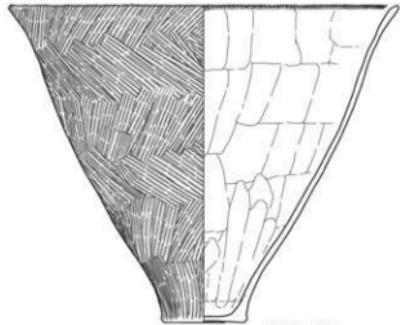


第 46 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (3) (1 : 4、拓本と断面のみは 1 : 3)

07Cc 区
051SK

第 47 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器（4）（1：4、拓本と断面のみは 1：3）

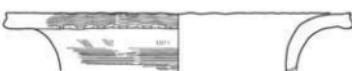
07Cc 区
051SK



055SK



E07Cc087



E07Cc089



E07Cc088

E07Cc089



057SK



064SK



068SK



086SK

081SK



E07Cc096



E07Cc100

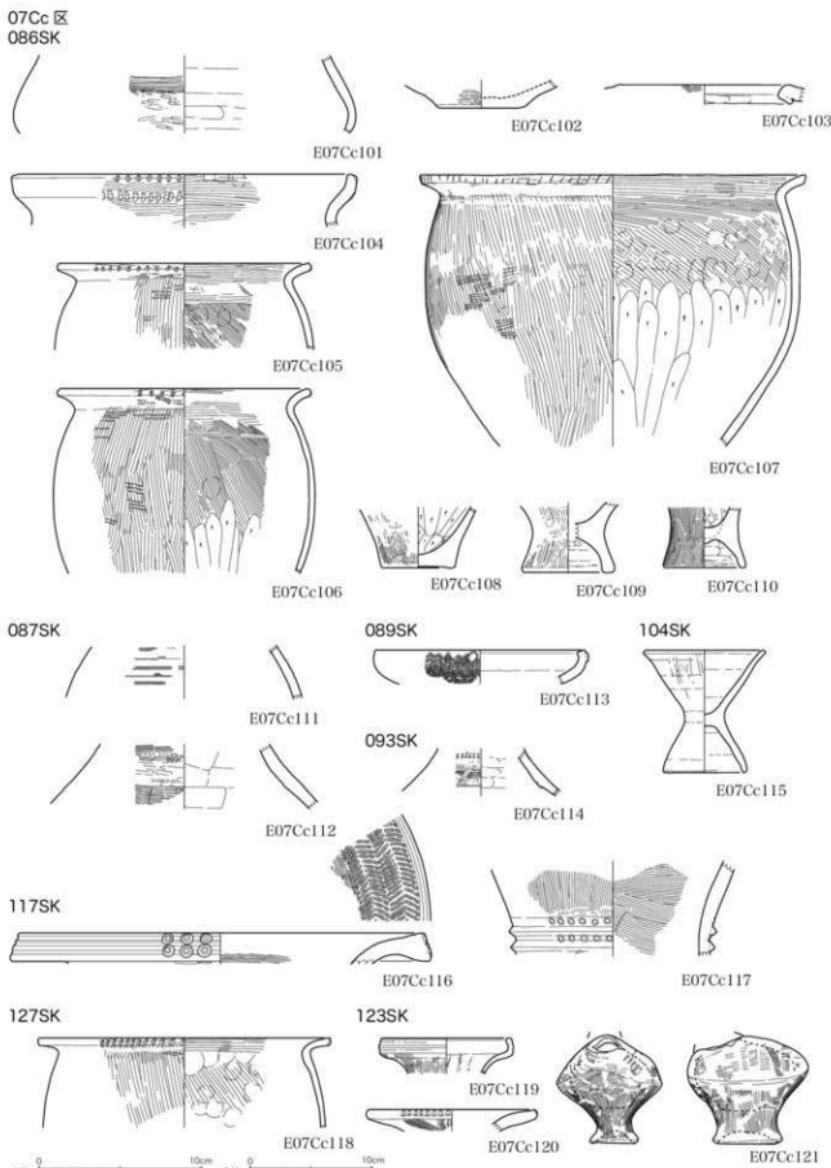
1/4

1/3

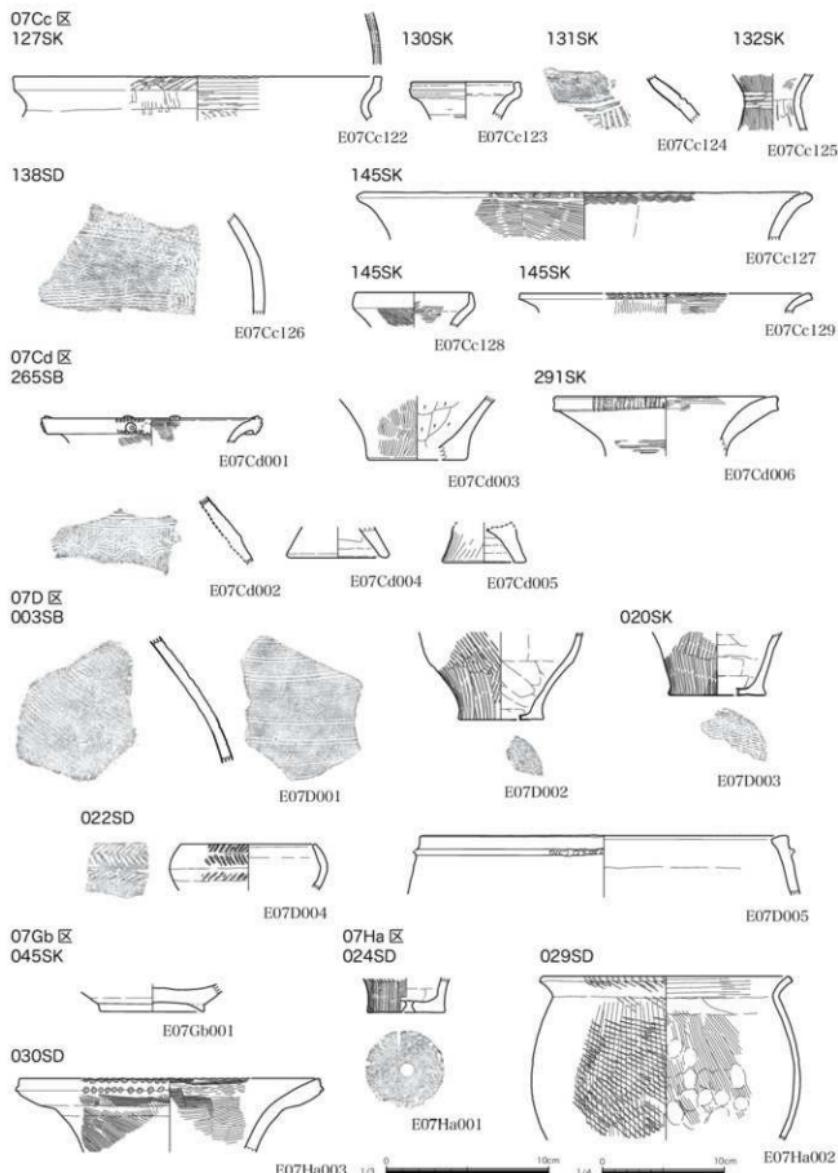
10cm

10cm

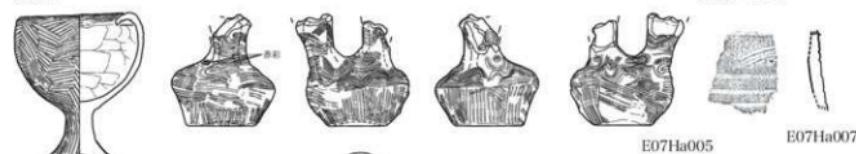
第 48 図 07Cc 区出土弥生土器・土師器・陶器 (5) (1 : 4、拓本と断面のみは 1 : 3)



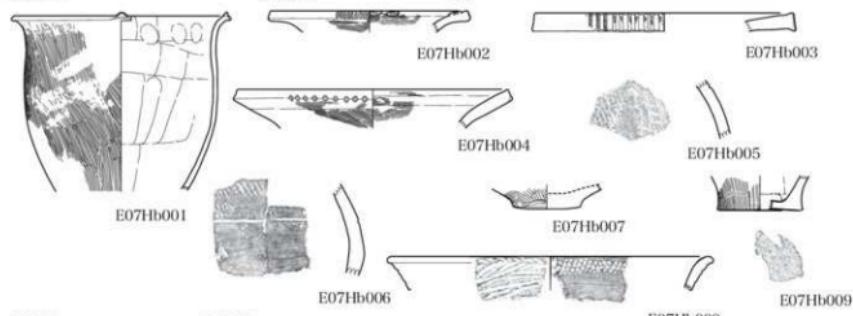
第49図 07Cc区出土弥生土器・土師器・陶器(6) (1:4、拓本と断面のみは1:3)



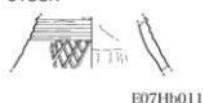
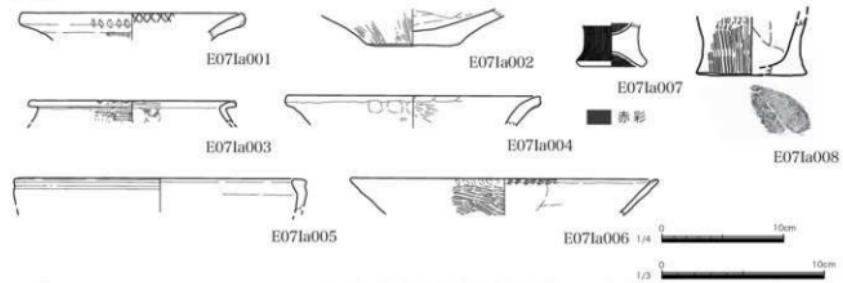
第 50 図 07Cc 区・07D 区・07Gb 区・07Ha 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1 : 4、拓本と断面のみは 1 : 3)

07Ha 区
検出 2

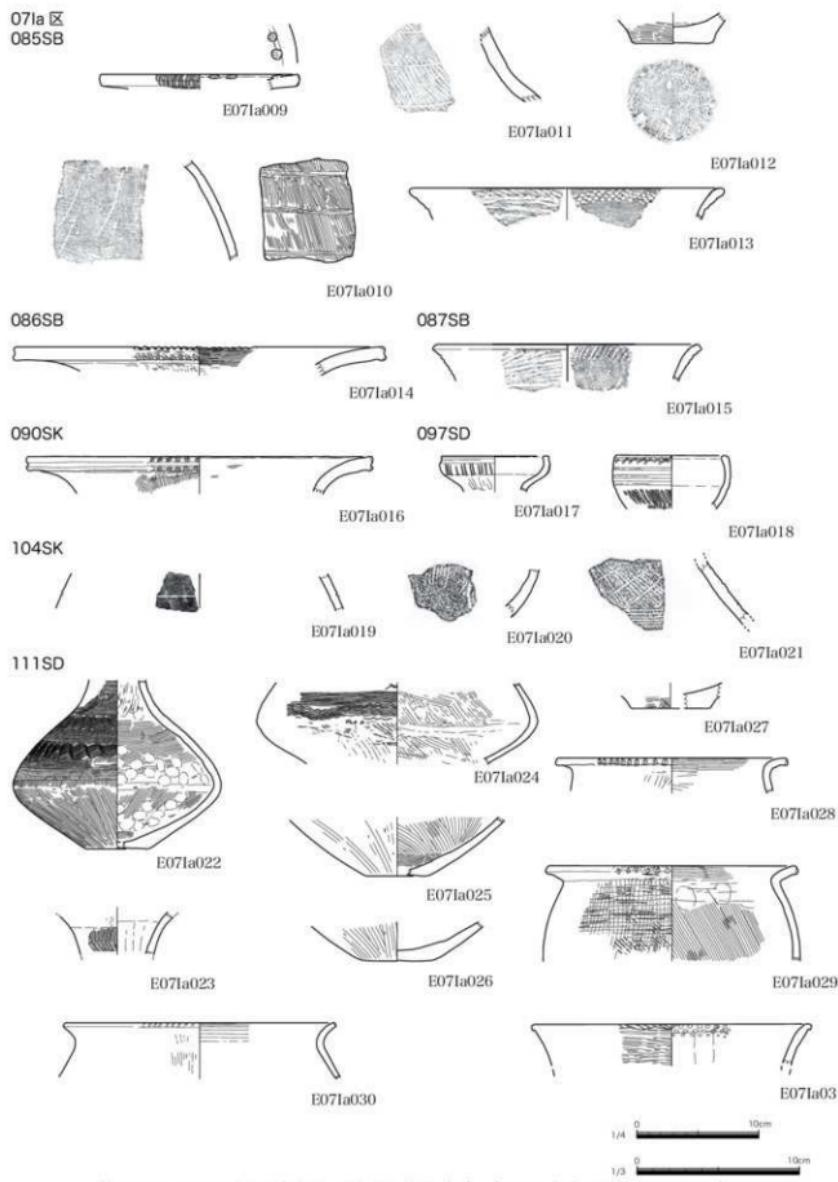
E07Ha004

07Hb 区
006SD

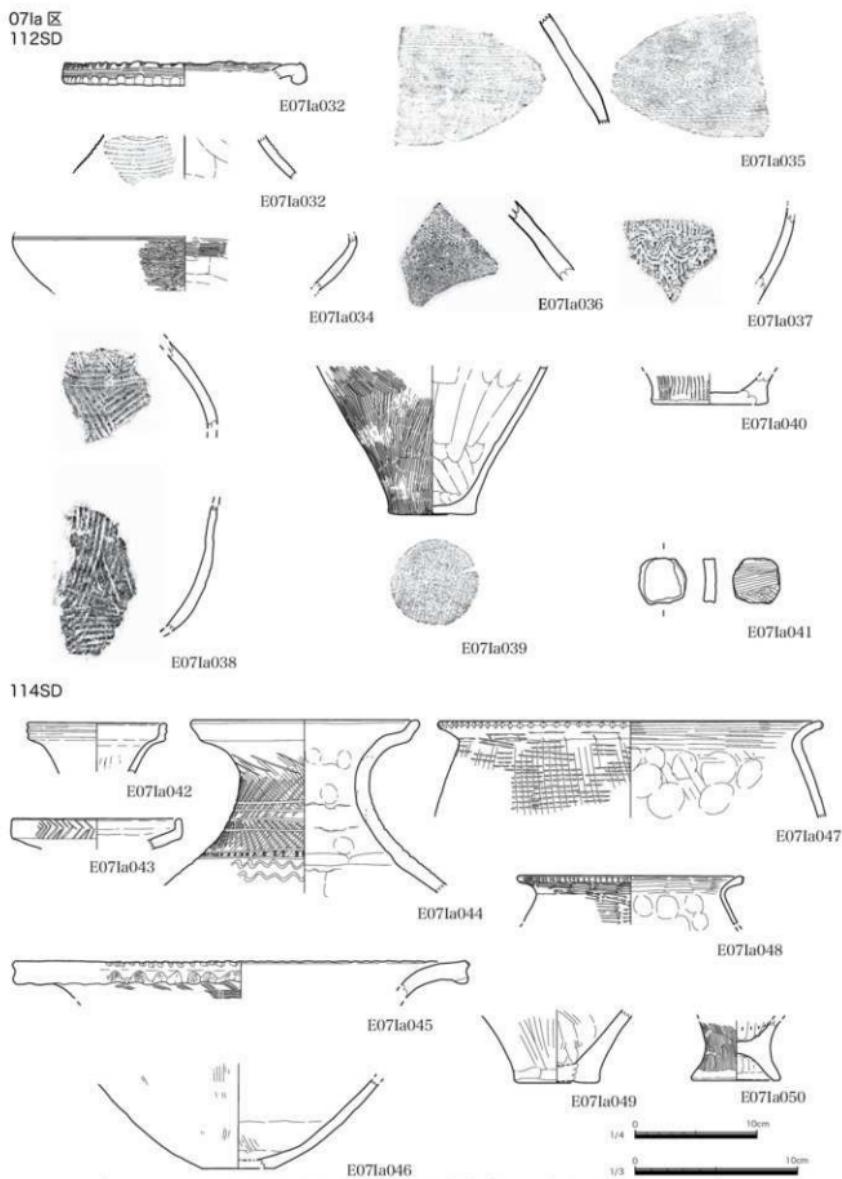
013SK

07la 区
076SD

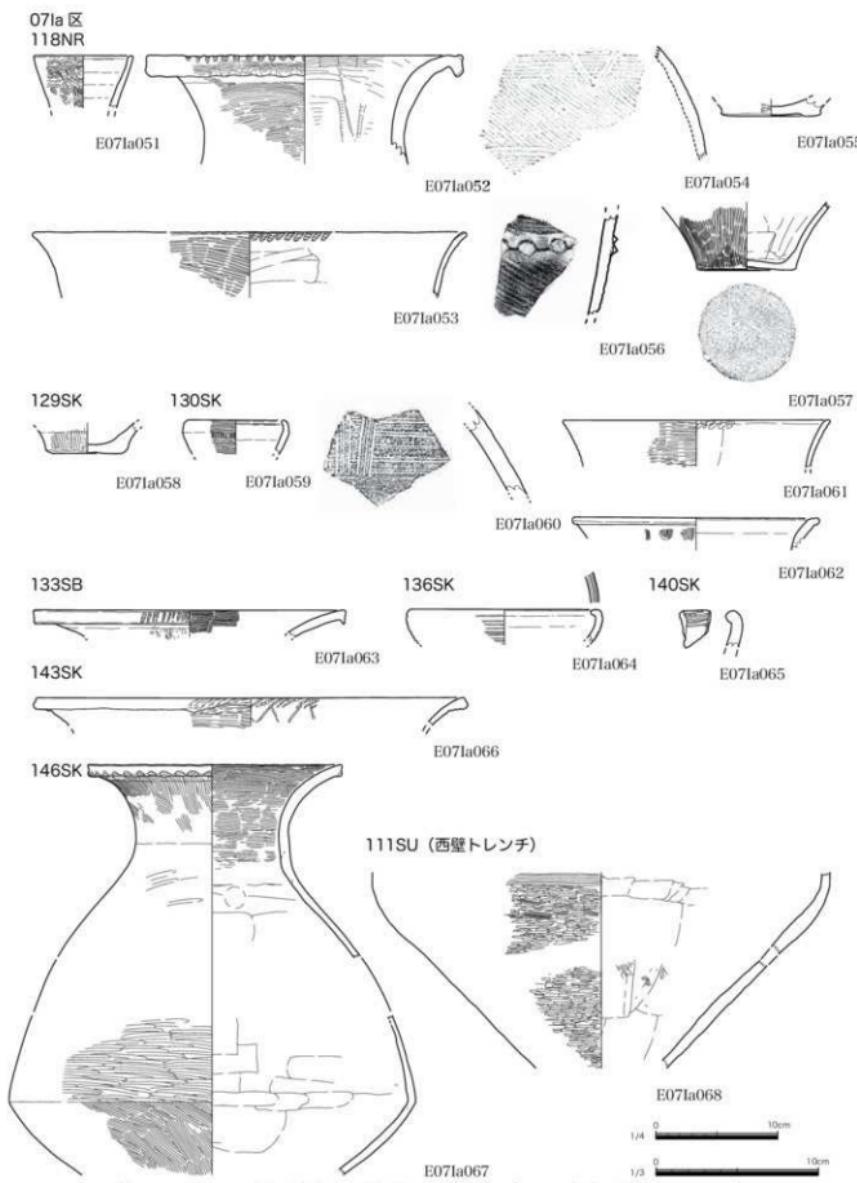
第 51 図 07Ha 区・07Hb 区・07la 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1:4, 拓本と断面のみは 1:3)



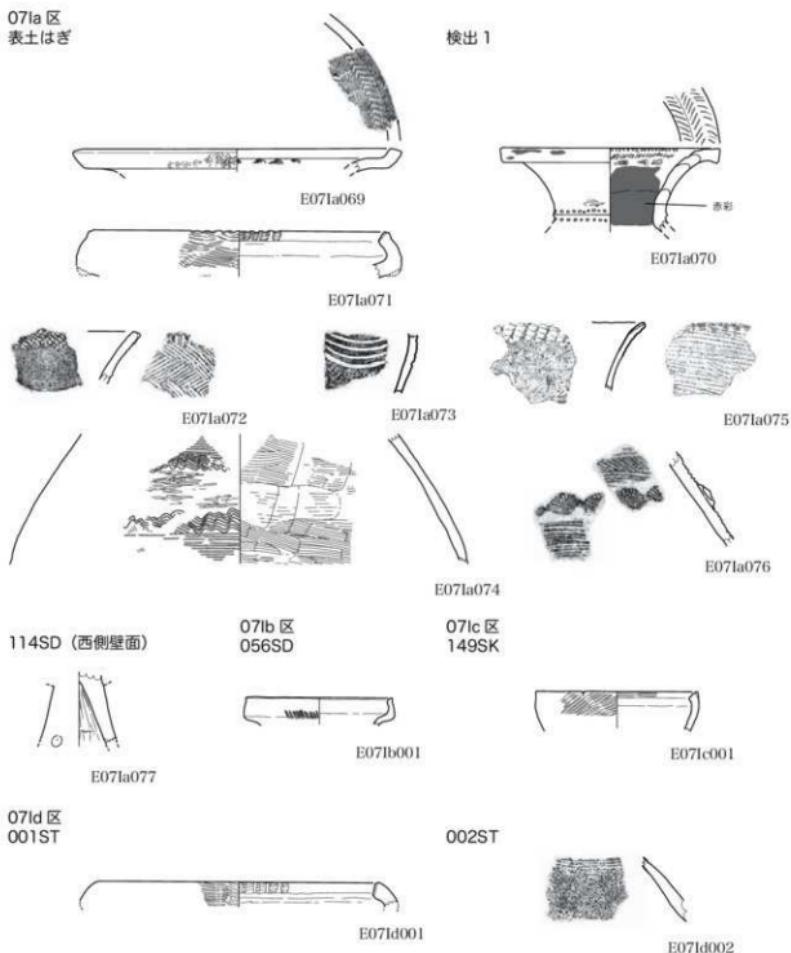
第 52 図 07la 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1) (1:4、拓本と断面のみは 1:3)



第53図 071a区出土弥生土器・土師器・陶器(2) (1:4、拓本と断面のみは1:3)

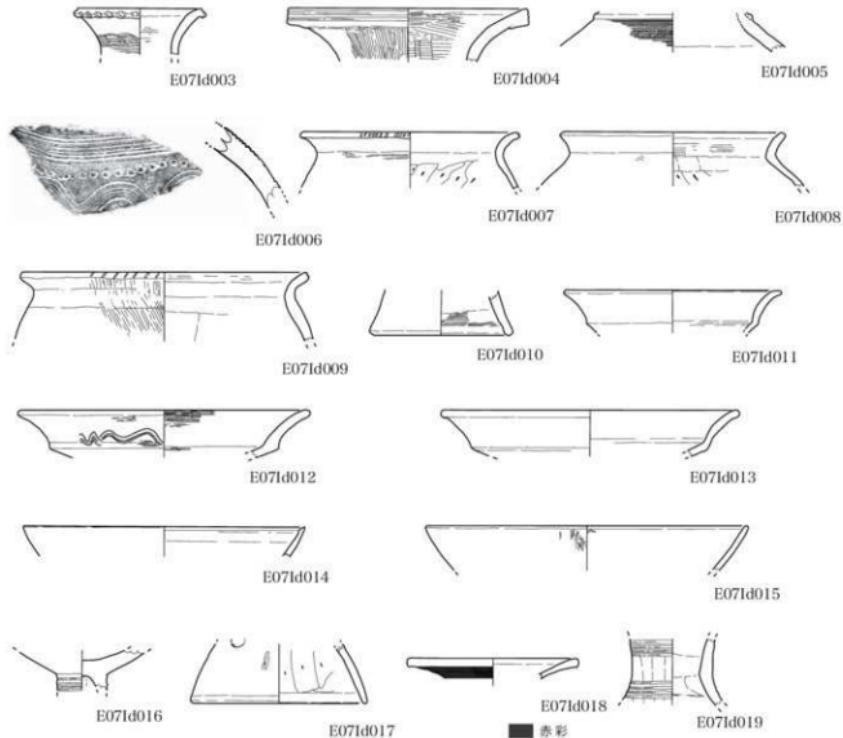


第54図 07la区出土弥生土器・土師器・陶器(3) (1:4、拓本と断面のみは1:3)

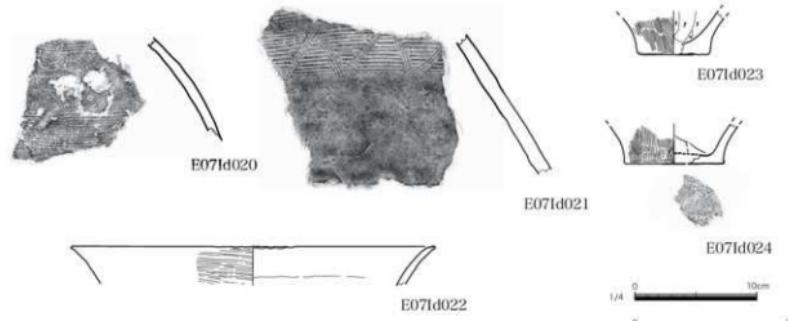
07la 区
表土はぎ

第 55 図 07la 区～07ld 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1 : 4、拓本と断面のみは 1 : 3)

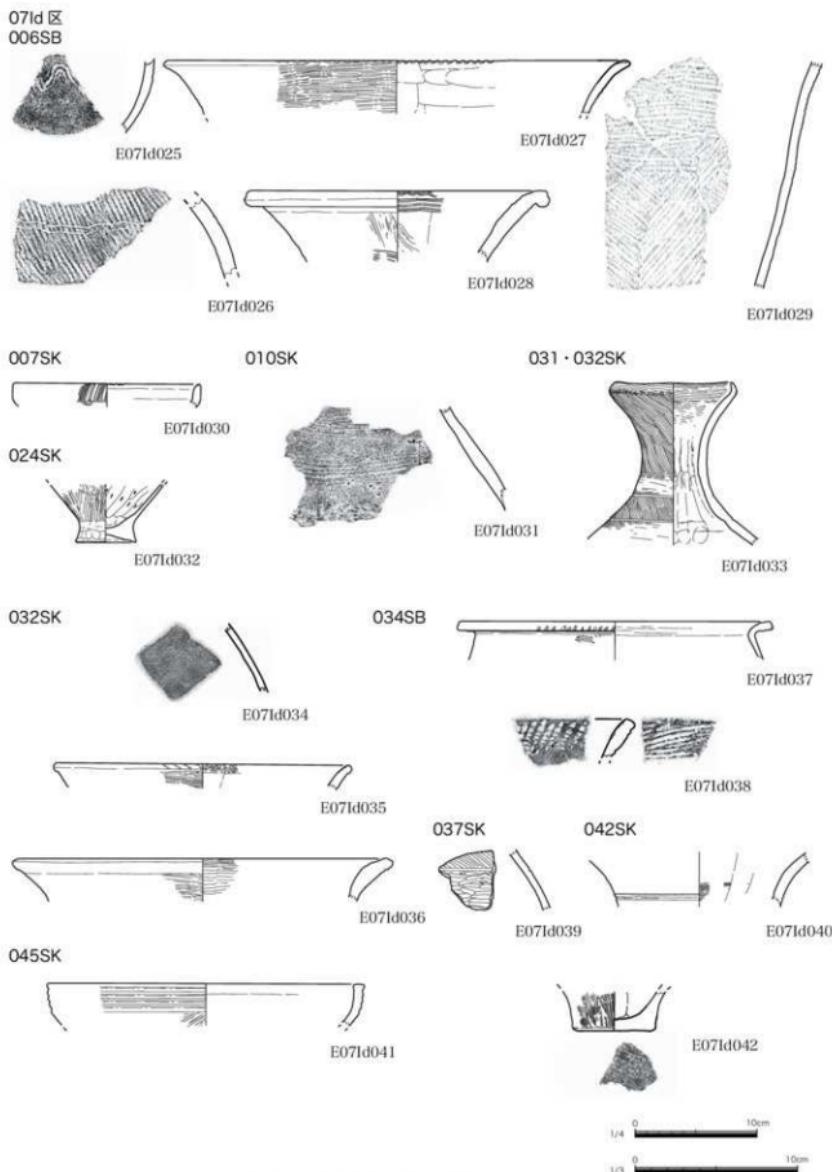
07Id 区
004SD



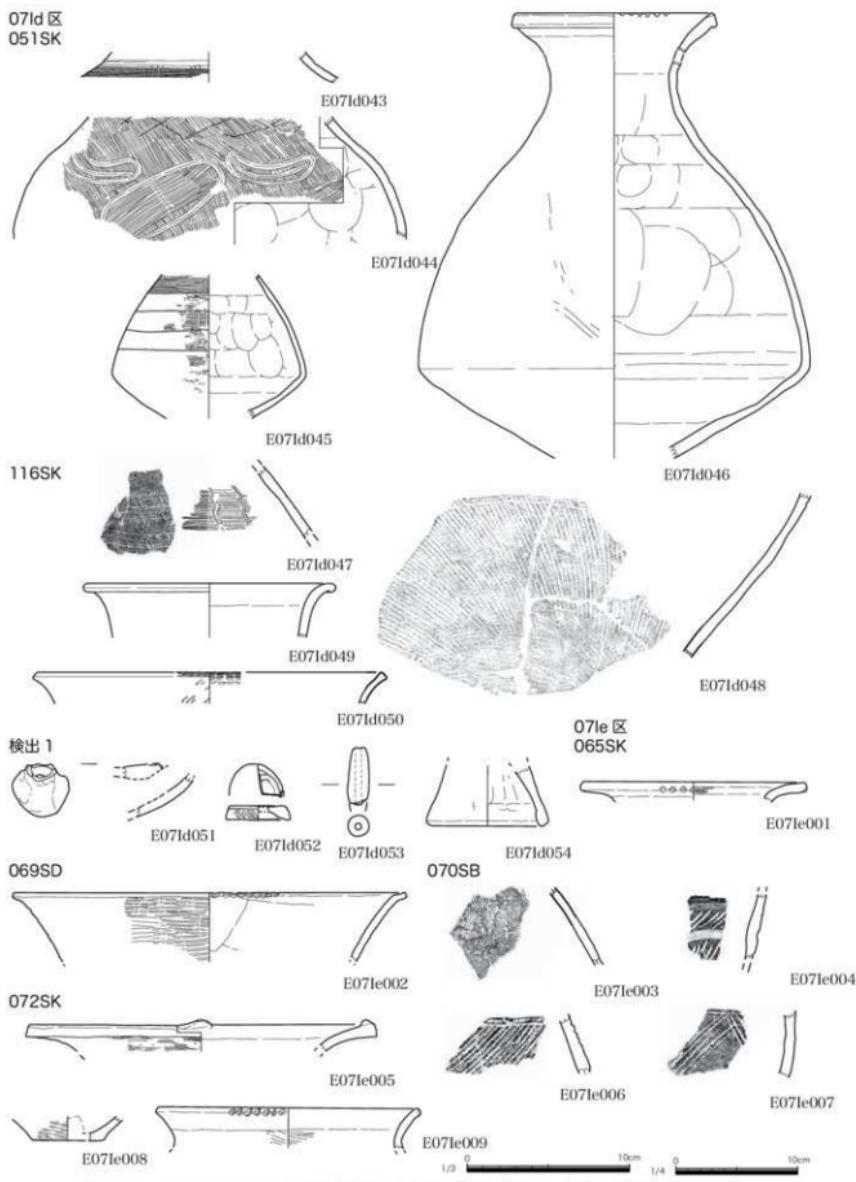
005SB



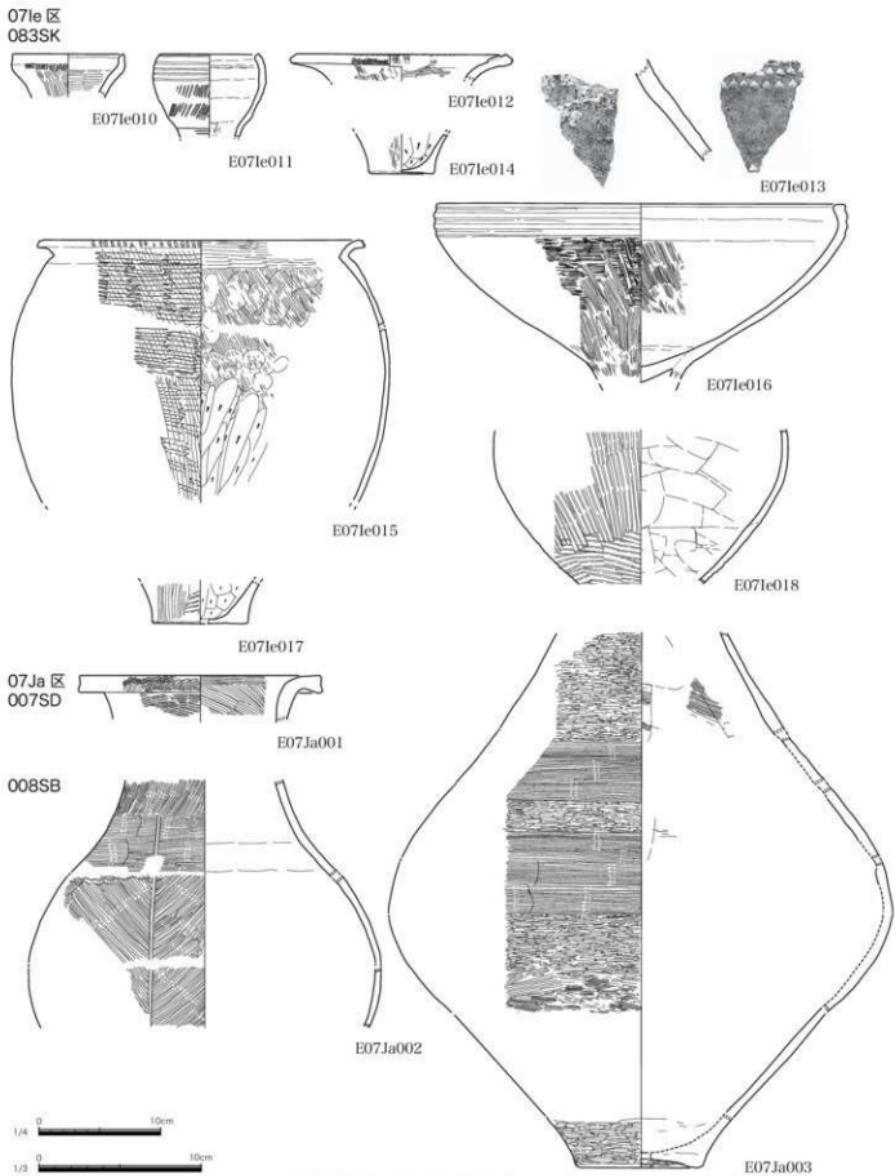
第 56 図 07Id 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1) (1:4、拓本と断面のみは 1:3)



第57図 071d区出土弥生土器・土師器・陶器(2) (1:4、拓本と断面のみは1:3)



第 58 図 071d 区・071e 区出土弥生土器・土師器・陶器 (1 : 4, 拓本と断面のみは 1 : 3)



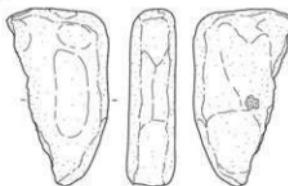
第59図 07le区・07Ja区出土弥生土器・土師器・陶器 (1:4、拓本と断面のみは1:3)

07la区
09OSK



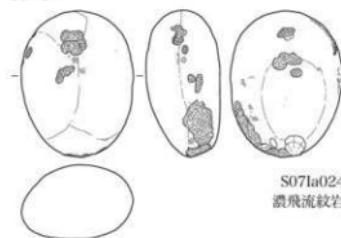
S07la023
下呂石

07Ab区
検出2

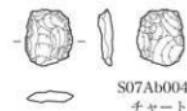


S07Ab003
濃飛流紋岩

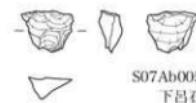
097SK



S07la024
濃飛流紋岩

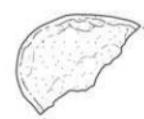


S07Ab004
チャート

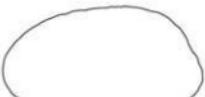


S07Ab005
下呂石

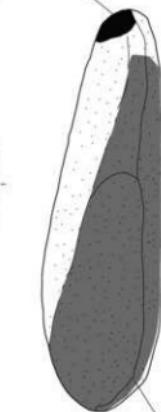
087SD



S07Ab001
砂岩



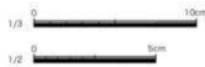
濃飛流紋岩・赤岩



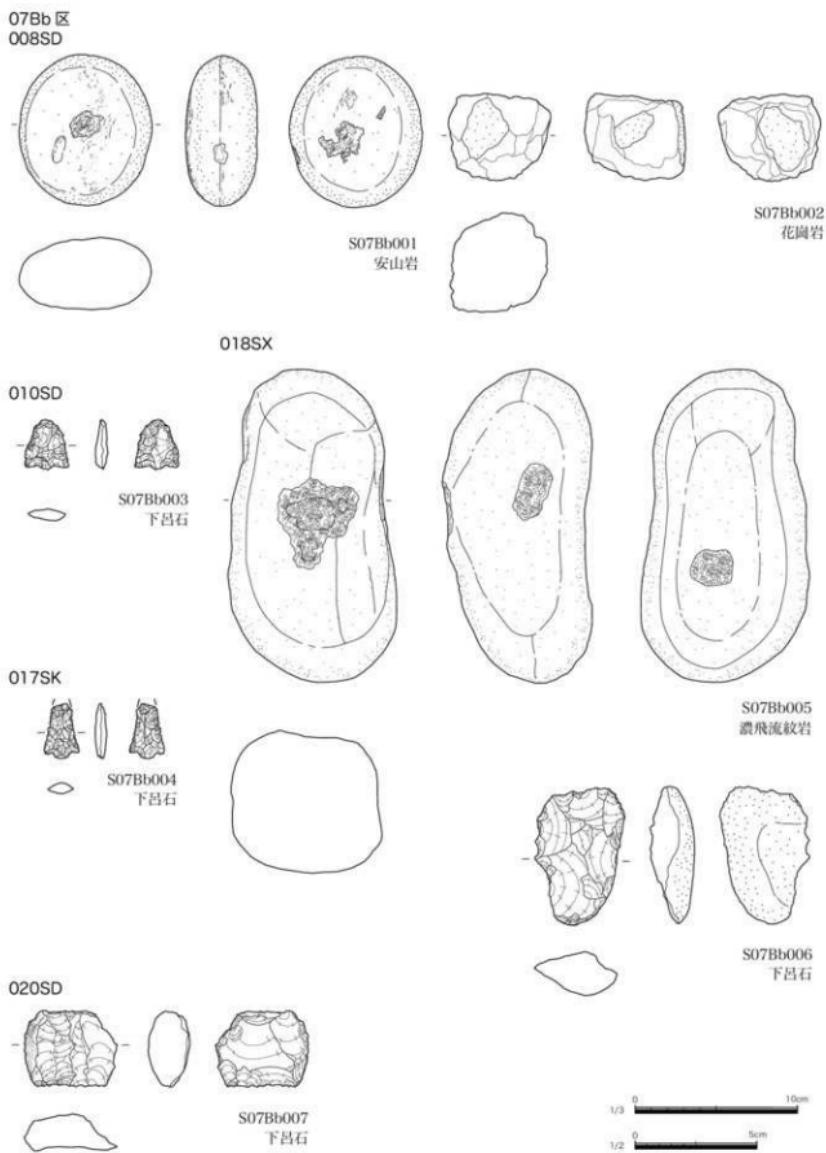
中等濃飛流紋岩



S07Ab002
濃飛流紋岩

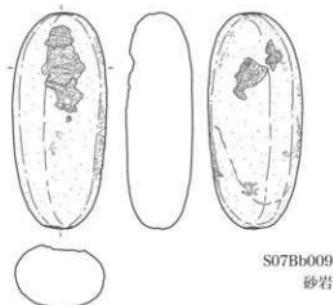
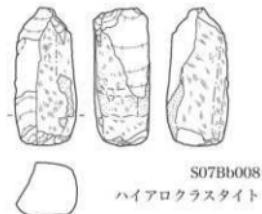


第60図 07Aa区・07Ab区出土石器 (磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2)

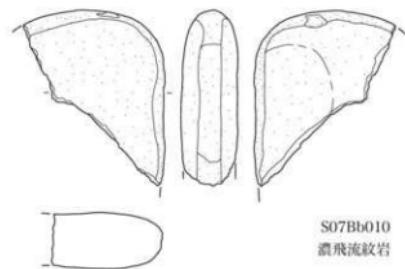


第 61 図 07Bb 区出土石器 (1) (磨製石器・礫石器は 1 : 3、剥片石器は 1 : 2)

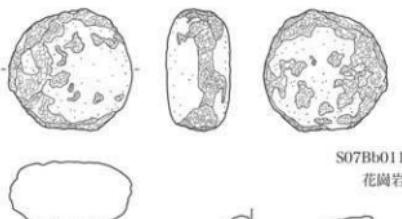
07Bb 区
023SD



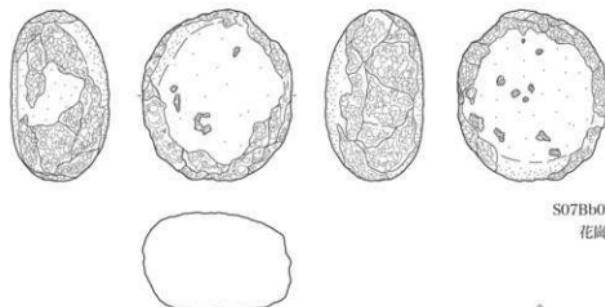
037SB



038SB



040SK

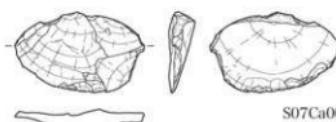
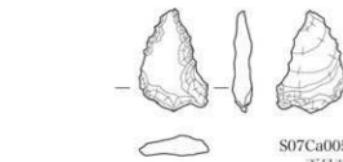
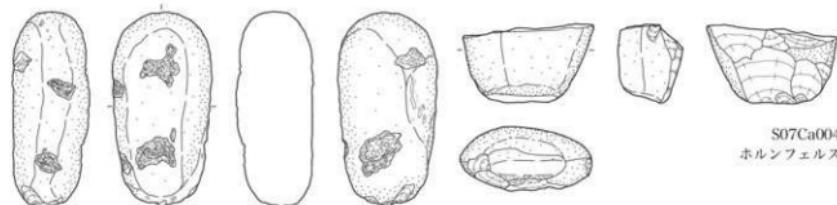
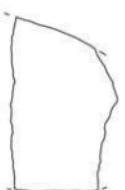
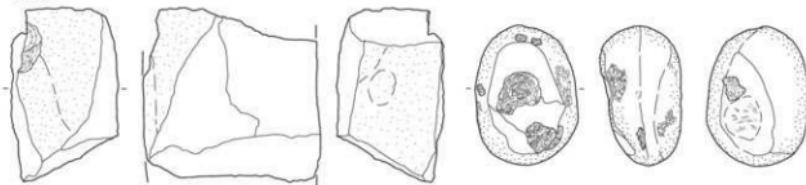


S07Bb013
花崗岩

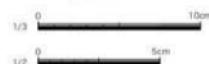
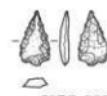
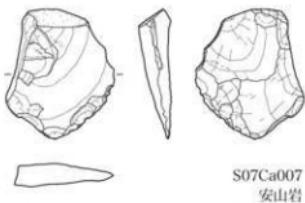
1/3 0 10cm

第62図 07Bb 区出土石器（2）（磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2）

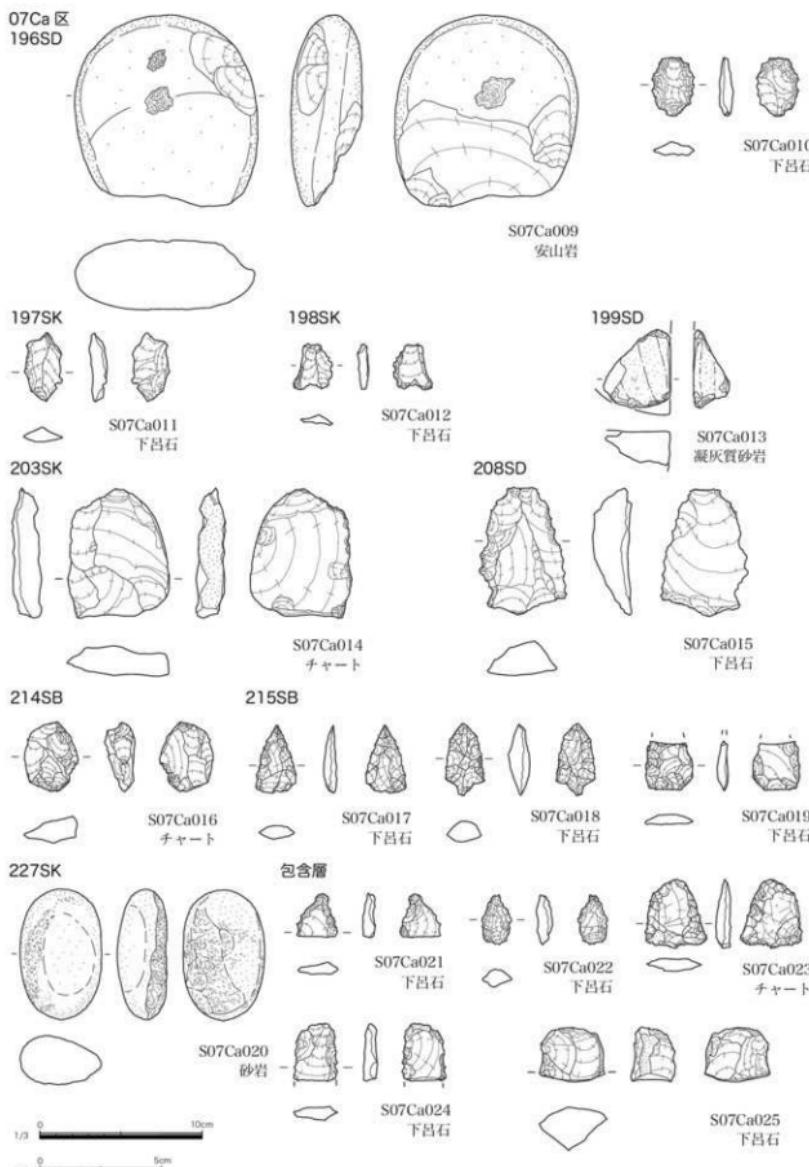
07Ca 区
187SD



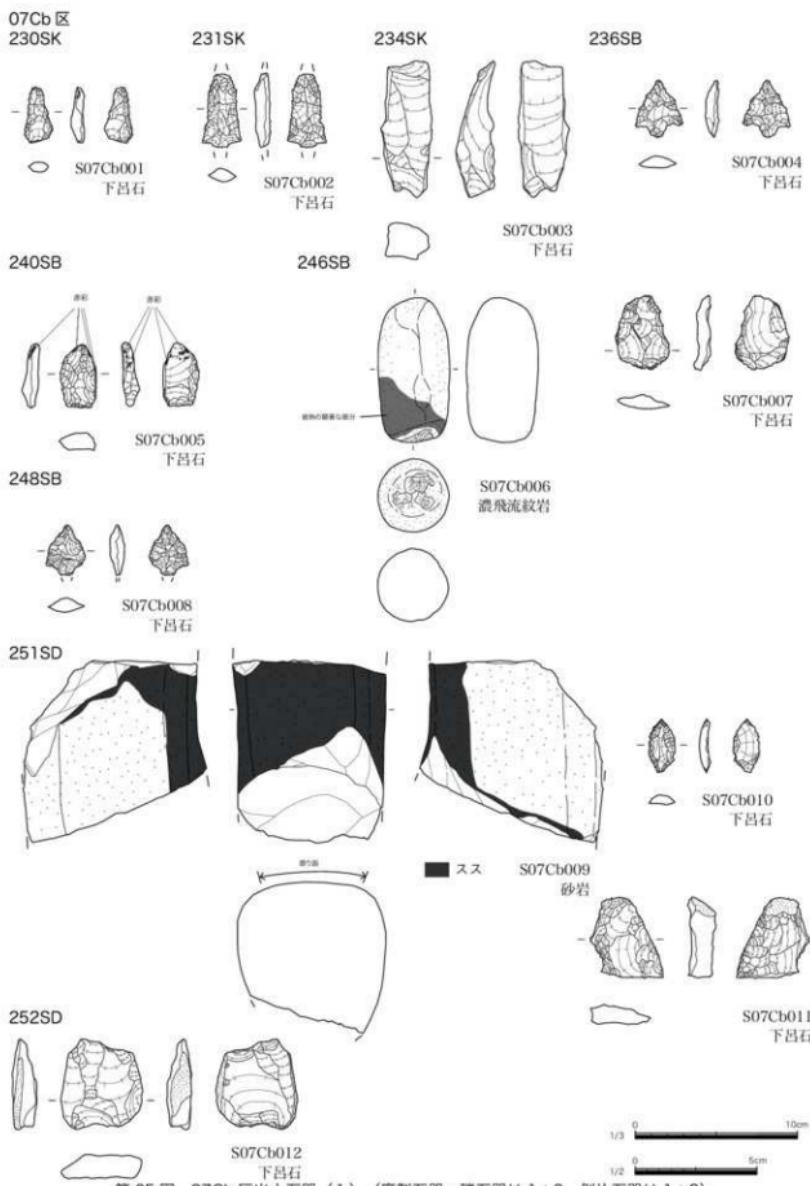
195SD



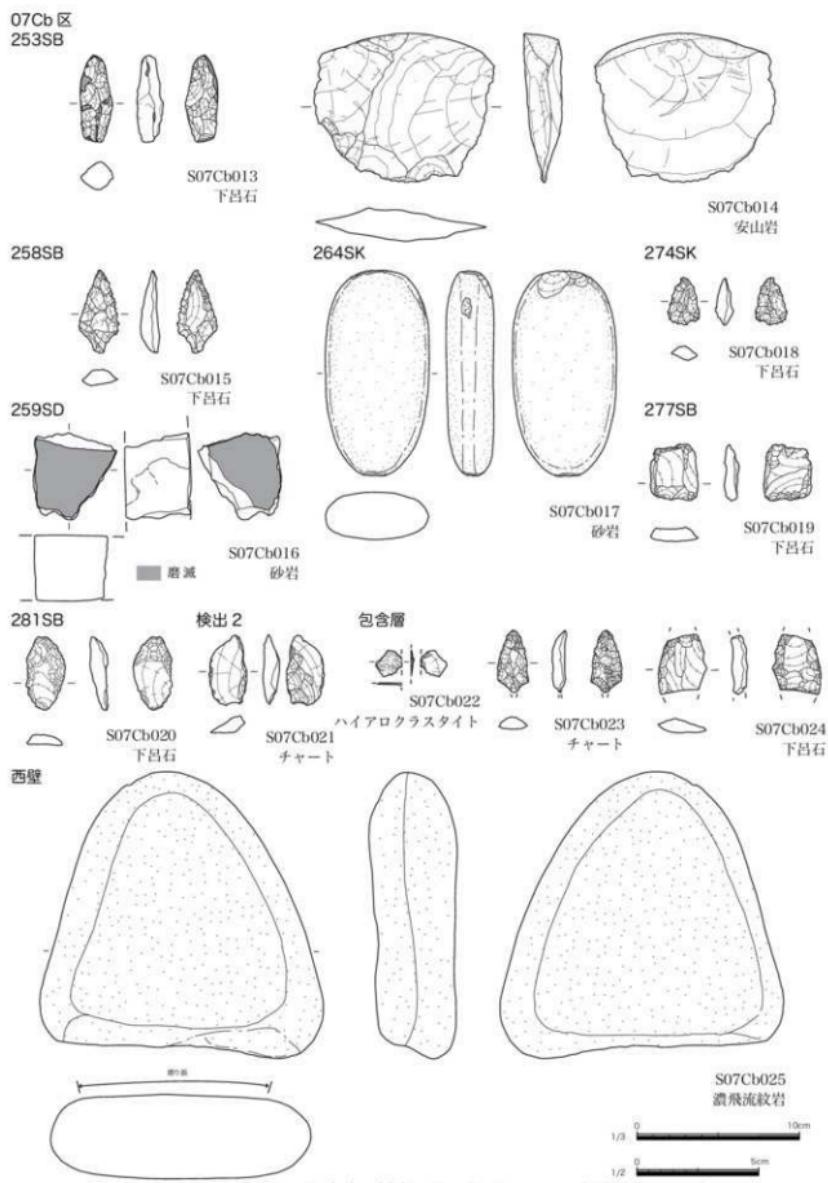
第 63 図 07Ca 区出土石器 (1) (磨製石器・礫石器は 1 : 3、剥片石器は 1 : 2)

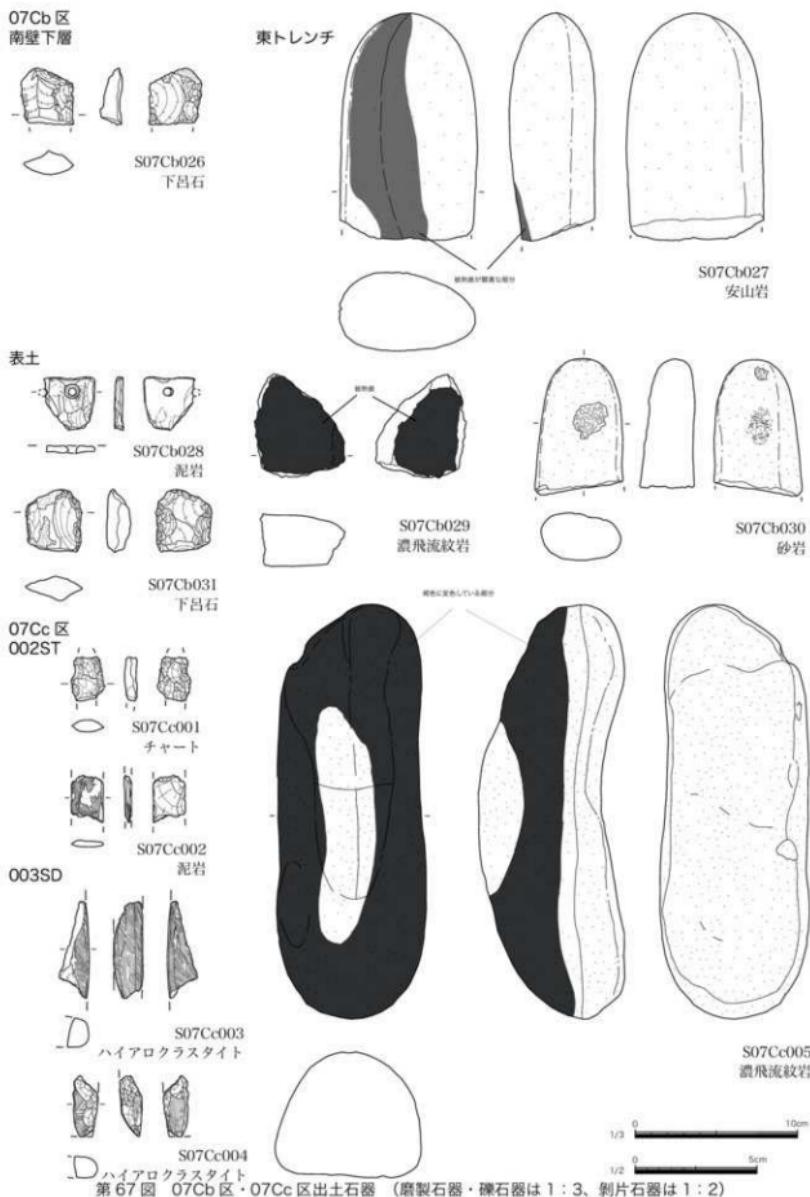


第 64 図 07Ca 区出土石器（2）（磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2）

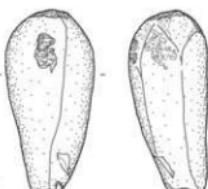
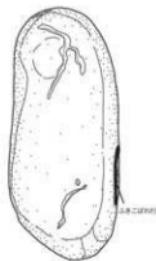
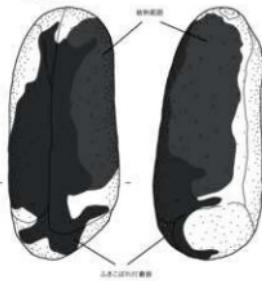


第65図 07Cb 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2）





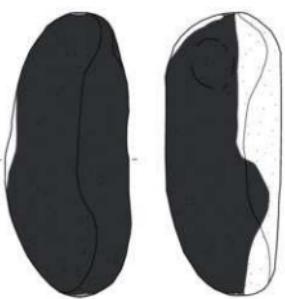
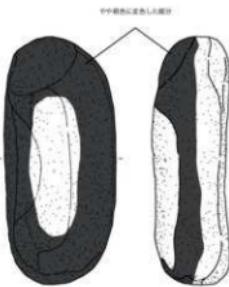
07Cc 区
003SD



S07Cc006
漂飛流紋岩



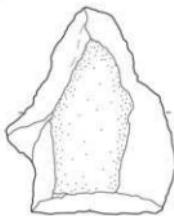
S07Cc007
漂飛流紋岩



S07Cc008
漂飛流紋岩



S07Cc009
漂飛流紋岩

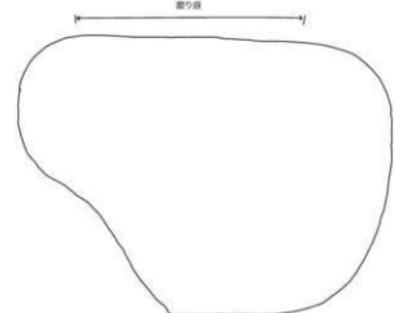
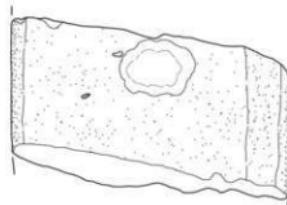
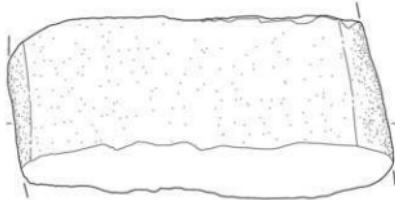


S07Cc010
漂飛流紋岩

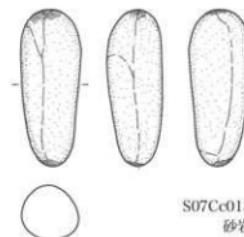


第 68 図 07Cc 区出土石器 (1) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)

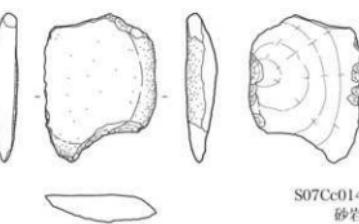
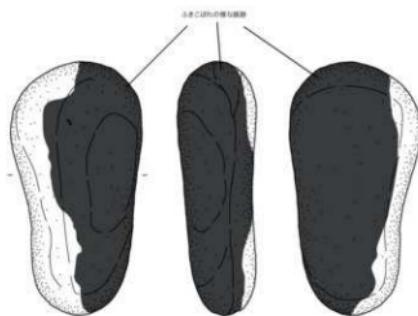
07Cc 区
003SD



S07Cc011
濃飛流紋岩



S07Cc013
砂岩



S07Cc014
砂岩

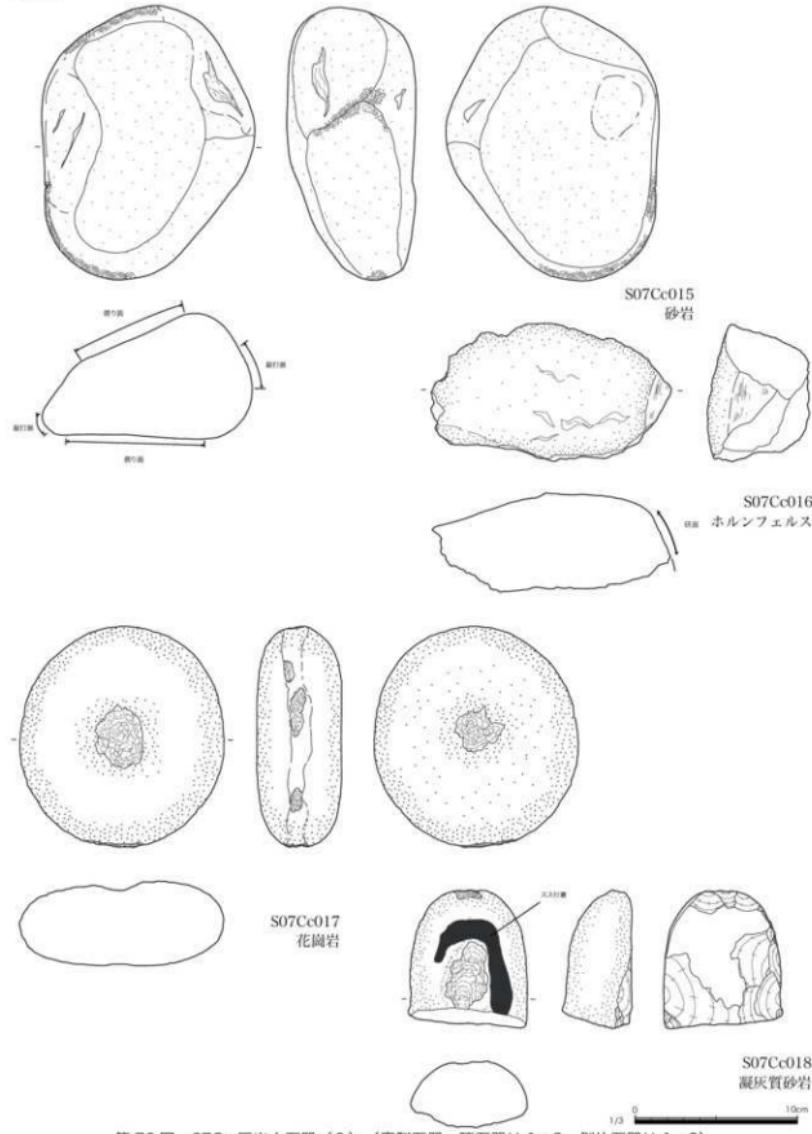


S07Cc012
砂岩

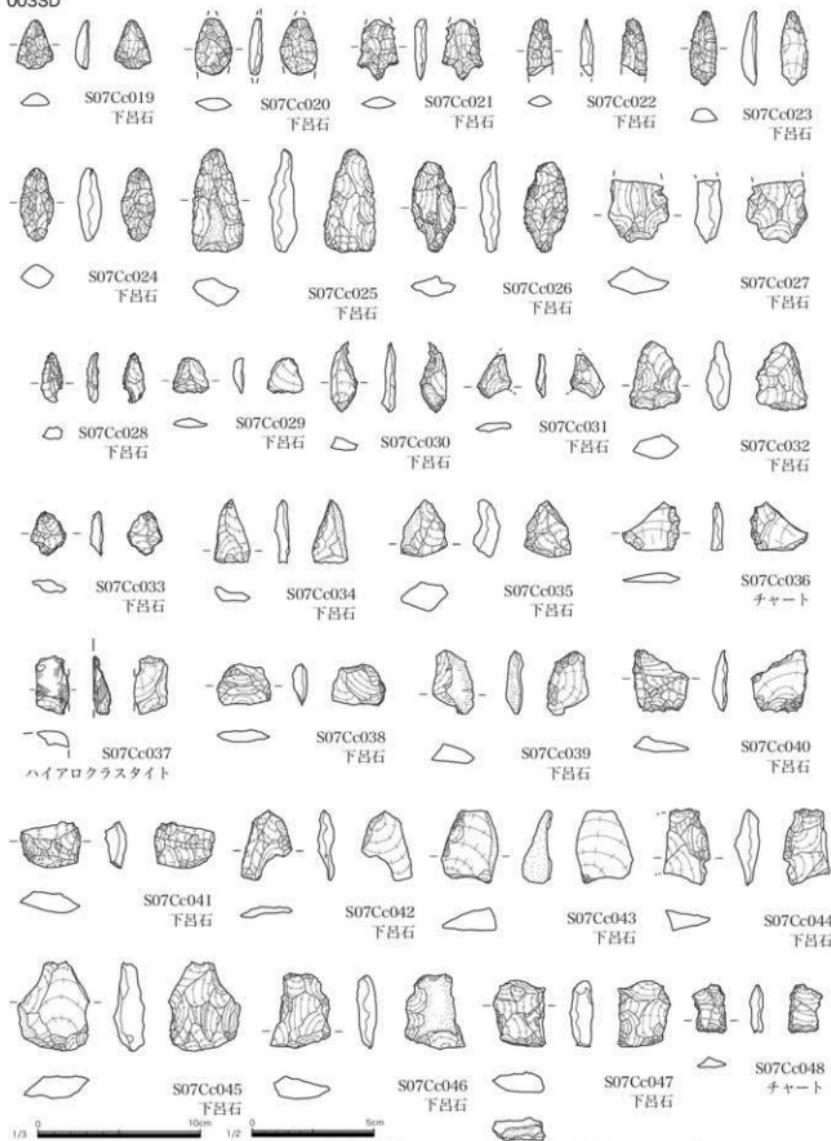
1/3 0 10cm

第 69 図 07Cc 区出土石器 (2) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)

07Cc 区
003SD

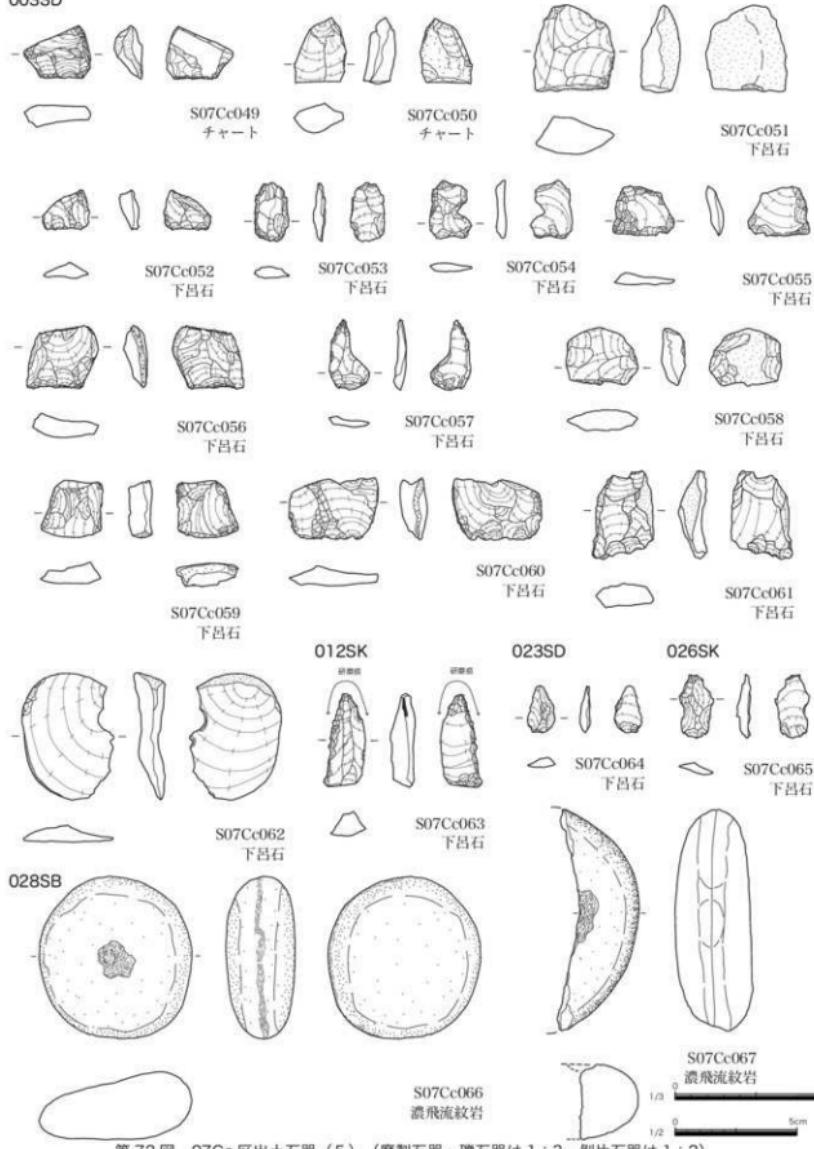


第 70 図 07Cc 区出土石器 (3) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)

07Cc 区
003SD

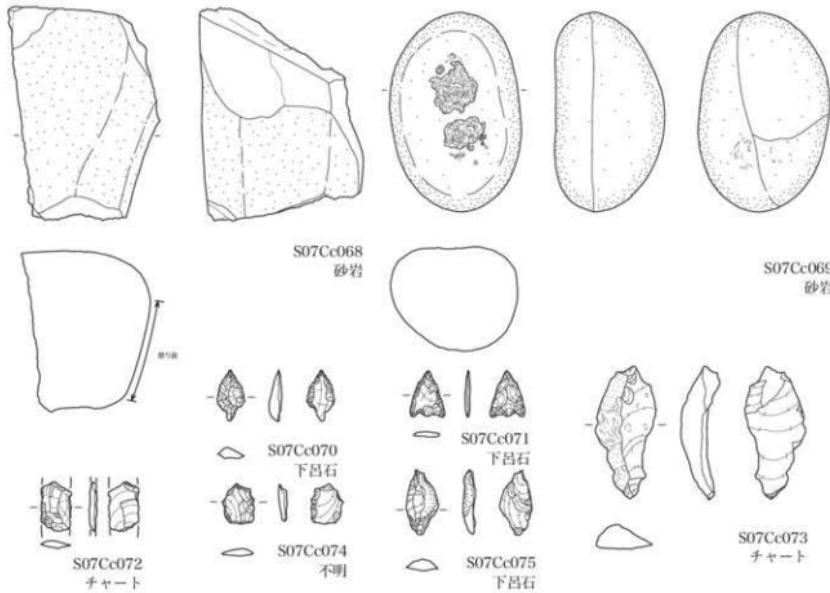
第 71 図 07Cc 区出土石器 (4) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)

07Cc 区
003SD

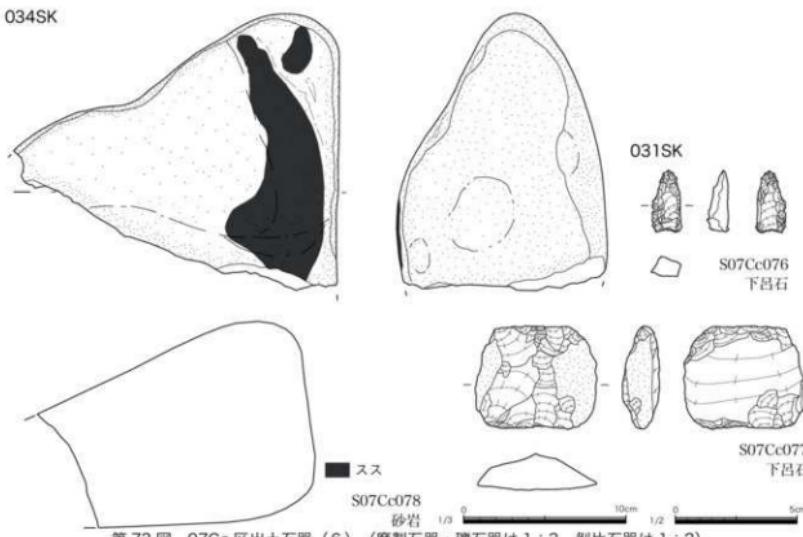


第 72 図 07Cc 区出土石器 (5) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)

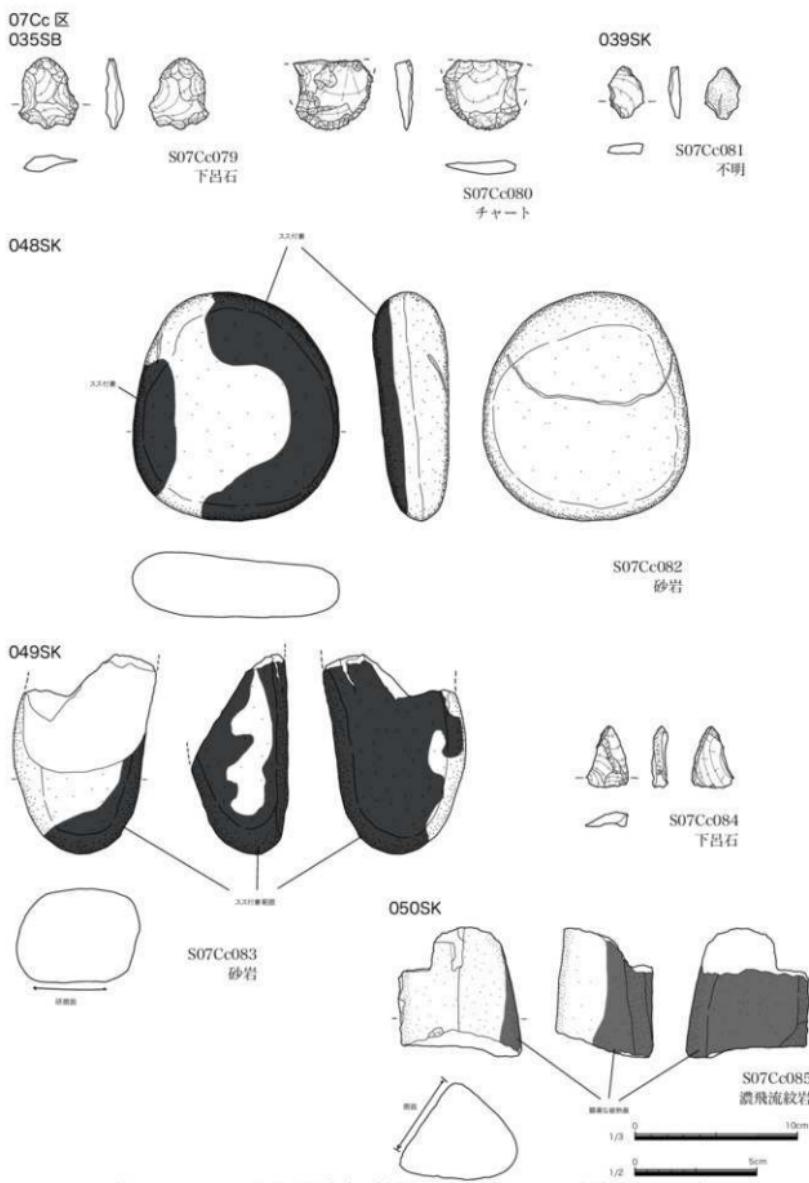
07Cc 区
028SB



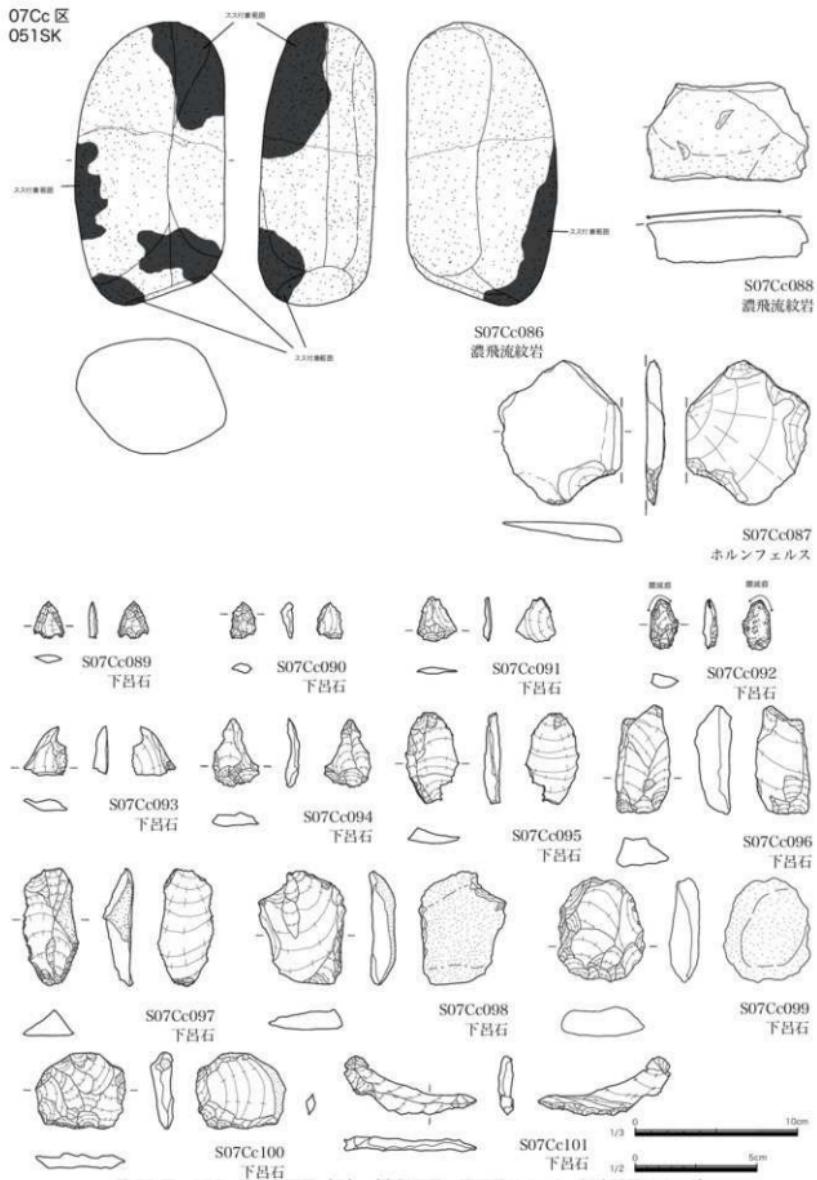
034SK



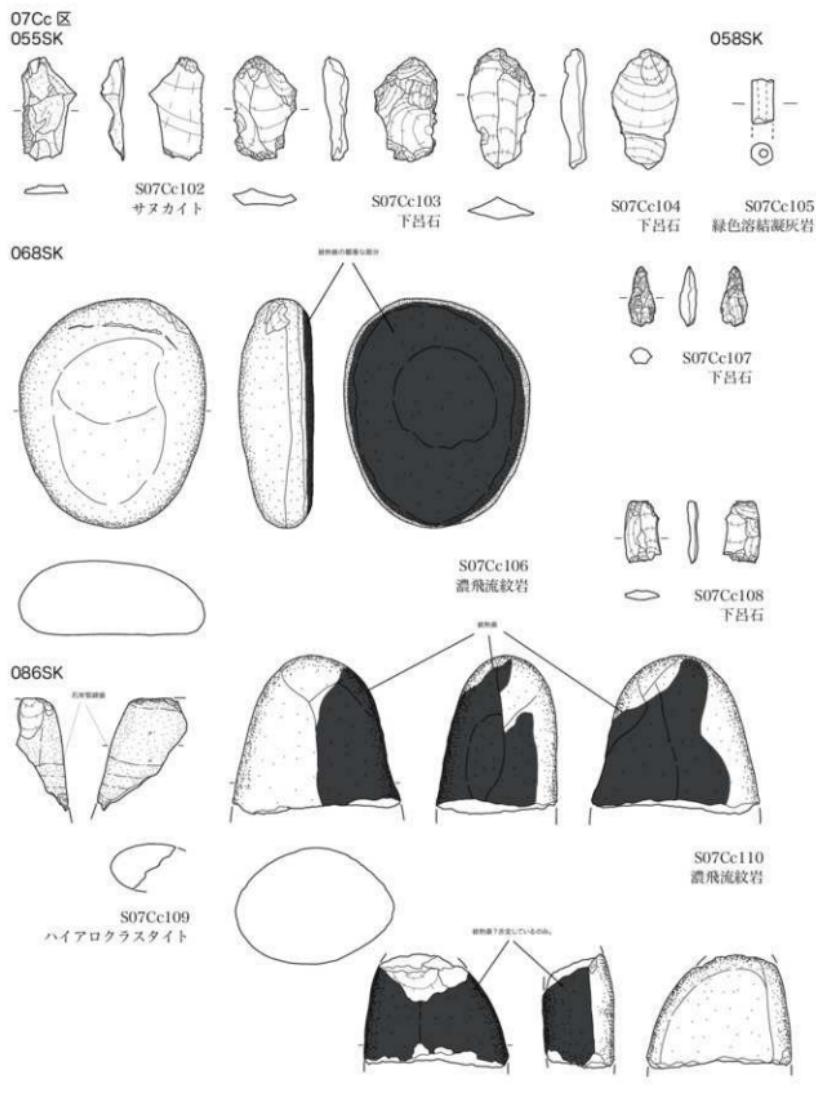
第 73 図 07Cc 区出土石器 (6) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)



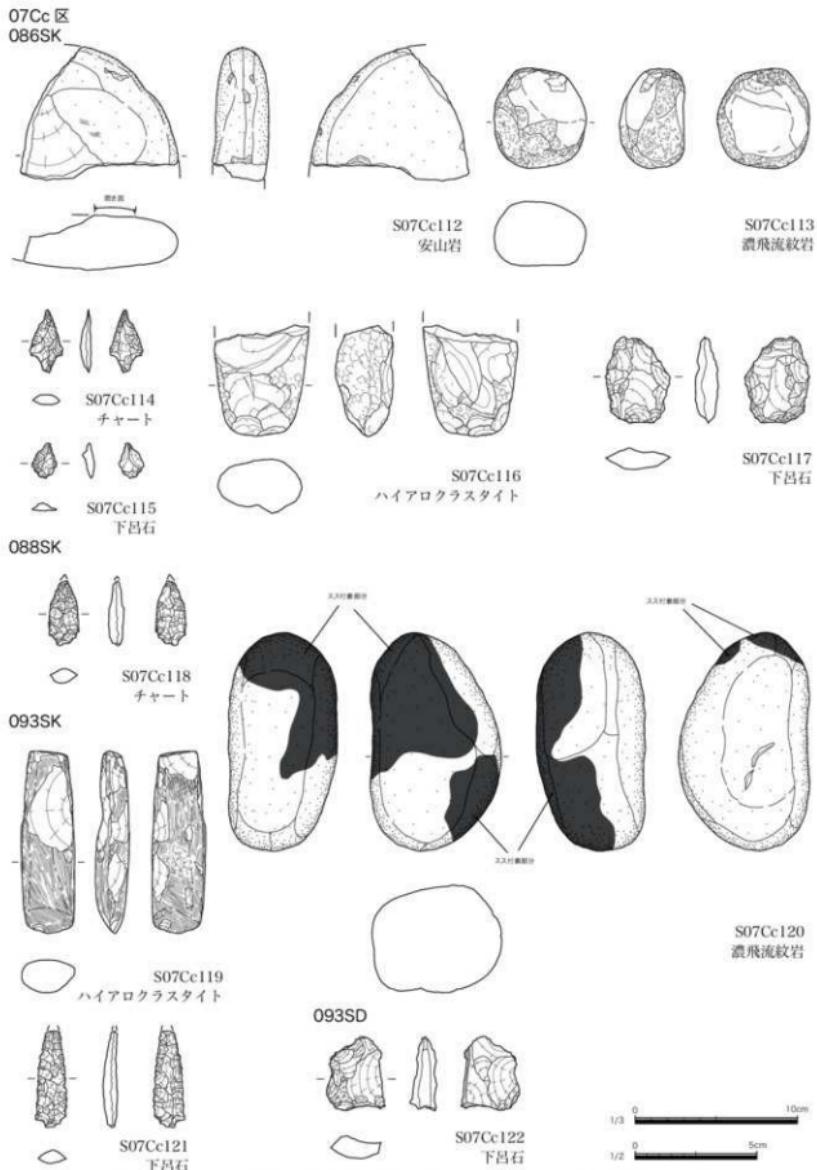
第74図 07Cc 区出土石器（7）（磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2）



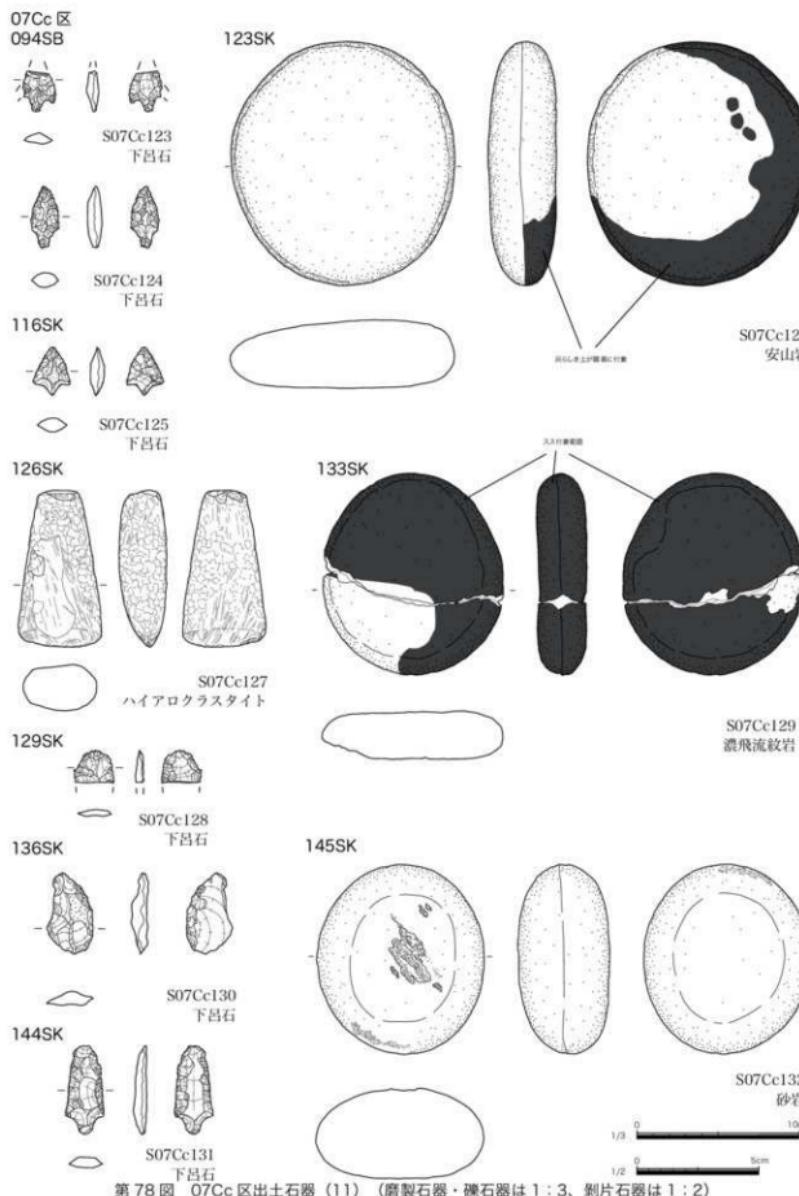
第75図 07Cc区出土石器(8) (磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2)

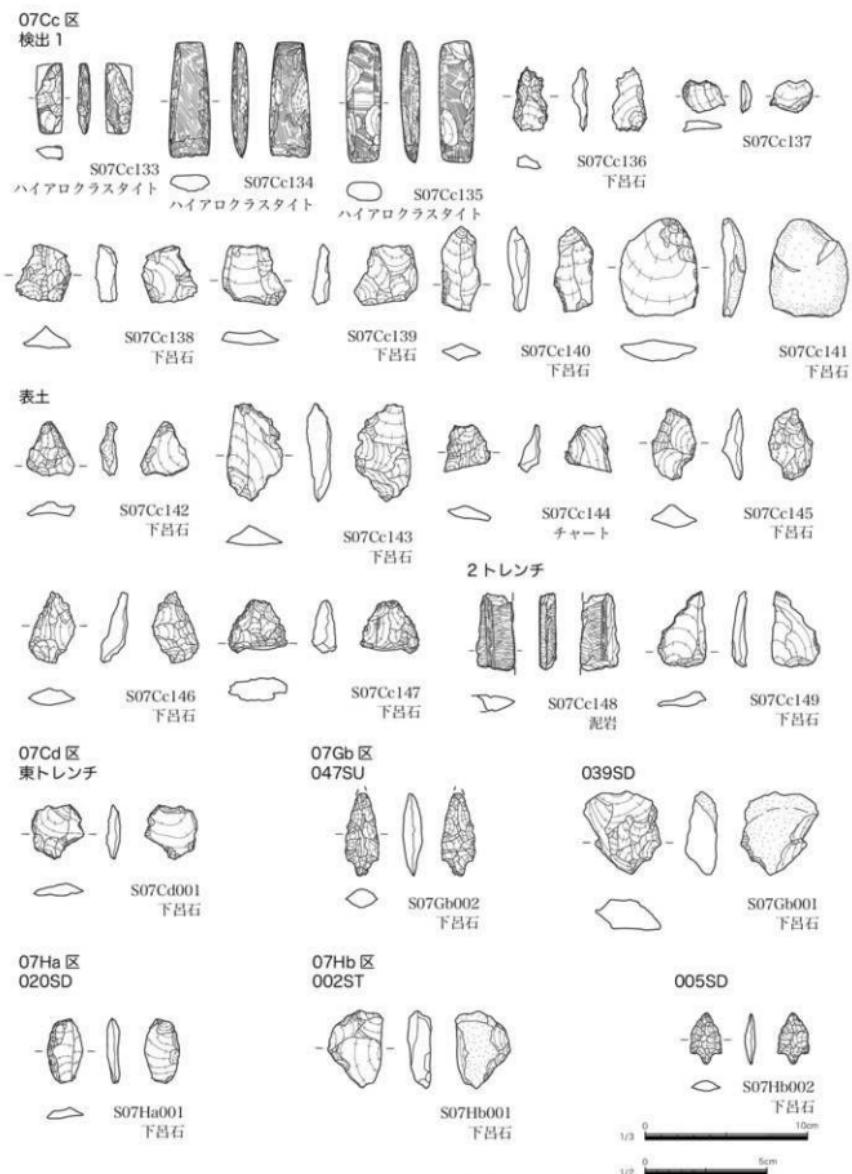


第 76 図 07Cc 区出土石器 (9) (磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2)



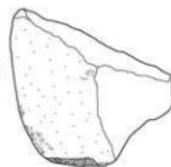
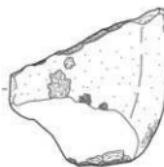
第77図 07Cc区出土石器(10) (磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2)





第79図 07Cc区・07Cd区・07Gb区・07Ha区・07Hb区出土石器（磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2）

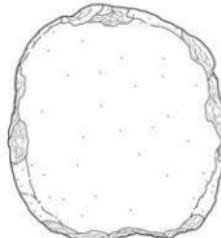
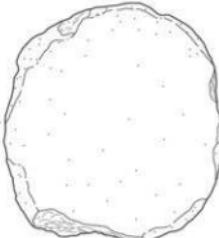
07Hb 区
020SD



S07Hb003
下呂石

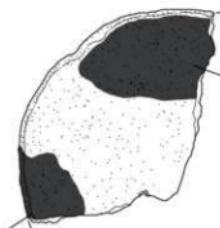
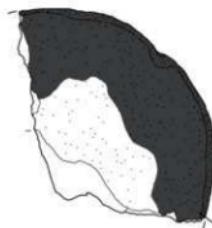
S07Hb004
凝灰質砂岩

07Ia 区
076SD



S07Ia001
砂岩

S07Ia002
漂飛流紋岩



火打石頭頭

S07Ia003
漂飛流紋岩

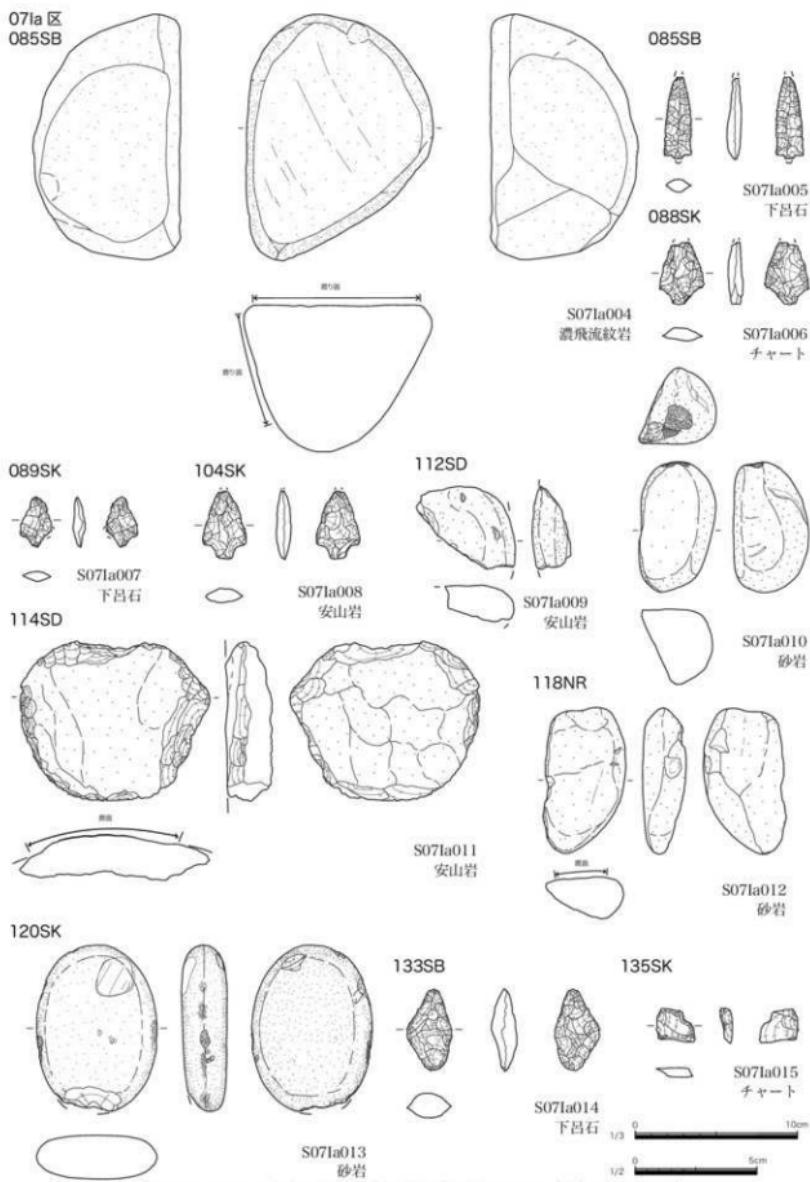
火打石頭頭



1/3 0 10cm

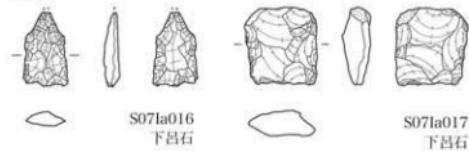
1/2 0 5cm

第 80 図 07Hb 区・07Ia 区出土石器 (磨製石器・礫石器は 1 : 3、剝片石器は 1 : 2)

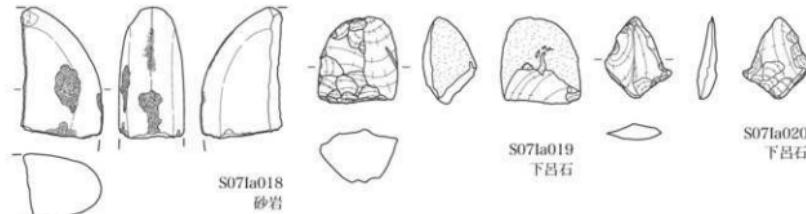


第81図 071a区出土石器（磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2）

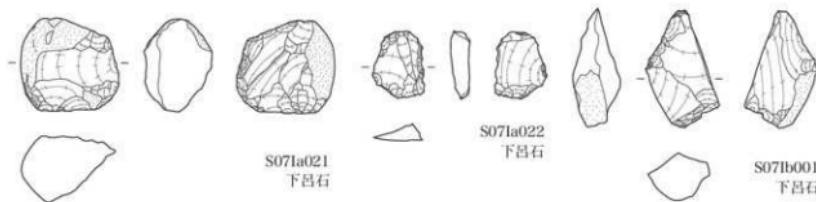
07la 区
検出 1



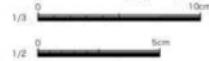
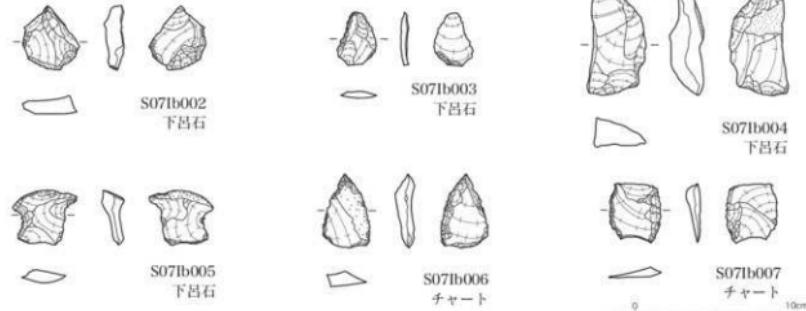
表土はぎ



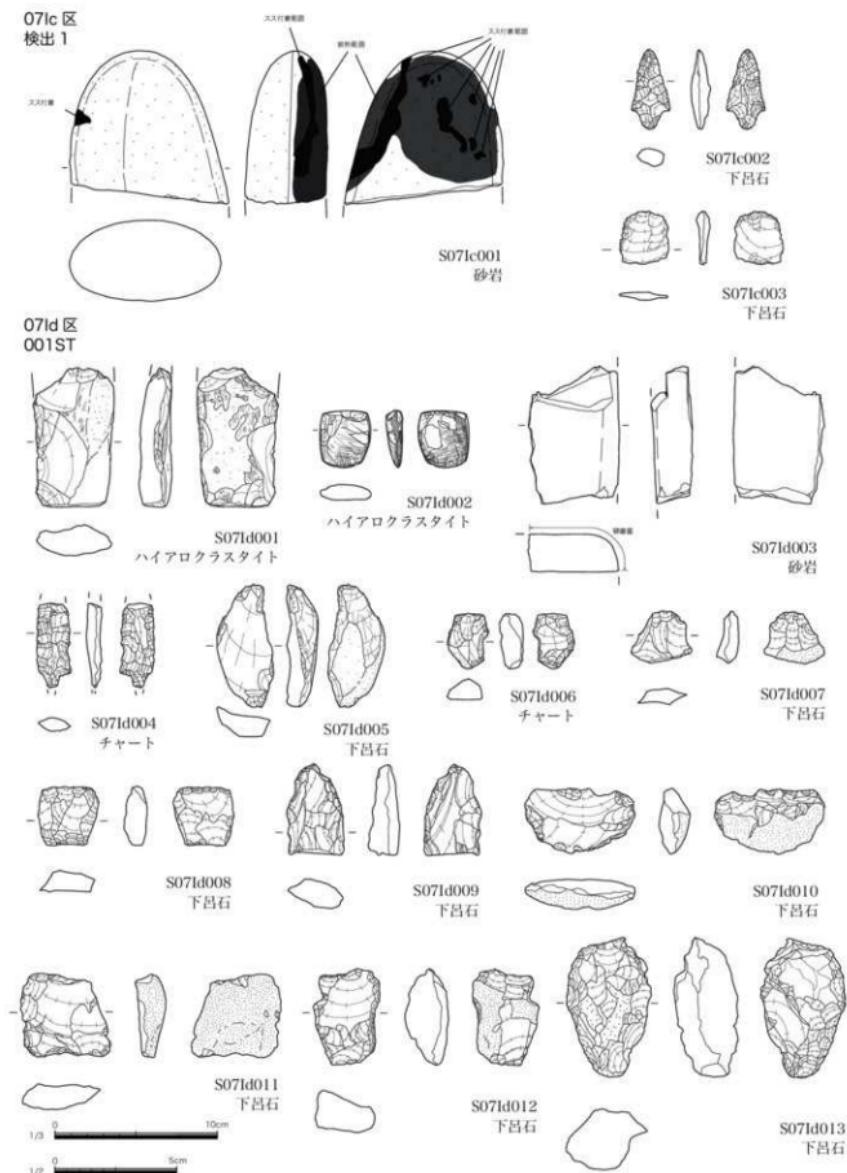
07lb 区
056SD



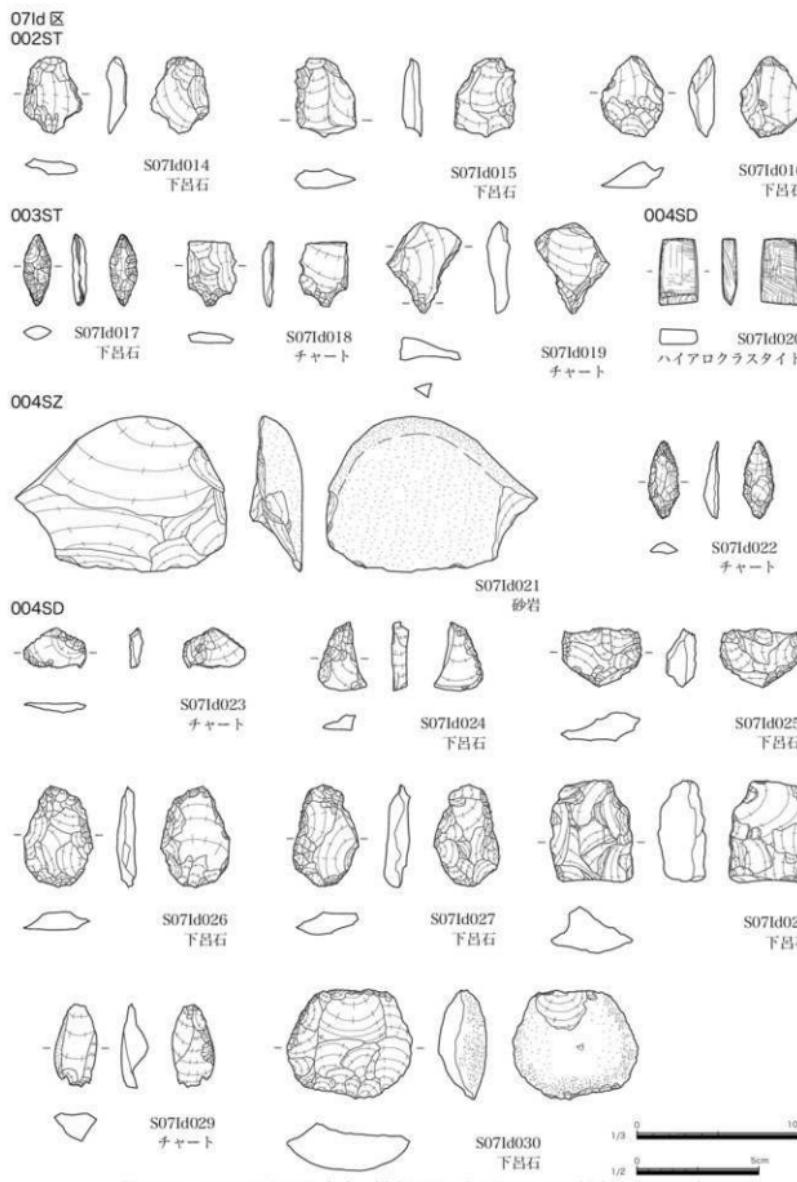
検出 1



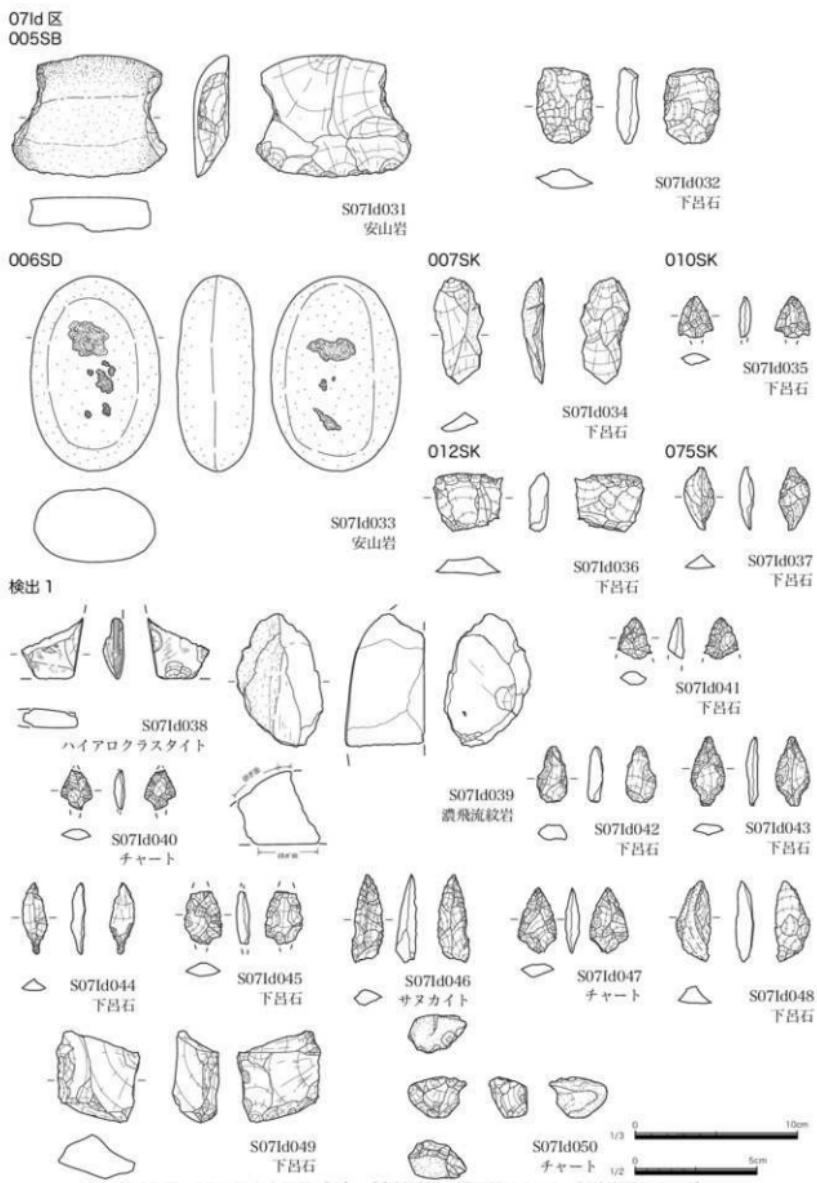
第 82 図 07la 区・07lb 区出土石器 (磨製石器・礫石器は 1 : 3、剥片石器は 1 : 2)



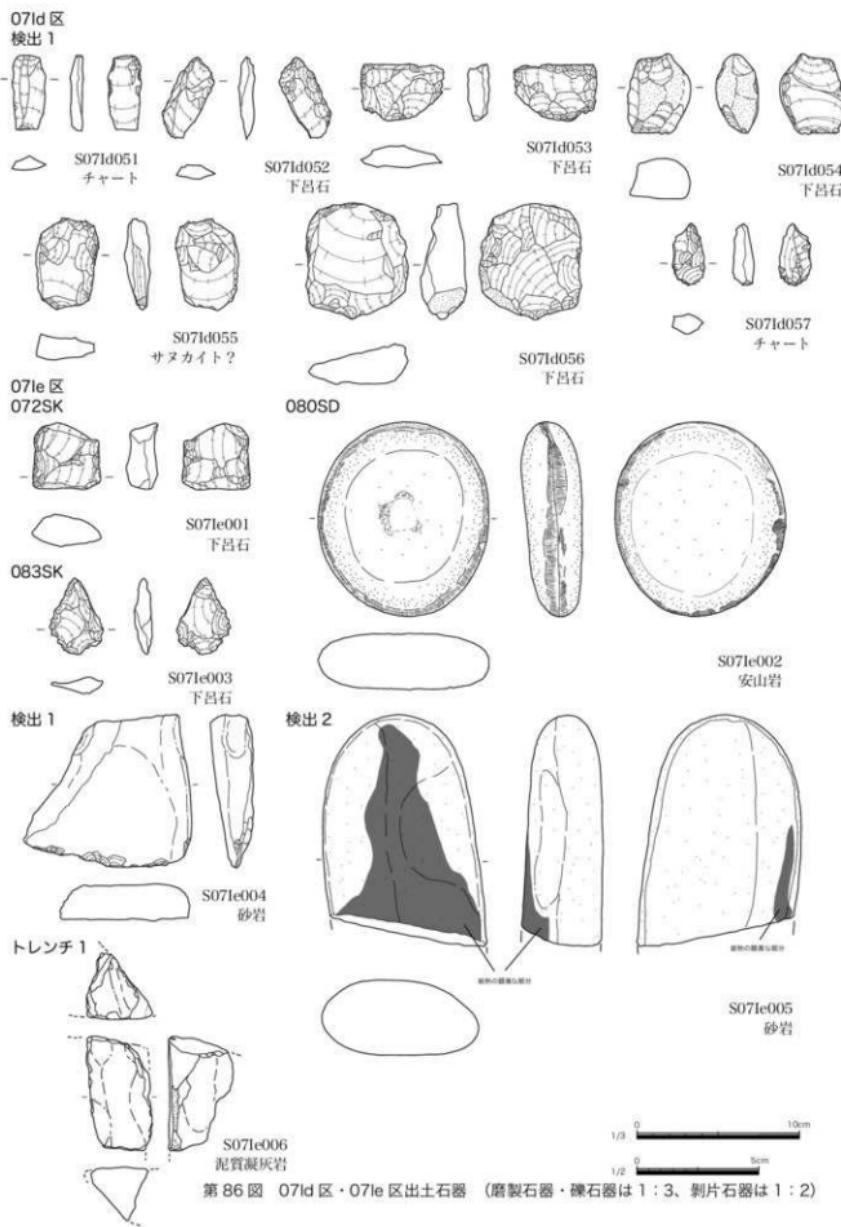
第83図 07lc区・07ld区出土石器（磨製石器・礫石器は1:3、剥片石器は1:2）



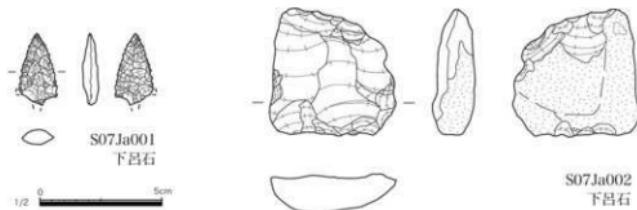
第 84 図 07Id 区出土石器（1）（磨製石器・礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2）



第 85 図 07Id 区出土石器（2）（磨製石器、礫石器は 1:3、剥片石器は 1:2）



07Ja 区
005SK



第87図 07Ja 区出土石器 (磨製石器・礫石器は 1 : 3、剥片石器は 1 : 2)

-⑩-
□



第88図 ガラス製品 (1 : 1)

第4章 総 括

第1節 遺構の変遷

今回の調査成果をふまえて、遺構の時期別変遷を辿りたい（第89図～第91図）。

（1）A期（弥生時代中期前葉）

比較的確実にこの時期の遺構と考えられるものは少なく、竪穴建物1棟（07Ja南区008SB）、土坑6基がある。この時期の遺構は、北側の07Ca中区・07Ia南区から07D区・07Ie区を経て、南側の07Ja南区にいたる範囲においてみられる。ただし、07D区・07Ie区と07Ja区の間には南北100m以上の名神高速道路などの未調査地があり、名神高速道路の南にある07Ja区北区・同中区には遺構が確認できていないので、07D区・07Ie区と07Ja南区の間には遺構の空白地がある可能性がある。名神高速道路の北にある07Ca中区・07Ia南区から07D区・07Ie区の範囲には、A期の弥生土器が多く出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。また07Ja南区において確認できた竪穴建物008SBはA期の遺物が伴う確実なもので、名神高速道路の南に弥生時代の遺構が展開することを示す重要な資料である。

（2）B期（弥生時代中期中葉前半）

この時期の遺構も比較的少なく、竪穴建物1棟（07Ia北区086SB）、土坑8基、溝1条（07Ia北区112SD）がある。この時期の遺構は、北側の07Bb南区・07Ia北区から南側の07Cc区・07Ie北区にいたる範囲においてみられる。名神高速道路の南にある地点では遺構が確認できていない。名神高速道路の北にある07Bb南区・07Ia北区から07D区・07Ie区の範囲には、B期の弥生土器が多く出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。この時期の遺構は竪穴建物07Ia北区086SBと土坑07Cc区051SK（050SKと055SKは本来同一遺構の可能性がある）を中心とし、遺構がやや集中する地点がみられる。07Ia北区112SDは幅2.7m以上あり、C期の溝とほぼ重複して流れることから、B期からC期にかけての区画溝になる可能性がある。

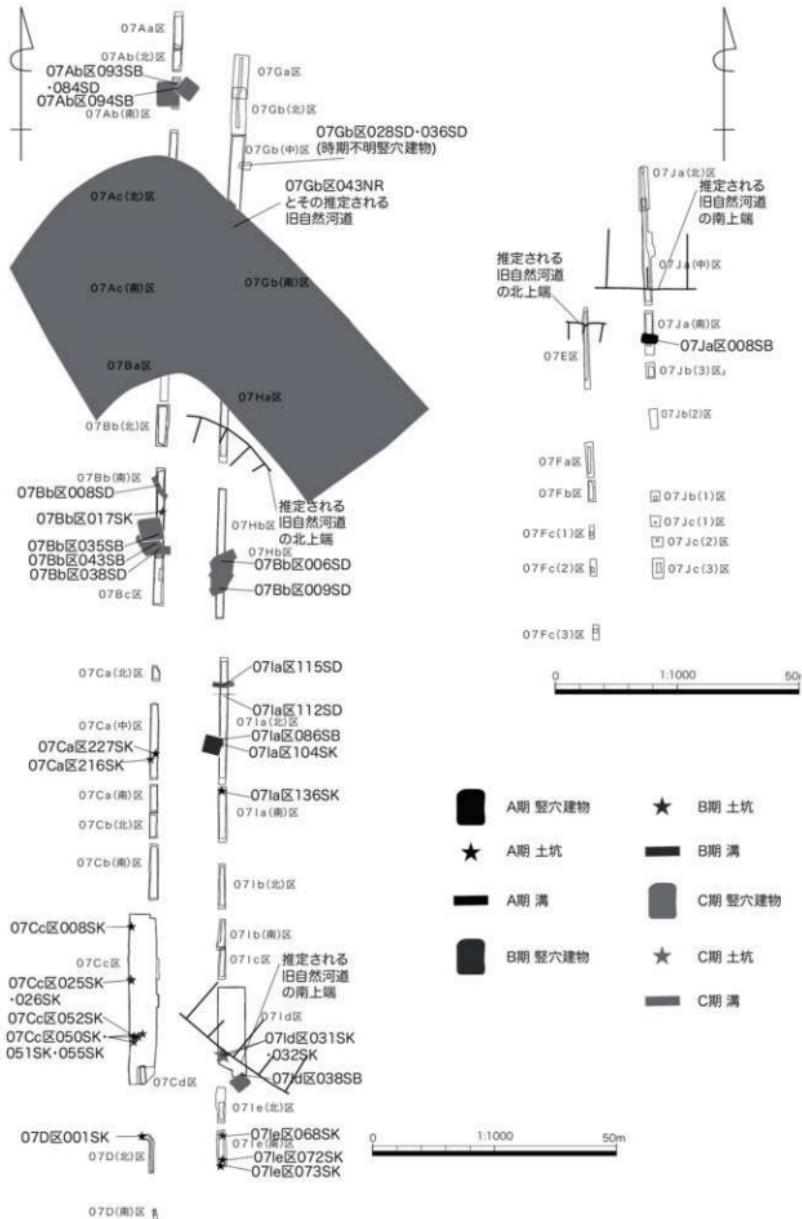
（3）C期（弥生時代中期中葉後半）

この時期の遺構も比較的少なく、竪穴建物5棟（07Ab

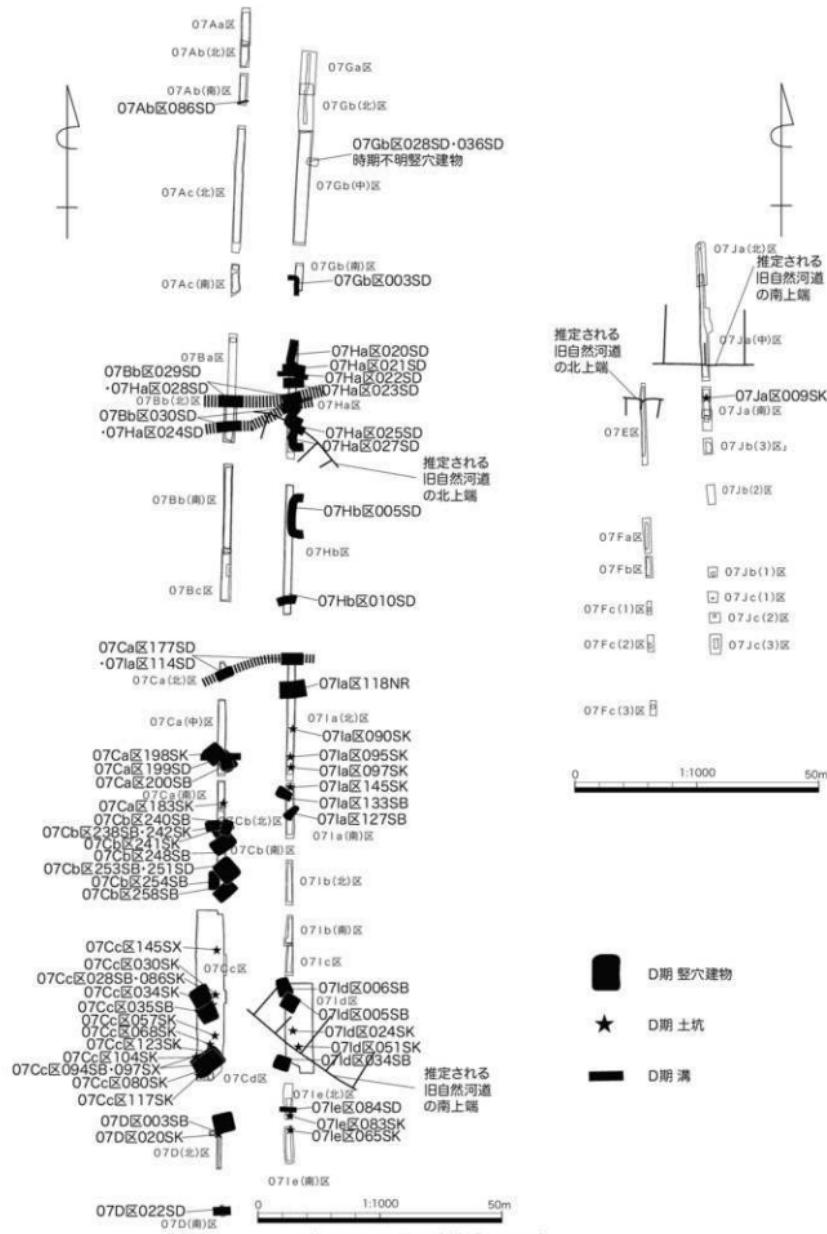
南区093SB・同094SB・07Bb南区035SB・同区043SB・07Id区038SB）、土坑2基、溝5条がある。この時期の遺構は、北側の07Ab南区から07Bb南区と07Hb区を経て、南の07Id区にいたる範囲においてみられる。名神高速道路の南にある地点では遺構が確認できていない。名神高速道路の北にある07Bb南区・07Ia北区から07D区・07Ie区の範囲には、C期の弥生土器が出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。この時期の特徴は3つあり、一つ目は竪穴建物07Ab南区093SB・094SBにみられる遺跡の北側に遺構が大きく展開することである。これは竪穴建物07Id区038SBがあるB期にも遺構が存在した07Cc区付近とは別に居住域が大きく二つに分かれることを示している。もう一つの特徴は、07Ia北区115SDがB期から引き続き区画溝が形成されており、その北側に溝07Bb南区008SD・07Hb区006SD・07Hb区009SDのように軸線が類似する鍵手状にめぐら溝が確認できることで、これらの溝は方形周溝墓の可能性が推定でき、先に述べた一つ目の居住域が大きく二カ所に分かれることと関連するものと考えられる。三つの特徴は、明確な遺構には確認できていないが、07Ha区の北側にてみつかった櫛条痕による施設・調整がみられる内傾口縁高杯と双口壺が出土した砂層堆積がある。この砂層堆積は出土した弥生土器からC期の自然河道による堆積と考えられ、続くD期における07Ha区の遺構展開とあわせて考えると、C期に07Ab南区・07Gb北区と07Bb南区・07Hb区の間にある自然河道が埋没した可能性が高い。

（4）D期（弥生時代中期後葉）

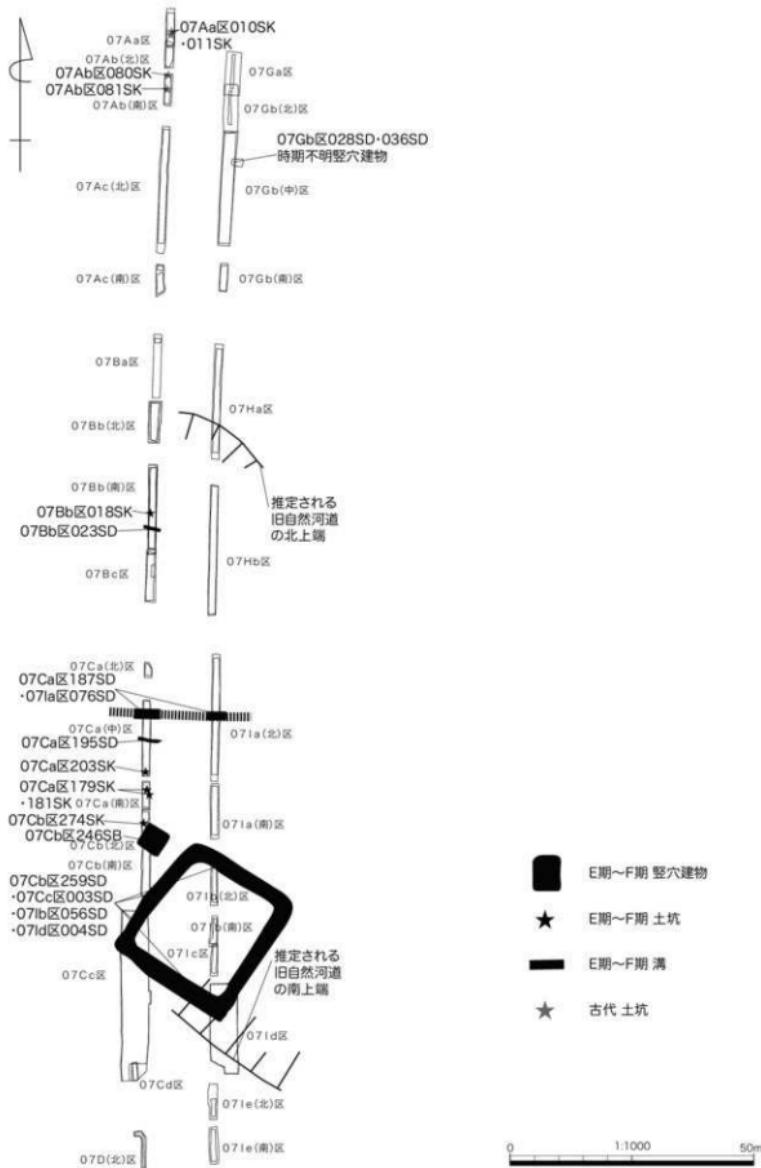
この時期の遺構は非常に多く、竪穴建物20棟、土坑19基、溝15条、自然流路1条がある。この時期の遺構は、北側の07Gb南区から07Cc区・07Id区を経て、南側の07Ja南区にいたる範囲においてみられる。名神高速道路の北にある07Ca中区・07Ia北区から07D区・07Ie区までの範囲には、他にもD期の弥生土器が出土する遺構もあるので、本来はもう少し遺構が存在した可能性が高い。この時期の特徴は3つあり、一つ



第89図 A期～C期の遺構（1:1,000）



第90図 D期の遺構（1:1,000）



第91図 E期～F期と古代の遺構 (1:1,000)

目は竪穴建物が確認できた地点は 07Ca 中区・07Ia 南区から 07D 北区までの南北約 80m の範囲に集中し、土坑もやや南北に広がるが、ほぼ同じ範囲にみられることがある。遺跡の北側の居住域は不明瞭になる。二つ目は、この竪穴建物の分布に関連してか、竪穴建物の分布域の北と南に溝が多数みつかる範囲がひろがることである。溝は北側の 07Gb 南区から南側の 07Ca 北区・07Ia 北区北側までに鍵手状や「コ」の字状にめぐら溝や東から西にはじめる溝があり、方形周溝墓の周溝や区画・用水などの溝が多数存在した可能性が高い。C 期の遺構の特徴で述べたように、07Bb 南区・07Hb 区に展開した方形周溝墓の周溝と考えられる鍵手状にめぐら溝から D 期に連続して形成されたものと考えることができる。三つ目は名神高速道路の南にある 07Ja 南区において土坑 07Ja 区 009SK があり、遺跡が名神高速道路付近の未調査区域の空白部分をはさみ、遺跡の南側地点に展開することである。

(5) E 期・F 期（弥生時代後期～古墳時代前期前半）

この時期の遺構は少なく、竪穴建物 1 棟（07Cb 区 246SB）、土坑 3 基、溝 3 条がある。この時期の遺構は、北側の 07Ca 中区・07Ia 北区から南側の 07Cc 区・07Id 区にいたる範囲においてみられ、D 期に比べて遺構の広がる範囲が小さくなる。名神高速道路の南にある地点では遺構が確認できていない。この時期の遺構

は竪穴建物 07Cb 区 246SB とその周辺にみられる土坑 07Ca 中区 203SK・07Ca 南区 179SK・同区 181SK に居住域に関連する遺構群と、その北側に 07Ca 中区 187SD・07Ia 北区 076SD の東西方向の区画溝が 1 条、竪穴建物 07Cb 区 246SB の南にある一辺 22m 程のマウンドをもつ方形周溝墓（07Cb 南区 259SD・07Cc 区 003SD・07Ib 北区 056SD・07Id 区 004SD の周溝に囲まれた範囲）1 基のコンパクトな構成である。以後、古墳時代の遺構は確認できない。

(6) 古代（6 世紀～8 世紀）

この時期の遺構は、土坑 4 基が遺跡の北端部分で確認されているのみである。07Aa 北区 010SK・同区 011SK・07Ab 南区 080SK・同区 081SK は土壤墓の可能性があり、墓域が展開したと推定したい。

(7) 中世～近世

中世の山茶碗・小皿や近世の土師器・陶磁器等が出土した溝や土坑がある。この時期の遺構は、遺跡の北端から南端までひろがり、所属時期を確定できるものが多い。溝ではほぼ東西方向に流れるものとや東に振れる南北方向の溝やや北に振れる東西方向の溝があり、全体ではやや北や東に振れる溝の方が近世以前にさかのぼる時期のものと考えられ、ほぼ東西方向に流れる溝などは近代以後のものを含む。土坑も中世の陶器・土師器が出土するものもあるが、近世以後に掘削されたものが多いように思われる。

第 2 節 弥生土器・土師器・陶磁器の出土分布

次に今回出土した弥生土器・土師器の出土分布から、遺跡の営みの展開を検討したい。

(1) 方法

出土遺物のカウントは発掘調査において遺物を取り上げた箇所（同一遺構・同一グリッドの包含層において複数の取り上げがある場合がある）毎に、弥生土器・土師器の時期のわかる破片数を時期ごとにカウントしたもので、11 点以上（図中では★マーク）、6 点～10 点（図中では○マーク）、3 点～5 点（図中では●マーク）、1 点～2 点（図中では▲マーク）で、それぞれ 1 つのマークを調査区ごとに計上したものである（第 2 表）。

(2) 各時期の出土傾向

A 期の出土遺物は出土箇所が比較的多く、県道西側

の 07Ca 区～07Cc 区と県道東側の 0707Ia 区・07Ib 区・07Id 区・07Ie 区・07Ja 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Aa 区・07Ab 区・07Bb 区・07Cd 区・07D 区・07Fb 区と県道東側の 07Ha 区・07Ic 区・07Jb 区・07Jc 区においても少量の出土箇所がみられる。B 期の出土遺物も出土箇所が比較的多く、県道西側の 07Bb 区・07Ca 区～07Cc 区と県道東側の 07Hb 区・07Ia 区・07Id 区・07Ie 区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の 07Aa 区～07Ac 区・07Cd 区・07D 区と県道東側の 07Ha 区・07Ib 区においても少量の出土箇所がみられる。C 期の出土遺物も出土箇所が比較的多く、県道西側の 07Ab 区・07Bb 区・07Ca 区～07Cc 区と県道東側の 07Ha 区・07Ib 区・

第2表 弥生土器・土師器・陶磁器の出土傾向（上段：県道西側地点 下段：県道東側地点）

調査区・時期	A期	B期	C期	D期	E期	F期	古代	中世	近世以後
07Aa区	▲1	▲1	▲1	○1,▲5		▲1		▲4	
07Ab区	▲1	▲5	★5,○2,●4,▲21	▲2	▲2		○2,▲3	▲3	▲3
07Ac区		▲1	▲1	▲4			▲3	★1,○3,●1,▲3	★1,○2,●2,▲2
07Ba区				▲1					
07Bb区	▲3	○1,●4,▲11	●5,▲15	●1,▲14	▲2	▲1		●1,▲4	○1,●1,▲4
07Bc区			▲2	▲2					▲2
07Ca区	○2,●11,▲21	●5,▲27	○2,●4,▲12	○4,●18,▲54	●2,▲17	●1,▲2		▲3	▲2
07Cb区	●1,▲28	●3,▲38	○1,●5,▲31	★3,○22,●38,▲66	○1,●2,▲8	▲1		○1,●1,▲3	▲4
07Cc区	○4,●21,▲105	○1,●16,▲94	●2,▲46	★1,○23,●55,▲189	○1,●7,▲29	▲6	▲3	●1,▲7	○1,●6,▲10
07Cd区	▲1	▲6	▲1	○1,●7,▲15			▲3		
07D区	▲3	●1,▲1	▲2	★2,●2,▲3					
07E区								▲1	
07Fa区									
07Fb区	▲1		▲1	▲2					
07Fc区									

＊A期：弥生時代中期前葉、B期：弥生時代中期中葉前半、C期：弥生時代中期中葉後半、D期：弥生時代中期後葉、E期：弥生時代後期。

F期：古墳時代前期前半、古代：須恵器・灰釉陶器・古代土師器、中世：山茶碗・小皿・中世土師器、近世以後：施釉陶器・磁器・近世土師器など

＊＊1カ所からの時期別の土器・陶器・磁器などの出土点数を★：11点以上、○：6点～10点、●：3点～5点、▲：1点～2点のマークにより表示した。

調査区・時期	A期	B期	C期	D期	E期	F期	古代	中世	近世以後
07Gg区									
07Gb区			▲1	▲1	▲2	▲1	●3,▲8	★2,●4,▲15	★1,○3,●2,▲8
07Ha区	▲3	▲3	●6,▲5	○3,●3,▲7				▲4	▲5
07Hb区		○1,▲4	★2,○1,●1,▲4	○1,●3,▲2			▲1	▲3	●2,▲2
07Ia区	★2,○2,●4,▲21	★1,○1,●3,▲13	●6,▲20	★7,○1,●7,▲75	●1,▲3	▲1	▲2		★1,○1,▲3
07Ib区	○1,▲3	▲2	▲1	●1,▲2				●1,▲2	★1,○1,▲1
07Ic区	▲1				▲1				
07Id区	○2,●8,▲17	●5,▲26	○2,●7,▲41	★8,○12,●9,▲40	★5,○11,●6,▲14	●1,▲13	●5,▲15	●7,▲15	★6,○7,●3,▲7
07Ie区	★2,○1,●1,▲7	●1,●2,▲6	●1,▲5	★3,▲4			▲3		▲2
07Ja区	★2,●1,▲3			▲1					
07Jb区	▲2								
07Jc区	▲1								

＊A期：弥生時代中期前葉、B期：弥生時代中期中葉前半、C期：弥生時代中期中葉後半、D期：弥生時代中期後葉、E期：弥生時代後期。

F期：古墳時代前期前半、古代：須恵器・灰釉陶器・古代土師器、中世：山茶碗・小皿・中世土師器、近世以後：施釉陶器・磁器・近世土師器など

＊＊1カ所からの時期別の土器・陶器・磁器などの出土点数を★：11点以上、○：6点～10点、●：3点～5点、▲：1点～2点のマークにより表示した。

07la区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の07Aa区・07Ac区・07Bc区・07Cd区・07D区・07Fb区と県道東側の07Gb区・07Ib区・07Ie区においても少量の出土箇所がみられる。D期の出土遺物は出土箇所・出土量とともに最も多い。県道西側の07Aa区・07Bb区・07Ca区～07Cd区・07D区と県道東側の07Ha区・07Hb区・07Ia区・07Id区・07Ie区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の07Ab区・07Ac区・07Bc区・07Fb区と県道東側の07Gb区・07Ib区・07Ja区においても少量の出土箇所がみられる。E期の出土遺物は出土箇所・出土量が少ない。県道西側の07Ca区～07Cc区と県道東側の07Id区において弥生土器の出土頻度が高く、県道西側の07Ab区・07Bb区と県道東側の07Gb区・07Ia区・07Ic区においても少量の出土箇所がみられる。F期の出土遺物は出土箇所・出土量が少なく、県道東側の07Id区において土師器の出土頻度が高いが、その他の調査区では県道西側の07Aa区・07Bb区・07Ca区～07Dcc区と県道東側の07Gb区・07Ia区において少量の出土箇所がみられるのみである。古代の出土遺物は出土箇所・出土量が少なく、県道東側の07Gb区・07Id区において須恵器と土師器の出土頻度が高く、その他では県道西側の07Ab区・07Ac区・07Cc区・07Cd区と県道東側の07Hb区・07Ia区・07Ie区においても少量の出土箇所がみられる。中世の遺物は出土箇所・出土量がやや少なく、県道西側の07Ac区・07Cb区・07Cc区と県道東側の07Gb区・07Id区において山茶碗・小皿・土師器の出土頻度が高く、県道西側の07Aa区・07Ab区・07Bb区・07Ca区・07Fa区と県道東側の07Ha区・07Hb区・07Ib区においても少量の出土箇所がみられる。近世以後の遺物では出土箇所・出土量が比較的多く、県道西側の07Ac区・07Bb区・07Cc区と県道東側の07Gb区・07Ia区・07Id区において陶磁器・土師器の出土頻度が高く、県道西側の07Ab区・07Bc区・07Ca区・07Cb区と県道東側の07Ha区・07Hb区・07Ib区・07Ie区においても少量の出土がみられる。

(3) 小結

以上の出土遺物の出土頻度の分析から、全体に調査区が狭く、近年の開発により遺構の残存状態が悪

い07Ba区・07Bc区・07Fc区・07Gb区・07Jb区・07Jc区を除くと、A期には県道西側の07Ca区～07Cc区と県道東側の07Ia区～07Ja区を中心出土頻度が高いが、B期には出土頻度の高い範囲が県道西側の07Bb区から07Cc区までと県道東側の07Hb区から07Ie区までの範囲になり、A期に比べて北側に広がる。C期には出土頻度の高い範囲が県道西側の07Ab区から07Cc区までと県道東側の07Ha区から07Ie区までの範囲になり、B期に比べてさらに北側に広がる。D期には出土頻度の高い範囲が県道西側の07Aa区から07D区までと県道東側の07Ha区から07Ie区までの、出土頻度の高い範囲がC期に比べてさらに北側に広がる傾向がみられる。続くE期には出土頻度の高い範囲が県道西側の07Ca区～07Cc区と県道東側の07Id区のみの範囲になり、出土頻度の高い範囲が小さくなる。F期では出土頻度の高い範囲が07Id区のみとなり、さらに広がりがなくなる。古代から近世以後にかけては県道西側の07Ab区・07Ac区・07Cb区・07Cc区と県道東側の07Gb区・07Id区を中心出土頻度の高い範囲が広がっていく傾向が見られる。

よって、弥生時代のA期からD期にかけては全体に07Ca区～07Cc区・07Ia区～07Id区を中心北に遺物の出土頻度の高い範囲が広がり、E期からF期にかけて急速にその範囲が小さくなる。また07Ac区や07Ib区・07Ic区のように、遺物の出土頻度の高い範囲の中にありながら、弥生時代を通じて出土頻度が低い地点がある。これらの出土傾向はおおよそ、先に分析した遺構変遷と同様の傾向を示すようであるが、遺物の出土傾向では遺構の少ないA期からC期においても遺物の出土頻度が高い地点では、人々の営みが盛んに行われたことを示すものであり、D期における遺構の広がりと近い状況がうかがえる。また遺構がなく出土遺物の少ない07Aa区～07Ac区・07Ha区などの遺跡の北側においても、A期の比較的早い時期から人々の営みが少しあは存在した可能性が高いことを示している。この点ではE期・F期の遺構・出土遺物の少ない時期においても、同じことを示すように思われる。一方、古墳時代の遺構・遺物のない時期を経て古代以後は、再び人為的営みが広がっていく傾向がうかがわれる。

第3節 石器の出土分布

次に今回出土した石器の出土分布から、遺跡の営みの展開を検討したい。石器の出土分布を調査区ごとに計上したもののが第3表である。

(1) 各石器の出土傾向

磨製石器には磨製石斧、管玉、磨製石剣、石包丁がある。磨製石斧は、両刃石斧と柱状片刃石斧、扁平片刃石斧を合計した点数であるが、県道西側の07Cc区の20点と07Id区の7点が多く、他に07Bb区に1点、07Cb区に3点、07Cd区に1点、07D区に1点出土しており、07Cc区と07Id区に出土の中心がみられる。その他には磨製石剣は07Cc区にて2点、石包丁は07Cb区に1点、管玉は07Cc区において1点出土している。

礫石器には凹み石・敲石・磨石・砥石がある。凹み石・敲石は07Cc区に12点と多く、07Bb区・07Ca区の5点、07la区の5点、07Cb区の3点と07Cc区の北側の調査区において比較的多く出土しており、その他に07Ab区・07Id区・07le区に1点ずつ出土しており、遺跡の北側と多数出土した07Cc区の南東側にも少量の出土がみられる。磨石は07Cc区に9点と多く、07la区の4点と07Ca区の3点、07Cb区の3点が比較的多く、その他に07Ab区の1点、07Bb区の2点、07Cd区の1点、07Gb区の1点、07Id区の1点と07Ca区～07Cc区と07la区に分布の中心があり、遺跡の北側にも少量の出土がみられる。磨石は凹み石・敲石より出土点数は少ないが類似する出土傾向をもつ。砥石は07Ca区が4点、07Id区が3点とやや多く、07Cc区が2点、07Bb区・07Ca区・07Cb区・07la区・07le区が1点ずつと各調査区の出土点数は1点～4点であり集中して出土する地点ではなく、他の礫石器の出土地点とも重なるが遺跡の北側において出土例がない。他には明確な粗製剥片石器が07Cc区において1点出土している。

打製石器には打製石鐵、打製石錐、押圧剥離加工品、両極石器、両極剥片がある。この中で押圧剥離加工品と両極石器、両極剥片は両極打撃による打製石器製作の痕跡である。打製石錐（未製品を合わせて）は07Cc

区に22点と多く、07Id区の11点、07Cb区の7点、07la区の6点と07Cc区付近の地点が比較的多く、その他に遺跡の北側の07Gb区に1点ずつ、07Ca区に3点、07Hb区・07lb区・07lc区・07Ja区に1点ずつ出土しており、07Cc区と07Id区に出土分布の中心があるが、遺跡の比較的広い範囲から出土している。打製石錐は07Cb区・07Cc区が3点ずつ、07Bb区が2点、07Id区が1点と07Cb区・07Cc区を中心に比較的狭い範囲から少量出土している。押圧剥離加工品は07Cc区に20点と07Id区に13点と多く、その周辺にある07Ca区に7点、07Cb区に4点、07lb区に3点と比較的多く、その他に遺跡の北側の07Ab区に2点出土している。両極石器は07Cc区に19点と07Id区に11点と多く、その周辺にある07Ca区に3点、07Cb区に5点、07la区に6点、07lb区に3点と比較的多く、その他に遺跡の北側にある07Gb区に1点、07le区に1点、遺跡の南側にある07Ja区に1点出土している。両極剥片は07Cc区に39点と07Id区に17点と多く、その他に07Bb区に3点、07Ca区に5点、07Cb区に1点、07Cd区に2点、07Hb区に2点、07la区に1点、07lc区に2点と少量ずつ出土している。

(2) 小結

以上の石器の出土分布の分析から、磨製石器・礫石器・打製石器・打製石器の未製品・加工途上品は、基本的に調査面積でも多い07Cc区・07Id区に多く、07Bb区・07Ca区・07Cb区・07la区に比較的多く、その周辺の調査区に少量出土する傾向があり、遺跡の北側にある07Aa区・07Ab区・07Gb区などや遺跡の南側にある07Ja区においても少量出土している。しかし、今回の発掘調査地点における石器の出土状況から、07Cc区における石器出土点数が明らかに多く、生活・木材加工・石器製作など活動の中心は、07Cc区を中心に行われたものと考えられる。ただし、磨製石器・礫石器・打製石器は遺跡内における疎密はあるが遺跡全体から出土していることから、これらの活動は遺跡の中心部だけではなく、あらゆる地点において行われていたことを示している。

第3表 石器の出土傾向（上段：県道西側地点 下段：県道東側地点）

調査区・器種	磨製石斧	凹み石 敲石	磨石	砥石	打製石鐵	打製石錐	押圧剝離 加工品	両極石器	両極剥片	その他
07Aa 区	1									
07Ab 区		1	1				2			
07Ac 区										
07Ba 区										
07Bb 区	1	5	2	1		2			3	
07Bc 区										
07Ca 区		5	3	1	3		7	3	5	
07Cb 区	3	3	3	4	7	3	4	5		石包丁 1
07Cc 区	20	12	9	2	19(3)	3	20	19	39	磨製石刀 2・曾玉 1・石包丁? 1
07Cd 区	1		1							2
07D 区	1									
07E 区										
07Fa 区										
07Fb 区										
07Fc 区										

*磨製石斧は、両刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧の合計した点数

**凹み石・敲石は、敲石のみのものも合計した点数

***打製石錐にある（）内の点数は、打製石錐未製品の点数

調査区・器種	磨製石斧	凹み石・敲石	磨石	砥石	打製石鐵	打製石錐	押圧剝離加工品	両極石器	両極剥片	その他
07Ga 区										
07Gb 区			1		1			1		
07Ha 区							1			
07Hb 区					1		1			
07Ia 区	5	4	1	6			6	1		
07Ib 区				(1)		3	3			
07Ic 区				1					2	
07Id 区	7	1	1	3	9(2)	1	13	11	17	粗製剥片石器 1
07Ie 区	1			1				2		
07Ja 区					1			1		
07Jb 区										
07Jc 区										

*磨製石斧は、両刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧の合計した点数

**凹み石・敲石は、敲石のみのものも合計した点数

***打製石錐にある（）内の点数は、打製石錐未製品の点数

第4節 遺構・出土遺物の分布と地形環境

先に分析した遺構分布から弥生時代の遺構変遷についてまとめた。これらの遺構分布の元となる古地形の分析を行い、先に分析した弥生時代の各時期における遺構分布との対応関係を考えたい。

（1）弥生時代以前の旧河道の痕跡

本節では、発掘調査において遺跡基盤層の堆積状況を南北に確認できた県道東側の堆積構造から上方細粒化の傾向を示す堆積を自然による旧河道（旧路路）の1単位として考え、その単位を抽出する。

まず、確実に旧河道として確認できたのは、07Gb 中区 043NR で南東から流れてきた路路の潤付近にあたり、県道付近にて流れを西南方向に変えて流れる自然河道が復元できる。この 07Gb 中区 043NR の南側

の上端は確認できていないが、その南にある 07Ha 区北側において C 期に堆積したと考えられる中間色細粒砂層を同じ流路の堆積と考えることができる。このように考えると 07Gb 中区 043NR の南上端は 07Ha 区中程の 028SD の付近となる。

次にその他の旧河道と考えられる堆積は、07Gb 中区 043NR の堆積とほぼ同時に堆積したか、その前に堆積したと考えられる堆積が 07Ha 区南側にある 027SD 付近から南に下る中間色細粒砂と明色極細粒砂の堆積で、この堆積は 07Ia 区にて標高 9.50m の中間色粘土質シルトの上に堆積し、南側に下がる側方堆積がみられ、07Id 区南側の 028SK ~ 030SK 付近にて立ち上がる堆積である。その南側の遺跡基盤層の堆積は

明色極細粒砂と中間色極細粒砂の北に下る側方堆積が南に続く。名神高速道路の南では、07Ja 南区の中間色粘土シルトの高まりから北に下る中間色極細粒砂がみられ、その側方堆積の間に中間色細粒砂が一部入る状況である。しかし名神高速道路の南で県道西側の07E 区では、07E 区北端で南に下る中間色細粒砂の堆積である 07E 区 006NR を確認できており、近接して別の流路痕が確認できるという複雑な堆積構造が確認できる。

(2) 復元した地形環境と弥生時代の遺構の関係

(第89図～第91図)

以上の分析から今回の発掘調査地点では、弥生時代以前の旧河道が大きく 3 条確認できる。一つ目の流路は 07Gb 中区 043NR と考えられる南北 40m 前後の自然河道（南側上端は 07Ha 区中程あたり）、二つ目の流路は北側上端が 07Hb 区南側で南側上端が 07Id 区南端にある南北 125m 前後の自然河道、三つ目の流路は 07Ja 南区より北に下る自然河道で、この流路による堆積は 07Id 区付近の基盤砂層を形成した可能性がある（第89図～第91図に示した）。

この内、町屋遺跡の遺構が営まれた弥生時代中期前

半に同時存在した可能性が高いのは 07Gb 中区 043NR で、07Ha 区北側までが流路であった可能性が高く、その流れは県道西側の調査区において遺構が不明瞭な 07Ac 区^{註①} から 07Ba 区にかけて南西方向に流れていた可能性が高く、C 期までの遺跡南側の遺構が 07Bb 南区と 07Hb 区南側の辺りまでにしか分布しないことと、遺跡北側の C 期の遺構が 07Ab 区に分布することと関係するようである。また D 期に方形周溝墓の周溝と思われる溝などが確認できる 07Gb 南区・07Ha 区・07Hb 区は C 期の段階では、十分に埋没しておらず、D 期になって遺構形成が可能となつたのかもしれない。

次に A 期から B 期にかけての町屋遺跡の最も古い段階の遺構は、07Gb 中区 043NR 以前に流れていた 2 条の旧河道により堆積された微高地に形成されており、遺跡の変遷過程と整合する。また遺跡の北側にある 07Aa 区・07Ab 区・07Gb 区において A 期～C 期の弥生土器や打製石器・打製石器の未製品などが少量出土する点は、遺跡北側において、木曾川扇状地の基盤疊層が比較的高くある地点であり、弥生時代の早い時期から遺構形成が可能であったためと思われる。

第5節 町屋遺跡の全体像

これまでの報告と分析をふまえて、発掘調査により検出できた遺構と確認できた出土遺物の評価を行い、町屋遺跡の全体像を少し考えたい。

(1) 発掘調査で検出できた遺構の評価

先の分析により、各時代の遺構変遷を示し、出土遺物の出土傾向と発掘調査で確認できた遺構との関係を述べ、弥生時代の遺構については古地形の変遷との対応関係を明らかにした。これらから、遺跡における遺跡北側の 07Aa 区～07Ab 区・07Ga 区～07Gb 中区においては確実な遺構が確認できたのは C 期であるけれども、A 期・B 期にさかのぼって、少し人為的營みが存在したことを指摘した。また 07Gb 中区 043NR の変遷と関係する 07Ac 区・07Ba 区・07Ha 区・07Hb 区では、自然河道の埋没以後に方形周溝墓の周溝をはじめとする溝群が形成されたことを明らかにし、近代以後の開発による削平を除けば、大体の遺構の様相を推定できたものと思われる。また弥生時代の A 期～E 期に居住域が展開した遺跡中央付近の 07Bb 区・07Bc

区・07Ca 区～07Cd 区・07D 区・07Ia 区～07Ie 区では、A 期～C 期の遺構は少なく D 期の遺構が多数確認できているが、弥生土器の出土分布傾向からは A 期～C 期の弥生土器が出土する箇所（遺構など）も多く、より多くの遺構が存在した可能性が高いことを指摘した。遺跡南側の 07E 区・07Fa 区～07Fc 区・07Ja 区～07Jc 区においては、近世以後の開発による削平が激しく、遺構の残存状況が比較的良かった 07Ja 南区において弥生時代の遺構が確認できるのみであった。

次に町屋遺跡の中心の時期である弥生時代中期の状況について考えるために、弥生時代中期（A 期～D 期）の竪穴建物の分布状況について検討する。

弥生時代中期に属する竪穴建物の内訳は、(1) 07Ab 区で 2 棟、(2) 07Bb 南区で 2 棟、(3) 07Ca 中区・同南区で 6 棟、(4) 07Cb 北区・同南区で 7 棟、(5) 07Cc 区中央付近で 2 棟、(6) 07Cc 区南側・07Cd 区で 2 棟、(7) 07D 北区で 1 棟、(8) 07Ia 北区で 1 棟、(9) 07Ia 南区で 2 棟、(10) 07Id 区北端で 2 棟、(11) Id

区南端で2棟、(12) 07Ja 南区で1棟である（第89図～第91図）。

これらは、調査区の制約から遺構のごく一部しか検出できていない。このような状況で、今次発掘調査において竪穴建物跡の指標としたのは、方形で平らな底面があることと壁溝が伴うことであるが、例えば壁溝や柱穴は不詳ながら平らな底面のある方形遺構について、竪穴建物の可能性を指摘した遺構もある。そしてそれらのうちで方位が崩いかつて1辺が4～5m前後の規模が想定されるものを組み合わせて、竪穴建物跡とみなしている。時にはそれが隣接調査区どうしで見出される場合や、逆に隣接調査区では削平されて続きの部分が残存していなかった場合もある。

今次発掘調査において、良好な検出状況の竪穴建物群は(5)のみである。(5)では2棟が一部重複しつつ検出されているが、これに似た状況が(1)・(2)・(6)～(12)で看取される。このような検出状況の中では(3)・(4)の6～7棟という検出数が多い印象がある。その反対に(3)・(4)に近接する07Cc区北半部や07Ib北区・07Ib南区北側において、E期（弥生時代後期）の大型方形周溝墓造営による削平が影響しているとはい、竪穴建物の「無検出区域」は極端な差に感じられる。しかし07Ca区～07Cd区・07Ia区～07Ie区の地点は先の古地形の推定では大きな凹地とは考えられないことから、(3)・(4)に該当する07Ca中央区～07Cb南区では後世の削平・搅乱が少なく、比較的上位（標高10.3～10.5m）で遺構検出が可能であったのに対し、07Cc区北半部での遺構検出面が標高10.2mとやや低くなっていることが大きく関係しているものと考えたい。したがって遺構の残存状況さえ良ければ、(5)近辺においても、より多数の竪穴建物が検出されたと考えられる。また検出された弥生時代中期の竪穴建物の内、A期の07Ja南区008SB、B期の07Ia南区086SBの1棟、B期～C期と思われる07Bb区035SB・043SB、C期の07Id区038SBを除くと他はD期の竪穴建物であり、A期～C期の竪穴建物がD期の竪穴建物の周囲、先の(1)・(2)・(8)・(11)・(12)の地点で確認できている。弥生土器の出土傾向では、D期の竪穴建物が密集して分布する(3)～(7)・(9)～(11)の地点にも多数のA期～C期の弥生土器が出

土しており、土坑などの遺構はD期の竪穴建物と重複するものと、その付近にて確認された。このことから、A期～C期の竪穴建物がD期の竪穴建物が確認された地点にも本来は重複して存在した可能性が高く、A期～C期に属する竪穴建物のある程度数はD期の竪穴建物の形成により消滅し、さらに中世以後の開発などによる削平によりほとんど消滅するに至ったものと考えられる。

さて、竪穴建物が多数検出されたD期の居住域について考えると、確認できた竪穴建物は短辺が3m前後で長辺でも4m～5m前後のものがほとんどである。07Ia南区において確認できた07Ia区127SB・同区133SBなどは短辺が2m前後の遺跡の中では最も小型の竪穴建物である。一方で長辺が6m前後をかかると思われる竪穴建物は(7)の地点にある07Cc区094SB・同区097SXのみであり、調査地点の中では(7)の地点に居住域のやや中心的部が推定できる。そして出土遺物の中で竪穴建物に重複する07Cc区123SKから鳥形土器(E07Cc121)があり、磨製有柄式銅劍形石剣(S07Cc148)や管玉(S07Cc105)は07Cc区094SB・同区097SXから北東5m内の隣接する地点で出土していることからも、この地点の居住者が一定の文化的先導者の性格をもつものであったと想定したい。同様なことは竪穴建物が確認できていないが、07Cc区北半部からも磨製石剣(S07Cc002)が1点出土していることからこの付近にもそのような存在があった可能性がある。

(2) 出土遺物の評価

弥生土器では、全体には出土量が少なく、遺構の時期を決定するにも困難がある程であり、弥生土器のみの分析は今回行わなかったが、本章において出土傾向の分析を行った。

そのような状況ではあるが特に興味深いものとして、まずC期に属する07Ha区出土の櫛条痕調整施文の内傾口縁高杯(E07Ha004)と双口壺(E07Ha005)があげられる。これらは、弥生時代中期の濃尾地域に盛行する櫛条痕調整をする深鉢と関連が深いものであり、E07Ha004の脚部下端に布目压痕が残る点は深鉢との関係からも貴重な成果と思われる。またこの2点の弥生土器が旧河道の埋没過程の中で、据えられたよう

に出土したことも特異な出土状況である。その他に希少な土器として先に触れた鳥形土器(E07Cc121)はD期の居住域の中心付近にあたる居住者の使用が想定され、土製品では07Cb区285SB出土のD期の小鉢(E07Cb025)や07Id区にて出土した沈線による装飾がある鉢車(E07Id052)なども居住域の中心部分に関連する可能性がある。

一括で出土したものとして、07Cc区050SK・同区051SK・同区055SKは連続して埋没したものであり、一連の遺構とも考えられる。この上坑からはA期の弥生土器で報告した貝殻施文・調整の太頭壺や甕などが多数出土し、その中にB期の弥生土器で報告した少数の櫛施文の太頭壺・細頭壺があり、B期初頭の一括資料とも考えられるものである。今後、弥生土器の地域性の研究などにも利用できる資料と思われる。

石器についても、弥生土器などと同様に出土傾向を分析し、磨製石器・礫石器・打製石器が07Cc区を中心とし、その周辺の07Ca区・07Cb区・07Ia区～07Id区に比較的多く、遺跡の北側の07Aa区・07Ab区・07Gb区や遺跡の南側の07Ja区にも少量ではあるが分布域が広がる傾向がうかがえ、これらの石器に関する営みも07Cc区を中心とするものの、遺跡のあらゆる地点において行われた可能性が高い。この中で管玉と磨製石剣は、07Cc区の南端部において出土していることから、磨製石剣の推定できる所属時期からD期の居住域の中心部に近い居住者との関係を想定できた。この磨製石剣2点は他の弥生時代の集落遺跡においても出土点数の少ないものであり、そのうちS07Cc148是有柄式銅劍を模倣したと考えられるものである。他に一宮市博物館寄託資料に同様な磨製石剣があり、町屋遺跡の代表的な遺物といえる。

今回の発掘調査では本製品は出土していないが、弥生時代中期の07Cb区248SB・同区250SK・同区253SB・同区272SK・同区322SX・07Cc区028SB・同区051SKから炭化材が1点～数点ずつ出土しており、竪穴建物の中には焼失した時のものがある可能性が高い。

また07Cc区028SB・同区031SK・同区051SK・同区086SK・07Id区006SBなどでは、遺構の層位ごとに土糞袋により土壤を持ち帰り洗浄したものから、

淡水魚を中心とした小骨が各層から1点～17点ずつ出土した。またこれと同時に07Cc区051SKと07Id区006SBからは炭化米が確認できた。これらは弥生時代中期の町屋遺跡の人々の食生活を考える上で貴重な資料になるものと思われる。

他にも土壤洗浄に伴って07Cc区051SKからはベンガラ粒が少量確認できた。弥生土器などの施文や他の営みに用いられたものと考えられる。

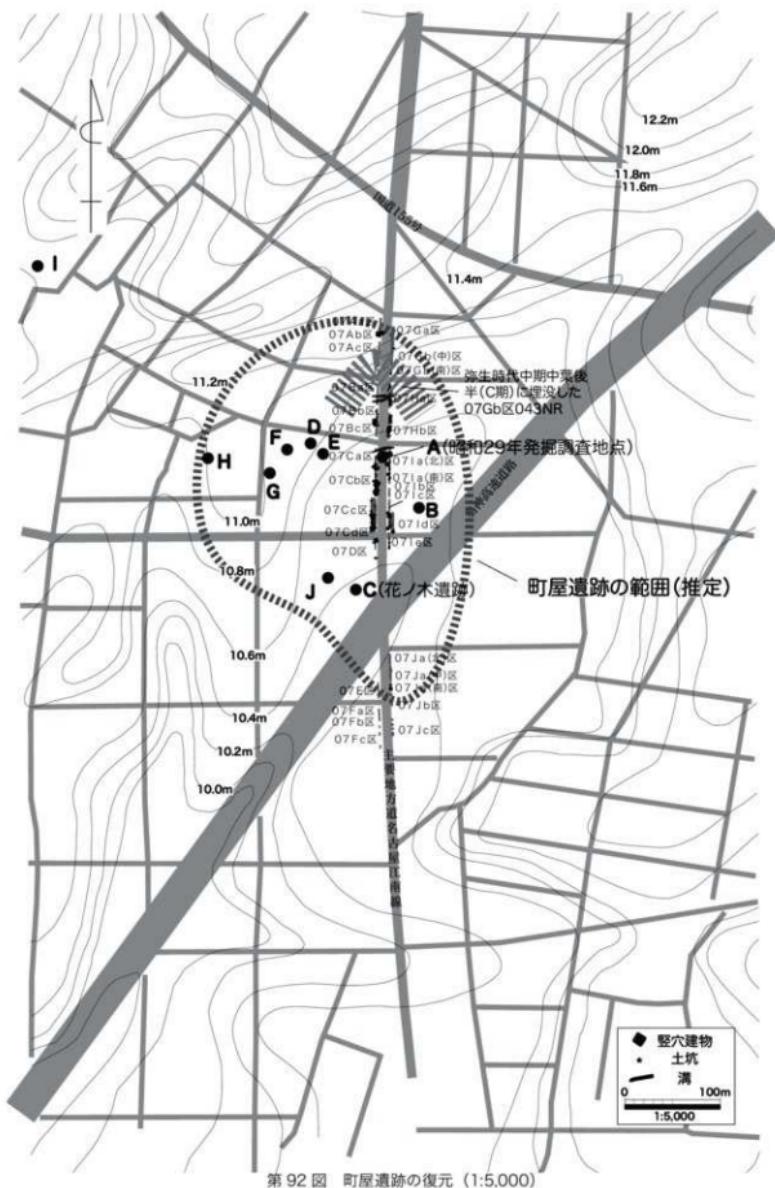
(3) 町屋遺跡の全体像

最後に今回の発掘調査による成果とこれまでの町屋遺跡の考古学的調査成果を合わせて、町屋遺跡の全体像を検討したい。

そこで町屋遺跡の景観を考えるために、現在の調査地付近の表層地形解析のため等高線図を作成し、これまでの考古学的調査地点などと今回の発掘調査の情報を合成した(第92図)。等高線図の作成には、愛知県一宮市発行の「都市計画図(1/2500)」と岩倉市発行の「都市計画図(1/2500)」にプロットされた標高値を用いた^{註4}。

現在の表層地形では、町屋遺跡周辺は木曾川扇状地の扇端(標高10mライン)に位置する地域にあたり、木曾川扇状地の傾斜に沿った北東から南西方向とは別にはほぼ北から南にむかう谷地形が多くみられる。また表層地形の基盤をなす砂礫層は遺跡周辺の比較的高所において確認でき、今回の発掘調査においても、遺跡北側の07Aa区や07Ga区、07Gb北区・同中区などでは盛土(表土)直下の遺構面上に砂礫層が露出する部分がみられた。町屋遺跡周辺の表層地形は今回の発掘調査地点の中程を北東から南西にはじる名神高速道路に沿って大きな谷地形があり、その北側微高地は先に述べた遺跡北側の07Aa区～07Ac区・07Ga区～07Gb中区がある北東から南西にのびる微高地で、この微高地が発掘調査地点の北西150mの地点にて南西にさらにのびる微高地と発掘調査地点の西150mをほぼ南北にのびる微高地に分かれ、発掘調査地点の西を南にのびる微高地は名神高速道路付近に至る。谷地形の南側の微高地は岩倉市鈴井町を南北にのびる微高地で、発掘調査地点の南端部付近に枝分かれ状にのびる部分がみられる。

次に町屋遺跡においてこれまでに調査・遺物が採集



第92図 町屋遺跡の復元 (1:5,000)

第1表 町屋遺跡の発見・調査歴

地点	地点詳細	調査・発見日	出土遺物	その他	文献
A	字花の木 1619番地	昭和 29年 8月 26日～同年 8月 28日	貝田町式春・櫛、寄道式春・櫛・高杯・鉢など	調査指導は橋崎彰一氏	千秋村史編纂委員会編・発行 1956『町屋遺跡』『千秋村村史』
B	字花の木_07区の東 20m 地点付近	昭和後期	軸形壺・赤彩広口壺	長谷川稔氏所蔵資料	本報告書付論 3 参照
C	花の木遺跡、07D区の南西 100m 地点付近	昭和 36年の土取りの際	弥生中期の春・深鉢・櫛	安達厚三氏採集	大參義一・岩野見司 1967『花ノ木遺跡』『新編一宮市史資料編二 弥生時代』一宮市
D	字北坪 1435番地	昭和 10年 3月下旬頃と昭和 10年 5月頃と昭和 13年 5月上旬頃	石劍?・石盾? (石小刀か)・敲石	梶田不二男氏採集 (梶田氏は地点 D～地点 G付近に於いて石器 500点以上、弥生土器 100点以上他にも採集された)	梶田不二男 1941.6『丹羽郡千秋村二於ける遺物』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収
E	字北坪 1432番地	昭和 6年 7月上旬頃	打製石斧・磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6『丹羽郡千秋村二於ける遺物』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収
F	字北坪 1438番地	昭和 2年 5月中頃	磨製両刃石斧	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6『丹羽郡千秋村二於ける遺物』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収
G	字北坪 1430番地	昭和 10年 5月上旬頃と昭和 13年 10月上旬頃	勾玉・管玉・臼玉・磨製石斧・敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6『丹羽郡千秋村二於ける遺物』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収、坂重吉 1941.6『丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収
H	字北坪 1398番地	昭和 13年 11月上旬	弥生時代中期・土鍬・球?	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6『丹羽郡千秋村二於ける遺物』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収
I	字北目保 1222番地	昭和 10年 5月中旬	敲石	梶田不二男氏採集	梶田不二男 1941.6『丹羽郡千秋村二於ける遺物』『濃尾の遺跡と遺物』第 29号、復刻版中巻に所収
J	07D区の南西 100m 地点付近、地点 C の北側畠地	昭和後期～平成	弥生時代中期～後期の弥生土器片多数、磨製石斧・敲石・凹み石・砾石・石小刀・打製石鏡・打製石鎌など多数	安藤春雄氏採集	本報告書付論 3 参照

されたもので、確認できるものを示したものが第1表で、現在の表層地形の等高線図(第92図)にも第1表にある地点 A～地点 Jの地点を落とした。第94図を見ると、昭和 29年に千秋村史編纂委員会により発掘調査された地点 Aは07Ca区の東側地点にあたり、貝田町式と寄道式の弥生土器が出土する調査成果は、今回の発掘調査成果とも整合性がとれており、紅村弘氏により『東海の先史遺跡』に紹介された町屋遺跡長谷川政エ門氏所蔵資料にある弥生土器の構成と対応している。長谷川政エ門氏所蔵資料は字北ノ坪と字花ノ木において採集されており、特に字花ノ木内にて多數採集されたようであり、この長谷川政エ門氏所蔵資料は地点 Aから地点 Bの長谷川氏所蔵資料の採集地点付近の採集遺物と推定することができる。その他の梶田不二男氏採集資料は昭和 2年から昭和 13年頃に主

に採取された資料で、地点 Iを除くと地点 D～地点 Jは、字北ノ坪地内の07Ca区～07Cb区の西150m程の地点付近で多數採取されたようである。地点 D～地点 Jは、今回の発掘調査地点の約150m西を南北にのびる微高地の北側の地点にあたり、これらの出土遺物から弥生時代中期の集落域が存在した可能性も示されるものである。長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料の磨製有柄式銅劍形石劍は地点 D～地点 G付近にて採集されたものである。地点 Cと地点 Jは07D区から南西100m程の地点の畠地であったところの採集資料で、地点 Cは『新編一宮市史資料編二』にある花ノ木遺跡である。こちらも弥生時代中期を主体とする弥生土器と石器が多數確認されている。

これらの調査・発見による成果は、今回の発掘調査成果とおおむね整合性をもつが、梶田不二男氏と長谷

川政エ門氏による採集資料の中に遺跡の性格を考える上で興味深い点がある。一つ目として梶田不二男氏採集資料は地点 D ～ 地点 G の資料の中に石器が多数あつたことで、その中で磨製石斧などが比較的多くみられること、地点 G に勾玉と管玉が含まれていることである。このような石器の出土傾向は 07Cc 区における石器の出土傾向と類似し、この付近で長谷川昭三氏寄贈の磨製有柄式銅劍形石劍が採集されていることも重要である。二つ目として、長谷川政エ門氏所蔵資料の中に今回の発掘調査では出土していない磨製石鐵が 9 点紹介されていることである。これは弥生土器の中で弥生中期の壺類とともに紹介されている弥生後期前半と思われる壺や高杯の存在とともに貴重な記録である。弥生時代中期末から弥生後期前半にかけての時期に、地点 A から地点 B 付近（今回の発掘調査地点の 07Ca 区～ 07D 区・07Ia 区～ 07Ie 区にあたる地点）が遺跡の中心地の一つであったものと考えられる。

以上の分析から弥生時代の町屋遺跡の範囲は、北は 07Ab 区付近から南の 07Ja 区付近までの南北約 370m、東西は不明で推測を含むが東は地点 B から西の地点 H までの東西約 200m の範囲に広がる可能性が高い。この中で地点 A と地点 B である 07Ca 区～ 07D 区、07Ia 区～ 07Ie 区の付近と地点 D ～ 地点 G において、

居住域の中心部分としての機能が想定でき、遺跡の北側を流れていた 07Gb 中区 043NR の南側に弥生時代中期後半の C 期から D 期にかけて方形周溝墓からなる墓域が展開し、用水・区画溝などと思われる溝が多数掘削され營まれた。また弥生時代後期の E 期～ F 期には一辺 22m 前後の大型方形周溝墓が 1 基単独で形成されていたようであり、この段階の墓域の類例として貴重な成果と思われる。

註 1 付近在住の方によると、07Ac 北区北東側の現在県道となっている地点には夏になると自噴する泉があり、以前はそこから南方向の水田へ水を引いていたという。今回の発掘調査で確認された東西溝群・旧河道はその北側に位置し、先述した泉は標高 10.8 ～ 11.2m の等高線間隔の挟い地点に相当する。おそらく犬山城状地盤端にあたり、斜面地で地下水脈の露頭するところが泉になっていたのであろう。

註 2 現在の表層地形の解析と等高線図作成は愛知県埋蔵文化財センター鬼頭剛氏によるものである。

参考・引用文献

- 梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村二於ける遺物」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
坂重吉 1941.6 「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『濃尾の遺跡と遺物』第 29 号、復刻版中巻に所収
千秋村史編纂委員会編・発行 1956 「町屋遺跡」「千秋村村史」
大參義一・岩野見司 1967 「花ノ木遺跡」『新編一宮市史資料編二
弥生時代』一宮市

町屋遺跡出土土器の胎土材料

藤根 久・米田恭子（バレオ・ラボ）

1.はじめに

土器や土師器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。また、粘土自体に珪藻化石やプランクトン・オパール、放散虫化石が混在していることがあり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる場合がある。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したバレススタイル土器では、3分の1程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている（藤根、1998；車崎ほか、1996）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

町屋遺跡は、一宮市千秋町町屋に所在する青木川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡は、犬山扇状地の末端でもあり、現地表下約2mで基礎礫層がみられ、標高は約11mである。発掘調査では、弥生時代中期の堅穴建物跡約20棟と弥生時代後期と考えられる方形周溝墓5基のほかに、弥生時代以降の溝、古墳時代の河道、7世紀後半の土坑が検出された。ここでは、弥生時代中期～古墳時代前期の土器について、粘土材料の特徴を薄片法により検討した。

2. 試料と方法

試料は、壺29点、甕8点、深鉢8点、高环4点、鉢1点の合計50点である（第1表）。

分析方法は、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土

中の粘土および砂粒の特徴について調べた。

(1) 試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後スライドグラスに接着した。(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片（プレパラート）は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った（表2）。

なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

〔放散虫化石〕

放散虫は、放射板足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

〔珪藻化石〕

珪藻質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

〔骨針化石〕

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。このことから、骨針化石は水成環境を指標とする。

第1表 胚土分析を行った町原遺跡出土土器とその詳細

2番No.	曾根No. / 風形	種類	通幅	グリッド No.	特徴 (切削面の外観)	型式	時期
1	ハコ型直筒口縁付平底鉢	直付 II	47	4D/4	に小さい黒褐色 (10YR 6/4)	円田町式 (後半)	弥生時代中期前葉
2	(G044 大字直筒口縁付平底鉢)	直付 I	51(54)mm上 145SK	6D/2	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/3) ~ 内面部 黒褐色 (2S5Y 6/1)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
3	(G067 大字直筒口縁付平底鉢)	直付 I	51(54)mm上 145SK	6D/2	に小さい黒褐色 (10YR 7/2)	円田町式	弥生時代中期前葉
4	C-017 タキ繩文部	直付 I	50/51H	154	に小さい黒褐色 (10YR 7/2)	円田町式	弥生時代中期前葉
5	C-018 縄文太腹深鉢	直付 I	60/61	672	外面部 に小さい黒褐色 (7.5YR 7/3) ~ 内面部 黑褐色 (5Y 4/1)	円田町式 (後半)	弥生時代中期前葉
6	C-019 縄文太腹深鉢	直付 I	60/61	602/2	外面部 に小さい黒褐色 (7.5YR 7/1) ~ 内面部 黑褐色 (5Y 4/1)	円田町式 (後半)	弥生時代中期前葉
7	C-024 太腹鉢	直付 I	60/62	563	外面部 黑褐色 (2S5Y 6/2) ~ 内面部 黑褐色 (N 3/1)	円田町式	弥生時代中期前葉
8	A-0004 直筒口縁付平底鉢	直付 I	60/62	562/2g	に小さい黒褐色 (10YR 7/2)	円田町式	弥生時代中期前葉
9	A-0005 直筒口縁付平底鉢	直付 I	60/62	563	外底部に小さい黒褐色 (10YR 6/4) ~ 黑褐色 (5Y 4/1) ~ 陶質感・壊れ (7.5YR 4/6)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
10	A-0003 同前直筒口縁付平底鉢	直付 I	60/62	563	外底部に小さい黒褐色 (7.5YR 6/4) ~ 黑褐色 (5Y 6/1) ~ 陶質感・壊れ (7.5YR 7/3)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
11	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	20B8SD	1701S	外底部に小さい黒褐色 (7.5YR 6/4) ~ 黑褐色 (5Y 6/1) ~ 陶質感・壊れ (10YR 5/1)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
12	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	20B8SD 上層	1701S	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/2) ~ 黑褐色 (5Y 6/1) ~ 陶質感・壊れ (10YR 5/1)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
13	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202H	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/2) ~ 黑褐色 (5Y 6/1) ~ 陶質感・壊れ (10YR 5/1)	円田町式	弥生時代中期前葉
14	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202g	外底部 黑褐色 (2S5Y 6/2) ~ 内面部 黑褐色 (2S5Y 4/1)	円田町式	弥生時代中期前葉
15	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	118NR	507	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/4) ~ 黑褐色 (5Y 6/1) ~ 陶質感・壊れ (10YR 6/4)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
16	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	118NR	50202	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/3) ~ 黑褐色 (5Y 6/1) ~ 陶質感・壊れ (10YR 6/4)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代中期前葉
17	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	118NR	50202	外底部 黑褐色 (10YR 7/1) ~ 内面部 黑褐色 (N 5/1)	円田町式	弥生時代中期前葉
18	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	501SK	6011	灰白色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
19	田町式直筒口縫部	直付 I	031SD	50202	黄褐色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
20	田町式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	灰褐色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
21	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	灰褐色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
22	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	20B8SD	1702	外底部 黑褐色 (10YR 4/2)	円田町式	弥生時代後葉
23	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202H	外底部に小さい黒褐色 (10YR 5/3) ~ 黑褐色 (2S5Y 4/1)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代後葉
24	ハケ調量器	直付 I	034SK	6011	外底部に小さい黒褐色 (10YR 6/3) ~ 黑褐色 (N 4/4)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代後葉
25	田町式直筒口縫部	直付 I	118NR	50202	外底部 黑褐色 (10YR 6/6) ~ 黑褐色 (10YR 8/3) ~ 内面部 黑褐色 (5Y 4/1)	円田町式 (後半)・高尾式	弥生時代後葉～晩葉
26	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	118NR	50202	外底部 黑褐色 (10YR 7/4) ~ 黑褐色 (5Y 4/1)	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
27	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	18TSO	22	に小さい黒褐色 (10YR 7/2)	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
28	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	外底部 黑褐色 (10YR 5/1) ~ 陶質感・壊れ (10YR 5/1)	円田町式	弥生時代後葉
29	田町式直筒口縫部	直付 I	034SK	503	外底部 黑褐色 (10YR 4/2) ~ 黑褐色 (5Y 4/1)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代後葉
30	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	503	外底部 黑褐色 (10YR 4/1) ~ 黑褐色 (5Y 4/1)	円田町式	弥生時代後葉
31	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	503	外底部 黑褐色 (10YR 6/2)	円田町式	弥生時代後葉
32	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	503	外底部 黑褐色 (10YR 6/2)	円田町式	弥生時代後葉
33	内沟式直筒口縫部	直付 I	118NR	506	外白色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
34	内沟式直筒口縫部	直付 I	034SK	6011	灰白色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
35	内沟式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	灰白色	円田町式 (後半)	弥生時代後葉
36	田町式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/4) ~ 黑褐色 (10YR 5/2)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代後葉
37	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	外底部 黑褐色 (10YR 8/2) ~ 黑褐色 (5Y 4/1)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代後葉
38	北端文部 地式直筒口縫部	直付 I	034SK	50202	外白色 (2S5Y 8/2)	円田町式	弥生時代後葉
39	タキ繩文部	直付 I	18TSO	506	に小さい黒褐色 (10YR 5/3)	円田町式	弥生時代後葉
40	タキ繩文部	直付 I	1111SO	391	に小さい黒褐色 (10YR 6/3)	円田町式	弥生時代後葉
41	広口直筒口縫部	直付 I	1111SO	170	灰白色	円田町式	弥生時代後葉
42	角形広口直筒口縫部	直付 I	034SK	5010	外底部に小さい黒褐色 (10YR 7/4) ~ 黑褐色 (10YR 5/2)、サンドイッチ構造	円田町式	弥生時代後葉
43	山中式直筒口縫部	直付 I	50202	502	灰白色 (2S5Y 8/2)	円田町式	弥生時代後葉
44	山中式直筒口縫部	直付 I	50202	502	黄褐色 (2S5Y 6/1)	円田町式	弥生時代後葉
45	山中式直筒口縫部	直付 I	50202	502	に小さい黒褐色 (7.5YR 7/3)	円田町式	弥生時代後葉
46	山中式直筒口縫部	直付 I	50202	502	外底部に小さい黒褐色 (10YR 6/3) ~ 黑褐色 (10YR 5/1)	円田町式	弥生時代後葉
47	広口直筒口縫部	直付 I	50202	502	外面部 黑褐色 (10YR 8/2) ~ 黑褐色 (N 2/1)	円田町式	弥生時代後葉
48	内沟直筒口縫部	直付 I	034SD	5010	灰白色 (10YR 8/2)	円田町式	弥生時代後葉
49	内沟直筒口縫部	直付 I	034SD	5010	灰白色 (10YR 7/2)	円田町式	弥生時代後葉
50	S字口直筒口縫部	直付 I	034SD	5010	内外底部に小さい黒褐色 (10YR 5/6) ~ 黑褐色 (5Y 6/1)、サンドイッチ構造	円田町式	古墳時代中期前葉

〔植物珪酸体化石〕

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μm前後である。一般的にブラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

〔胞子化石〕

胞子は、直径約10～30μm程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壤中にも含まれる。

〔石英・長石類〕

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

〔長石類〕

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これら縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（バーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。バーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

〔雲母類〕

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

〔輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石がある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、

柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類の中にも産出する。

〔角閃石類〕

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃綠岩のようなケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

〔ガラス質〕

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（パブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

〔片理複合石英類〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。

〔砂岩質・泥岩質〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

〔複合石英類〕

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒なものから細粒なものまでさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.10mmのものを中型、0.10mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

〔斑晶質・完晶質〕

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

〔流紋岩質〕

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

〔凝灰岩質〕

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体

的に暗い粒子である。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察結果について述べる。

胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、おおまかな量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

i) 微化石類による材料粘土の分類

各土器の薄片全面の観察の結果、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数100 μm、珪藻化石が10～数100 μm、骨針化石が10～100 μm前後である（植物珪酸体化石が10～50 μm前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm以下、シルトが約3.9～62.5 μm、砂が62.5 μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会、1981）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、植物珪酸体化石を除く微化石類は、土器の粘土材料中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、
a) 海成粘土を用いた粘土、b) 淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の4種類の粘土に分類された（第2表）。第2表において、○は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

なお、海成粘土は、放散虫化石あるいは海水種珪藻

化石を含むが、淡水種珪藻化石は全く含まれていない胎土である。

a) 海成粘土（7試料）

これら土器胎土中には、放散虫化石あるいは海水種珪藻化石が含まれ、淡水種珪藻化石は全く含まれていなかった。また、骨針の化石が含まれていた。特に、分析No.42およびNo.43では、海水種珪藻化石Coscinodiscus属/Thalassiosira属が多産した。

東海地域では、新第三紀中新世の第1瀬戸内海の海進に伴って形成された東濃地域の瑞浪層群、三河地域の岡崎層群や設楽層群などが分布する（藤根、1998）。これらの地層粘土は、固結した地層であり、直接採取して土器の粘土材料に利用できる粘土ではないが、中新世以降に堆積した地層粘土として泥化して再堆積すると考えられ、基盤層として分布する地域では新しい地層中に放散虫化石や海水種珪藻化石が含まれている可能性がある。

また、第四紀後期更新世に形成された熱田層などでは、熱田海進（関東地方の下末吉海進に相当）に伴う海成粘土が堆積し、海水～汽水種からなる珪藻化石が豊富に含まれている（藤根、1998）。

b) 淡水成粘土（20試料）

これらの土器胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。このうち、分析No.3、No.18、No.20、No.25～30、No.47の粘土中には、安藤（1990）が設定した沼澤湿地付着生指標種群（O）や湖沼沼澤湿地指標種群（N）が特徴的に含まれ、湖沼沼澤湿地環境で堆積した粘土が用いられたと推定される。なお、湖沼沼澤湿地環境下の粘土で製作されたこれらの土器の器種は、9点が壺であり、1点（分析No.30）が甌であった。東海地域では、岐阜県東濃地域～瀬戸内海にかけて瀬戸層群（新第三紀後期中新世～鮮新世の古東海湖の堆積物）の良質の粘土が分布するが、これらの地層粘土中には珪藻化石が全くと言っていいほど含まれていない（藤根、1998）。また、濃尾平野の主に岐阜県側周辺部では、第四紀後期更新世に形成された段丘堆積物が見られるが、これら段丘堆積物中には珪藻化石が含まれていない場合が多い。

表2 町屋遺跡出土土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

第2表 町屋遺跡出土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

第2表 町屋遺跡出土土器胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴

第3表 土器胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分析 No.	器種	種類	粘土の特徴				砂粒の特徴				鉱物の特徴				植物 珪藻体 化石	備考	
			放 散 化 虫 化 石 海 石 水 種	球 藻 化 石 石 不 明 種	球 藻 化 石 石 不 明 種	骨 針 化 石	崩 分 類	片 岩 類	深 成 岩 類	堆 積 岩 類	火 山 岩 類	湖 底 岩 類	流 紋 岩 類	ジ ル コ ン	角 閃 石 類	輝 石 類	霞 母 類
1	高杯	水 成				△	Bc	○ ○ ○ △	△	△	△	△	△	△	△	△	△
2	壺	淡水成		△	○	Cb	○ ○ △	○	△	△	△	△	△	△	○	植物遺体含む	
3	壺	淡水成	△	○	○	○	Cb	○ ○ △	○	△	△	△	△	△	○	○	湖沼沿岸地成、植物遺体含む
4	壺	水 成				△	Cb	○ ○ ○	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	○	植物珪藻体化石多産（灰質混入か）
5	深鉢	淡水成	△	△	△	Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	イネ型短細柱珪藻体含む、植物遺体含む
6	壺	その他				Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	△	△	△	○	○	
7	壺	水 成		○		Cb	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	植物遺体含む
8	壺	水 成		△		Bc	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	植物遺体含む
9	深鉢	水 成		○		Bc	○ ○ ○	△		△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	植物遺体含む
10	壺	その他				Bc	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
11	壺	淡水成	△	△	○	Bc	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	砂粒付着層含む
12	壺	淡水成	△	○		Cb	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
13	壺	水 成		○	△	Cb	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
14	壺	海成	△	△		Cb	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
15	壺	水 成		△		Bc	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
16	壺	淡水成	△	△	○	Bc	○ ○ ○	△	△		△	△	△	△	○	○	
17	深鉢	淡水成	△	△	△	B	○ ○ ○	△		△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	
18	壺	淡水成	○	○	△	Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢湿地成、イネ類の珪藻体含む
19	壺	水 成				Cb	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	沼沢沿岸地成
20	壺	淡水成	○	○	△	Bc	○ ○ ○	○		△	△	△	△	△	○	○	沼沢沿岸地成
21	壺	その他				B	○ ○ ○	△		△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	
22	深鉢	水 成		○		C	△ △ △	△	△	△	△	△	△	△	○	○	
23	深鉢	淡水成	○	△		Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	
24	壺	水 成				A	○ ○ ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
25	壺	淡水成	○	○	△	Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢沿岸地成
26	壺	淡水成	△	○	○	△	Cb	○ ○ ○	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢湿地成
27	壺	淡水成	△	○	○	Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢沿岸地成
28	壺	淡水成	○	○	△	Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢沿岸地成
29	壺	淡水成	○	○	△	Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢沿岸地成、植物遺体多く含む
30	深鉢	淡水成	△	△		Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○	○	○	○	沼沢沿岸地成
31	深鉢	水 成				Cg	○ ○ ○	△		△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	○	
32	深鉢	水 成				Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	
33	壺	淡水成	△	○		Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体含む
34	壺	海成	△	△		Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	ガラスやや多く含む
35	壺	淡水成	△	○		Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体含む
36	鉢	淡水成	△	△	△	B	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	(沼沢湿地成)
37	壺	水 成	△	△	○	B	(○) ○	△		△	△	△	△	△	○	○	
38	壺	水 成		○	○	Bc	(○) ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	ガラスやや多く含む
39	壺	水 成		△	△	Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	
40	壺	水 成				Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体含む
41	壺	海成	△	△	△	B	(○) ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	
42	壺	薄成	○	○		Cd	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体多く含む
43	高杯	薄成	△	○		Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	
44	壺	海成	△	△		Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体含む
45	壺	水 成				Bc	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	
46	壺	海成	△	△		Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体含む
47	壺	淡水成	○	△	△	Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	沼沢沿岸地成、植物遺体含む
48	高杯	水 成		△	△	B	(○) ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	植物遺体含む
49	高杯	水 成				B	(○) ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	○	○	○	
50	壺	水 成				Cb	○ ○ ○	△	△	△	△	○ ○ ○	○ ○ ○	△	△	△	

c) 水成粘土(20試料)

これらの土器胎土中には、不明種珪藻化石または骨針化石が含まれていた。

d) その他粘土(3試料)

これらの土器胎土中には、堆積環境を指標するような珪藻化石または骨針化石は含まれていなかった。

ii) 土器胎土中の砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合

石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定することが困難となる。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第3表）。岩石の推定は、片岩質が片岩類（A/a）、複合石英類が深成岩類（B/b）、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類（C/c）、斑晶質・完晶質が火山岩類（D/d）、凝灰岩質が凝灰岩類（E/e）、流紋岩質が流紋岩類（F/f）、ガラス質または軽石質がテフラ（G/g）である。ただし、斑晶質・完晶質の多くは結晶度が低く、凝灰岩類に属する場合もある。推定した起源岩石は、第4表の組み合わせに従って分類した。以下に、胎土中の砂粒物の岩石組み合わせについて述べる。なお、第5表に器種と粘土の種類および砂粒組成の関係をまとめた。

第4表 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
单	a 片岩類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
b 深成岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga		
c 堆積岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb		
d 火山岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc		
e 凝灰岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd		
f 流紋岩類	Ae	B e	C e	D e	F e	G e		
g テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg		

1) 主に深成岩類からなるB群(8試料)

これらの胎土中の砂粒は、大型結晶から構成される複合石英類からなり、その他の起源岩石は少ない。

この岩石組成では、主に花崗岩が分布する地域を考えられ、東海地域では東濃地域～瀬戸内山地の花崗岩が広く分布する地域（過去の河川流域を含む）の砂粒組成と考えられる。

2) 主に堆積岩類からなるC群(1試料)

この胎土中の砂粒は、堆積岩類のほか、少量の火山岩類を含むことから、次に述べるCb群またはBc群に近い組成と考えられる。

3) 深成岩類を主として堆積岩類を伴うBc群または堆積岩類を主とし深成岩類を伴うCb群(39試料)

これらの胎土中の砂粒では、深成岩類と堆積岩類が特徴的であり、火山岩類や凝灰岩類あるいは流紋岩類を伴う場合が多い。このうち火山岩類あるいは凝灰岩類は、現木曾川の河川礫として見られる岩石である。一方、流紋岩類は、現木曾川や長良川など濃飛流紋岩類の分布域を流下する河川に見られる岩石である。今回の町屋遺跡は、木曾川流域に相当する地域であるため、今回の分析試料の7割以上の土器がこのBc群またはCb群の砂粒組成に該当したと考えられる。

4) 堆積岩類を主として火山岩類を伴うCd群(1試料)

この胎土中の砂粒は、堆積岩類や火山岩類のほか、深成岩類、少量の凝灰岩類や流紋岩類を含むことから、先のCb群またはBc群に近い組成と考えられる。

5) 堆積岩類を主としてテフラを伴うCg群(1試料)

この胎土中の砂は、深成岩類や凝灰岩類を伴うが、このうち凝灰岩類はテフラに付随する組成と考えられる。

このガラス質テフラを多く含む胎土は、明らかに地層中のテフラが混和したものであり、材料の調達地はテフラ層が分布する地域である。特に砂粒物の大部分がテフラで構成される場合はテフラが混和材であるが、テフラを混和材に用いたとされる土器は、東海地域のパレススタイル壺や千葉県市原市の長平台遺跡の弥生土器など各地に見られる（藤根、1986；管野ほか、2010など）。

iii) 土器胎土材料の特徴

土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a) 海成粘土を用いた粘土、b) 淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の4種類の粘土に分類された。

第5表 器種と粘土の種類および砂粒組成の関係

器種	海成				淡水成			水成				その他		総計	
	B	Bc	Cb	Cd	B	Bc	Cb	B	C	Bc	Cb	Cg	B	Bc	
壺	1	1	1	1				6	9	1	3	3	1	2	29
甕		1	1							1	2	3			8
深鉢					1	2	1			1	2				8
高杯										2	1				4
鉢								1							1
計	1	2	3	1	2	8	10	4	1	8	6	1	1	2	50

一方、岩石種の推定とその組み合わせから、砂粒は、
1) 主に深成岩類からなる B 群、2) 主に堆積岩類からなる C 群、3) 深成岩類を主として堆積岩類を伴う Bc 群または堆積岩類を主とし深成岩類を伴う Cb 群、4) 堆積岩類を主として火山岩類を伴う Cd 群、5) 堆積岩類を主としてテフラを伴う Cg 群、の 5 種類に分類された。

器種毎に見ると、壺では、淡水成および水成粘土であり、砂粒組成 Bc 群または Cb 群である胎土が 21 点であった。また、海成や水成またはその他粘土であり、砂粒組成 B 群の胎土が 3 点見られた。

甕では、海成および水成粘土を材料とした個体が多く、砂粒組成 Bc 群または Cb 群の胎土が 7 点であった。また、水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土が 1 点見られた。

深鉢では、粘土材料が淡水成および水成粘土で、砂粒組成 Bc 群または Cb 群の胎土が 5 点であった。その他は、淡水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土、水成粘土で砂粒組成 C 群の胎土、水成粘土で砂粒組成 Cg 群の胎土が各 1 点であった。

高环では、海成粘土で砂粒組成 Cb 群の胎土が 1 点、水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土が 2 点と Bc 群の胎土が 1 点であった。

鉢では、淡水成粘土で砂粒組成 B 群の胎土が 1 点であった。

これ以外の胎土の特徴について見ると、分析 No.4 の壺胎土中には、イネ科植物の葉身中に形成される植物珪酸体化石が特徴的に多く含まれていた。この胎土の粘土材料には微化石類に乏しい粘土が用いられており、有機質粘土のような植物起源の遺体を多く含む粘土とは異なる。本来、粘土に含まれるイネ科植物起源の植物珪酸体化石は少ないと考えられるため、これらの植物珪酸体化石はイネ科植物を焼いてできた灰質の混入に由来する可能性が考えられる。このように灰質物を胎土の除粘剤として混入する土器はとしては、数例の事例が知られている（藤根、1998）。

分析 No.34, No.38 の壺胎土などには、砂粒物の一部としてガラス質のテフラが多く含まれている。これらのテフラは、明らかに地層中に挟在するガラス質テフラであり、材料の調達地はテフラ層が分布する地域と考えられる。東海地域では、伊勢北部地域および南部地域、名古屋市東部地域、知多半島に分布する東海

層群中にテフラ層が挟在する（日本の地質「中部地方 II」編集委員会編、1988）。

なお、胎土中のテフラは、その屈折率を測定することにより対象テフラを同定することが可能である（菅野ほか、2010）。町田・新井（2003）に示された主なテフラと比較・同定し、採取した地層層準の特定を行うことにより、採取地に関するより具体的なデータが提示できると考えている。

5. おわりに

土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。

その結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a) 海成粘土を用いた粘土、b) 淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の 4 種類に分類された。

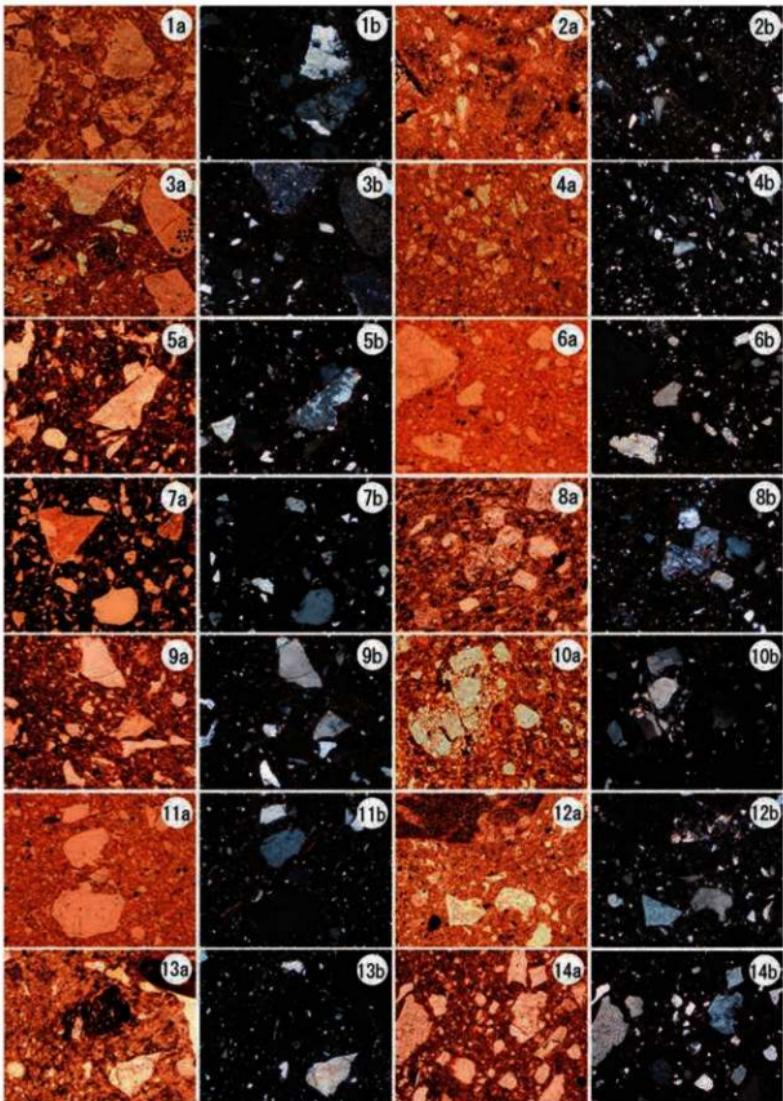
一方、岩石種の推定とその組み合わせから、砂粒は、1) 主に深成岩類からなる B 群、2) 主に堆積岩類からなる C 群、3) 深成岩類を主として堆積岩類を伴う Bc 群または堆積岩類を主とし深成岩類を伴う Cb 群、4) 堆積岩類を主として火山岩類を伴う Cd 群、5) 堆積岩類を主としてテフラを伴う Cg 群、の 6 種類に分類された。多くの土器胎土にみられる材料の特徴は、遺跡周辺での地質環境を反映したものと推定される。今後の発掘調査において粘土採掘坑の検出が期待されるが、粘土採掘坑の粘土等の材料と土器胎土材料との比較を行うことにより、土器作りの実態について検討することができるであろう。

また、砂粒物の一部にガラス質のテフラを多く含む土器胎土が見られたが、これらの胎土中のガラスの屈折率を測定して、対象テフラを同定することは可能であり、採取地に関するより具体的なデータが提示できると考えている。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用、東北地理、42 (2), 73-88。
地質調査所（1993）20万分の1 地質図「青森」、通商産業省工業技術院地質調査所。
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典、1612p、平凡社。

- 藤根 久 (1998) 東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料。東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ」：108-117。東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会。
- 藤根 久・今村美智子 (2001) 第3節 土器の胎土材料と粘土 採掘坑対象堆植物の特徴、群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277。日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 菅野稔洋・鶴田有里奈・福岡孝昭・藤根 久 (2010) 土器中軸 石の起源 - 千葉県長平台遺跡と鹿児島県牟礼川遺跡の場合 - 日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集。126-127。
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究。27, 1-20。
- 車崎正彦・松本 実・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 (1996) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に。日本考古学協会編「日本考古学協会第62回大会研究発表要旨」：153-156。日本考古学協会。
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス「日本列島とその周辺」。東京大学出版会。336p.
- 日本の地質『中部地方II』編集委員会編 (1988) 『日本の地質5 中部地方II』。共立出版。310p.



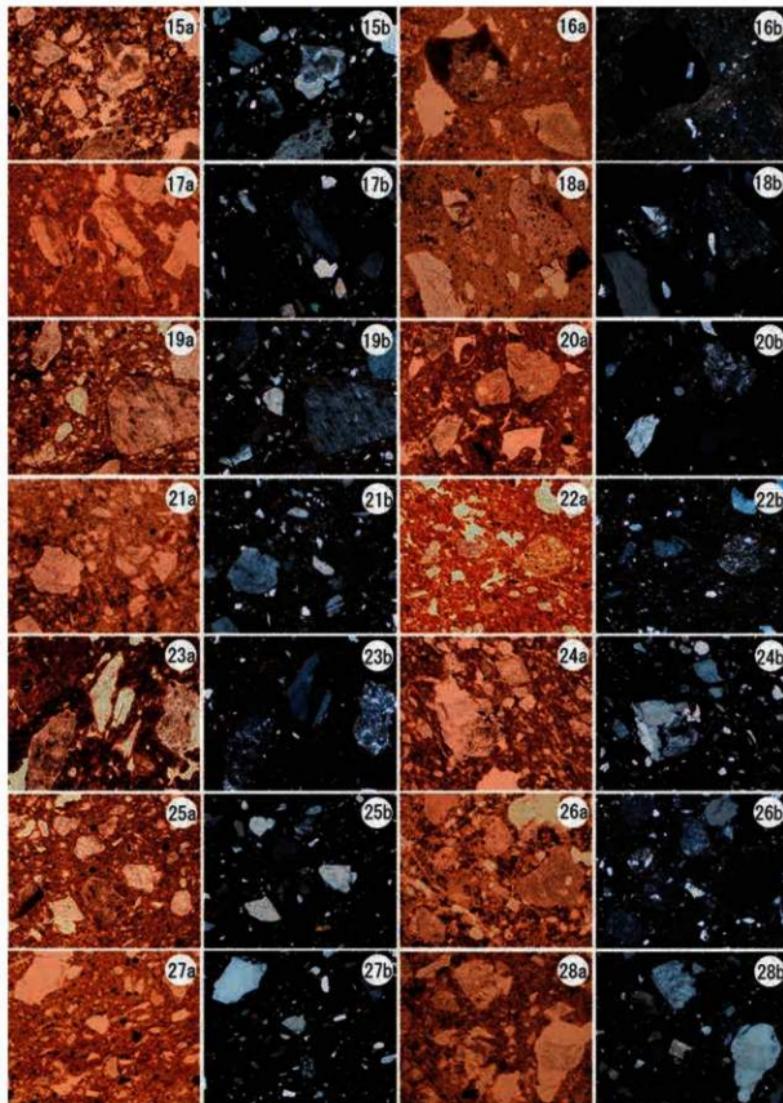
図版1 分析試料の偏光顕微鏡写真 (a:開放ニコル、b:直交ニコル、bar:500 μm)

1a-1b. 分析No. 1 2a-2b. 分析No. 2 3a-3b. 分析No. 3 4a-4b. 分析No. 4 5a-5b. 分析No. 5 6a-6b. 分析No. 6

7a-7b. 分析No. 7 8a-8b. 分析No. 8 9a-9b. 分析No. 9 10a-10b. 分析No. 10 11a-11b. 分析No. 11 12a-12b. 分析No. 12

13a-13b. 分析No. 13 14a-14b. 分析No. 14

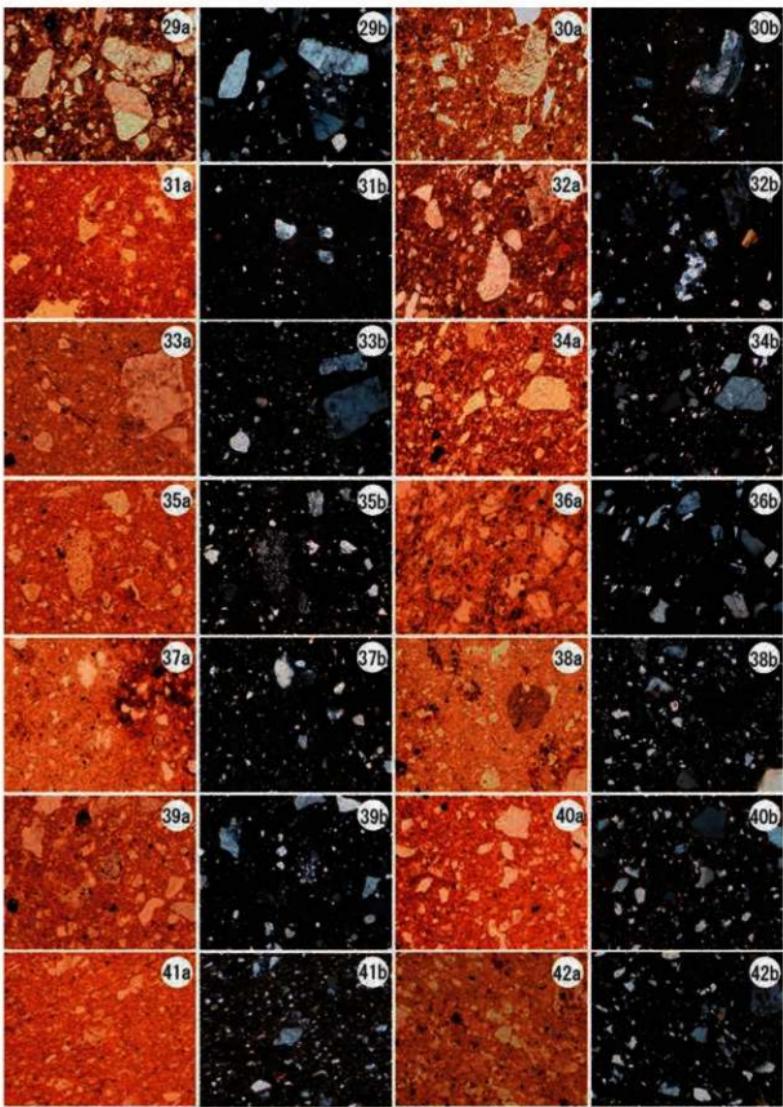
図版1 分析試料の偏光顕微鏡写真



図版2 分析試料の偏光顕微鏡写真 (a:開放ニコル、b:直交ニコル、bar:500 μm)

15a-15b, 分析No. 15 16a-16b, 分析No. 16 17a-17b, 分析No. 17 18a-18b, 分析No. 18 19a-19b, 分析No. 19 20a-20b, 分析No. 20 21a-21b, 分析No. 21 22a-22b, 分析No. 22 23a-23b, 分析No. 23 24a-24b, 分析No. 24 25a-25b, 分析No. 25 26a-26b, 分析No. 26 27a-27b, 分析No. 27 28a-28b, 分析No. 28

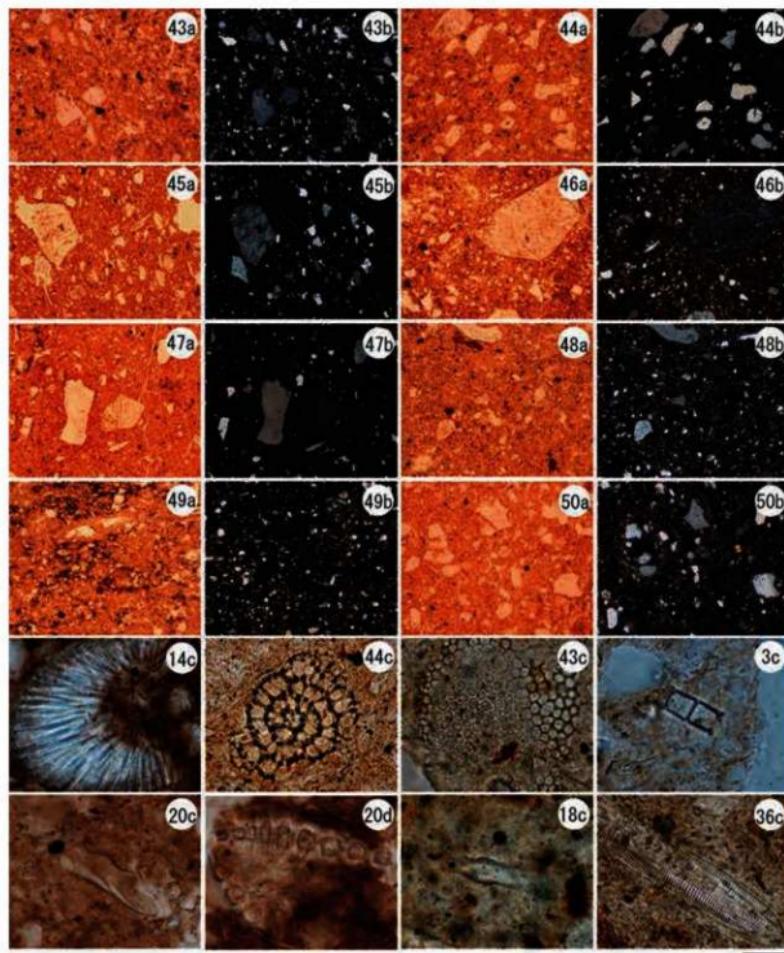
図版2 分析試料の偏光顕微鏡写真



図版3 分析試料の偏光顕微鏡写真 (a:開放ニコル、b:直交ニコル。bar:500 μ m)

29a~29b. 分析No. 29 30a~30b. 分析No. 30 31a~31b. 分析No. 31 32a~32b. 分析No. 32 33a~33b. 分析No. 33 34a~34b. 分析No. 34 35a~35b. 分析No. 35 36a~36b. 分析No. 36 37a~37b. 分析No. 37 38a~38b. 分析No. 38 39a~39b. 分析No. 39 40a~40b. 分析No. 40 41a~41b. 分析No. 41 42a~42b. 分析No. 42

図版3 分析試料の偏光顕微鏡写真



図版4 分析試料の偏光顕微鏡写真 (a:開放ニコル、b:直交ニコル、bar:500 μm)

43a~43b, 分析No. 43 44a~44b, 分析No. 44 45a~45b, 分析No. 45 46a~46b, 分析No. 46 47a~47b, 分析No. 47 48a~48b, 分析No. 48

49a~49b, 分析No. 49 50a~50b, 分析No. 50 14c, 放散虫化石(20 μm) 44c, 放散虫化石(50 μm)

43c, 海水種珪藻化石Coccolithus属/Thalassiosira属(20 μm) 3c, 淡水種珪藻化石Aulacosira ambigua(20 μm)

20c, 淡水種珪藻化石Eunotia monodon(20 μm) 20d, 淡水種Surirella属(20 μm)

18c, 淡水種珪藻化石Pinularia nodosa(20 μm) 36c, 淡水種珪藻化石Pinularia viridis(20 μm)

図版4 分析試料の偏光顕微鏡写真

愛知県一宮市町屋遺跡から出土した 櫛条痕文系土器の胎土に関する考察

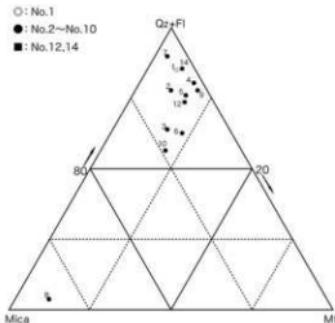
永草 康次

1. はじめに

町屋遺跡（愛知県一宮市千秋町）は犬山扇状地先端部に位置し、以前から弥生時代の遺物の発見が報告されていた。近くには猪島遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 2003）などの同時期の遺跡も多い。

町屋遺跡は、愛知県埋蔵文化財センターにより平成19年から20年に調査され、その際自然流路と思われ

る遺構から、双口壺（第3図）と内傾口縁高杯（第3図1）が互いに深い関係をうかがわせる状態で出土し、注目されるものである。この2点の土器は考古学的には櫛条痕文系土器に分類されるが、搬入品である可能性があった。そのため产地推定を目的として、他の町屋遺跡出土弥生土器と愛知県春日井市松河戸遺跡出土の弥生土器を比較試料として胎土分析を行ったので、その結果について報告する。

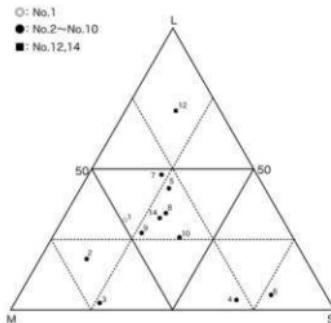


（Qz+Fl：無色鉱物、Mica：雲母、MF：雲母以外の有色鉱物）

第1図 主要鉱物三角ダイヤグラム

2. 分析試料

今回の調査において、最も注目すべきは上述の双口壺であるが、この試料は破損が少なく、破壊を伴う分析に供することは困難であった。そのため、この土器に関しては非破壊による表面の実体顕微鏡観察にとどめた。また同時に出土した内傾口縁高杯（試料番号1）が、同様に観察した結果非常に類似した胎土であると結論付けることができ、これらは出土状況や考古的位置づけからも同じ起源を持つと判断し、内傾口縁高杯を分析の試料として提供いただいた。



第2図 粒径三角ダイヤグラム

また、比較試料として同遺跡の弥生時代中～後期の土器9点（試料番号2～10）と、春日井市教育委員会のご協力により提供いただいた松河戸遺跡（愛知県春日井市松河戸町）の土器3点（試料番号12・14・20）の、合計13点を対象に分析を行った（第1表・第3図）。

3. 分析方法

対象となった試料について、土器表面の実体顕微鏡観察とプレパラートの偏光顕微鏡観察の2方法で分析を行った。詳しい方法は（池本他 1990）等を参照いただきたい。

第1表 町屋遺跡胎土分析試料一覧

試料番号	調査区	グリッド	遺構名・出土位置	層位No.	取上げ日	器種	時期など
試料1 07Ha	4D14j	検出2	No.047	080208	櫛条痕施文内溝口縁高杯	E07Ha004、弥生時代中期中葉前半(8期)	
試料2 07Id	6D2j	No.211	071207	太線施文太頭壺	E07Id044、弥生時代中期中葉前半(8期)		
試料3 07Ia	5D11j	145SK	No.513	080116	広口縁太頭壺	E07Ia067、弥生時代中期後葉(8期)	
試料4 07Cc	5D19f	086SK	No.154	071130	タキギ調整縦	E07Cc107、弥生時代中期後葉(8期)	
試料5 07Cc	6D1f	051SK	No.672	071207	櫛条痕調整深鉢	E07Cc083、弥生時代中期中葉前半(8期)	
試料6 07Cc	6D2f	051SK	No.322	071204	櫛施文太頭壺	E07Cc072、弥生時代中期中葉前半(8期)	
試料7 07Cc	5D20g	031SK	No.363	071204	太頭壺	E07Cc041、弥生時代中期中葉前半(8期)	
試料8 07Ab		084SD	No.20	080130	櫛施文広口縁太頭壺	E07Ab004、弥生時代中期中葉後半(8期)	
試料9 07Ab		084SD	No.028	080130	櫛条痕調整深鉢	E07Ab006、弥生時代中期中葉後半(8期)	
試料10 07Ja	7D15j	010SK		080215	貝殻施文太頭壺	E07Ja003、弥生時代中期前葉(A期)、國文施文	
試料12 松河戸安賀 D	F14・F15 3層(III区)	SD75	南溝部	970910	唇口縁部	弥生時代前期、遠賀川式新しいタイプ	
試料14 松河戸安賀 B		SD44			条痕文系脣部	弥生時代前期、貝殻条痕	
試料20 松河戸安賀 D		SD75			脣部	弥生時代前期、遠賀川式古いタイプ	

4. 分析結果

(1) 試料番号1 内傾口縁高杯(弥生時代中期中葉後半)

土器表面の実体顕微鏡観察結果から、今回同時に出土した双口壺と共通の特徴を有する。

比較的よく締まった暗褐色の素地中に、淘汰のよい1mm前後の砂礫中には、長石が目立って含まれております。土器を特徴づける。砂礫の量自体は多くなく、内表面の11視野で188粒と、基準の200粒に満たなかつた(1視野平均約17.1粒)が、データはほかの試料と同等に扱う。

無色鉱物のほか、花崗岩片が含まれる。偏光顕微鏡下でも、花崗岩とそれに由来する黒雲母・角閃石が観察され、それらに加えわずかながらチャート片がみられた。

(2) 試料番号2~10 町屋遺跡比較試料(弥生時代中期前葉~後葉)

試料番号2~5, 9, 10は、実体顕微鏡観察・偏光顕微鏡観察の両方でチャートの存在が目立ち、これに加え偏光顕微鏡下で火山岩が伴い、またそれに由来する斜方輝石が含まれることがある。

試料番号6は、ほかの試料に比べ土器表面に小片も含めて白雲母が多く、偏光顕微鏡下でも火山岩やそれに伴う輝石が確認できなかった。

試料番号7は、粗粒の砂礫が極端に多く含まれる。無色鉱物の割合が多く、岩片には花崗岩・チャートが含まれる。

試料番号8も粗粒岩片が多いが、7とは異なり白雲母が他に比べ極端に多い。偏光顕微鏡下でも花崗岩が

多く、チャートが伴う。

(3) 試料番号12, 14, 20 松河戸遺跡比較資料(弥生時代前期)

比較試料として分析を行った。松河戸遺跡出土試料3点である。

試料番号12は、肉眼的には松河戸遺跡で多数を占めるタイプである。偏光顕微鏡下においてチャートに加え比較的多くの火山岩片を含むことで特徴づけられる。

試料番号14は、表面の特徴から試料番号1および双口壺と関連が考えられる土器である。分析の結果もやはり類似した傾向があることがわかった。

試料番号20は、尾張西部との関連が予想される土器である。土器中の砂礫が極端に少なく緻密な印象を受ける。砂礫組成では、チャート・花崗岩の岩片が多くを占め、偏光顕微鏡下では視野中に火山岩は認められなかった。

5. 分析試料土器の产地と考察

(1) 町屋遺跡比較試料

比較試料のうち、チャート・火山岩・斜方輝石に特徴づけられる一群は、これまでの筆者による分析から尾張平野産の土器胎土としてよいと考えられる。中に試料番号2, 4には火山ガラスが、試料番号4にはさらにプラントオパールがみられ、胎土素地にやや異なる特徴があり、小地域差や調整時に複数種類の素地を混和するなどの調整があった可能性もあるが、大局的には同じ产地と考えてよい。

試料番号6は、尾張平野でもより西部産の土器と思われる。この試料にも土器表面で火山ガラスが観察できる。

試料番号7は、構成する砂礫種からは花崗岩地質の影響が大きいと判断されるが、その特定は困難である。これまでに分析を行った試料の中では、三重県北部等が候補として挙げられるが、比較的円磨度の高い粗粒砂礫が多く含まれる表面的な組織は、後述の松河戸遺跡産の土器に類似する。

試料番号8は、土器表面での黒雲母の多さが特徴的であり、その点を除けば試料番号7に共通の組織を有するといえる。

(2) 松河戸遺跡出土試料

試料番号12は、上述のように外觀では松河戸遺跡で多数を占めるタイプである。具体的には素地中に円磨度の高い大粒(>2mm)の砂礫が極端に多く、場合によっては脱落が多数認められる一群で、同様の土器は一宮市周辺の複数の遺跡で一定数見ることができ(町屋遺跡試料番号7等)、その起源との関連が予想される土器であった。

しかしながら分析の結果胎土中に火山岩片が多数含まれるなど、これまでに分析を行った庄内川流域の土器胎土とは大きく異なり、木曽川流域の土器胎土に類似するという結果となった。火山岩片の量比や粒度などから、木曽川中流域との関連を伺わせる。また試料番号7とは表面的には類似するが、砂礫組成は大きく異なることがわかった。

今回の松河戸遺跡出土土器からは、類似試料がこの1点のみの分析であったため、今後同様の土器の分析を進め、町屋遺跡出土の試料番号7の様に一宮周辺で見られるこの一群の土器と、松河戸遺跡との関連を再考することが必要である。

試料番号14は、上述のように試料番号1(内傾口縁高杯)および双口壺との類似性が認められる。その胎土の起源については以下に述べる。

試料番号20は肉眼的な特徴からは尾張西部に類似するが、砂礫が細粒であるため極端に少なく、詳細は不明である。火山岩片が認められないことを除けば、町屋遺跡試料番号9と類似しており、砂礫の少なさゆえに火山岩が認められなかつたが、町屋遺跡を含む尾張

西部の遺跡との関連も考えられる。

(3) 内傾口縁高杯と双口壺

さて内傾口縁高杯であるが、チャートがわずかに含まれるもの花崗岩地質の影響が強いことは明らかであり、町屋遺跡産の比較試料にも似た傾向の土器はみられるが、表面での長石の占める割合が高い点などからは区別される。一般に無色鉱物では、その硬度から石英の占める割合が多い場合がほとんどである。現在までの分析対象とした遺跡では、同様の胎土の土器が試料中に含まれることはあっても、その産地を特定するには至っていない。

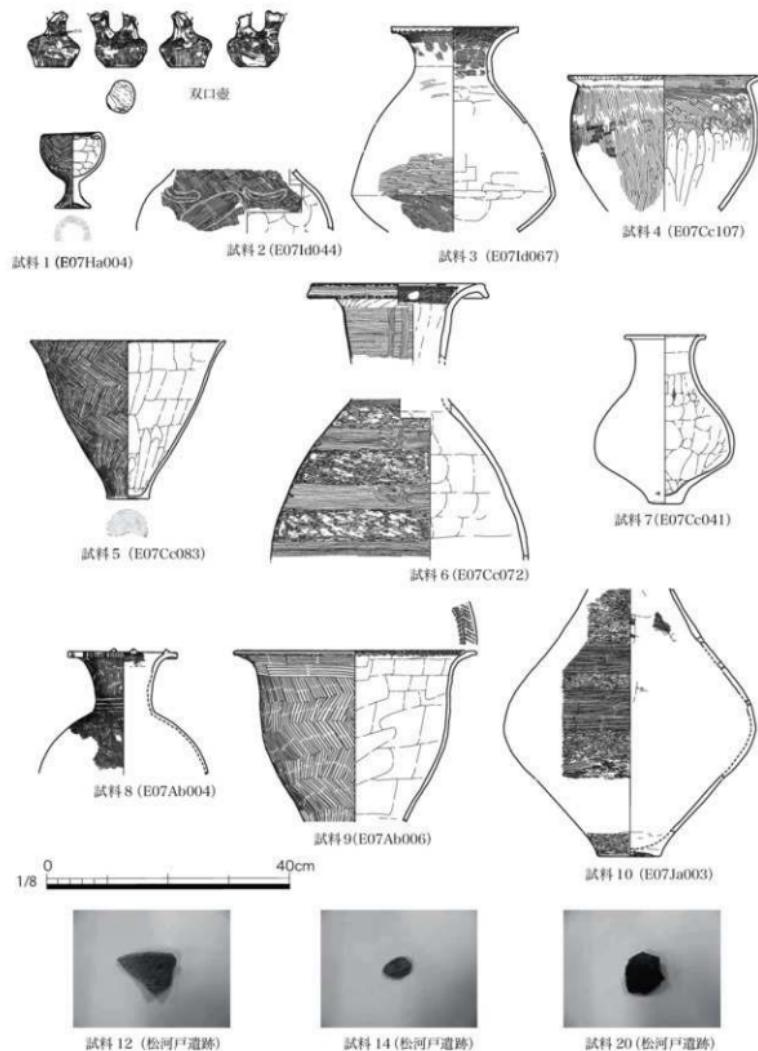
詳細な胎土分析の対象にはなっていないが、これまでに訪れた遺跡や土器表面を観察した土器の中では、岐阜県多治見市に共通の特徴を見いだすことができる。今回、多治見市文化財保護センター矢部氏にご協力により、平田遺跡(多治見市太平町)、喜多町西遺跡(同市喜多町)の土器の観察の機会をいただいた。比較の結果、素地の色合いや砂礫の構成比率など若干の差はあるものの、長石の入り方など肉眼的には比較的似た胎土の土器があり、今回分析した内傾口縁高杯や、それと共に胎土の双口壺が、庄内川(土岐川)の中・上流にあたる多治見市あるいはその周辺地域に起源を求めることができる可能性が考えられる。庄内川(土岐川)に沿ってその南側に走る屏風山断層・笠原断層の南側には、広く花崗岩類が分布しており、地質にも整合するといつてよい。

また、松河戸遺跡の出土土器の中にも、前述の試料番号14だけでなく、いわゆる条痕紋系の土器に同様の土器が含まれている可能性があり、今回注目すべき双口壺も含め、松河戸遺跡や町屋遺跡が、庄内川を介してその上流域と交流があったことが考えられる。

ただし、多治見市近辺には弥生時代の遺跡は多くはない、現在までに得られている情報のみで詳細を把握することは難しい。今後の該当地域の調査の進展や、詳細な胎土分析を待ちたい。

6. 謝辞

分析にあたり、愛知県理蔵文化財センター藤山誠一氏および鬼頭剛氏には、試料の提供をはじめとし、多くのご協力を賜った。春日井市教育委員会文化財課村



第3図 胎土分析資料実測図（1：8）・写真

第2表 実態顕微鏡観察結果

サンプル No.	黒雲母	白雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	カンラン石	ジルコン	火山岩	花崗岩	チャート	砂岩性 堆積岩類	火山性 堆積岩類
N1	○	—	△				(—)		○	△		—
N2	○	(—)	—	(—)				△	○	○		
N3	○	(—)	△	(—)				△	△	○		
N4	—						(—)	(—)	—	○		
N5	△							△	△	○		
N6	○	—							○	○	(—)	
N7	—	(—)							○	△	(—)	
N8	(—)		△						○	△	(—)	
N9	○		△					△	△	○		
N10	△	(—)	△	(—)				△	○	○		
N12	△	—						△	○	○		
N14									○	△		
N20	△						(—)		○	○		

第3表 偏光顕微鏡観察結果 1

No1	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	16	2	0	0	0	0	0	1	0	19		
M	57	3	0	0	1	0	4	0	0	65		
S	72	21	3	1	6	0	1	0	0	104		
合計	145	26	3	1	7	0	5	1	0	188	視野数	1 視野平均 17.1
No2	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	2	1	1	0	0	0	0	1	1	6		
M	40	1	1	0	1	0	0	3	4	50		
S	35	1	1	1	3	0	0	0	0	41		
合計	77	3	3	1	4	0	0	4	5	97	視野数	8 1 視野平均 12.1
No3	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
M	42	4	1	0	0	0	0	3	8	58		
S	60	5	9	0	9	0	0	2	1	86		
合計	103	9	10	0	9	0	0	5	9	145	視野数	7 1 視野平均 20.7
No4	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1		
M	8	1	0	0	2	0	0	5	4	20		
S	160	7	0	2	11	0	0	7	3	190		
合計	168	8	0	2	13	0	0	13	7	211	視野数	8 1 視野平均 26.4
No5	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	9	1	0	0	0	0	2	1	0	13		
M	14	2	0	0	0	0	0	1	1	18		
S	55	13	2	1	7	0	0	0	0	78		
合計	78	16	2	1	7	0	2	2	1	109	視野数	7 1 視野平均 15.6
No6	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
M	6	1	0	0	0	0	0	0	0	7		
S	95	12	1	7	12	2	0	0	0	129		
合計	102	13	1	7	12	2	0	0	0	137	視野数	6 1 視野平均 22.8
No7	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	23	6	0	0	0	0	2	0	1	32		
M	42	1	0	0	0	1	0	0	0	44		
S	115	12	5	0	3	0	0	0	0	135		
合計	180	19	5	0	3	1	2	0	1	211	視野数	10 1 視野平均 21.1
No8	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計		
L	16	0	0	0	0	0	1	0	2	19		
M	37	1	4	0	0	0	0	0	0	42		
S	69	6	65	3	9	0	0	0	0	152		
合計	122	7	69	3	9	0	1	0	2	213	視野数	8 1 視野平均 26.6

第3表 偏光顕微鏡観察結果2

No	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	
L	11	0	0	0	0	0	3	0	1	15	
M	52	3	0	0	0	0	0	0	0	55	
S	93	17	2	0	15	0	0	0	3	130	
合計	156	20	2	0	15	0	3	0	4	200	
											視野数 9
											1視野平均 22.2

No	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	
L	11	1	0	0	0	0	0	0	0	12	
M	31	2	2	0	1	0	0	0	1	37	
S	115	18	18	0	16	0	0	0	1	168	
合計	157	21	20	0	17	0	0	0	2	217	
											視野数 9
											1視野平均 24.1

No	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	
L	16	0	0	0	0	0	0	1	1	18	
M	4	1	1	0	0	0	0	2		8	
S	30	1	1	0	4	0	0	0		36	
合計	50	2	2	0	4	0	0	3	1	62	
											視野数 3
											1視野平均 20.7

No	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	
L	15	3	0	0	0		0	0	0	18	
M	35	11	0	0	0		0	0	0	46	
S	119	15	3	0	9		0	0	0	146	
合計	169	29	3	0	9		0	0	0	210	
											視野数 10
											1視野平均 21.0

No	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合計	
L										0	
M										0	
S										0	
合計	○	△	+	+	+			-		0	視野数 砂礫極少 1~2程度

松一秀氏および浅田博造氏、若杉尚代氏には、松河戸遺跡をはじめとする資料観察と資料提供をはじめとする多大なご協力をいただいた。多治見市文化財保護センターの矢部由美子氏には、多治見市出土土器との比較にあたり、便宜をいただいた。記して感謝の意を表す。

参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第107集）猫島遺跡（2003），387。
- 池本正明・永草康次・植真美子（1990）岡島遺跡の土器胎土の特徴。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第14集）岡島遺跡，51-63。
- 池本正明・永草康次・植真美子（1990）岡島遺跡の土器胎土に関する考察。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第14集）岡島遺跡，98-101。
- 永草康次（1992）朝日遺跡出土の土器胎土。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第31集）朝日遺跡II（自然科学編），299-314。
- 永草康次（1993）岡島遺跡の土器胎土。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第43集）岡島遺跡II・不馬入遺跡，142-152。
- 永草康次（1994a）朝日遺跡sz162出土の土器胎土。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第34集）朝日遺跡V，322-328。
- 永草康次（1994b）伊勢湾岸地域の土器胎土－弥生時代から古墳時代を中心として－。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第34集）朝日遺跡V，355-362。
- 永草康次（1998）一色青海遺跡出土土器の岩石学的手法による胎土分析。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第79集）一色青海遺跡（自然科学・考察編），101-108。
- 永草康次・藤山誠一（2001）川原遺跡出土弥生中期土器の胎土分析とその考古学的評価。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第91集）川原遺跡（第三分冊），61-70。
- 永草康次・藤山誠一（2003）猫島遺跡出土弥生土器の分析。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第107集）猫島遺跡，130-140。
- 永草康次（2007）朝日遺跡（2001年度・2002年度出土）における土器胎土の岩石学的分析。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第138集）朝日遺跡VII（第三分冊），143-145。
- 森勇一・永草康次・植真美子（1989b）町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第9集）町田遺跡，50-53。
- 森勇一・永草康次・植真美子（1989b）町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第9集）町田遺跡，50-53。
- 森勇一・永草康次・植真美子（1989b）町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第9集）町田遺跡，50-53。
- 森勇一・永草康次・植真美子（1989a）尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について。

愛知県一宮市町屋遺跡採集資料の分析

藤山 誠一

町屋遺跡は一宮市南東部にある遺跡で、木曾川扇状地の末端にあたる地域に位置する。平成19年度の町屋遺跡発掘調査終了後、私は町屋地区の弥生時代の資料を所蔵される方からご協力を頂き、その発掘調査地点の周辺にて採集された資料を実見・調査する機会を得た。以下において、その資料の概要を報告する。

1. 安藤春雄氏所蔵資料（第1図～第3図）

安藤春雄氏により07D区の南西100m地点付近にある畑地で、近年採集された土器、石器、鉄滓（楕円鉢1点）などがある。

（1）土器

土器・陶器には、弥生土器5点、布目平瓦片1点、他土器片3点があり、弥生土器には貝殻施文太頭壺1点、台付甕1点、有孔蓋1点、貝田町式細頸壺底部片1点、四線文期の太頭壺片1点があった。また一宮市博物館所蔵安藤春雄氏寄贈資料に弥生土器片が保管されているコンテナ2箱が別にある。弥生土器の構成は、弥生時代中期前葉では貝殻条痕調整壺片11点、貝殻条痕調整深鉢3点、貝殻条痕調整厚口鉢1点、弥生時代中期中葉前半では櫛施文受口口縁細頸壺10点、ハケ調整深鉢1点、櫛条痕調整深鉢8点（弥生時代中期中葉後半に及ぶ可能性あり）、櫛施文太頭壺の底部5点（弥生時代中期中葉後半に及ぶ可能性あり）、高杯脚部1点、弥生時代中期中葉後半では、櫛施文太頭壺1点、櫛施文細頸壺15点、ハケ調整甕14点、櫛条痕調整深鉢11点（他に体部片65点ある）、弥生時代中期後葉では四線文太頭壺12点、四線文細頸壺6点、西三河系太頭壺1点、四線文鉢21点、高杯脚部1点、タタキ調整甕15点、内面ケズリ甕21点、受口口縁甕1点、弥生時代後期では「く」の字口縁内面ケズリ甕5点、時期不明の壺片が他に13点ある。

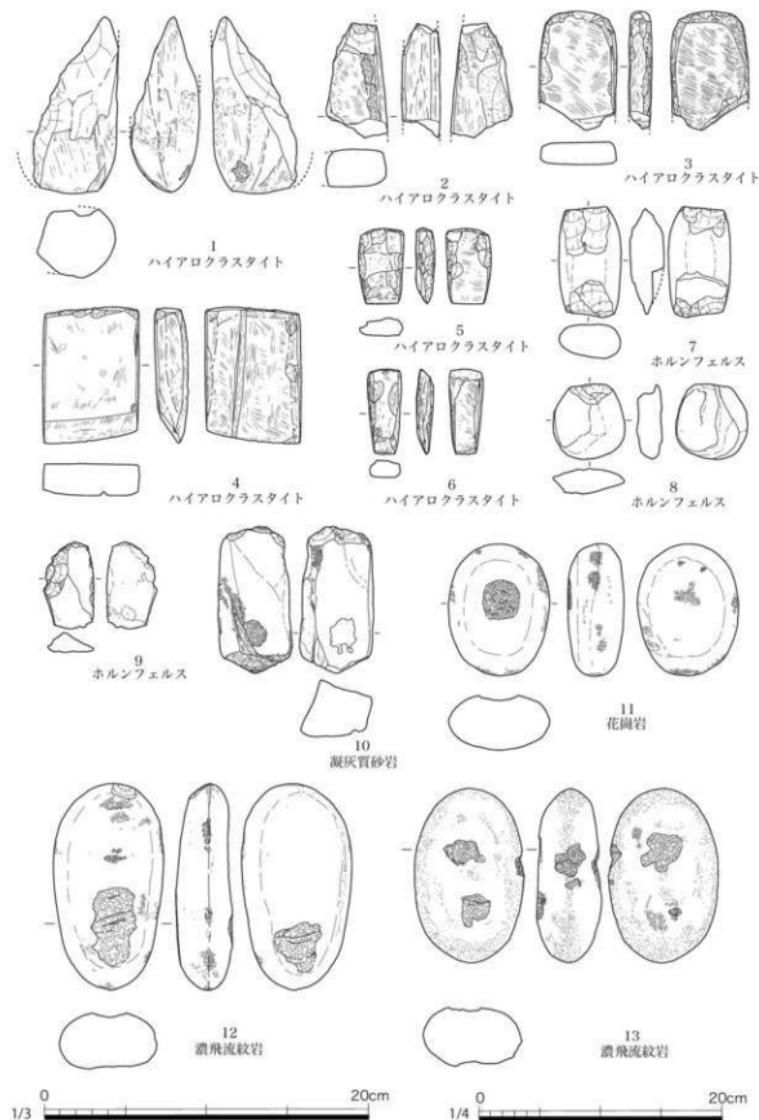
弥生土器は弥生時代中期前葉～弥生時代中期後葉のものが多數あり、弥生時代後期のものが少量ある。

（2）石器

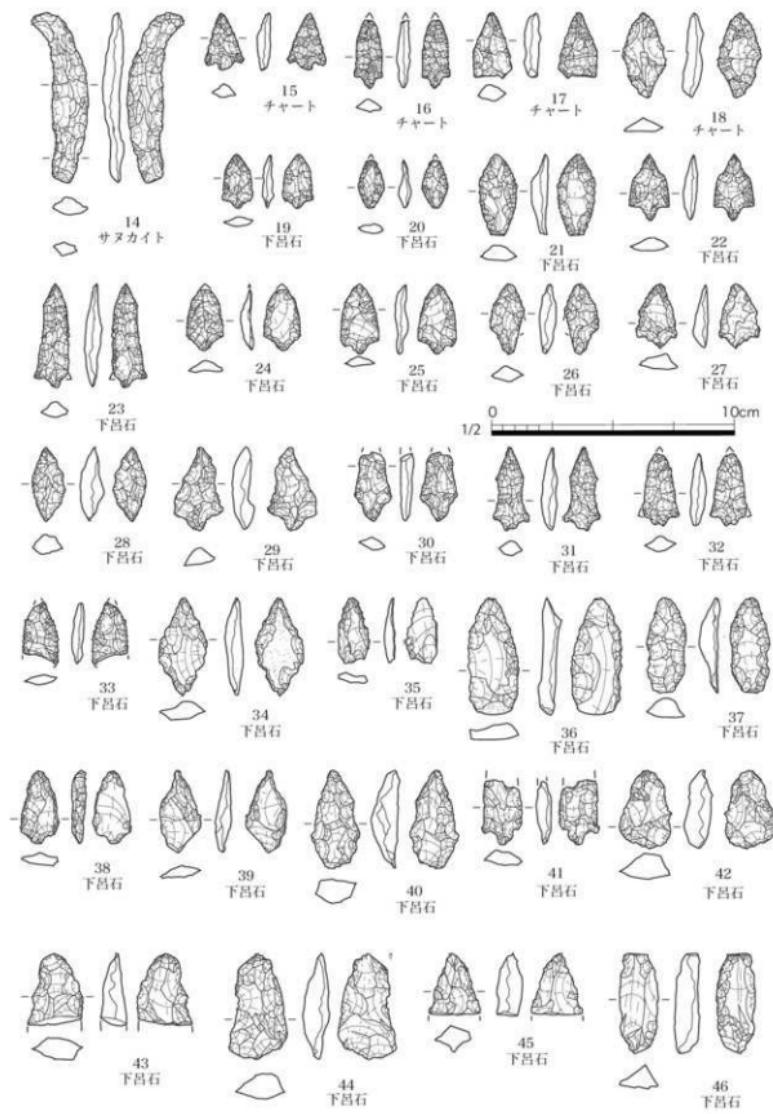
石器ではハイアロクラスタイト製磨製石斧6点（両

刃石斧2点、片刃石斧4点）、ホルンフェルス製石錘2点、ホルンフェルス製刃器1点、サヌカイト製石小刀1点、サヌカイト製剝片1点、下呂石製打製石錘15点、下呂石製打製石器未成品（押圧剥離が認められるもの）31点、下呂石製両極加工剝片26点、下呂石製剝片27点、チャート製打製石錘4点、チャート製剝片3点、凝灰質砂岩製砥石1点、砂岩製砥石1点、变成岩製砥石1点、タタキ石・凹み石12点（内2点に線状痕あり）、花崗岩製1点、砂岩製5点、安山岩製1点、ホルンフェルス製1点、濃飛流紋岩製5点）、被熱礫4点、珪化木1点、小礫多數、高師小僧多數がある。

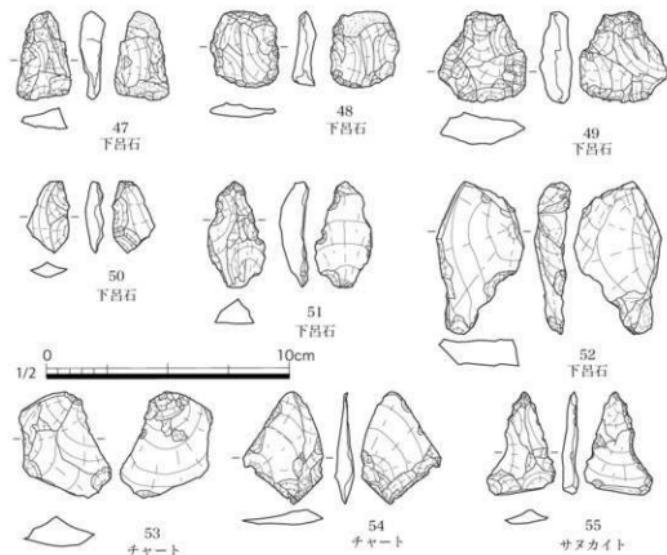
この中で、重要と思われる石器を55点実測したものが第1図～第3図である。磨製石斧は、全てハイアロクラスタイト製で、1が両刃石斧の刃部、2がやや基部に近い両刃石斧の身部である。3・4はやや大型の扁平片刃石斧の身部で3が厚み1.4cm、5が長さ8.0cm、幅5.9cm、厚み2.0cmで身部の片面に長辺に沿った擦切り溝があり、より小型の扁平片刃石斧への加工途上のものであろうか。5・6は小型の扁平片刃石斧で、5が長さ4.6cm、幅2.7cm、厚み1.2cm、6が長さ5.2cm、幅2.1cm、厚み1.05cmをはかる。これらは基部より刃部の幅が細くなっているものである。7・8がホルンフェルス製の石錘と思われるもので、7は石材の短辺部に打ち欠きがあり、8も短辺側の片側であるが打ち欠きがある。9はホルンフェルス製の刃器と思われるもので、断面三角形の剝片の一部が片面加工され、刃状になっている。10は凝灰質砂岩製の砥石で長さ12.0cm、幅5.8cm、厚み4.6cmをはかり、研磨面が形成された後に敲石として使用されたと思われる敲打痕や敲打による凹みがみられる。11～13は敲石・凹み石で、11が花崗岩製で長径10.9cm、短径8.3cm、厚み4.6cm、12が濃飛流紋岩製で長径17.0cm、短径9.0cm、厚み4.5cm、13が長径14.3cm、短径9.0cm、厚み5.2cmのもので、12・13の凹み部では、敲打による凹みが線状になっているものがみられる。14～55は打製石器で、14がサヌカイト製の石小刀、15～



第1図 安藤春雄氏所蔵資料(1) (1~6は1:3、7~13は1:4)



第2図 安藤春雄氏所蔵資料（2）



第3図 安藤春雄氏所蔵資料(3)

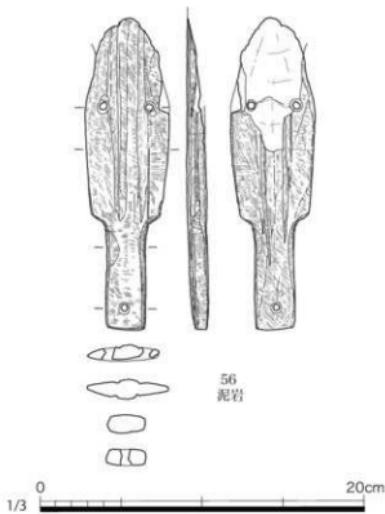
18がチャート製の石鎌とその未製品、19～41が下呂石製の石鎌、42～49が下呂石製の両極石器、50～52が下呂石製の両極剥片、53・54がチャート製の両極剥片、55はサムカイト製の石器加工品である。14は長さ6.9cm、幅1.5cm、厚み0.75cmの優品で、町屋遺跡では唯一の完形品である。石鎌では23・31・41が基部から逆刃部のつくりが丁寧な平面五角形石鎌になるもの、15・16・19・22・24・25・27・29・30・32・38は有茎石鎌で、逆刃部から先端までがほぼ平面三角形状になる15と先端からやや左右の刃部が作り出される19・22・24・25・27・30・32があり、他は先端からの左右の作り出しが不明瞭に膨らむものである。29は基部から先端部の軸線が曲がっており、失敗品の可能性がある。18・20・21・26・28・34・35・36・37・39・40は未製品の可能性のあるものを含むが、逆刃部の作り出しがない平面柳葉形から菱形状のものである。42～49は両極打撃による加工品で、42～47は石鎌の形態を意識した平面長い三角形のも

の、48・49は平面梢円形から隅丸台形のもので石鎌の製品・未製品より厚みが大きいものである。50～52は両極打撃により派生する両極剥片と思われるもので、縁辺に剝離加工がみられる。53・54も両極打撃による派生する剥片の可能性があるものである。55はサムカイト製の加工品で、定型的な製品とはいえないもので、町屋遺跡においてサムカイト製品の加工が行われたことを示す資料として重要なものである。

2. 長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料(第4図)

長谷川昭三氏により所蔵されていた磨製石剣が1点ある。この磨製石剣は、07Ca区の西北西約150m付近の畠地で採集されたもので、付近では梶田不二男氏など町屋地区の方々により多数の弥生土器と石器が地表面などで採集されている。

56は泥岩製の磨製有柄式銅劍形石剣で、刃部の先端側を欠損している。現存している長さは19.2cm、刃部幅5.2cm、刃部厚み1.2cm、基部の長さは6.86cm、



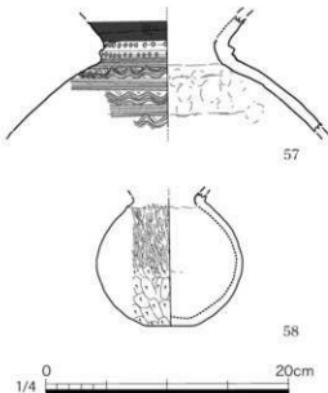
第4図 長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料

基部幅2.4cm、基部厚み1.1cmをはかる。平面形では刃部の欠損部付近に刃方と考えられる刃部の抉れる部分があり、刃方の基部側が最も幅広になる形態である。刃部の横断面は長い菱形で、刃部の棱の両側で擦切りによる溝状の縫によって脊と翼を区分している。基部の横断面は隅丸長方形で、基部の端際に径2.3mm程度の両面穿孔の孔があり、柄との組み合わせるための固定用目釘穴と思われる。また刃方の基部側に縫の両側に1カ所ずつの孔がある。この2つの孔は両面穿孔によるものであるが、片面側で貫通していない凹みがそれぞれ残る。

3. 長谷川稔氏所蔵資料（第5図）

長谷川稔氏により字花ノ木07lc区の東約20m地点付近にて採集された弥生土器が2点ある（第5図）。

57は弥生時代後期中頃から後半の赤彩広口壺で、頭部径10.1cmをはかる。外面の色調は灰白色で、比較的緻密な胎土をもつもので、頭部から口縁部の内面に赤彩がみられる。外面頭部には断面三角形の帶状浮文が貼付けられており、その帶状浮文の上・下に円形管状刺突文列がめぐる。体部上半には、ハケ調整後櫛施



第5図 長谷川稔氏所蔵資料

文直線文と波状文を交互に上から施文している。

58は弥生土器とほぼ同時期と思われる瓢（ひさご）形壺で、頭部径5.8cm、体部径12.0cm、のもので、体部下半のタテケズリ後体部上半をタテ方向のミガキ調整を施している。この土器も大型方形周溝墓の葬送に関係する土器である可能性がある。

その他

坂重吉により「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」において紹介された用途不明の彫刻のある石器（被熱痕があり、立っていたようですが）1点と江戸時代以後の青磁の鉢片を利用した砥石用の土器1点、礫1点がある。

4.まとめ

以上の報告させて頂いた資料について若干の検討を加え、結びとしたい。Iの安藤春雄氏所蔵の資料は、発掘調査地点の南西に位置する地点のもので、「新編一宮市史」において花ノ木遺跡として紹介されている北側の地点の資料である。採集資料には石器を多く含み、かつ弥生時代中期前葉から中期後葉を中心とする発掘調査において得られた遺跡中心部が07Cc区付近

から続くことを示すものである。2の長谷川昭三氏寄贈一宮市博物館所蔵資料は単品ではあるものの、本報告の第4章において町屋遺跡の全体像を分析する上で、遺跡の北西側地点において弥生時代中期後葉に遺跡の中核部分の存在を示す好資料であり、町屋遺跡を代表する遺物といえる。3の長谷川稔氏所蔵資料（第5図57・58）は、本報告にある弥生時代後期の大型方形周溝墓（07Cc003・07Id004）の東隅あたりで出土していることから、葬送に関係する供獻土器の可能性があるものである。

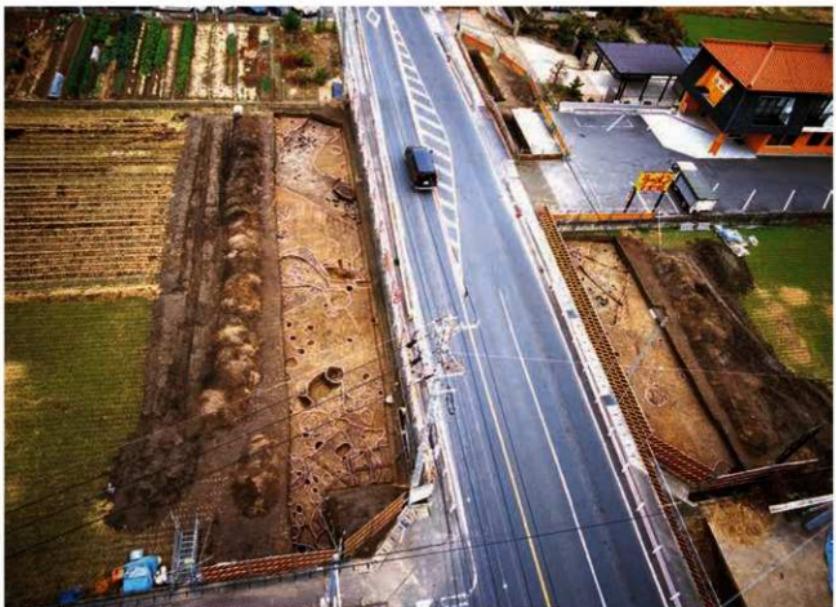
以上から、これらの資料は町屋遺跡の構造や性格を考える上で、貴重な資料といえるものである。今後の調査・研究に活かされることを期待したい。

謝辞

町屋遺跡の資料調査にあたり、安藤春雄氏、長谷川昭三氏・長谷川稔氏にはご理解とご協力を頂き、誠にありがとうございました。また一宮市博物館における資料調査では、土本典生氏と松本彩氏にお世話になつた。記して感謝の意としたい。

参考文献

- 梶田不二男 1941.6 「丹羽郡千秋村ニ於ける遺物」『尾張の遺跡と遺物』第29号（復刻版中巻に所収）
- 坂重吉 1941.6 「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『尾張の遺跡と遺物』第29号（復刻版中巻に所収）
- 大參義一・岩野見司 1967 「花ノ木遺跡」『新編一宮市史 資料編二 弥生時代』一宮市



07Cc 区・07Id 区第 2 面全景（南より）



07Cc 区より遺跡の南西を望む（北東より）

写真図版 2



07Aa 区第1面全景（北より）



07Ab 北区第2面 110SKと東壁（西より）



07Ab 南区第1面全景（北より）



07Ab 南区第2面検出状況（北より）



07Ab 南区第2面全景、084SD・085SD（北より）



07Ab 南区第3面全景（北より）



07Ac 北区第1面 045SD（西より）



07Bb 北区第1面全景、005SD（北より）



07Bb 北区第2面全景、029SD・030SD(北より)



07Bb 南区第2面 023SD(南より)



07Bb 南区第1面 017SK(東より)



07Bb 南区第1面 018SK(南より)



07Bb 南区第1面全景(南より)



07Bb 南区第2面 038SD(西より)



07Bb 南区第2面 008SD(北より)



07Ca 中区第1面 203SK(南より)

写真図版 4



07Ca 南区第 1 面全景（北より）



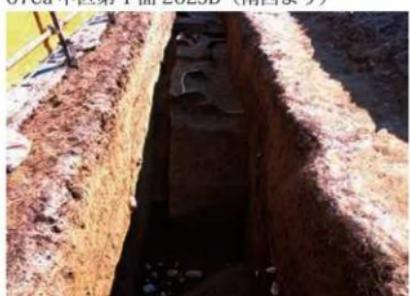
07Ca 中区第 1 面 200SB（南より）



07Ca 中区第 1 面 202SD（南西より）



07Ca 中区第 2 面 217SB（南より）



07Ca 中区第 2 面 208SD（北より）



07Cb 北区第 2 面全景（北より）



07Cb 南区第 2 面全景（南より）



07Cb 南区第 3 面 285SB（東より）



07Cc 区第2面全景（南より）



07Cc 区第2面 003SD 南溝断面（北西より）



07Cc 区第2面 033SK（南より）



07Cc 区第2面 034SK（南より）



07Cc 区第2面 008SK（西より）

写真図版 6



07Cc 区第2面 031SK (西より)



07Cc 区第2面 050SK・051SK・055SK(西より)



07Cc 区第2面 051SK 上層遺物出土状況(北より)



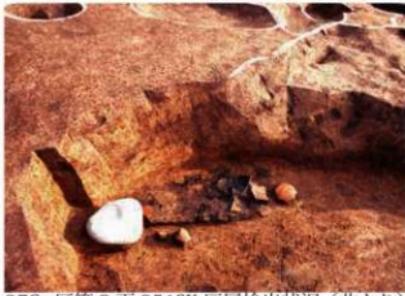
07Cc 区第2面 051SK 下層遺物出土状況(南より)



07Cc 区第2面 050SK 下層遺物出土状況(南より)



07Cc 区第2面 055SK 下層遺物出土状況(南より)



07Cc 区第2面 051SK 灰層検出状況 (北より)



07Cc 区第2面 051SK 完掘状況 (南西より)



07Cc区第2面028SB・086SK遺物出土状況(北東より)



07Cc区第2面028SB・086SK(南東より)



07Cc区第2面133SK(東より)



07Cc区第2面035SB(南東より)



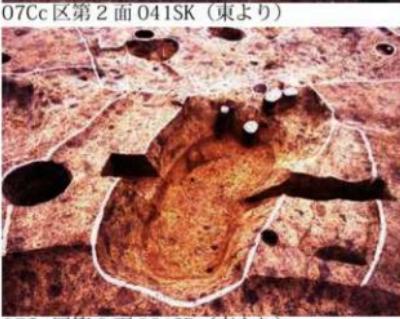
07Cc区第2面048SK(南東より)



07Cc区第2面041SK(東より)



07Cc区第2面117SK(西より)



07Cc区第2面031SD(東より)

写真図版 8



07D 北区第1面全景（南より）



07E 区第1面全景（南より）



07Fb 区第2面全景（北より）



07Ga 区第1面全景（南より）



07Gb 中区第1面全景（南より）



07Gb 中区第1面 019SK・020SK（南より）



07Gb 中区第1面堅穴建物跡 028SK～037SK（南西より）



07Gb 中区第2面 043NR（北東より）



07Ha 区第2面全景（北より）



07Hb 区第2面全景（南より）



07la 北区第2面全景（南より）



07la 北区第2面 111SU（南西より）



07la 北区第2面 112SD（南西より）



07ls 南区第2面全景（北より）



07la 南区第2面 145SK（東より）



07ja 南区第1面全景（南より）

写真図版 10



07Id 区第 2 面 004SD (北東より)



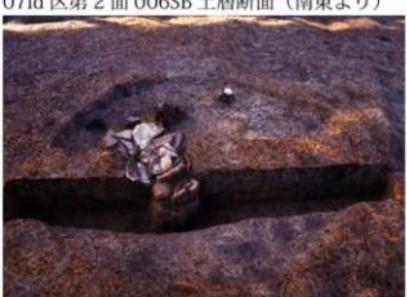
07Id 区第 2 面 005SB・006SB (南東より)



07Id 区第 2 面 031SK・032SK (南より)



07Id 区第 2 面 006SB 土層断面 (南東より)



07Id 区第 2 面 051SK (東より)



櫛条痕施文・調整の双口壺（E07Ha005）と内傾口縁高杯（E07Ha004）



E07Ha005 側面



E07Ha005 斜め上から



E07Ha005 上面



E07Ha005 側面



E07Ha005 側面



E07Ha005 下面



E07Ha004



E07Ha004 脚部下面



鳥形土器 (E07Cc121)



E07Cc121 正面



E07Cc121 側面



E07Cc121 下面



E07Cb025



E07Id052



E07Ia041



E07Id053



E07Ia007



E07Cc115



写真図版 14





写真図版 16



S07Cc002



S07Cc148a



S07Cb028



S07Cc127



S07Cc003



S07Cc037



S07Cc116



S07Cc119



S07Cc004



S07Cc134



S07Cc135



S07Id002



S07Id020



S07Cb006



S07Cc013



S07Bb009



S07Cc007



S07Ca003



S07Bb005



S07Bb001



S07Cc017



S07Aa002



S07Bb011



S07Bb013



S07Cc015



S07Ie002



S07Ab001



S07Cc018



S07Ie006



S07Ca013



S07Cb016

写真図版 18



S07la001



S07ld003



S07ld039



S07Ab003



S07Bb010



S07Cc088



S07Cc112



S07Cb009



S07la004



S07ld031



S07Cb027



S07Cc082



S07Cc106



S07Cc129



S07Cc126



S07le005



S07Cc006



S07Cc086



S07Cc089



S07Cc131



S07Bb004



S07Cc121



S07la023



S07la016



S07Ca018



S07la008



S07Cc124



S07Id043



S07Id047



S07Ca017



S07Cc076



S07Cc071



S07Cb008



S07Hb002



S07la006



S07Ca008

写真図版 20



S07Id044



S07Id017



S07Id022



S07Cb005



S07Cb001



S07Cc092



S07Cc080



S07Cc101



S07Cc141



S07Id050



S07Ca015



S07Id013



S07la014



S07Cc029



S07Cc094



S07Id034



S07Cc043



S07Cc102

抄 錄

ふりがな	まちやいせき
書名	町屋遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第179集
編著者名	藤山誠一・永井邦仁・永草廉次・藤根 久・米田恭子
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財團 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567-67-4163
発行年月日	西暦2013年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まちやいせき 町屋遺跡	あいらけんいちのみやし 愛知県一宮市 ちあきちょうまちや 千秋町町屋	232033	02034	35度 17分 30秒	136度 51分 44秒	2007.11 ~ 2008.2	1,600	県道名古屋 江南線道路 拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町屋遺跡	集落跡	弥生時代中期 後葉～中世後葉 弥生時代後葉 古墳時代後期	堅穴建物24棟 土塁15基、溝4条 堅穴建物1基、方墳 周溝墓1基、土塁3基 溝2条 土塁2基	弥生土器、磨製石器、菅玉、磨製石斧、 石器、石錐、砾石、四面石、磨石、砾石 磨石、軒轅石 弥生土器、ガラス小玉	弥生時代中期から弥生時代後期における集落跡を確認。

文書番号	発掘届出(19埋セ第51号、平成19年8月23日付) 通知(19教生第1305号、平成19年8月31日付) 終了届、発見届、保管証(19埋セ第115号、平成20年3月11日付) 監査結果通知(19教生第2968号、平成20年3月24日付)
------	--

要 約
今回の発掘調査成果とこれまでの調査周辺にて採集された資料の調査によって、これまで内容が不明であった当路跡について、道路の範囲が南北約370m、東西約200mの範囲に広がることを明らかにした。また、遺構大半は出土遺物の検討から弥生時代中期後葉から遡れ、弥生時代(後)期にかけては居住域が広く展開し、同時に弥生時代中期中葉半から方形溝跡が確認される。弥生時代(後)期にかけては居住域と墓域の範囲が急速に小さくなり、古墳時代には遺物が消滅することを明らかにした。そして古には、道路の北側で墓が小規模に形成され、中世から近世にかけて土塁や用水路と思われる溝が挖まれたことを明らかにした。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第179集

町屋遺跡

2013年3月31日

編集・発行 公益財団法人教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

DTP 有限会社アルケーリサーチ

印刷 サンメッセ株式会社